

保渡田屋敷廻り遺跡

保渡田屋敷廻り遺跡

西毛広域幹線道路（高崎工区）社会资本総合整備
事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書



西毛広域幹線道路（高崎工区）社会资本総合整備
事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

二〇二二三

群馬県高崎土木事務所
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

2023

保渡田屋敷廻り遺跡

西毛広域幹線道路（高崎工区）社会资本総合整備
事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2023

群馬県高崎土木事務所
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

序

西毛広域幹線道路は、主要地方道前橋安中富岡線のバイパス道路として、前橋市、高崎市、安中市及び富岡市を結ぶ総延長27.8kmの主要幹線道路として計画されました。

道路の路線計画にあたる高崎市保渡田町地区には、国指定史跡保渡田古墳群によって知られる通り、県内屈指の遺跡の多い地域に当たります。今回の工事対象地においても、県文化財保護課による埋蔵文化財の確認調査によりまして埋蔵文化財の包蔵が認められたため、同課の調整を経て、工事に先立って埋蔵文化財の記録保存の措置が執られることとなり、令和3年度に当事業団が発掘調査を実施しました。その結果、古墳・古墳時代から平安時代にかけての竪穴建物・中世の溝・井戸・土坑などの遺構と土器等の遺物が発見され、令和4・5年度に発掘調査の成果をまとめる整理作業を実施し、このほど発掘調査報告書を刊行する運びとなり、高崎市保渡田地区における豊富な埋蔵文化財情報に新たなデータを加えることとなりました。

発掘調査から報告書の刊行に至るまでには、群馬県県土整備部、群馬県高崎土木事務所、群馬県地域創生部、群馬県教育委員会、高崎市教育委員会、地元関係者の方々に多大なるご支援とご協力を賜りました。ここに篤く御礼を申し上げますとともに、本書が地域における歴史の解明と、豊かな地域社会の形成に役立てられますことを願いまして、序といたします。

令和5年8月

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

理 事 長 向 田 忠 正

例　　言

1. 本書は、西毛広域幹線道路(高崎工区)社会资本総合整備事業に伴って発掘調査された保渡田屋敷廻り遺跡の発掘調査報告書である。
2. 遺跡は高崎市保渡田町90-1、90-2、1302-1、1302-2、1303-1、1303-2に所在する。
3. 調査対象面積は3197.73m²である。
4. 事業主体は群馬県高崎土木事務所である。
5. 調査主体は公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団である。
6. 発掘調査の期間と体制は次のとおりである。

名　　称：令和3年度社会资本総合整備(活力・重点)(主)前橋安中富岡線(西毛広域幹線道路【高崎工区】)事業

履行期間：令和3年5月1日～令和3年12月31日

調査期間：令和3年6月1日～令和3年10月31日

調査担当：田村　博(主任調査研究員、令和3年6・7・10月)、麻生敏隆(専門調査役)、新井仁(専門調査役、令和3年8・9月)

遺跡掘削工事請負：吉澤建設株式会社

地上測量委託：アコン測量設計株式会社

7. 整理事業の期間と体制は次のとおりである

第一次整理

名　　称：令和4年度西毛広域幹線道路(高崎工区)社会资本総合整備(活力・重点)事業

履行期間：令和5年2月1日～令和5年3月31日

整理期間：令和5年2月1日～令和5年3月31日

整理担当：高島英之(専門員(総括))

第二次整理

名　　称：令和4年度西毛広域幹線道路(高崎工区)社会资本総合整備(活力・重点・補正)事業

履行期間：令和5年4月1日～令和5年8月31日

整理期間：令和5年4月1日～令和5年6月30日

整理担当：高島英之(専門員(総括))

8. 本書作成担当は次のとおりである。

| | | |
|------|-------------|--------------------------------|
| 編集 | ： | 高島英之(専門員(総括)) |
| 本文執筆 | ： | 麻生敏隆(専門調査役) (株)火山灰考古学研究所 |
| | 第4章2本文 | |
| | 上記以外 | 高島英之(専門員(総括)) |
| 遺物觀察 | ： | 神谷佳明(専門調査役) |
| | 縄文土器 | 橋本　淳(主任調査研究員・資料統括) |
| | 中・近世土器・陶磁器類 | 大西雅広(専門調査役) |
| | 石器・石製品 | 間口博幸(上席調査研究員・資料統括)・岩崎泰一(専門調査役) |
| | 金属製品 | 板垣泰之(専門員(主任)) |

デジタル編集：齊田智彦(主任調査研究員)

遺物写真撮影：縄文土器、土師器、須恵器 高島英之

石器・石製品 岩崎泰一

中・近世土器・陶磁器類 大西雅広

金属製品 板垣泰之

遺物保存処理：板垣泰之、関邦一(専門調査役)

9. 出土遺物および写真・図面等記録類は、群馬県埋蔵文化財調査センターに保管している。

10. 火山灰分析業務は(株)火山灰考古学研究所に委託して実施した。

11. 発掘調査および報告書作成には、次の関係機関にご助言をいただいた。

群馬県県土整備部、群馬県地域創生部、群馬県高崎土木事務所、群馬県教育委員会、高崎市教育委員会

凡　例

1. 本報告書に用いた遺構名称は、発掘調査時の名称を踏襲したが、整理作業の過程で変更したものもある。

2. 本報告書に用いた座標・方位は、すべて国家座標第IX系(世界測地系)による。主軸方位等の計算にもこれを用いた。

3. 本報告書の遺構図版縮尺は以下の通り。ただし、遺構によってはこの限りではない。

遺構平面図・断面図 窓穴建物1/60、窓穴建物竈1/30、掘立柱建物・柵1/60、溝1/50、土坑・ピット・井戸・集石1/40

4. 本報告書の遺物図版縮尺は以下の通り。ただし、遺物によってはこの限りではない。

土師器、須恵器、縄文土器、石器・石製品1/3、金属製品1/2

5. 本報告書中のスクリーントーン表現・記号は以下の通り。

灰 ■■■ 炭 ■■■ 燃土 ■■■ 粘土 ■■■ 搾乱 ■■■

土器 ● 石器 ▲ 金属製品 ■

6. 本報告書中の遺構断面図の標高値は、原則として断面図下に「L=○○m」のように表記した。

7. 本報告書における土層断面図及び遺物観察表に記した色調表現は、農林水産省農林水産技術会議事務局・財團法人日本色彩研究所色票監修1988『新版標準土色帳』によった。

8. 本報告書におけるテフラ(火山噴出物)の略号は以下の通り(テフラの名称は町田洋・新井房夫1992『火山灰アトラス』東京大学出版会による)。

As-B…浅間 B、As-C…浅間 C、Hr-FP…榛名二ツ岳伊香保、Hr-FA…榛名二ツ岳渋川、As-YP…草津黄色軽石、

AT…始良TN

目 次

| | | | |
|-------------------|-------------------------|-----------------|-----|
| 序 | 5. | 集石 | 56 |
| 例言 | 6. | 土坑 | 58 |
| 凡例 | 7. | ピット | 83 |
| 目次 | 8. | 烟 | 83 |
| 挿図・表・写真目次 | 第2節 | 古代～古墳時代の遺構と遺物 | 89 |
| 第1章 調査に至る経緯、方法と経過 | 1. | 竪穴建物・竪穴状遺構 | 89 |
| 第1節 調査に至る経緯 | 2. | 古墳 | 104 |
| 第2節 発掘調査の方法 | 3. | 遺構外出土遺物 | 105 |
| 第1項 調査区と座標の設定 | 第3節 古墳時代前期4世紀後半以前の遺構と遺物 | 106 | |
| 第2項 発掘調査の方法 | 1. | 土坑 | 106 |
| 第3項 遺構測量 | 2. | ピット | 109 |
| 第4項 遺構写真撮影 | 3. | 遺構外出土遺物 | 110 |
| 第3節 発掘調査の経過 | 第4節 旧石器確認調査 | 111 | |
| 第4節 整理作業の方法と経過 | 第4章 火山灰分析の成果とまとめ | 115 | |
| 第2章 遺跡の地理的・歴史的環境 | 1. | 調査の目的と意義 | 115 |
| 第1節 地理的環境 | 2. | 成果 | 115 |
| 第1項 地勢 | 第5章 調査成果の整理とまとめ | 125 | |
| 第2項 地形 | 1. | 上面から部分的に検出された遺構 | 125 |
| 第2節 歴史的環境 | 2. | 中・近世の遺構 | 125 |
| 第1項 旧石器時代 | 3. | 平安・古墳時代の遺構 | 127 |
| 第2項 繩文時代 | 4. | 古墳時代前期以前の遺構 | 127 |
| 第3項 弥生時代 | 遺物観察表 | 129 | |
| 第4項 古墳時代 | 写真図版 | | |
| 第5項 奈良・平安時代 | 報告書抄録 | | |
| 第6項 中世 | | | |
| 第7項 近世 | | | |
| 第3節 基本上層 | | | |
| 第3章 発見された遺構と遺物 | | | |
| 第1節 中・近世の遺跡と遺物 | | | |
| 1. 挖立柱建物 | | | |
| 2. 柵 | | | |
| 3. 溝 | | | |
| 4. 井戸 | | | |

挿図目次

| | | | |
|---------------------------------|----|--|-----|
| 第1図 道跡の位置··· | 2 | 第33図 61・63・64・66・67・69~71・75号土坑··· | 80 |
| 第2図 調査区決定図··· | 3 | 第34図 72~74・78号土坑··· | 82 |
| 第3図 周辺地形分類図··· | 9 | 第35図 1~19・21・22号ピット··· | 84 |
| 第4図 周辺の遺跡··· | 18 | 第36図 23~33・35・38・40~44・46~48号ピット··· | 85 |
| 第5図 基本上層図··· | 28 | 第37図 49・51・53~55・58・61・63~72・86~89号ピット··· | 86 |
| 第6図 古墳・古代~中・近世の遺構全体図··· | 31 | 第38図 91・93・95・99~103・105~108・110~116号ピットと91号ピット··· | 87 |
| 第7図 1号掘立柱建物··· | 33 | ト出土遺物··· | 87 |
| 第8図 2号掘立柱建物··· | 34 | 第39図 1号壙··· | 88 |
| 第9図 3・4号掘立柱建物··· | 37 | 第40図 1号竪穴建物··· | 91 |
| 第10図 5号掘立柱建物と出土遺物··· | 38 | 第41図 1号竪穴建物··· | 92 |
| 第11図 1号壙··· | 40 | 第42図 1号竪穴建物出土上遺物··· | 93 |
| 第12図 1号溝··· | 41 | 第43図 2~4号竪穴建物、1号壙の穴状遺構··· | 95 |
| 第13図 2・3号溝と3号溝出土上遺物··· | 42 | 第44図 2・4号竪穴建物壙··· | 96 |
| 第14図 4~6号溝··· | 44 | 第45図 3号竪穴建物自然石集巾圓形微細図··· | 97 |
| 第15図 7号溝··· | 45 | 第46図 2号竪穴建物出土上遺物(1)··· | 98 |
| 第16図 8号溝··· | 46 | 第47図 2号竪穴建物出土上遺物(2)、3号竪穴建物出土上遺物··· | 99 |
| 第17図 9~13号溝··· | 48 | 第48図 4号竪穴建物出土上遺物··· | 100 |
| 第18図 14号溝··· | 50 | 第49図 5号竪穴建物··· | 102 |
| 第19図 1号井戸と出土上遺物··· | 51 | 第50図 5号竪穴建物出土上遺物··· | 103 |
| 第20図 2号井戸と出土上遺物··· | 52 | 第51図 1号壙と出土上遺物··· | 104 |
| 第21図 3号井戸と出土上遺物··· | 53 | 第52図 遺構外出土近世陶器、埴輪片、石製品、金属製品··· | 105 |
| 第22図 4号井戸と出土上遺物··· | 54 | 第53図 古墳時代前期4世紀後半以前の遺構全体図··· | 107 |
| 第23図 5・6号井戸··· | 55 | 第54図 68~76・77号土坑··· | 109 |
| 第24図 1・2・4号集石··· | 57 | 第55図 73~83・118~125号ピット··· | 110 |
| 第25図 1~7号土坑と5・6号土坑出土上遺物··· | 59 | 第56図 遺構外出土縄文土器··· | 111 |
| 第26図 8~17号土坑··· | 63 | 第57図 旧石器確認トレントチ··· | 112 |
| 第27図 18~22号土坑··· | 65 | 第58図 テフラ分析試料の層位1··· | 120 |
| 第28図 22~26号土坑と26号土坑出土上遺物··· | 66 | 第59図 テフラ分析試料の層位2··· | 121 |
| 第29図 27~34号土坑··· | 69 | 第60図 テフラ分析試料の層位3··· | 122 |
| 第30図 35~37・39~41・53・60・65号土坑··· | 71 | 第61図 テフラ分析試料の層位写真1··· | 123 |
| 第31図 42~45・54~55・58・59・62号土坑··· | 74 | 第62図 テフラ分析試料の層位写真2、テフラ分析試料写真··· | 124 |
| 第32図 46~52・56・57号土坑··· | 77 | | |

表 目 次

| | | | |
|----------------|-----|------------------|-----|
| 第1表 周辺遺跡一覧表··· | 19 | 第4表 テフラ検出分析結果··· | 119 |
| 第2表 検出遺構一覧表··· | 29 | 第5表 遺物観察表··· | 129 |
| 第3表 ピット一覧表··· | 113 | | |

写真目次

| | | |
|--------|------------------------|-------------------------|
| P L. 1 | 1 調査区全景(東から) | 15 5号掘立柱建物P 6断面(西から) |
| | 2 調査区全景(北から) | 1 1号櫛全景(東から) |
| P L. 2 | 1 1号掘立柱建物P 1全景(南から) | 2 1号櫛P 1全景(南から) |
| | 2 1号掘立柱建物P 1断面(南から) | 3 1号櫛P 1断面(南から) |
| | 3 1号掘立柱建物P 1断面(南から) | 4 1号櫛P 2全景(南から) |
| | 4 1号掘立柱建物P 2全景(南から) | 5 1号櫛P 2断面(南から) |
| | 5 1号掘立柱建物P 2断面(南から) | 6 1号櫛P 3全景(南から) |
| | 6 1号掘立柱建物P 3全景(南から) | 7 1号櫛P 4全景(南から) |
| | 7 1号掘立柱建物P 3断面(南から) | 8 1号櫛P 4断面(南から) |
| | 8 1号掘立柱建物P 4全景(北から) | 9 1号櫛P 5全景(南から) |
| | 9 1号掘立柱建物P 4断面(北から) | 10 1号櫛P 5断面(南から) |
| | 10 1号掘立柱建物P 5全景(南から) | 11 1号櫛P 6全景(南から) |
| | 11 1号掘立柱建物P 5断面(南から) | 12 1号櫛P 6断面(南から) |
| | 12 1号掘立柱建物P 6全景(東から) | 13 1号櫛P 7全景(南から) |
| P L. 3 | 1 2号掘立柱建物南側P 1全景(東から) | 14 1号櫛P 7断面(南から) |
| | 2 2号掘立柱建物北側P 1全景(東から) | P L. 8 1 1・2号溝全景(西から) |
| | 3 2号掘立柱建物 P 1全景(南から) | 2 1号溝全景(東から) |
| | 4 2号掘立柱建物 P 2全景(南から) | 3 2号溝全景(南東から) |
| | 5 2号掘立柱建物 P 3全景(南から) | 4 3号溝全景(東から) |
| | 6 2号掘立柱建物 P 4全景(南から) | 5 3号溝A～A'断面(東から) |
| | 7 2号掘立柱建物 P 5全景(南から) | 6 4号溝全景(北から) |
| | 8 2号掘立柱建物 P 6全景(南から) | 7 4号溝断面(南から) |
| | 9 2号掘立柱建物 P 7全景(南から) | P L. 9 1 5号溝全景(北から) |
| | 10 2号掘立柱建物 P 8全景(南から) | 2 5号溝断面(北から) |
| | 11 2号掘立柱建物 P 9全景(南から) | 3 6号溝全景(西から) |
| | 12 2号掘立柱建物 P 10全景(南から) | 4 7号溝全景(西から) |
| | 13 2号掘立柱建物P 11全景(南から) | 5 6号溝断面(西から) |
| P L. 4 | 1 3号掘立柱建物全景(南東から) | 6 7号溝断面(西から) |
| | 2 3号掘立柱建物 P 1全景(南から) | P L. 10 1 8号溝全景(東から) |
| | 3 3号掘立柱建物 P 1断面(南から) | 2 8号溝断面(東から) |
| | 4 3号掘立柱建物 P 2全景(南から) | 3 9号溝断面(西から) |
| | 5 3号掘立柱建物 P 3全景(南から) | 4 9～11号溝全景(東から) |
| | 6 3号掘立柱建物 P 3断面(南から) | P L. 11 1 10号溝断面(西から) |
| | 7 3号掘立柱建物 P 4全景(南から) | 2 11号溝断面(西から) |
| P L. 5 | 1 3号掘立柱建物 P 4断面(南から) | 3 12号溝全景(東から) |
| | 2 3号掘立柱建物 P 5全景(南東から) | 4 12号溝断面(東から) |
| | 3 3号掘立柱建物 P 5断面(南東から) | 5 13号溝全景(東から) |
| | 4 3号掘立柱建物 P 6全景(南から) | 6 13号溝断面(東から) |
| | 5 3号掘立柱建物 P 6断面(南から) | 7 14号溝北側全景(南から) |
| | 6 3号掘立柱建物 P 7全景(南東から) | 8 14号溝A～A'断面(南から) |
| | 7 3号掘立柱建物 P 7断面(南から) | P L. 12 1 14号溝南側全景(北から) |
| | 8 3号掘立柱建物 P 8全景(南から) | 2 14号溝B～B'断面(北から) |
| | 9 3号掘立柱建物 P 8断面(南から) | 3 1号井戸掘出状況(南から) |
| | 10 4号掘立柱建物 P 1全景(南から) | 4 1号井戸全景(東から) |
| | 11 4号掘立柱建物 P 1断面(南から) | 5 1号井戸掘方全景(南から) |
| | 12 4号掘立柱建物 P 2全景(南から) | 6 1号井戸完掘全景(南から) |
| | 13 4号掘立柱建物 P 2断面(南から) | 7 2号井戸検出状況(南から) |
| | 14 4号掘立柱建物 P 3全景(西から) | 8 2号井戸全景(南から) |
| | 15 4号掘立柱建物 P 3断面(西から) | P L. 13 1 2号井戸断面(南から) |
| P L. 6 | 1 4号掘立柱建物 P 4全景(東から) | 2 2号井戸掘方全景(南から) |
| | 2 4号掘立柱建物 P 4断面(東から) | 3 2号井戸完掘全景(南から) |
| | 3 調査状況(南東から) | 4 3号井戸検出状況(南から) |
| | 4 5号掘立柱建物 P 1全景(南から) | 5 3号井戸全景(南から) |
| | 5 5号掘立柱建物 P 1断面(南から) | 6 3号井戸掘方全景(東から) |
| | 6 5号掘立柱建物 P 2全景(南から) | 7 3号井戸完掘全景(東から) |
| | 7 5号掘立柱建物 P 2断面(南から) | P L. 14 1 4号井戸全景(東から) |
| | 8 5号掘立柱建物 P 3全景(南から) | 2 4号井戸断面(西南から) |
| | 9 5号掘立柱建物 P 3断面(南から) | 3 4号井戸完掘全景(南から) |
| | 10 5号掘立柱建物 P 4全景(南から) | 4 5号井戸全景(南から) |
| | 11 5号掘立柱建物 P 4断面(南から) | 5 5号井戸断面(南から) |
| | 12 5号掘立柱建物 P 5全景(南から) | 6 5号井戸完掘全景(南から) |
| | 13 5号掘立柱建物 P 5断面(南から) | 7 6号井戸全景(南から) |
| | 14 5号掘立柱建物 P 6全景(西から) | 8 6号井戸完掘全景(南から) |

| | | | | |
|---------|----|--------------------|---------|--------------------|
| P L. 15 | 1 | 1・2号集石全景(南から) | 5 | 35号土坑断面(南から) |
| | 2 | 1号集石B-B'断面(南から) | 6 | 36・60号土坑断面(西から) |
| | 3 | 1号集石掘方全景(南から) | 7 | 37号土坑全景(東から) |
| | 4 | 2号集石B-B'断面(南から) | 8 | 37号土坑断面(南から) |
| | 5 | 2号集石掘方全景(南から) | 9 | 38号土坑全景(南から) |
| | 6 | 4号集石全景(南から) | 10 | 38号土坑断面(北から) |
| | 7 | 4号集石断面(南から) | 11 | 39号土坑埋出状況(東から) |
| | 8 | 4号集石掘方全景(南から) | 12 | 39号土坑全景(東から) |
| P L. 16 | 1 | 1号土坑全景(南から) | 1 | 39号土坑A-A'断面(東から) |
| | 2 | 1号土坑断面(南から) | 2 | 40号土坑全景(北から) |
| | 3 | 2号土坑全景、断面(北から) | 3 | 40号土坑断面(西から) |
| | 4 | 3・4号土坑全景(東から) | 5 | 41号土坑全景(南から) |
| | 5 | 3・4号土坑断面(東から) | 6 | 41号土坑断面(南から) |
| | 6 | 5・6号土坑全景(東から) | 7 | 42・44・45号土坑全景(南から) |
| | 7 | 7・9号土坑全景(南から) | 8 | 42・44・45号土坑断面(東から) |
| | 8 | 5・6号土坑断面(東から) | 9 | 43号土坑全景(南から) |
| | 9 | 7号土坑断面(東から) | 10 | 43号土坑断面(西から) |
| | 10 | 8号土坑断面(東から) | 11 | 46号土坑全景(南から) |
| | 11 | 9号土坑断面(東から) | 12 | 46・47号土坑全景(東から) |
| | 12 | 10号土坑全景(南から) | 1 | 46・47号土坑断面(東から) |
| P L. 17 | 1 | 10号土坑断面(東から) | 2 | 48・49号土坑全景(東から) |
| | 2 | 11号土坑全景(南から) | 3 | 49号土坑断面(南から) |
| | 3 | 11号土坑断面(東から) | 4 | 49号土坑断面(南から) |
| | 4 | 12号土坑全景(南から) | 5 | 50号土坑全景(南から) |
| | 5 | 12号土坑断面(東から) | 6 | 50号土坑断面(東から) |
| | 6 | 13号土坑全景(南から) | 7 | 51号土坑全景(南から) |
| | 7 | 13号土坑断面(南から) | 8 | 51号土坑断面(東から) |
| | 8 | 14号土坑全景(南から) | 9 | 52号土坑全景(南から) |
| | 9 | 14号土坑断面(南から) | 10 | 52号土坑断面(西から) |
| | 10 | 15号土坑全景(南から) | 11 | 53号土坑全景(北から) |
| | 11 | 15号土坑断面(南から) | 12 | 53号土坑断面(西から) |
| | 12 | 16号土坑全景(南から) | 13 | 54号土坑全景(南から) |
| | 13 | 16号土坑断面(南から) | 14 | 54号土坑断面(南東から) |
| | 14 | 17号土坑全景(南から) | 15 | 56号土坑全景(南から) |
| | 15 | 17号土坑断面(南から) | P L. 23 | 1 |
| P L. 18 | 1 | 18号土坑全景(南西から) | 2 | 55・58・59号土坑全景(南から) |
| | 2 | 18号土坑断面(南西から) | 3 | 55号土坑断面(東から) |
| | 3 | 19号土坑全景(南から) | 4 | 55・62号土坑全景(南から) |
| | 4 | 19号土坑断面(南から) | 5 | 62号土坑断面(南から) |
| | 5 | 20号土坑全景(南から) | 6 | 57号土坑全景(南から) |
| | 6 | 20号土坑断面(南から) | 7 | 57号土坑断面(南から) |
| | 7 | 21・23号土坑全景(南から) | 8 | 61号土坑全景(南から) |
| | 8 | 21号土坑断面(西から) | 9 | 61号土坑断面(西から) |
| | 9 | 22号土坑断面(南から) | 10 | 63号土坑全景(南から) |
| | 10 | 23号土坑断面(南東から) | 11 | 63号土坑断面(東から) |
| | 11 | 24号土坑全景(南東から) | 12 | 64・75号土坑全景(東から) |
| | 12 | 24号土坑断面(南東から) | 13 | 64号土坑断面(南から) |
| P L. 19 | 1 | 25号土坑全景(南から) | 14 | 75号土坑断面(南から) |
| | 2 | 25号土坑断面(南から) | 15 | 66号土坑全景(東から) |
| | 3 | 26号土坑全景(南から) | P L. 24 | 1 |
| | 4 | 26号土坑断面(東から) | 2 | 67号土坑全景(東から) |
| | 5 | 27号土坑全景(南から) | 3 | 69号土坑全景(南東から) |
| | 6 | 27号土坑断面(東から) | 4 | 69号土坑断面(南東から) |
| | 7 | 28・31号土坑全景(東から) | 5 | 70号土坑全景(北から) |
| | 8 | 31号土坑断面(東から) | 6 | 70号土坑断面(東から) |
| | 9 | 29号土坑全景(南から) | 7 | 71号土坑全景(北から) |
| | 10 | 29号土坑断面(東から) | 8 | 71号土坑断面(西から) |
| | 11 | 30号土坑、7号ピット全景(北から) | 9 | 72号土坑全景(西から) |
| | 12 | 32号土坑全景(南から) | 10 | 72号土坑断面(西から) |
| | 13 | 32号土坑断面(南西から) | 11 | 73・74号土坑全景(南から) |
| | 14 | 33号土坑全景(南から) | 12 | 73号土坑断面(南から) |
| | 15 | 33号土坑断面(東から) | 13 | 74号土坑全景(南から) |
| P L. 20 | 1 | 34号土坑全景(南から) | 14 | 74号土坑断面(南から) |
| | 2 | 34号土坑断面(東から) | 15 | 78号土坑全景、断面(南東から) |
| | 3 | 35号土坑全景(南から) | P L. 25 | 1 |
| | 4 | 36・60・65号土坑全景(南から) | 2 | 1号ピット断面(南から) |

| | | | |
|---------|---------------------|---------|------------------|
| 3 | 2号ビット全景(南から) | 9 | 47号ビット全景(南東から) |
| 4 | 2号ビット断面(南から) | 10 | 47号ビット断面(南東から) |
| 5 | 3号ビット全景(南から) | 11 | 48号ビット全景(南東から) |
| 6 | 3号ビット断面(南から) | 12 | 48号ビット断面(南東から) |
| 7 | 4号ビット全景(南から) | 13 | 49号ビット全景(南から) |
| 8 | 4号ビット断面(南から) | 14 | 49号ビット断面(南西から) |
| 9 | 5号ビット全景(南から) | 15 | 51号ビット全景(南から) |
| 10 | 5号ビット断面(南から) | 1 | 51号ビット断面(南から) |
| 11 | 6号ビット断面(北から) | 2 | 53号ビット全景(南東から) |
| 12 | 8・9号ビット全景(南から) | 3 | 53号ビット断面(南東から) |
| 13 | 8・9号ビット断面(東から) | 4 | 54号ビット全景(南から) |
| 14 | 10号ビット全景(南から) | 5 | 54号ビット断面(南東から) |
| 15 | 10号ビット断面(北から) | 6 | 55号ビット全景(南から) |
| P L, 26 | 1 11号ビット全景(南から) | 7 | 55号ビット断面(南から) |
| | 2 11号ビット断面(南から) | 8 | 58号ビット全景(南から) |
| | 3 12・13号ビット全景(南から) | 9 | 61号ビット全景(南から) |
| | 4 12・13号ビット断面(南から) | 10 | 61号ビット断面(南から) |
| | 5 14号ビット全景(南から) | 11 | 63号ビット全景(南から) |
| | 6 14号ビット断面(南から) | 12 | 63号ビット断面(南から) |
| | 7 15号ビット全景(東から) | 13 | 64号ビット全景(南から) |
| | 8 16号ビット全景(南から) | 14 | 64号ビット断面(南東から) |
| | 9 16号ビット断面(南から) | 15 | 65号ビット全景(南から) |
| | 10 17号ビット全景(南から) | P L, 31 | 1 65号ビット断面(南西から) |
| | 11 17号ビット断面(南から) | 2 | 66号ビット全景(南から) |
| | 12 18号ビット全景(南から) | 3 | 66号ビット断面(南から) |
| | 13 18号ビット断面(南から) | 4 | 67号ビット全景(南から) |
| | 14 19号ビット全景(南から) | 5 | 67号ビット断面(南から) |
| | 15 19号ビット断面(南西から) | 6 | 68号ビット全景(南から) |
| P L, 27 | 1 21号ビット全景(南から) | 7 | 68号ビット断面(南から) |
| | 2 21号ビット断面(東から) | 8 | 69号ビット全景(南から) |
| | 3 22号ビット全景(南から) | 9 | 69号ビット断面(南から) |
| | 4 22号ビット断面(南から) | 10 | 70号ビット全景(南から) |
| | 5 23号ビット全景(北から) | 11 | 70号ビット断面(南東から) |
| | 6 23号ビット断面(北から) | 12 | 71号ビット全景(南から) |
| | 7 24号ビット全景(南から) | 13 | 71号ビット断面(南から) |
| | 8 24号ビット断面(南から) | 14 | 72号ビット全景(南から) |
| | 9 25号ビット全景(南から) | 15 | 72号ビット断面(南西から) |
| | 10 25号ビット断面(南から) | P L, 32 | 1 86号ビット全景(南から) |
| | 11 26号ビット全景(北から) | 2 | 87・88号ビット全景(南から) |
| | 12 26号ビット断面(南東から) | 3 | 87・88号ビット断面(南から) |
| | 13 27号ビット全景(南から) | 4 | 89号ビット全景(西から) |
| | 14 28・29号ビット全景(北から) | 5 | 91号ビット全景(南から) |
| | 15 28号ビット断面(西から) | 6 | 91号ビット断面(南から) |
| P L, 28 | 1 30号ビット全景(南から) | 7 | 93号ビット全景(西から) |
| | 2 30号ビット断面(南から) | 8 | 95号ビット全景(南から) |
| | 3 31号ビット全景(南から) | 9 | 95号ビット断面(南から) |
| | 4 31号ビット断面(南から) | 10 | 99号ビット全景(北から) |
| | 5 32号ビット全景(南から) | 11 | 99号ビット断面(北から) |
| | 6 32号ビット断面(南から) | 12 | 100号ビット全景(南から) |
| | 7 33号ビット全景(南東から) | 13 | 100号ビット断面(南から) |
| | 8 33号ビット断面(南東から) | 14 | 101号ビット全景(南から) |
| | 9 35号ビット全景(南から) | 15 | 101号ビット断面(南から) |
| | 10 35号ビット断面(南から) | P L, 33 | 1 102号ビット全景(東から) |
| | 11 38号ビット全景(南から) | 2 | 102号ビット断面(東から) |
| | 12 40号ビット全景(南西から) | 3 | 103号ビット全景(南から) |
| | 13 40号ビット断面(南西から) | 4 | 103号ビット断面(南から) |
| | 14 41号ビット全景(南から) | 5 | 105号ビット全景(南から) |
| | 15 41号ビット断面(南西から) | 6 | 105号ビット断面(南から) |
| P L, 29 | 1 42号ビット全景(南から) | 7 | 106号ビット全景(東から) |
| | 2 42号ビット断面(南から) | 8 | 106号ビット断面(東から) |
| | 3 43号ビット全景(南から) | 9 | 107号ビット全景(南から) |
| | 4 43号ビット断面(南から) | 10 | 107号ビット断面(南から) |
| | 5 44号ビット全景(南から) | 11 | 108号ビット全景(北から) |
| | 6 44号ビット断面(南から) | 12 | 108号ビット断面(北から) |
| | 7 46号ビット全景(南から) | 13 | 110号ビット全景(北から) |
| | 8 46号ビット断面(南から) | 14 | 110号ビット断面(南から) |

| | | |
|---------|--|---|
| P L. 34 | 1 111号ビット全景(南から) 2 112号ビット全景(東から) 3 112号ビット断面(東から) 4 113号ビット全景(南から) 5 113号ビット断面(南から) 6 114号ビット全景(南から) 7 114号ビット断面(南から) 8 115号ビット全景(北から) 9 115号ビット断面(北から) 10 116号ビット全景(北から) 11 116号ビット断面(北から) 12 1号壙の側全景(南から) 13 1号壙東側全景(南から) 14 1号壙西側面(南から) | 5 77号土坑全景(南東から) 6 77号土坑断面(南東から) 7 73号ビット全景(南から) 8 73号ビット断面(南から) 9 74号ビット全景(南から) 10 74号ビット断面(南から) 11 75号ビット全景(南から) 12 75号ビット断面(南から) 13 76号ビット全景(南から) 14 76号ビット断面(北西から) 15 77号ビット全景(南東から) |
| P L. 35 | 1 1号壙全景(東から) 2 1号壙前面(南から) 3 1号壙動物出土状況(南から) 4 1～4号豊穴建物、1号豊穴状構全景(南から) | P L. 44 1 77号ビット断面(南東から) 2 78号ビット全景(南から) 3 78号ビット断面(南から) 4 79号ビット全景(南から) 5 79号ビット断面(南から) 6 80号ビット全景(南から) 7 80号ビット断面(南から) 8 81号ビット全景(南から) 9 81号ビット断面(北から) 10 82号ビット全景(南から) 11 82号ビット断面(南西から) 12 83号ビット全景(南から) 13 83号ビット断面(南から) |
| P L. 36 | 1 1号豊穴建物全景(西から) 2 1号豊穴建物 A-A' 断面(北から) 3 1号豊穴建物 B-B' 断面(西から) 4 1号豊穴建物 縦全景(西から) 5 1号豊穴建物 縦掘方全景(西から) | P L. 45 1 119号ビット全景(南から) 2 119号ビット断面(南から) 3 120号ビット全景(南東から) 4 121号ビット全景(南東から) 5 120・121号ビット断面(南東から) 6 122号ビット全景(南東から) 7 122号ビット断面(南東から) 8 123号ビット全景(南から) 9 123号ビット断面(南から) 10 124号ビット全景(南東から) 11 124号ビット断面(南東から) 12 125号ビット全景(南から) 13 125号ビット断面(南から) |
| P L. 37 | 1 1号豊穴建物掘方全景(西から) 2 1号豊穴建物掘方 B-B' 断面(西から) 3 1号豊穴建物掘方 E-E' 断面(西から) 4 1号豊穴建物底下土坑 F-F' 断面(北西から) 5 1号豊穴建物 P I-C-G' 断面(西から) 6 1号豊穴建物 P 2-H-H' 断面(南から) 7 1号豊穴建物 P 3 I-I' 断面(南西から) 8 1号豊穴建物調査状況(西から) | P L. 46 1 基本上層 1 (西から) 2 基本上層 2 (東から) 3 基本上層 3 (東から) 4 旧石器確認 1 号トレンチ全景(南から) 5 旧石器確認 2 号トレンチ全景(南から) 6 旧石器確認 2 号トレンチ断面(南から) 7 旧石器確認 3 号トレンチ全景(南から) 8 旧石器確認 3 号トレンチ断面(南から) 9 旧石器確認 4 号トレンチ全景(南から) 10 旧石器確認 4 号トレンチ断面(南から) 11 旧石器確認 5 号トレンチ全景(南から) 12 旧石器確認 6 号トレンチ全景(南から) |
| P L. 38 | 1 2～4号豊穴建物、1号豊穴状構全景(西から) 2 3×4号豊穴建物、1号豊穴状構 A-A' 断面(北から) 3 3×4号豊穴建物、1号豊穴状構 A-A' 断面(北東から) 4 3×4号豊穴建物、1号豊穴状構 A-A' 断面(北東から) 5 2×4号豊穴建物、1号豊穴状構 B-B' 断面(北西から) | P L. 47 1 旧石器確認 4 号トレンチ全景(南から) 2 旧石器確認 4 号トレンチ断面(南から) 3 旧石器確認 5 号トレンチ全景(南から) 4 旧石器確認 6 号トレンチ全景(南から) |
| P L. 39 | 1 2号豊穴建物全景(西から) 2 2号豊穴建物遺物出土状況(西から) 3 2号豊穴建物縦全景(西から) 4 2号豊穴建物 縦掘方全景(西から) 5 3号豊穴建物全景(西から) 6 3号豊穴建物遺物出土状況(西から) 7 3号豊穴建物自然石集団縦全景(西から) 8 3号豊穴建物自然石集団縦掘方全景(西から) | P L. 48 5号柱立柱建物、1～4号井戸、5・6・26号土坑、9号ビット出土遺物 |
| P L. 40 | 1 4号豊穴建物、1号豊穴状構全景(西から) 2 4号豊穴建物、1号豊穴状構全景(西から) 3 4号豊穴建物縦全景(西から) 4 4号豊穴建物 縦掘方全景(西から) 5 5号豊穴建物全景(南東から) | P L. 49 1 2号豊穴建物出土遺物 |
| P L. 41 | 1 5号豊穴建物 A-A' 断面(南東から) 2 5号豊穴建物 B-B' 断面(南東から) 3 5号豊穴建物遺物出土状況(南東から) 4 5号豊穴建物炉全景(南東から) 5 5号豊穴建物炉 C-C' 断面(東から) 6 5号豊穴建物 P 1 全景(南東から) 7 5号豊穴建物 P 2 全景(南東から) 8 5号豊穴建物 P 3 全景(南東から) | P L. 50 4・5号豊穴建物、1号壙、道構外(近世・織文)出土遺物 |
| P L. 42 | 1 5号豊穴建物 P 4 全景(南から) 2 5号豊穴建物 P 5 全景(南東から) 3 5号豊穴建物掘方全景(南東から) 4 5号豊穴建物掘方 A-A' 断面(南東から) | |
| P L. 43 | 1 68号土坑全景(南から) 2 68号土坑断面(南から) 3 76号土坑全景(南西から) 4 76号土坑断面(南から) | |

第1章 調査に至る経緯、方法と経過

第1節 調査に至る経緯

群馬県では、近年、気候変動の影響等により、水害等の気象災害が頻発・激甚化する中で、災害の脅威にしっかりと対応でき、災害時にも機能する強靭な道路ネットワークの構築に取り組んでいる。西毛広域幹線道路は、防災・物流拠点集積エリア間を結ぶ強靭な道路ネットワークとして、大規模災害時における広域的な救命救助や被災地への支援物資輸送を可能にし、安定した経済活動の継続を目的に、「ぐんま・県土整備プラン2020」に基づいて整備が進められている。西毛広域幹線道路は、国道17号線との前橋市千代田町三丁目交差点を起点とし、前橋市西部、高崎市北西部、安中市中央部を経て、国道254号富岡バイパスとの富岡市富岡町のめ跨線橋北交差点に至る、総延長27.8kmの主要幹線道路である。この道路整備によって、前橋～高崎・安中エリア間の移動が円滑になり、災害時においても広域的な救命救助や被災地への支援物資輸送などが可能になると共に、周囲地域における交通渋滞の緩和や物流の効率化、生活圏の拡大など西毛地域の産業、経済、観光の発展を担うことが期待されている。

現在、起点の国道17号の前橋市千代田町三丁目交差点から高崎市棟高の主要地方道高崎渋川線(旧道)との交差点に至る前橋工区・元総社舊海工区・国分寺工区・中央第二工区計6.24kmと、高崎市真鄉町上芝から高崎市下里見に至る高崎西工区4.70km、安中市下秋間から安中市安中の国道18号との安中市役所入口交差点に至る安中工区1.90kmが現在整備中であり、前橋市千代田町三丁目交差点から前橋市問屋町までの前橋工区2.73kmと、前橋市元総社町の関越自動車道と交差する箇所から高崎市引間町の主要地方道高崎渋川線バイパスとの辻久保交差点までの国分寺工区1.64km、それに主要地方道高崎渋川線バイパスとの辻久保交差点から高崎市棟高の主要地方道高崎渋川線との交差点までの中央第二工区西側0.40kmに至る間はすでに供用が開始されている。

西毛広域幹線道路高崎工区は、「災害時における安全

な通行を確保してほしい。」、「棟名から前橋高崎方面に行くには、渋滞が激しい場所があり非常にアクセスが悪い。」、「東西方向を結ぶ道路が少ないため、バイパス道路には非常に期待している。」などといった地元住民からの強い要望を受けて、災害時にも機能する強靭な道路ネットワークの構築を目的に、高崎市棟高町から真郷町下芝に至る総延長3.17kmに及ぶ主要地方道前橋安中富岡線のバイパス整備事業として計画された。

高崎市保渡田町地内における西毛広域幹線道路高崎工区工事計画地点には、高崎市の遺跡台帳に登録された「鎌倉室町No.55遺跡(高崎市遺跡番号02007)」と「保渡田阿弥陀遺跡(高崎市遺跡番号04028)」の2箇所の周知の埋蔵文化財埋蔵地の範囲にかかっていたため、令和2(2020)年5月7日付にて群馬県県土整備部建設企画課(以下、県建設企画課と言う)から群馬県地域創生部文化財保護課(以下、県文化財保護課と言う)宛令和2年度以降の公共開発関連計画一覧表が提出されたことを承けて、県文化財保護課は埋蔵文化財の取扱いに関する判定を行い、令和2年5月8日付文財第30004-26号にて県建設企画課に宛て事前の埋蔵文化財試掘・確認調査(C判定)が必要と通知した。

工事事業を管掌する群馬県高崎土木事務所(以下、高崎土木事務所と言う)は令和2年10月23日付高土第31-1号にて県文化財保護課宛に工事対象箇所における埋蔵文化財埋蔵の有無を確認するための試掘・確認調査の依頼し、これを承けて県文化財保護課では、同日付文財第706-1号にて高崎土木事務所宛令和2年10月28日～29日、11月4日～6日に試掘・確認調査を実施する旨を通知した。

県文化財保護課では令和2年10月28日～29日、11月4日～6日に高崎市保渡田町地内における埋蔵文化財試掘・確認調査を実施し、工事対象地内2地点において埋蔵文化財の包蔵を確認した。県文化財保護課は令和3(2021)年2月9日付文財第706-80号にて高崎土木事務所宛、高崎市保渡田町地内の事業地の一部において埋蔵文化財発掘調査が必要であることを通知した。

事業地においては遺構・遺物が検出されたため、当該事業の実施によって埋蔵文化財に破壊が及ぶことは明白となつたが、用地取得状況、事業地周辺における埋蔵文化財包蔵の状況、事業の進捗状況等によって、埋蔵文化財包蔵地を避けた路線変更は既に不可能な状況にあった。そのため、当該箇所に関しては、やむを得ず埋蔵文化財発掘調査を実施し、記録保存の措置を執ることが同事業と文化財保護との調整を図る上で最も適切であるとの結論に至った。

県文化財保護課では発掘調査の実施に向けて、県建設

企画課、高崎土木事務所、高崎市教育委員会事務局文化財保護課(以下、高崎市教委と言う)、発掘調査を実施する公益財團法人群馬県埋蔵文化財調査事業団(以下、当事業団と称する)、地元等との協議を重ねた。

調整・協議の結果、令和3年度に当該地における保渡田屋敷廻り遺跡と保渡田阿弥陀遺跡の2遺跡、計7,963m²(当初、後に6360.9m²に変更)を対象とする発掘調査を当事業団が実施することとなり、高崎土木事務所は令和3年4月15日付高土第31-1号にて高崎市教委宛に文化財保護法94条に規定する届出及び添付書類を提出



第1図 遺跡の位置

〔国土地理院発行20万分の1地勢図「長野」「宇都宮」図幅を加工、高崎市都市計画図1万5千分の1を加工〕

し、これを承けて高崎市教委は令和3年4月15日付第15-16号にて県文化財保護課に進出した。

発掘調査は、履行期間を令和3年5月1日～令和3年12月31日、調査期間を令和3年6月1日～令和3年10月31日の5か月間として、実施されることとなったのである。

第2節 発掘調査の方法

第1項 調査区と座標の設定

令和3年度に実施された調査では、本遺跡と、その西南西側約500mに所在する保渡田阿弥陀遺跡の両遺跡を併せて同時に調査することになった。両遺跡を併せた調査対象面積は当初、7963.22m²であったが、調査進捗の結果6360.9m²となった。なお、本遺跡のみの調査対象面積は3197.73m²である。

保渡田屋敷廻り遺跡は全長約110m、幅約30mの東西に長い長方形状の調査区1区画、保渡田阿弥陀遺跡は全長約270m、幅約30mの逆台形状の範囲に3箇所の調査区が設けられる。

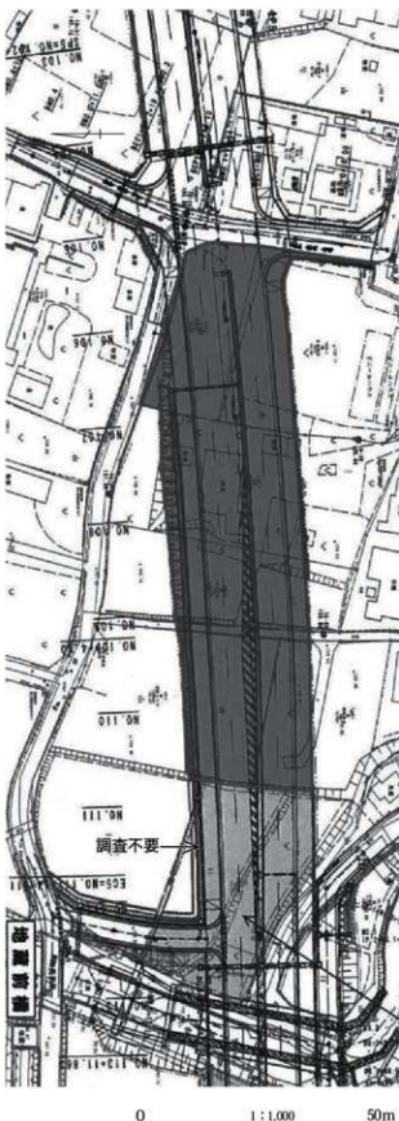
発掘調査に用いた座標は世界測地系(日本測地系2011平面直角座標第IX系)であり、10m×10mを基本とし設定した。遺構図中の座標については、座標値の下3桁を「X軸-Y軸」の順で記した。保渡田屋敷廻り遺跡の調査区は、世界測地系(日本測地系2011平面直角座標系第IX系)のX=42770～830、Y=-76700～810の範囲に収まる(第5図参照)。

遺構測量における遺構の位置及び遺物出土位置などはすべて世界測地系の座標によって記録しているため、本報告書でも、遺構外出土遺物を含め、遺構・遺物の位置情報については、世界測地系の座標によって表記する。

第2項 発掘調査の方法

調査範囲確定後、重機による表土掘削を開始し、重機掘削を終了した箇所から、安全を確認した上で発掘作業員を投入し、人力による鋤廉を使用しての遺構確認作業を行い、発見した遺構の掘削調査に着手した。

発掘作業員による遺構の掘り下げ等、調査の詳細な方法や手段、手順等については、遺跡掘削工事請負会社の現場代理人に逐一指示するとともに、常に安全対策を万



第2図 調査区決定図

全とし、作業の安全を十二分に図った上で実際の作業に着手するよう再三に亘って要請した。

埋没土の観察、写真撮影、測量委託業者への図化指示等は担当者が行った。

両遺跡の出土遺物は、遺物収納箱計6箱分の土器・石器・石製品・金属製品等で、遺物の洗浄・注記作業は業者委託して実施した。

第3項 遺構測量

遺構等の測量は、遺構断面及び平面実測図とも縮尺1/40を基本とし、竪穴建物の竪などを詳細に実測する際には適宜1/20などの縮尺とした。

遺構実測図の作成に当たっては、測量会社にデジタル測量を委託し、データ収録媒体及び打ち出し図面の提出を受けた。

上記、委託先測量会社により作成されたデジタルデータ成果品は、調査記録として保存されている。

第4項 遺構写真撮影

発掘調査において、すべての遺構の写真は発掘調査担当者が分担して撮影した。担当者により遺構全景、遺物出土状況、掘り方、土層(覆土)及び広視野での遺構写真撮影を行った。写真は、中型カメラによるモノクロフィルムとフルサイズデジタルカメラによるRAWデータでの記録化を行った。

主要な遺構については、中判カメラを用いてiso400モノクロフィルムを6×7cm判サイズで撮影し、撮影記録はネガフィルムの状態で保存し、焼き付け写真を貼付したフィルムの検索台帳を作成した。

また、発掘調査の過程で、調査の進捗状況の記録、及びすべての遺構について、デジタルカメラで撮影を行った。

また、調査記録として、遺構ごとに土層断面、遺物出土状況、遺構全景等の撮影を行い、さらに必要に応じて遺構の各部分について、検出および調査の状況について微細な接写を行っている。

なお、撮影した写真的デジタルデータはHD等のメディアに保存し、データのファイル名は、調査区・遺構略号・番号・撮影方向・内容を数値化したものに置き換えるリネーム作業を行った。

第3節 発掘調査の経過

本遺跡は、高崎市保渡田町地内、井野川と大清水川の合流地点付近の扇状地上に位置する。本遺跡の東側は推定保渡田城跡と接し、現況は主に宅地となっている。標高は約136~138mである。

周辺には古墳時代を中心に多くの遺跡が分布している。

保渡田屋敷廻り遺跡では調査区北～西部に土手状の高まりがあり、伝保渡田城に関わる土壘の存在が想定されていた。しかし、調査区内は現代の耕作による擾乱が著しく、調査区北～西部の土手状の高まりはAs-Cを含む黒色土まで、その区画の内側はローム上面まで現代の耕作が及んでおり、土壘の存在は確認できなかった。調査の結果、3面に亘る遺構確認面が確認された。1面目は二次堆積の天仁元(1108)年降下のAs-Bで埋没した近世の烟で、調査区北部土手部分の一部、表土直下に約100m残存していた。2面目は、現耕作土直下(1面目烟の下層を含む)の古墳時代～近世の遺構面で、古墳周溝、古墳時代～平安時代の竪穴建物・竪穴状遺構、中世の掘立柱建物・柵・ピット群、近世の溝・土坑・ピット等を確認した。3面目はAs-Cを含む黒色土下の繩文時代～古墳時代の遺構面で、調査区北部および西部の土手部分の一部から土坑・ピットを確認した。

なお、先述した通り、発掘調査は令和3年6月1日から同年10月31日まで実施されたが、そのうち、本遺跡の発掘調査に要した期間は令和3年6月1日から同年7月30日までである。両遺跡の調査を同時並行で実施した時期も存在するが、以下、調査日誌抄では、本遺跡の調査に該当する部分のみを掲載する。

調査日誌抄

令和3年

6月1日(火)担当者2名着任。事務所用地、調査区草刈り。

2日(水)表土削削、周辺整備表土削削。

9日(水)1面煙写真撮影、実測。1号溝上断面写真撮影、実測。

2面(北側土手部分)表土削削、遺構確認継続。竪穴建物、

1号溝、1号ピット掘削精査。

10日(木)2面竪穴建物掘削精査。1～6号土坑、1～5号ピット等写真撮影。

第3節 発掘調査の経過

- 11日(金)2面1号竪穴建物上層断面写真撮影、実測。2・3号竪穴建物掘削精査。1～6号土坑、1～5号ピット写真撮影、実測。
- 15日(火)2面1号竪穴建物出土物写真撮影。2～5号竪穴建物、1号竪穴道構削精査。7～10号土坑写真撮影。溝掘削精査。11～20号土坑全景写真撮影。
- 16日(水)2面1号竪穴建物全景写真撮影、実測。2～5号竪穴建物、1号竪穴道構上層断面写真撮影、実測。7～10号土坑、溝掘削精査。11～20号土坑実測。21～25号土坑写真撮影、実測。3～5号溝写真撮影。
- 17日(木)2面1号竪穴建物掘削精査。2～5号竪穴建物、1号竪穴道構精査。26～29号土坑全景写真撮影、平面実測。6・7号溝全景写真撮影。
- 18日(金)2面1号竪穴建物掘方実測、部分写真撮影。2～4号竪穴建物籠写真撮影、実測。土坑・溝精査。調査状況写真撮影。
- 21日(月)2面1号竪穴建物掘方全景写真撮影。2～4号竪穴建物掘方写真、実測。3～5号井戸上層断面上層写真撮影、実測。3号溝全景写真撮影。26～31号土坑全景写真撮影、実測。
- 22日(火)2面4号竪穴建物掘削方写真撮影、平面実測。1号竪穴道構全景写真撮影。1～5号井戸上層断面写真撮影、実測。6～35号土坑上層断面写真撮影、実測。溝・樋精査。
- 23日(水)2面32～43号土坑。7～24号ピット全景写真撮影、実測。1号墳周溝精査。掘立柱建物柱穴上層断面写真撮影、実測。
- 24日(木)2面44～53号土坑。25～30号ピット全景写真撮影、実測。1号墳周溝、ピット精査。
- 25日(金)2面54～55号土坑、31～35号ピット全景写真撮影、実測。1号墳周溝精査。
- 28日(月)2面55～65号土坑。35～41号ピット全景写真撮影、実測。1号墳周溝上層断面写真撮影、実測。5号竪穴建物上層断面写真撮影、実測。
- 30日(水)2面空洞、土坑精査。42～71号ピット全景写真撮影。1号墳周溝精査。5号竪穴建物精査。8号溝上層断面写真撮影。
- 7月5日(月)2面掘立柱建物全景写真撮影。42～71号ピット平面実測。5号竪穴建物精査。3面道構確認。
- 6日(火)2面1号墳周溝全景写真撮影、平面実測。5号竪穴建物全景写真撮影、平面実測。69号土坑上層断面写真撮影、実測。3面道構確認。68号土坑。72～83号ピット全景写真撮影、平面実測。
- 7日(水)2面5号竪穴建物掘方全景写真、平面実測。69号土坑全景写真、平面実測。3面土坑・ピット群写真撮影。旧石器確認調査着手。
- 8日(木)旧石器確認調査継続。
- 12日(月)旧石器確認調査継続。2面井戸掘削精査。70～75号土坑、84～94号ピット全景写真撮影、平面実測。
- 13日(火)旧石器確認調査継続。2面井戸掘削精査継続。95～116号ピット全景写真撮影、平面実測。
- 14日(水)旧石器確認調査継続。2面井戸掘削精査継続。110～117号ピット、1号掘立柱建物全景写真、平面実測。
- 15日(木)旧石器確認調査継続。3面76・77号土坑、118～125号ピット全景写真撮影、平面実測。
- 20日(火)旧石器確認調査継続。
- 26日(月)旧石器確認調査継続。
- 28日(水)旧石器確認調査トレーン土上層断面実測。保渡田屋敷廻り道跡調査終了。機材撤収。
- 29日(木)機材撤収。保渡田阿苏蛇遺跡の調査本格化へ。
- 30日(金)保渡田屋敷廻り遺跡の現務処理。

第4節 整理作業の方法と経過

整理作業は、令和5年2月1日から令和5年6月30日までの5か月間にわたって県高崎土木事務所の委託を受けて、当事業団が実施した。

出土遺物については、まず、報告書に掲載する土器類、石器・石製品類の選別を行い、土器類、石器・石製品類の写真撮影、接合・復元等の作業を実施した。次いで実測・トレース及び遺物観察表の作成を行い、業務を完了した。なお、今回の調査においては木製品は出土していない。遺構実測図については、まず調査区ごとに順次、各遺構の確認、遺構計測、遺構台帳の整備といった基礎作業とともに、遺構写真との確認作業を行い、その後、図面修正を進め、点検・整理の上、平面図及び土層断面図の編集及び修正、デジタル・トレース原図の作成、土層記注の編集等の作業を行い、デジタル原稿化を行った。

さらに、報告書に掲載する遺構写真を選定した後、レイアウト原案の作成、キャプション原稿の整備等を行い、レイアウト原案及びキャプション原稿をデジタル専業班において遺構写真図版頁のデジタル原稿化を行った。

これらの作業と並行して報告書本文の原稿の執筆を進めた。

それらを経て、デジタル化された遺構図面の校正、本文の原稿執筆及び報告書原稿の総合的なレイアウト等の作業、報告書原稿全体のデジタル組版及び編集作業を行った。

作成された原稿は、落札した業者に委託し、印刷・製本の業務を実施した。なお、業者委託した印刷業務の推移の中で、原稿の校正作業を実施し、完成後、納品を受

第1章 調査に至る経緯、方法と経過

け、納品された発掘調査報告書は、検品の上、完了検査を実施し、活用に資するために関係各機関へ発送する作業を行った。

また、これらの作業と並行して、調査及び整理業務の過程で作成された遺構・遺物の各種図面・写真等の記録類を収納する作業を実施した。発掘調査及び整理業務の過程で作成された遺構・遺物関連の各種図面及び写真等の調査記録資料は、一括して群馬県埋蔵文化財調査センターに収納・保管されている。

参考文献(第1章)

群馬県土整備部2023「令和5年度版 よくわかる公共事業 高崎編」

(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2022「年報」41

マッピングぐんま

<http://mapping-gunma.pref-gunma.jp/pref-gunma/top>

第2章 遺跡の地理的・歴史的環境

第1節 地理的環境

第1項 地勢

保渡田屋敷廻り遺跡は群馬県高崎市保渡田町90-1、90-2、1302-1、1302-2、1303-1、1303-2に、保渡田阿弥陀遺跡は同じく群馬県高崎市保渡田町756、762、781、782に所在している。

遺跡が所在する高崎市は群馬県の中南部、関東平野の北西端部に位置している。東京都心から約100km程度の位置にあり、西端は長野県北佐久郡軽井沢町、東端は前橋市に接しており、群馬県南西部をほぼ横断する形になっている。

江戸時代には高崎藩の城下町として、中山道69次中4番目に規模が大きい宿場町として、また物資の集散地・商業のまちとして大いにぎわった。街道筋の田町、本町、新町(現:あら町)などには市が立ち、鍛治町には鍛冶職人が、鞘町には刀の鞘師が、白銀町には金銀細工師らが住み、当時の職人の町は今も町名として留めている。明治33(1900)年、旧高崎城下を核とした高崎町が市制施行して成立した。

古くから交通の要衝で、中山道(国道17号・国道18号)と三国街道(群馬県道25号高崎渋川線)の分岐点、関越自動車道と北関東自動車道の分岐点、上越新幹線と北陸新幹線の分岐点になるなど、全国有数の交通拠点都市である。新幹線が停車する高崎駅は群馬県の県庁所在地前橋市の玄関口ともなっており、群馬県の交通の中心地である。県内有数の商業都市として盛えており、高崎郊外に位置する問屋町は、日本初の郊外型問屋団地である。

平成の大合併では、倉渕村、箕郷町、群馬町、新町、榛名町、吉井町を編入し、459.16km²の広大な市域と、約37万人の人口を擁する県下第一の都市となった。公示地価では、高崎市が商業地・住宅地とともに群馬県内の最高地点を占めている。

産業では近世以来の高崎紬・染色・木工品などの製作に加え、明治以降は製糸・織物・製粉・煙草・製紙業な

どが盛んとなった。第2次世界大戦後は機械・化学・電気機器・金属製品などの大規模工場、電機関係の群南工業団地、織維を中心とした卸売団地などが建設された。

気候は太平洋側気候と内陸性気候を併せ持つ。寒暑の差が大きく、冬季は西北西の乾燥した季節風が卓越し、「赤城嵐」「榛名嵐」と称される「空っ風」となって吹き付ける。降水量は少ない。夏季の中日は気温がかなり高くなり、全国1位となる日もある。朝の気温は下がり、熱帯夜になることは稀である。最高気温記録は1998年7月4日に観測された40.3℃で、全国の観測地点の中では20位タイの高さとなっている。年間を通して降水量は概して少なく、晴天が続く。夏季には雷雲が発生しやすく、その移動により局的に豪雨となる。

第2項 地形

(1) 群馬県南部平野部の地形

本遺跡が所在する群馬県高崎市は関東平野北西部の平野と山地の境界付近に所在し、北東には赤城山、北西には榛名山が位置している。また、利根川や烏川、碓氷川が山間部から平野部に流出する地点にも当たっている。

海岸より約100km以上離れた内陸に位置するにもかかわらず、市中心市街地の標高は97m前後と然程には高くはないが、市の北部及び西部の山地では標高1000m以上の地点も存在し、倉渕町川浦の浅間隠山にある東吉妻町及び、長野原町との境界では標高1690m、新町の烏川河川敷の標高60mと、市域内において標高差が1630mにもなっている。

榛名山の南面は大部分が高崎市域に含まれる。また市内には、利根川・烏川・碓氷川など、大きな一級河川が流れ、特に烏川は、流域のほとんどが市域に含まれている。

群馬県の中央や東寄りを利根川が北から南東に流下しており、前橋市街地から南東方向には利根川の旧流路の一つと考えられる低地を広瀬川が流れる。群馬県平野部の南西端には烏川や碓氷川が流下しており、利根川と烏川の間に榛名山の南東斜面を流域にする井野川が流

下している。広瀬川沿いには低地が広がり、その北東は赤城山の火山麓扇状地となっている。また、広瀬川の南西側には前橋台地が広がり、井野川が流れる低地を挟んで、高崎台地がその南西に位置している。高崎台地の西側は烏川や碓氷川の低地で、烏川や碓氷川の南西は野殿丘陵や岩野谷丘陵等丘陵地になっている。

群馬県平野部の西北は榛名山の火山麓扇状地で、その末端は前橋台地、高崎台地に連続している。地質的には、野殿丘陵や岩野谷丘陵に新第三紀の堆積岩が分布する他は、赤城山や榛名山からの火山噴出物や利根川や烏川などの河川によって運ばれてきた堆積物が見られる。

群馬県南部平野部には赤城山・榛名山の両火山の火山麓扇状地と野殿丘陵と岩野谷丘陵が位置する。

赤城山は黒檜山(標高1,827.6m)を最高峰に、駒ヶ岳(標高1,685m)、地蔵岳(標高1,673.9m)、長七郎山(標高1,578.9m)等からなる火山で、北東端に火山麓扇状地が分布し、新期成層火山形成期の噴出物などが堆積している。火山麓扇状地の末端の標高は約90mで、傾斜は31.4‰(約1.8°)となっている。火山麓扇状地の末端は広瀬川低地に接し、利根川の旧流路の側方侵食により比高5~15mの崖が形成されている。扇状地面は開析が進んでおり、広瀬川低地に流下する谷が多数形成されている。

榛名山は掃部岳(標高1,449m)を最高峰に、相馬山(標高1,411m)、榛名富士(標高1,390.3m)、烏帽子岳(標高1,363m)、ニッ岳(標高1,343m)等のいくつもの峰々からなる火山で、中期更新世の中頃には、ある程度の規模の山体が形成されていたと考えられている。西北部の広範囲にわたって火山麓扇状地が分布しており、後期更新世以降の噴出物などが堆積している。火山麓扇状地の末端の標高は約110mで、火山麓扇状地面の傾斜は急勾配で、開析が進んでいる上流側で約37.8‰(約2.2°)、勾配が緩い下流側で約15.4‰(約0.9°)である。火山麓扇状地の末端は、前橋台地などの周辺の地形面に明瞭な崖地形などを形成せず接している。広瀬川沿いの低地と井野川沿いの低地の間に前橋台地が、井野川沿いの低地と烏川の低地の間に高崎台地が広がっている。

前橋台地は旧利根川の流域である桃ノ木川、烏川との間に広がる広大な台地面で、台地面は多少の起伏は求められるが殆ど平坦地形である。約2.4万年前に流下した前橋泥流の堆積面が段化したものである。前橋泥流は

前橋躑躅の上に堆積する火山灰や粘土などが混じる礫層や、礫混じりの火山灰層で、比較的軟らかい地層となっている。前橋台地を貫流する現在の利根川の河床との比高は、前橋市街地付近で約10~14m程度であるが、下流側ほど小さくなり、玉村町付近では約6.5~10mとなる。台地面の高さは利根川左岸側上流端付近の前橋市本町で標高約107m、下流側の玉村町上福島付近では標高約70mで、この2地点間の台地面の傾斜は約4.1‰(約0.2°)と緩勾配となっている。昭和22(1947)年のカスリーン台風の際には玉村町福島付近で利根川から溢流し、福島地区などでは大きな被害があった。前橋台地面上には微高地や浅い谷がみられ、下流側を中心に利根川沿いには自然堤防状の微高地があり、この微高地には利根川の古い自然堤防上に天明泥流が堆積している。

高崎台地は前橋台地と同様に前橋泥流の堆積面が元となった台地であるが、前橋泥流の上には高崎泥流などが堆積している。前橋泥流の上位に有機質土などが堆積し、その上位に火山灰質土や火山灰混じりの砂などが堆積しており、台地面の高さは高崎市中心部で標高約95m、調査地域南端のJR倉賀野駅付近の台地上で標高約85mとなっている。この2地点間の台地面の傾斜は約2.2‰(約0.1°)と緩勾配となっている。高崎台地と高崎台地の西側を流下する烏川の河床との比高は高崎市市街地で約10mで、台地上には浅い谷や微高地が見られる。

赤城火山麓扇状地と前橋台地の間には「広瀬川低地、前橋台地と高崎台地の間に井野川低地、また、烏川・碓氷川沿いに谷底平野・氾濫平野が見られる。

井野川低地は、前橋台地と高崎台地の間に広がっており、高崎市宿大類町付近では幅約2km、下流の群馬の森付近では幅約1kmで、現在の井野川の規模と比べて広い低地となっており、井野川低地の地下に分布する礫層の礫種から、広瀬川低地を流路とする古い時期の利根川が形成した谷と考えられている。低地の北東側に片寄って流下する井野川に隣接して狭い谷底平野が見られ、谷底平野の周辺には約2~5mの崖や斜面で谷底平野に接している地形面が広く分布し、完新世段丘と考えられている。

(2) 遺跡所在地周辺の地形

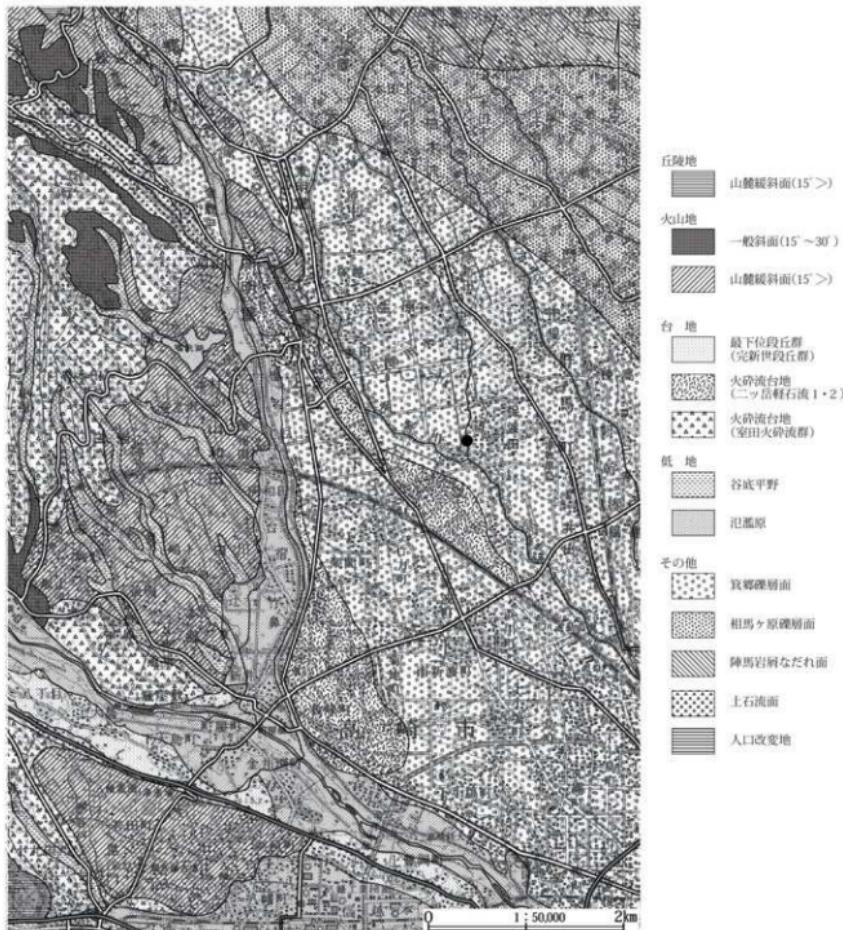
遺跡の所在地は、平成の大合併によって高崎市域となった旧群馬町の一角に当たっている。旧群馬町は、榛

名山の東南麓に形成された広大な相馬ヶ原扇状地扇端部と前橋台地の接点に位置し、標高約110m～260mの南東に緩やかに傾斜した地域である。

相馬ヶ原扇状地の範囲は、標高約600m付近を扇頂とし、扇端部は標高約110m付近に達し、北は渋川市南部から高崎市の旧棟東村、旧箕郷町北東部、旧群馬町に亘る凝灰角礫岩の上に載る砂礫層の堆積面で、そこを流れ

る中小河川によって侵食が進み、現在に至っている。扇状地扇端は前橋台地と交錯しているが、厳密にその地形的な境界を画することは困難である。

旧群馬町域の北西部分、旧町域面積の約1/3を占める標高約150m以上の地域は火山山麓地域であり、榛名山起源の火山碎屑物層及びその上を上部ローム層によって薄く覆われた地域である。平均斜度は約4度で、河川な



第3図 周辺地形分類図

(地形分類は群馬県『土地分類基本調査・榛名山』(平成17年2月発行)による。国土地理院発行5万分の1地形図「榛名山」図幅を編集・加工)

どによる開析はあまり進んでおらず谷も浅いが、北端部には独立丘陵群が見られ、現地表より数～数十mの高さの瘤状に突出する小規模なものから丘陵状のものまで存在している。

標高約150m以下の地域は扇状地性段丘面に相当する。表層地質は上部ローム層(立川ローム層相当)で、谷底平野には未固定の礫の堆積が見られる。平均斜度は約2度前後であり、火山山麓地域に比べて傾斜はかなり緩やかである。火山山麓地域と扇状地性段丘面地域の間の傾斜変換線に当たる標高約150m前後の地点各所に湧水点が見られる。これらの湧水は榛名山麓の標高約260～280m付近に源を有する八幡川、牛池川、染谷川、天王川、唐沢川、井野川等と合流し、北西から南東に流れている。この地域を流れるこれら中小河川は、現地表面と河床面との比高はところによっては数mに及び、谷の幅も広くなるが、扇状地特有の流路変更の状況が各所で見られる。また、正觀寺川や天王川、猿府川の流域には湿潤な低地帯が開ける一方、南端部には直徑約30～50m、高さ約3～5m程度の小規模な独立丘陵群がみられるなど、火山山麓地域に比べて複雑な様相を呈している。

また、旧箕郷町下芝地区、旧群馬町保渡田地区から高崎市浜川町及び下小島町にかけては6世紀の榛名山噴火に伴う厚さ約2m以上の土石流が約2.2kmに亘って堆積した場所があり、古墳時代後期以前には現地形から推測することが難しい起伏に富んだ豊かな地形が広がっていた可能性が考えられている。

第2節 歴史的環境

先述した通り、本遺跡の周辺地域では、5世紀末あるいは6世紀初頭に起きたと考えられている榛名山の大噴火による泥流が厚く滞留している箇所があるため、それ以前の遺跡は泥流下に埋没しているため、発見が困難な場所も多い。現状で確認されている古墳時代6世紀初頭以前の遺跡の多寡が、直接的に当時の人々の営みの痕跡を表しているわけではないことに注意する必要がある。

第1項 旧石器時代

本遺跡が所在する旧群馬町域からは旧石器時代の遺跡は発見されていないが、浜川の早瀬川周辺でチャート製の尖頭器が採集されている。

第2項 繩文時代

本遺跡が所在する旧群馬町域では、現在の地形からは簡単には窺い知れないような埋没した谷地地形がそこに存在している。こうした埋没した地形は、縄文時代の遺跡の分布状況と密接な関わりを有している。特に、標高約150m以下の地域における地形とその推移は、人々の生活への関わりが大きい水系や、動植物の生態系などの自然環境の変遷と歩調を同じくするもので、この地域における縄文時代の研究には、地形の推移が果たす役割が余りにも大きい。そのため、地形学や地質学などの自然科学の分野や他の関連諸科学と連携して古環境や古地形を復元することが、欠くことが出来ない研究の前提となる基礎的な作業となる。

当該地域における自然環境の変遷過程において、人々の生活成立の諸条件を満たした環境の有無は、時代別の遺跡分布密度の相違に端的に反映されていると見られよう。

赤城・榛名両山麓地域においては縄文時代には前期中葉の黒浜・諸磯a式期と中期後葉の加曾利E式期をそれぞれ頂点とする2大二期を認めることが出来るが、本遺跡周辺地域においては前期後葉の遺跡数は極めて少ない。縄文時代各時期におけるそれぞれの遺跡の分布の在り方に、社会や文化の基礎的な成立背景と時代による変

遷過程を如実に窺うことが出来る。

(1) 本遺跡周辺における縄文時代の遺跡の分布

旧群馬町域における縄文時代の遺跡の分布は、標高150m以下の地域に集中している。

旧群馬町域において発見された縄文時代の遺跡は、中期のものが圧倒的に多いが、縄文時代全般を通して扇状地性段丘面の地域に集中している。高低差が比較的少ない起伏に富むなだらかな傾斜地で、傾斜変換点からの湧水もあり、水利に恵まれた地域と言える。

縄文時代の遺跡が集中する扇状地性段丘面の地域においても、八幡川、牛池川、染谷川等の流域と井野川、唐沢川、天王川等の流域に特に多く分布しており、河川に沿って形成された自然堤防上や台地縁辺部に多く、水系の乏しい平坦な土地には少ない。

本遺跡周辺では、保渡田薬師前遺跡(第1表・第4図5)から、早期の陥し穴、諸磯a式期の土坑、黒浜式期の土坑などが検出された。

また、旧群馬町域に縄文時代中期の遺跡が多い点については、旧群馬町域の地形を中心とした自然環境が縄文時代中期の人々の生活環境に適合したことによると考えられる。

現況の地形景観の中で、遺跡地の立地を見ると、遺跡の周辺の地形よりやや高い微高地に占地するものが大勢を占めている。水系の乏しい平坦な地形上には遺跡は少ない。遺跡が立地する微高地は、河川沿岸に形成された自然堤防状の地形や、小沢の浸食を免れた台地縁辺部に多い。小沢による浸食を免れた台地縁辺部では、微高地地形に沿って谷地が形成されているが、谷地は、現在、帯状の水田として土地利用されているところもあり、地形図に表された等高線に谷地地形の痕跡を遺すところもある。こうした遺跡地の地形的背景は、遺跡地の地層が関東ローム層上に冲積土が堆積して安定した層序を成していることとも関連する。

(2) 中期後葉加曾利E式期に集中する遺跡

先述したように、旧群馬町域における縄文時代の遺跡の中では、中期の遺跡が圧倒的に多いのであるが、中期後葉の加曾利E式期のものが殆どである。当該期の遺跡は、標高約150m以下の場所に所在するものが多く、それぞれの遺跡は、小範囲に少量の遺物散布が見られるような小規模な遺跡が多い。

加曾利E式期における遺跡の急増は目覚ましいが、それは赤城・榛名両山麓地域を中心とした地域の動向と軌を一している。適当な間隔をおいて当該期の大集落が形成され、それらの周辺に小集落が散在し、相互に結びついて生活圏を形成していた様子が窺える。

他の時期に比べて、極端に遺跡数が急増する加曾利E式期における人々のこの地への進出は、この地域における環境条件が人々に与えた好影響を抜きにしては考えられない。また、加曾利E式期の遺跡急増の背景には、前代までの集落が形成されていた場所と何ら関係が無い新たな場所に居住の場が營まれたということもある。当該期の集落には、前代の遺跡との継続性が無い遺跡が多い。加曾利E式期の大集落である上野国分僧寺・尼寺中間地域(第4図範囲外)では、堅穴建物34棟、配石構造1基、屋外埋甕18基、土坑409基が検出されている。

(3) その他の時期の遺跡の分布

縄文時代中期後葉加曾利E式期以外の時期の遺跡については、縄文時代早期の遺跡が標高約150m以上の相馬ヶ原扇状地に立地していることと、縄文時代晚期の遺跡が標高約130m付近に偏在していることが特徴的である。自然環境に多くの部分を依存する縄文時代の人々の生活や文化の在り方は、自然環境による諸条件によって大きく制約を受けたものと考えられる。

赤城山西・南麓と榛名山東南麓地域における縄文時代の時代別の遺跡数の動向は、前期前葉と後期以降は極めて少量なのに対し、前期中葉の黒浜・諸磯a式期と中期後葉は加曾利E式期において遺跡の急増が認められるのは、共通した現象である。

縄文時代前期中葉の黒浜・諸磯a式期における遺跡数の急増の背景には、火山山麓の緩傾斜面に開析谷が発達したことによって形成された帯状の台地の縁辺部の舌状台地全面を占めるような集落が山麓全体に拡散したことによる。また、黒浜・諸磯a式期以降の伝統的な遺跡の分布傾向には、前代までの遺跡地と重複関係の無い新たな場所に生活の場を営むという点も、遺跡数増加に関与していくよう。その後、遺跡数は減少していく。

本遺跡周辺地域は、黒浜・諸磯a式期の遺跡急増地帯の周辺地域に当たり、黒浜・諸磯a式期における生活成立の諸条件に然程恵まれなかった地域と言ふことが出来る。黒浜・諸磯a式期における遺跡の急増現象は、地形

的な制約を超えた普遍的な現象では無く、赤城山西・南麓や榛名山東南麓、河岸段丘上など、地形的に限られた地域を中心に展開したものと考えられ、加曾利E式期における遺跡の急増現象とは本質的に異なるものと考えられる。

保渡田II遺跡検出の敷石竪穴建物 本遺跡の北東約1.5kmに位置する保渡田II遺跡(第1表・第4図113・114)からは繩文時代中期後葉加曾利E式期末期の敷石竪穴建物が検出された。後世の耕作による破壊を受けていて、残存状態は良好では無かったが、竪穴建物の床面の南北約4m・東西約2.5mの範囲に扁平な輝石安山岩を貼り詰め、中央やや南寄りの位置に石圓いの炉が設置されている。

竪穴建物の範囲を示す周囲の壁や掘り込み、柱穴の痕跡は未検出で、竪穴建物自体の形状や付帯施設は不明である。

炉は4枚の自然石を横位に立てて方形に形づくり、炉床には深鉢形土器の約1/4個分を敷き詰めた構造である。出土遺物は余り多くはなく、炉の周囲から打製石斧と土器片、多孔石が出土している。

第3項 弥生時代

本遺跡が所在する旧群馬町域においては、弥生時代の遺跡は標高約150m付近を上限に分布している。

(1) I～III期の遺跡

本県ではI～III期の遺跡は丘陵部や山間部からの発見例が多い。それらの殆どは再葬墓である。

旧群馬町域ではI～III期の遺跡の数は少ない。しかしながらこの時期の土器片が少量見つかることもあり、弥生時代の初めから榛名山麓の扇状地に人々が生活を営んでいた様子が想定出来る。

本遺跡の北東約2.4kmに位置する西三社免遺跡(第1表・第4図133)は、微高地縁辺部に位置する奈良・平安時代の集落遺跡で、弥生時代の遺構は何ら検出されなかつたが、弥生時代I～II期の三角連係文が施された有文甕片、底部に網代痕が着いた甕片などが出土した。この地域最古の弥生時代資料である。

(2) IV～V期の遺跡

一方、本県における弥生時代IV期の中核地域は井野川及び烏川水系の標高約80～100m周辺の地域であり、本

遺跡の所在地よりは2km以上南側の、第4図の範囲外である。

弥生時代V期になるとIV期の環濠集落が解体し、社会が再編成される。V～II期になると遺跡の数は増大し、榛名山麓を流れる小河川の流域毎に集落が営まれ、耕地開発が爆発的に進んだ様子が窺える。また、井野川中流域でも大規模化した集落が発見されている。給水しやすく比較的水田化が容易な山麓部から、河川下流の低湿地へと水田開発が進んでおり、給排水技術の高まりが想定出来る。また、同時に畑作の発達とともに、丘陵部へも集落が拡大していく。

弥生時代V～III期には集落は一時縮小するものの、その後、古墳時代初期の3世紀後半には、積極的に東海地方の外来系土器を受容し、前方後方形墳丘墓を营造するに至る。

中核的な集落 本遺跡の南東約2～4kmの井出地区周辺は、東西を低地によって挟まれた南北に長い微高地上に当たり、その中央を猿府川が北から南に流れている。猿府川の西側には、本遺跡の南東約2kmに位置する井出村東遺跡(第1表・第4図100)、本遺跡の南東約3kmに位置する熊野堂I・II・III遺跡(第1表・第4図範囲外)、猿府川の東側には、同じく本遺跡の南東約2kmに位置する西浦北遺跡・西浦南遺跡(第1表・第4図147・148)、本遺跡の南東約2.2kmに位置する雨森遺跡(第1表・第4図範囲外)、本遺跡の南東約2.4kmに位置する大八木・伊勢廻り遺跡(第1表・第4図範囲外)等の遺跡がある。

これらの遺跡の中で、最も早く形成されるのは熊野堂II・III遺跡と雨森遺跡で、IV～II期のものと考えられる。これら猿府川の東西両岸の弥生時代後期の集落は弥生時代IV～II期から古墳時代I期まで継続しており、群馬県地域における弥生時代後期の中核的な集落の一つと考えられる。

熊野堂II遺跡では、東西約60m・南北約150mの範囲に弥生時代IV～II期からV～II期にかけての竪穴建物群と古墳時代I期の水田が検出された。中心は弥生時代V～II期の集落である。

熊野堂II遺跡の北側約0.2kmの位置に所在する熊野堂I遺跡からは南北約200mの範囲にV～II期を中心とし、古墳I期まで継続する集落が検出された。

熊野堂I遺跡から北へ約0.5kmに位置する井出村東遺

跡からは、南北約150mの範囲内から弥生時代V-2期を中心とする集落が検出された。少量ではあるが、V-3期の竪穴建物も検出されている。

熊野堂Ⅱ遺跡の東側約0.3kmに位置する熊野堂Ⅲ遺跡・雨壺遺跡においても東西約100mに及ぶ範囲から集落が検出された。

超大型竪穴建物を中心として左右に小型竪穴建物が分かれて並ぶ様子が看取できた。

方形周溝墓 熊野堂Ⅲ遺跡・雨壺遺跡の北西約0.3kmに位置する西浦北遺跡・西浦南遺跡からは集落と共に方形周溝墓群が検出された。群馬県南西部における弥生時代遺跡の中で唯一、方形周溝墓群が検出された遺跡である。集落の規模は、調査範囲の制約を受け、明らかにしがたい部分が多いが、西浦南遺跡では大型の竪穴建物が多く、西浦北遺跡では小型の竪穴建物が多いことが判明している。西浦北遺跡の南端において、南東へ軸を向ける幅約3m、深さ約1.5mの溝が検出された。溝の埋土上層には5世紀末～6世紀初頭頃に降下したと考えられているHr-FAが堆積し、弥生時代V-2期から古墳時代中期にかけての土器が出土している。この溝の北側には弥生時代の竪穴建物群が展開しており、溝の南側から検出された弥生時代の竪穴建物は僅か1棟に過ぎなかったことから、集落域を区画する溝である可能性が高いものと考えられている。

また、西浦南遺跡・西浦北遺跡から検出された方形周溝墓群は、3箇所に分けられる。北側の第1墓域から検出された方形周溝墓群は弥生時代V-2～3期にかけて、中央部の第2墓域から検出された方形周溝墓群は弥生時代V-2～古墳時代I期にかけて、最も南側の第3墓域から検出された方形周溝墓群は弥生時代V-2期にそれぞれ築造されたものと考えられる。

第4項 古墳時代

本遺跡周辺地域は本県屈指の古墳時代の遺跡の密集地帯で、この地を統治した豪族たちの墳墓、生前の豪族たちが居住し、政治・経済・行政の拠点であった居館、一般民衆の居住地である集落、地域の経済基盤であった耕地の遺構など、5～6世紀における地域社会を構成した遺構がほぼ揃って検出され、古墳時代の地域社会の構造を具体的に解明可能な一つモデルケースとして、他地域

には類を見ない歴史的な重要性がある。

(1)集落

集落では、3世紀後半から7世紀に亘る古墳時代の集落を構成する竪穴建物の数は、5世紀には4世紀の竪穴建物数の約4倍に増加し、さらに6世紀になると4世紀の竪穴建物数の約6倍にまで増加していく。7世紀代の集落は、6世紀とほぼ変わりは無く、居住に伴う人口増が安定していった様子を窺うことが出来る。本遺跡周辺地域における古墳時代の集落の変遷を概観すると、5世紀が画期であったことが判明する。

前期集落 井野川下流域は、本県では最も早くから在来の弥生土器の系譜が消滅し、典型的な外来系土器が集中して出土する地域である。弥生時代に人々の営みがあった地域に、東海地方西部地域の人々が移住し、古墳文化生成の原動力になったと考えられている。

古墳時代初期の3世紀後半においては、東海西部系、東海東部系、南関東系、北陸東部系、北陸西部系、山陰系、近江系、畿内系、東関東系等多種の外来系土器が入り込む。特に東海西部系土器は煮沸具、貯蔵具、祭祀具がセットで出現し、単に土器のみがもたらされたのではなく、人の移動に伴っていたことが裏付けられている。

前掲の熊野堂Ⅱ遺跡及び熊野堂Ⅲ遺跡・雨壺遺跡からは古墳時代の初期である3世紀後半頃の集落、水田、前方後方周溝墓等が検出され、古墳時代初頭における中核的な集落と考えられている。出土土器には外来系土器の比率が高い。

本遺跡の北側にほぼ隣接する保渡田荒神前皿掛遺跡(第1表・第4図18)は、井野川の支流である大清水川と小谷地とに挟まれた狭い台地上に営まれた集落で、As-Cに薄く覆われていた。広場を囲んで竪穴建物が並び、仮小屋のような付属施設も存在していたことが判明し、古墳時代初期における集落の景観が復元可能な一つの例として注目される。

本遺跡の北東約2kmに位置する寺屋敷Ⅰ遺跡(第1表・第4図121)からも古墳時代初期の竪穴建物が1棟検出された。また、前掲の保渡田荒神前皿掛遺跡も10棟の竪穴建物からなる古墳時代初期の集落が検出された。在来系の土器と外来系の土器が混在して出土しており、古墳時代前期における集団関係の複雑さを示している。

本遺跡の南東約1.5kmに位置する中泉十王堂遺跡群(第

1表・第4図146)からもAs-Cに覆われた古墳時代前期の竪穴建物や畑が検出されている。

古墳時代初期における集落が低調であった本遺跡から東側の地域において、集落が次第に現れるようになってくる。大規模集落は、井野川と唐沢川との合流点に位置する前掲の熊野堂遺跡群や牛池川と染谷川の間に位置する上野国分僧寺・尼寺中間地域(第1表・第4図範囲外)において検出されている。これら両遺跡では、その後、11世紀まで集落が継続しており、長く多くの人々が居住を続けた安定的な集落であったことが分かる。本遺跡の東北東約5kmに位置する上野国分僧寺・尼寺中間地域では、弥生時代後期の集落の廃絶後、一時、集落が形成されなくなり、その後、古墳時代前期後半になって再び集落が営まれるようになる。

中期集落 5世紀代には唐沢川の流域に位置し、本遺跡の南東約1.2kmに位置する三ツ寺II遺跡(第1表・第4図106・107)や井出村東遺跡(第1表・第4図100)など、豪族居館である三ツ寺I遺跡(第1表・第4図105・106)の周辺において急激な竪穴建物の増加が見られるようになってくる。この地域においては4世紀代まで竪穴建物が殆ど見られないが、この時期に異様に増加している。

後期集落 6世紀代になると唐沢川の流域を遡った本遺跡を含む保渡田遺跡群(第1表・第4図1・2・5・7・17・18・20・108)や堤上遺跡(第1表・第4図範囲外)において竪穴建物数が増加している。

7世紀代では唐沢川の流域をさらに遡った保渡田東遺跡(第1表・第4図11)や保渡田徳昌寺前遺跡(第1表・第4図7)や、牛池川の流域から染谷川の流域に当たる、本遺跡の東約4.5kmに位置する国分境遺跡(第1表・第4図範囲外)及び上野国分僧寺・尼寺中間地域(第1表・第4図範囲外)及び鳥羽遺跡(第1表・第4図範囲外)等で竪穴建物数が増加している。しかしながら、その後の奈良・平安時代にかけては牛池川流域から染谷川流域に当たる地域では竪穴建物数の増加がさらに著しくなっていく反面、唐沢川の上流域では然程の増加は見られない。

(2) 墳墓

最古の墳墓 前記の熊野堂II遺跡からは、井野川と猿府川にはさまれた舌状微高地の中央部から前方後方墳が1基検出された。墳丘及び主体部は後世の削平を受けて破壊され検出されなかつたが、南側に前方部、北側に後方

部が位置し、全長約21m、後方部は東西約12m×南北約13m、周溝を含めた主軸長は約28mである。深さ約1mの周溝の埋土からは4世紀前葉頃に降下したと考えられているAs-Cの堆積が認められ、出土した土器の年代観から3世紀後半に造営されたと考えられており、本県における前方後方墳の最古の事例である。

前方後方形の墳墓の源流は東海地方西部伊勢湾地域と考えられており、この墳墓が検出された熊野堂II遺跡や、その北側約3km、本遺跡の東側約0.3kmに位置する保渡田薬師前遺跡(第1表・第4図5)等では東海地方西部地域の越前II式土器を忠実に模倣したもの、あるいは直接持ち込まれたものが出土している。当該地域は群馬県西部において東海地方を核とした文化の影響をダイレクトに受けた最初の地域と言える。

保渡田古墳群 4世紀から5世紀にかけて上毛野の地域には要所々々で統々と巨大な前方後円墳あるいは前方後方墳が造営された。井野川が烏川に合流する低地域には岩鼻古墳群(第1表・第4図範囲外)が形成された。

井野川下流域に巨大墳墓を構築した豪族たちは、その後、墳墓造営の地を井野川上流域に移す。高崎市並柳町の上並柳稲荷山古墳、さらに5世紀後半から6世紀初めにかけて、本遺跡の南東側に隣接する位置に保渡田古墳群(第1表・第4図4・6・9)が形成された。

榛名山東南麓の烏川左岸、井野川流域に当たる沖積地域は南北方向に連なる微高地と、それらを挟んで水田可耕地が展開する理想的な居住域であった。保渡田古墳群は中毛地域から西毛地域にかけての支配権を掌握した豪族によって、このような場所に造営されたのである。

保渡田古墳群は3基の大型前方後円墳からなり、南側に位置する井出二子山古墳と北側に位置する保渡田薬師塚古墳が東西方向のほぼ主軸で南北に並立し、その東側の間に南北方向に長い保渡田八幡塚古墳が造営されており、全体的に3基の古墳は「コ」の字状に配されている。

最も南側に位置し、全長約108mの井出二子山古墳(第1表・第4図9)が最も早く造営されたと考えられている。周囲には2重の堀が巡らされ、後円部、前方部とともに3段築成されている。内堀内の括れ部左右と後円部の主軸を挟んで2箇所4基の中島が設けられている。主体部は後円部に設けられ、凝灰岩製の舟形石棺である。円筒埴輪は墳丘2段目の平坦部、墳頂、中堤上に見られ、

形象埴輪は北側中堤上の1箇所から纏まって出土した。前述したように5世紀後半に築造されたものと考えられている。

井出二子山古墳に次いで造営されたのが、井出二子山古墳の北東側に隣接する、南北方向に主軸を取り前方部を南側に向ける保渡田八幡塚古墳(第1表・第4図6)である。Hr-FA降下直前の5世紀第4四半期頃に造営されたものと見られている。全長約96m、3段築成され、内堤を挟んで2重の堀を巡らし、その外側に外堤を設け、さらに外部に外周溝を巡らすという全長約188mに及ぶ広大な兆域を伴っている。主体部は後円部中央の墓壙内から凝灰岩製の舟形石棺と竪穴式石椁が発見された。円筒埴輪は墳丘各段と外堤に各1列、内堀と中島施設では2列配列されていた。形象埴輪の配列区は内堤上に2箇所あり、内区では50体を超える人物・動物・器材埴輪の配列があり、祭宴及び狩獵の場面を表現した群像と見られている。井出二子山古墳に埋葬された豪族の権力を継承した豪族の墳墓と考えられる。

保渡田古墳群の3基の大型前方後円墳の中で、最後に出現したのが、最も北側に位置する保渡田薬師塚古墳(第1表・第4図4)である。保渡田八幡塚古墳の北西約0.3kmに位置し、東西方向に主軸をとり、井出二子山古墳と同様、前方部を西側に向いている。全長約105mで、周囲に2重の堀を巡らす。現在、後円部墳頂に凝灰岩製の舟形石棺が保管されている。なお、墳丘の南側は現存する寺院によって大きく破壊されており、保渡田古墳群を構成する他の2基の大型前方後円墳に比べて不明な点が少なくない。円筒埴輪は墳丘下段の平坦面に配列し、形象埴輪は墳丘南側の中堤上に樹立されている。本古墳は、先行する井出二子山古墳、保渡田八幡塚古墳に比べて墓域や墳丘表面施設や副葬品の省略が著しく、また、内堀にはHr-FAの堆積は認められていない、5世紀末から6世紀初頭頃の造営と考えられている。

鳥川・井野川流域を中心とした生産力の高い耕地がもたらす経済力を背景とした豪族が、3世代に亘ってこの地域を支配の拠点にしていた様子が窺える。

後期古墳 本遺跡周辺地域においては、保渡田古墳群の後、大型前方後円墳は造営されていない。6世紀になると標高約200m以下の、当時の集落に比較的近い位置に横穴式石室を埋葬施設とした円墳が築造されるようにな

り、6世紀後半以降増加する。

7世紀になるとそれまで未開発であった標高約200m以上の、河川沿いに多くの古墳が造営されるようになってくる。それらの大部分は横穴式石室を埋葬主体とする小円墳で、群集墳を形成する。

7世紀後半になると、限定された地域に数基からなる単位群を基礎とし、それらが幾つか集まって大規模な群集墳を形成している。なお、これら群集墳の周囲には、当該時期の集落は少なく、予想される人口に比して古墳の数が多い。この地域よりも標高が低い、生活に適した場所に居住していた人々が、居住地よりも標高が高い地域に意識的に墓域を営んだものと考えられる。

谷ツ古墳 本遺跡の南西約0.8kmに位置する谷ツ古墳(第1表・第4図57)は、6世紀初頭頃の築造と考えられている一辺約20mの2段築成された方墳で、上段は石だけで造られていて、朝鮮半島北部にルーツをもつ積石塚と同様の構造である。竪穴式石室の内部からは豊富な副葬品が出土し、なかでも金銅製の飾輪はガラス玉や透かし彫りで飾られた優品である。周辺の集落跡からは朝鮮半島系の土器が出土しており、渡来系の豪族を葬った墳墓と考えられている。

上芝古墳 本遺跡の北西約2kmに位置する上芝古墳(第1表・第4図34)は、昭和4(1929)年に発掘調査された墳丘長18mの6世紀中葉頃と考えられる帆立貝式古墳である。Hr-FPによって埋もれており、前方部上から坏を捧げる女子像のほか、武人や男子像、馬などの形象埴輪が出土したことで著名である。現在は、削平され、古墳の痕跡は全く無い。

(3)豪族居館

井野川上流に5世紀後半から順次出現した保渡田古墳群を構成する3基の大型前方後円墳は、5世紀後半から6世紀初頭頃にかけて、この地に大きな勢力を振るった3世代に亘る豪族たちの墳墓と考えられているが、彼らが生前に居住し、地域支配の拠点としたのが保渡田古墳群の南東約1kmから発見された三ツ寺I遺跡(第1表・第4図105)から検出された豪族居館と考えられる。

三ツ寺I遺跡 三ツ寺I遺跡から検出された豪族居館は、内側に約1mの盛土が施され、1辺約86mの方形で、西辺2か所と南辺1か所に張出部を伴い、周囲に幅約30~40m、深さ約3~4mの堀が巡らされ、堀の内縁には

石垣が築かれていた。居館内部への出入は北西部の張出部に架かっていた橋を用いていたと見られている。居館本体の内側には堀に沿って3重の柵列が巡らされ、防御態勢は堅固であり、更に別の柵で南北に2ブロックに区画されている。居館本体南地区の西寄りには13.6m×14.1mの主殿とみられる掘立柱建物や堀から木樋で水を引いた祭祀施設が検出され、北地区からは複数の竪穴建物が検出されており、南側が政務・儀礼空間である主殿、北側が私の空間である居住区と見る考え方がある。また居館の存続期間は土器の年代観から5世紀後半期から6世紀初頭までの約40~50年程と推定されている。保渡田八幡塚古墳と三ツ寺I遺跡から発見された居館との関係が濃厚であると考えられている。

北谷遺跡 本遺跡の北東約3.5km、三ツ寺I遺跡の北東約3kmに位置する北谷遺跡(第1表・第4図範囲外、国指定史跡)からは、三ツ寺I遺跡から検出された豪族居館とほぼ同時期の豪族居館が検出されている。

居館は一辺約90mの方形の平面形態を呈し、南側を除く3方に2か所の張出しが設けられている。堀は、幅約30m以上、深さ約3m以上の大規模なもので、堀の内側の斜面には石積みが確認され、北側と東側の堀は土橋状の施設によって隔てられ、北側と西側の堀には水が貯えられていたと考えられている。三ツ寺I遺跡から検出された豪族居館と規模・形態が酷似し、共通の規格で築造されたと見られる。

三ツ寺I遺跡の発掘調査では、居館内部で大型の掘立柱建物跡や竪穴建物跡、導水施設を伴う祭祀の場などが確認されていることから、北谷遺跡でも同様の施設が存在したものと推定される。北谷遺跡は、三ツ寺I遺跡や保渡田古墳群と同時期の遺跡であり、古墳と居館の関係や居館の構造や機能を知る上で非常に貴重な遺跡である。

(4) 耕地

本遺跡の周辺では、本遺跡の西約0.7kmに位置する保渡田阿弥陀遺跡(第1表・第4図54)、本遺跡の南東約1.2kmに位置する同道遺跡(第1表・第4図90)、本遺跡の南東約1.5kmに位置する井出地区遺跡群(第1表・第4図100・101)、本遺跡の南約1.5kmに位置する御布呂遺跡(第1表・第4図84・85)、本遺跡の南~南東約1~1.5kmに位置する浜川遺跡群(第1表・第4図86・94~

96・98・99)、本遺跡の北東約4kmに位置する北原遺跡(第1表・第4図範囲外)、前掲の熊野堂遺跡、保渡田荒神前皿掛遺跡、保渡田IV遺跡、西浦南遺跡、井出村東遺跡、三ツ寺I遺跡、三ツ寺II遺跡等において古墳時代の水田が検出されている。いずれも浅間山あるいは榛名山の火山噴出物に覆われた状態で検出されており、古墳時代前期から平安時代末期に至る水田が重層的に検出された遺跡も存在している。それらの遺跡の多くは、現在の水田地帯から検出されており、千数百年に亘って連続と水田耕作が営まってきた様子を窺うことが出来る。

同道遺跡 本遺跡周辺では、古墳時代の代表的な水田遺跡として、井手川流域に位置する同道遺跡を挙げることが出来る。

この遺跡では、大まかに、古墳時代前期の4世紀初頭、古墳時代中~後期の5世紀末~6世紀初頭と中葉、平安時代末12世紀初頭にそれぞれ降下した浅間山及び榛名山二ツ岳を給源とする火山噴出物によって覆われた4面の水田の遺構が重層的に検出された。古墳時代の水田は、大畔で区画された範囲の中を小畦で小さく区画した小区画水田である。水を効率よく湛水し、生産効率を高めるために区画を小さくしたと考えられている。

5世紀末~6世紀初頭に降下したHr-FAによって埋没した水田の主要な畦畔と6世紀中葉にHr-FPによって埋没した水田の主要な畦畔は全く同位置に造られるなど、前代の畦畔の位置を正確に踏襲している箇所が多いことから、相次ぐ火山災害にも拘わらず、短時間で水田を復旧していた様子が窺えるのである。

水田が意外に早く復旧しているという事実は、集落の継続性ともほぼ一致した現象を呈している。例えば三ツ寺I遺跡から検出された豪族居館の周辺では、5世紀末~6世紀中葉における2度に亘る榛名山二ツ岳の噴火に拘わらず、一貫して集落が継続していることが発掘調査の結果、判明している。三ツ寺I遺跡の周辺からは、現在までの所、水田遺構は検出されていないが、集落の継続が確認出来ると言うことは、その生産基盤たる耕地の継続を意味すると考えざるを得ない。集落と水田の継続性には、同じ動向を認めることができ、古墳時代の集落が立地する背景には、生産基盤である水田の存在が不可分であったと言えるのである。

第5項 奈良・平安時代

(1) 上野国と群馬郡

律令制下の上野国内は、広域行政区である東山道の中の一国として位置づけられ、当初、碓氷・片岡・甘楽・緑野・那波・群馬・吾妻・利根・勢多・佐位・新田・山田・邑楽の13郡が置かれていた。『続日本紀』和銅4年3月辛亥(6日)条や、高崎市吉井町池に現存する多胡碑碑文に見えるように、711(和銅4年)年に甘楽郡・片岡郡・緑野郡から割かれた300戸によって多胡郡が新たに設置され14郡となった。

本遺跡が所在する地域一帯は、古代には群馬郡内に当たる。群馬郡には上野国府が置かれており、上野国内において中心的な都であったと考えられる。平安時代中期に成立した『和名類聚抄』によれば、群馬郡は長野・井出・小野・八木・上郷・畔切・鳥名・群馬・桃井・有馬・利刈・駿家・白衣の13郷が存在する上郡であった。なお、本遺跡の所在地は、現存する地名から見て井出郷の一角であったと考えられる。

奈良県橿原市の藤原宮跡から出土した7世紀の木簡の中に「上毛野車評」と記された鉛を都に貢納した際の荷札木簡がある。群馬という郡名は、大宝令以前の評の段階では「車」と標記され、和銅6(713年)に出された国・郡名表記を「好字」2字とする命令によって、「群馬」の郡名表記が定着したものと推測されている。なお、「ぐんま」の読みは後になって生まれたもので、「くるま」は江戸時代まで使われており、「ぐんま」の読みが定着したのは明治以降になってからのことである。

(2) 上野国府・国分寺・国分尼寺・群馬郡家

国府 上野国府の遺構は未だに明確には検出されていないが、本遺跡の北東約5.3kmに位置する前橋市元総社町の元総社寺田遺跡(第1表・第4図範囲外)からは、牛池川の河川改修工事に伴う発掘調査において、国府の厨家を意味する「国厨」、オフィスを意味する「曹司」等と記された墨書き土器、人形・馬形・斎串などの木製祭祀具等が纏まって出土した。古くから、上野国府は前橋市元総社町付近に所在したと言われて来たが、これら、国府内の施設を意味する文字が記された文字資料や、律令的祭祀具と言われる遺物が纏まって出土したことにより、前橋市元総社町一帯に国府の施設が存在したことはほぼ確実

視されるようになった。

なお、10世紀前葉、下總国猿島郡・豊田郡に本拠を有した地方軍事貴族平将門は中央政府に対して反乱を起こし、天慶2(939年)、常陸國府、下野國府を経て上野國府を占拠し、「新皇」を自称して弟たちや配下をそれぞれ坂東8か国及び伊豆国の国司に任じ、中央政府からの独立を宣言した。上野國府がその歴史的な出来事の舞台になった。

国分寺・国分尼寺 その北西側、本遺跡から北東へ約4～5.5kmの位置、前橋市元総社町から高崎市東国分町・引間町にかけて国分寺(国指定史跡)・尼寺の遺跡が所在している(第1表・第4図範囲外)。西側に僧寺、東側に尼寺が並立し、僧寺の約350m東側に尼寺が位置している。両寺は榛名山東南麓の末端と前橋台地が交わる位置の、北西から南東に向かって緩やかに傾斜し、小河川によって区切られた標高125～129mの微高地の一つに立地している。天平13(741年)の国分寺建立の詔を受けて、8世紀の中葉から後半にかけて寺院を構成する堂宇が次々と造営された様子が発掘調査によって判明している。

郡家 車評家、後の群馬郡家の遺跡も全く不明であるが、全国的に見て、国府所在郡の郡家は、概ね国府に近い位置に設置されていたと見られている。

また、群馬郡家と密接な関連を有すると見られている白鳳期創建の寺院である山王庵寺(第1表・第4図範囲外・国指定史跡)は、本遺跡の北東約5.5kmに位置し、牛池川と八幡川とに挟まれた台地上に立地している。古代群馬郡唯一の寺院である山王庵寺も国府推定地、国分寺、国分尼寺に近接した位置に所在していることからも、群馬郡家の遺跡は、本遺跡の北東～東側約5～5.5kmの前橋市元総社町から高崎市東国分町一帯のどこかに所在していたものと推測される。

本遺跡は、上野国及び群馬郡の中枢地帯から比較的近い場所に所在する遺跡と位置づけることが出来る。

(3) 東山道駅路

広域行政区画である東山道を縱貫する幹線陸上交通路東山道駅路は、都から東へ、日本列島中央の内陸部を通って東北地方へ通ずる重要な交通路であった。『延喜式』兵部省式諸国駅伝馬条には上野国内に設置された東山道駅路上の駅家として、「坂本」(安中市松井田町坂本付近)

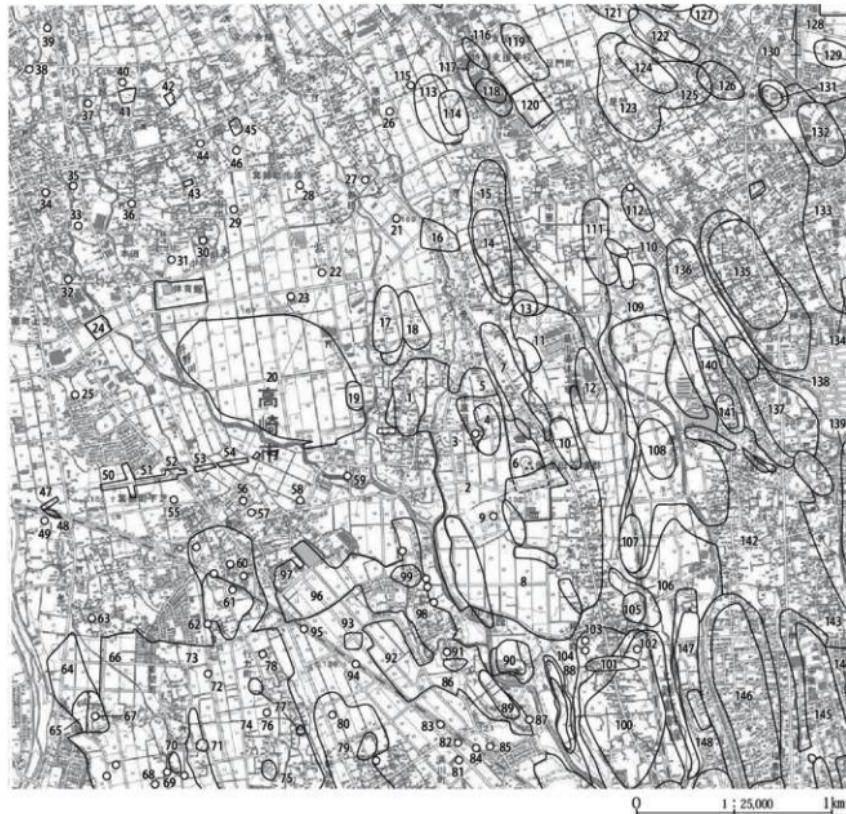
「野後」(安中市上野尻・下野尻付近)、「群馬」(前橋市大手町付近)、「佐位」(伊勢崎市上植木本町付近)、「新田」(太田市天良町・寺井町付近)など5駅が上げられている。このうち、群馬郡内には群馬駅家が置かれていた。群馬駅家の遺跡はまだ発見されていないが、「前橋」の旧名である「雁橋」が群馬駅家に由来する地名を見て、中世雁橋城の故地である前橋市大手町一带に群馬駅家が置かれていたとする見方もある。

上信国境の碓冰峠を経て上野国内に入り、国府を経由して下野国へと向かう『延喜式』に記載のある東山道駿路の遺構は、前掲の熊野堂遺跡、本遺跡の南東約2kmに位

置する福島飛地遺跡(第1表・第4図範囲外)、本遺跡の南東約2.5kmに位置する菅谷の高谷戸遺跡(第1表・第4図範囲外)、前掲西浦南遺跡、本遺跡の南西約1.4kmに位置する浜川町の寺ノ内遺跡(第1表・第4図範囲外)、前掲御布呂遺跡、本遺跡の南東約3kmに位置する正觀寺町の正觀寺菅谷遺跡(第1表・第4図範囲外)などから側溝が付いた幅約5m前後の駿路の遺構が検出されている。

(4) 集落

本遺跡周辺地域においては、古墳時代終末期である7世紀代から奈良時代8世紀に入ると竪穴建物の数は約1.4倍に増える。さらに平安時代9世紀になると8世紀



表第1 周辺遺跡一覧表

| 遺跡No.・枚数 | 遺跡名 | 性質 | 年代 | 主な発見物 | 参考文献 |
|----------|------------------------|--------|-----------------|--|--|
| 1 3 | 穀倉貯蔵庫、瓦窯跡 | 住居・土器窯 | 新石器時代・5.5世紀 | 0.0207 佐賀県山都郡山都町 0.0147 佐賀県山都町 0.0455 天子塚古墳 | 「佐賀県山都郡山都町の小字山都」、都馬原1986「都馬原町 資料編」 始始古代・中世、都馬原町教委 2017「都馬原町地図帳」、本荘利一 「都馬原町 資料編」、都馬原1988「都馬原町の中世遺跡」、都馬原1998「都馬原町 資料編」 資料編 |
| 2 4 | 穀倉貯蔵庫、瓦窯跡 | 住居・土器窯 | 新石器時代・5.5世紀 | 0.0195 佐賀県山都町 0.0172 佐賀県山都町山都 0.0177 佐賀県山都町山都 0.0183 佐賀県山都町山都 | 「都馬原町 資料編」、都馬原1988「都馬原町の中世遺跡、資料編」 始始古代・中世、都馬原町教委 2017「都馬原町地図帳」、本荘利一 「都馬原町 資料編」、都馬原1988「都馬原町の中世遺跡」、都馬原1998「都馬原町 資料編」 資料編 |
| 5 6 | 古窯No.11罐窯 古窯No.12瓦窯 | 住居・土器窯 | 新石器時代・5.5世紀 | 0.0140 佐賀県山都町山都 0.0193 佐賀県山都町山都 0.0195 佐賀県山都町山都 0.0198 佐賀県山都町山都 0.0209 佐賀県山都町山都 0.0205 佐賀県山都町山都 | 「都馬原町 資料編」、都馬原1988「都馬原町の中世遺跡、資料編」 始始古代・中世、都馬原町教委 2017「都馬原町地図帳」、本荘利一 「都馬原町 資料編」、都馬原1988「都馬原町の中世遺跡」、都馬原1998「都馬原町 資料編」 資料編 |
| 7 8 | 陶文No.52罐窯 瓦窯No.26罐窯 | 住居・土器窯 | 新石器時代・4.4・5.2世紀 | 0.0196 No.52罐 0.0197 No.26罐 0.0198 瓦窯 0.0199 瓦窯 0.0200 瓦窯 0.0201 瓦窯 | 「都馬原町 資料編」、都馬原1988「都馬原町の中世遺跡、資料編」 始始古代・中世、都馬原町教委 2017「都馬原町地図帳」、本荘利一 「都馬原町 資料編」、都馬原1988「都馬原町の中世遺跡」、都馬原1998「都馬原町 資料編」 資料編 |
| 9 10 | 古窯No.12罐窯 古窯No.12瓦窯 | 住居・土器窯 | 新石器時代・5.2世紀 | 0.0193.1 瓦窯 0.0193.2 瓦窯 0.0193.3 瓦窯 0.0193.4 瓦窯 0.0193.5 瓦窯 0.0193.6 瓦窯 | 「都馬原町 資料編」、都馬原1988「都馬原町の中世遺跡、資料編」 始始古代・中世、都馬原町教委 2017「都馬原町地図帳」、本荘利一 「都馬原町 資料編」、都馬原1988「都馬原町の中世遺跡」、都馬原1998「都馬原町 資料編」 資料編 |
| 11 12 | 穀倉貯蔵庫、瓦窯跡 | 住居・土器窯 | 新石器時代・5.2世紀 | 0.0174.1 二子山古墳 0.0174.2 二子山古墳 0.0174.3 二子山古墳 0.0174.4 二子山古墳 0.0174.5 二子山古墳 0.0174.6 二子山古墳 | 「都馬原町 資料編」、都馬原1988「都馬原町の中世遺跡、資料編」 始始古代・中世、都馬原町教委 2017「都馬原町地図帳」、本荘利一 「都馬原町 資料編」、都馬原1988「都馬原町の中世遺跡」、都馬原1998「都馬原町 資料編」 資料編 |
| 13 14 | 穀倉貯蔵庫、瓦窯跡 | 住居・土器窯 | 新石器時代・5.2世紀 | 0.0192.1 瓦窯 0.0192.2 瓦窯 0.0192.3 瓦窯 0.0192.4 瓦窯 0.0192.5 瓦窯 0.0192.6 瓦窯 | 「都馬原町 資料編」、都馬原1988「都馬原町の中世遺跡、資料編」 始始古代・中世、都馬原町教委 2017「都馬原町地図帳」、本荘利一 「都馬原町 資料編」、都馬原1988「都馬原町の中世遺跡」、都馬原1998「都馬原町 資料編」 資料編 |
| 15 16 | 穀倉貯蔵庫、瓦窯跡 | 住居・土器窯 | 新石器時代・5.4世紀 | 0.0187.1 瓦窯 0.0187.2 瓦窯 0.0190.1 瓦窯 0.0190.2 瓦窯 0.0190.3 瓦窯 0.0190.4 瓦窯 | 「都馬原町 資料編」、都馬原1988「都馬原町の中世遺跡、資料編」 始始古代・中世、都馬原町教委 2017「都馬原町地図帳」、本荘利一 「都馬原町 資料編」、都馬原1988「都馬原町の中世遺跡」、都馬原1998「都馬原町 資料編」 資料編 |
| 17 18 | 古窯No.35罐窯 古窯No.36罐窯 | 住居・土器窯 | 新石器時代・5.8世紀 | 0.0194.1 瓦窯 0.0194.2 瓦窯 0.0194.3 瓦窯 0.0194.4 瓦窯 0.0194.5 瓦窯 0.0194.6 瓦窯 | 「都馬原町 資料編」、都馬原1988「都馬原町の中世遺跡、資料編」 始始古代・中世、都馬原町教委 2017「都馬原町地図帳」、本荘利一 「都馬原町 資料編」、都馬原1988「都馬原町の中世遺跡」、都馬原1998「都馬原町 資料編」 資料編 |
| 19 20 | 古窯No.34瓦窯 古窯No.35瓦窯 | 住居・土器窯 | 新石器時代・5.8世紀 | 0.0195.1 瓦窯 0.0195.2 瓦窯 0.0195.3 瓦窯 0.0195.4 瓦窯 0.0195.5 瓦窯 0.0195.6 瓦窯 | 「都馬原町 資料編」、都馬原1988「都馬原町の中世遺跡、資料編」 始始古代・中世、都馬原町教委 2017「都馬原町地図帳」、本荘利一 「都馬原町 資料編」、都馬原1988「都馬原町の中世遺跡」、都馬原1998「都馬原町 資料編」 資料編 |
| 21 22 | 古窯No.62瓦窯 | 住居・土器窯 | 新石器時代・5.8世紀 | 0.0196.1 瓦窯 0.0196.2 瓦窯 0.0196.3 瓦窯 0.0196.4 瓦窯 0.0196.5 瓦窯 0.0196.6 瓦窯 | 「都馬原町 資料編」、都馬原1988「都馬原町の中世遺跡、資料編」 始始古代・中世、都馬原町教委 2017「都馬原町地図帳」、本荘利一 「都馬原町 資料編」、都馬原1988「都馬原町の中世遺跡」、都馬原1998「都馬原町 資料編」 資料編 |
| 23 24 | 古窯No.63瓦窯 古窯No.64瓦窯 | 住居・土器窯 | 新石器時代・5.8世紀 | 0.0197.1 瓦窯 0.0197.2 瓦窯 0.0197.3 瓦窯 0.0197.4 瓦窯 0.0197.5 瓦窯 0.0197.6 瓦窯 | 「都馬原町 資料編」、都馬原1988「都馬原町の中世遺跡、資料編」 始始古代・中世、都馬原町教委 2017「都馬原町地図帳」、本荘利一 「都馬原町 資料編」、都馬原1988「都馬原町の中世遺跡」、都馬原1998「都馬原町 資料編」 資料編 |

| 道路No.・名稱 | 井石園文 系三 | 古墳 余平 | 中近 極明 | 文庫・備考 |
|----------|---------------|----------|----------|--------------|
| 25 | 0225 番町ノ宮道路 | ○ | ○ | ○ 放水地 |
| 26 | 0220 田馬頭道路 | ○ | ○ | ○ 放水地 |
| 27 | 0227 小原山道路 | ○ | ○ | ○ 放水地、集落、古墳 |
| 28 | 0226 小原山道路 | ○ | ○ | ○ 放水地、集落 |
| 29 | 0225 人見山道路 | ○ | ○ | ○ 放水地、集落 |
| 30 | 0216 堀ノ内道路 | ○ | ○ | ○ 放水地 |
| 31 | 0212 沖野道路 | ○ | ○ | ○ 放水地 |
| 32 | 0217 四ヶ谷道路 | ○ | ○ | ○ 放水地 |
| 33 | 0221 本牧山道路 | ○ | ○ | ○ 放水地 |
| 34 | 0211 佐久間 | ○ | ○ | ○ 放水地 |
| 35 | 0213 上大字小須 | ○ | ○ | ○ 放水地 |
| 36 | 0215 本郷小須 | ○ | ○ | ○ 放水地 |
| 37 | 0217 本郷小須 | ○ | ○ | ○ 放水地 |
| 38 | 0214 本郷小須 | ○ | ○ | ○ 放水地 |
| 39 | 0208 堀内下道路 | ○ | ○ | ○ 放水地 |
| 40 | 0209 堀内上道路 | ○ | ○ | ○ 放水地 |
| 41 | 0409 本郷坂道 | ○ | ○ | ○ 放水地 |
| 42 | 0402 本郷坂道 | ○ | ○ | ○ 放水地 |
| 43 | 0406 本郷坂道 | ○ | ○ | ○ 放水地 |
| 44 | 0213 金森坂道 | ○ | ○ | ○ 放水地、集落、その他 |
| 45 | 0200 牛森坂道 | ○ | ○ | ○ 放水地 |
| 46 | 0224 生瀬坂道 | ○ | ○ | ○ 放水地 |
| 47 | 0403 下北山坂道 | ○ | ○ | ○ 放水地 |
| 48 | 0404 下北山坂道 | ○ | ○ | ○ 放水地 |
| 49 | 0228 上北山坂道 | ○ | ○ | ○ 放水地 |
| 50 | 0300 船越坂道 | ○ | ○ | ○ 放水地 |
| 51 | 0401 下北山坂道 | ○ | ○ | ○ 放水地、集落 |
| 52 | 0303 周山道路 | ○ | ○ | ○ 放水地、集落 |
| 53 | 0406 佐木坂道 | ○ | ○ | ○ 放水地 |
| 54 | 0408 保田山河原定坂道 | ○ | ○ | ○ 放水地 |
| 55 | 02240 内川坂道 | ○ | ○ | ○ 放水地、集落、古墳 |
| 56 | 02242 今ノ坂道 | ○ | ○ | ○ 放水地、集落 |
| 57 | 02243 古ノ坂道 | ○ | ○ | ○ 放水地、集落 |
| 58 | 古墳No.50道路 | ○ | ○ | ○ 放水地、古墳 |
| 59 | 糠倉谷筋山古墳跡 | ○ | ○ | ○ 放水地 |
| 60 | 02050 五丁目道路 | ○ | ○ | ○ 放水地、集落 |
| 61 | 00051 五丁目移名道路 | ○ | ○ | ○ 放水地 |
| 62 | 02050 五丁目道路 | ○ | ○ | ○ 放水地 |
| 63 | 00008 五丁目上段道路 | ○ | ○ | ○ 放水地 |
| 64 | 02291 朝日道路 | ○ | ○ | ○ 放水地、集落、その他 |
| 65 | 01010 朝日道路 | ○ | ○ | ○ 放水地 |
| 66 | 02050 朝日道路 | ○ | ○ | ○ 放水地 |
| 67 | 02050 朝日道路 | ○ | ○ | ○ 放水地 |
| 68 | 02050 朝日道路 | ○ | ○ | ○ 放水地 |
| 69 | 02293 朝日2・3段階 | ○ | ○ | ○ 放水地、その他 |
| 70 | 02050 朝日 | ○ | ○ | ○ 放水地 |
| 71 | 02050 朝日 | ○ | ○ | ○ 放水地 |
| 72 | 02050 朝日道路 | ○ | ○ | ○ 放水地、集落、その他 |
| 73 | 02050 朝日道路 | ○ | ○ | ○ 放水地 |
| 74 | 01015 朝日2段階 | ○ | ○ | ○ 放水地、その他 |
| 75 | 02050 朝日 | ○ | ○ | ○ 放水地 |
| 76 | 02050 朝日 | ○ | ○ | ○ 放水地 |

| 通名・件名 | 著者 | 刊行年 | 図文 | 書名 | 中近編 |
|---|---|---|-----------------------|------------------|-----------------------|
| 横260、高360 外330、下360 内330、下360 | 01753、 01815、 01840、 01933、 01966 | 関西文化審議会1965「三ツ令田跡、保田山跡、中里天神山古墳」、關西考古会1968「關西古跡」、資料編 | ○ ○ ○ ○ ○ | 鷺谷地、鬼深、古墳、城跡、その他 | ○ ○ ○ ○ ○ |
| 横260、高360 外330、下360 内330、下360 | 01744、 01899、 01933 | 關西文化審議会1965「三ツ令田跡、保田山跡、中里天神山古墳」、關西考古会1968「關西古跡」、資料編 | ○ ○ ○ | 鷺谷地、鬼深、古墳、城跡、その他 | ○ ○ ○ |
| 横260、高360 外330、下360 内330、下360 | 01932 | 關西文化審議会1965「三ツ令田跡、保田山跡、中里天神山古墳」、關西考古会1968「關西古跡」、資料編 | ○ | 鷺谷地 | ○ |
| 110 令田・安佐・佐野跡 | 01932 | 關西文化審議会1965「三ツ令田跡、保田山跡、中里天神山古墳」、關西考古会1968「關西古跡」、資料編 | ○ | 鷺谷地、古墳 | ○ |
| 111 佐野跡、保田跡 | 01873 | 關西文化審議会1965「三ツ令田跡、保田山跡、中里天神山古墳」、關西考古会1968「關西古跡」、資料編 | ○ | 鷺谷地、古墳、鬼深、その他 | ○ |
| 112 佐野跡・佐野古跡 | 01874、 01935 | 關西文化審議会1965「三ツ令田跡、保田山跡、中里天神山古墳」、關西考古会1968「關西古跡」、資料編 | ○ ○ | 鷺谷地、古墳、鬼深、その他 | ○ ○ |
| 113 関260、高360 外330、下360 内330、下360 | 01930 | 關西文化審議会1965「三ツ令田跡、保田山跡、中里天神山古墳」、關西考古会1968「關西古跡」、資料編 | ○ | 鷺谷地、その他の古跡 | ○ |
| 114 佐野跡、保田跡 | 01887、 01960 | 關西文化審議会1965「三ツ令田跡、保田山跡、中里天神山古墳」、關西考古会1968「關西古跡」、資料編 | ○ ○ | 鷺谷地、鬼深、その他 | ○ ○ |
| 115 関260、高360 外330、下360 内330、下360 | 01929、 01936 | 關西文化審議会1965「三ツ令田跡、保田山跡、中里天神山古墳」、關西考古会1968「關西古跡」、資料編 | ○ ○ | 鷺谷地、その他の古跡 | ○ ○ |
| 116 令田・安佐・佐野跡 | 01906 | 關西文化審議会1965「三ツ令田跡、保田山跡、中里天神山古墳」、關西考古会1968「關西古跡」、資料編 | ○ | 鷺谷地、鬼深、その他 | ○ |
| 117 関260、高360 外330、下360 内330、下360 | 01907、 01959 | 關西文化審議会1965「三ツ令田跡、保田山跡、中里天神山古墳」、關西考古会1968「關西古跡」、資料編 | ○ ○ | 鷺谷地、古墳 | ○ ○ |
| 118 佐野跡、保田跡 | 01828 | 關西文化審議会1965「三ツ令田跡、保田山跡、中里天神山古墳」、關西考古会1968「關西古跡」、資料編 | ○ | 鷺谷地、古墳 | ○ |
| 119 関260、高360 外330、下360 内330、下360 | 01958 | 關西文化審議会1965「三ツ令田跡、保田山跡、中里天神山古墳」、關西考古会1968「關西古跡」、資料編 | ○ | 鷺谷地、その他の古跡 | ○ |
| 120 | 01900、 01955 | 關西文化審議会1965「三ツ令田跡、保田山跡、中里天神山古墳」、關西考古会1968「關西古跡」、資料編 | ○ ○ | 鷺谷地、古墳、その他の古跡 | ○ ○ |
| 121 佐野跡、保田跡 | 01865、 01751 | 關西文化審議会1965「三ツ令田跡、保田山跡、中里天神山古墳」、關西考古会1968「關西古跡」、資料編 | ○ ○ | 鷺谷地、古墳、その他の古跡 | ○ ○ |
| 122 令田・安佐・佐野跡 | 01911 | 關西文化審議会1965「三ツ令田跡、保田山跡、中里天神山古墳」、關西考古会1968「關西古跡」、資料編 | ○ | 鷺谷地、古墳、その他の古跡 | ○ |
| 123 関260、高360 外330、下360 内330、下360 | 01963 | 關西文化審議会1965「三ツ令田跡、保田山跡、中里天神山古墳」、關西考古会1968「關西古跡」、資料編 | ○ | 鷺谷地、古墳、その他の古跡 | ○ |
| 124 佐野跡、保田跡 | 01898、 01913 | 關西文化審議会1965「三ツ令田跡、保田山跡、中里天神山古墳」、關西考古会1968「關西古跡」、資料編 | ○ ○ | 鷺谷地、古墳、その他の古跡 | ○ ○ |
| 125 佐野跡、保田跡 | 01708 | 關西文化審議会1965「三ツ令田跡、保田山跡、中里天神山古墳」、關西考古会1968「關西古跡」、資料編 | ○ | 鷺谷地、古墳 | ○ |
| 126 令田・安佐・佐野跡 | 01912 | 關西文化審議会1965「三ツ令田跡、保田山跡、中里天神山古墳」、關西考古会1968「關西古跡」、資料編 | ○ | 鷺谷地、古墳 | ○ |
| 127 令田・安佐・佐野跡 | 01910 | 關西文化審議会1965「三ツ令田跡、保田山跡、中里天神山古墳」、關西考古会1968「關西古跡」、資料編 | ○ | 鷺谷地、古墳 | ○ |
| 128 令田・安佐・佐野跡 | 01970 | 關西文化審議会1965「三ツ令田跡、保田山跡、中里天神山古墳」、關西考古会1968「關西古跡」、資料編 | ○ | 鷺谷地、古墳 | ○ |
| 129 令田・安佐・佐野跡 | 01924 | 關西文化審議会1965「三ツ令田跡、保田山跡、中里天神山古墳」、關西考古会1968「關西古跡」、資料編 | ○ | 鷺谷地、古墳 | ○ |
| 130 佐野跡、保田跡 | 01899 | 關西文化審議会1965「三ツ令田跡、保田山跡、中里天神山古墳」、關西考古会1968「關西古跡」、資料編 | ○ | 鷺谷地、古墳 | ○ |
| 131 令田・安佐・佐野跡 | 01926 | 關西文化審議会1965「三ツ令田跡、保田山跡、中里天神山古墳」、關西考古会1968「關西古跡」、資料編 | ○ | 鷺谷地、古墳 | ○ |
| 132 佐野跡、保田跡 | 01890 | 關西文化審議会1965「三ツ令田跡、保田山跡、中里天神山古墳」、關西考古会1968「關西古跡」、資料編 | ○ | 鷺谷地、古墳 | ○ |
| 133 令田・安佐・佐野跡 | 01926 | 關西文化審議会1965「三ツ令田跡、保田山跡、中里天神山古墳」、關西考古会1968「關西古跡」、資料編 | ○ | 鷺谷地、古墳 | ○ |

「<http://mapping-gurus-prestige.jp/prestige-portal>」を参照した。

の約1.4倍に増え、ピークを迎える。その後、10世紀代から堅穴建物は減少ていき、11世紀になるとごく一部を除いて堅穴建物は見られなくなる。こうした堅穴建物数の推移から、この地域においては8世紀代と9世紀代が古代集落の大きな画期であったことが判明する。

古墳時代終末期7世紀代には唐沢川上流域に位置する前掲保渡田東遺跡や保渡田徳昌寺前遺跡、さらに東側に寄った牛池川から染谷川流域において堅穴建物数は増加している。牛池川や染谷川流域には上野国府や車評家が造営され、上野国における行政の中枢が形成されたことが人口増加の要因と考えられる。約5km程度西側の本遺跡周辺地域においても、比較的近い位置と言えるので、その影響を受けたであろうことは容易に考えられる。

8世紀代には本遺跡の周辺である唐沢川の上流域では堅穴建物数が減少するのに対して、古代上野国中枢施設が纏まつて所在する牛池川から染谷川及び八幡川流域に至るまでの地域において堅穴建物は急増している。

なお、10世紀からの堅穴建物数の減少は、必ずしも集落の減少を意味しているわけではなく、関東地方一円でも同様の傾向が認められる。10世紀からの堅穴建物の急減は、集落立地や住居構造の変化によるところと考えられている。

(5) 耕地

古代の耕地は天仁元(1108)年に起こった浅間山噴火によって降下したAs-S下から検出される。1108年より以前ということは確実であるが、古墳時代から連続と続いている水田と、古代になってから新たに開発される水田があり、古代のどの時期に開発され、利用されるようになつたかを明確に解明することは難しい。本遺跡の周辺では、前掲の保渡田阿弥陀遺跡、同道遺跡、井出村東遺跡、井出地区遺跡群、三ツ寺Ⅰ遺跡、三ツ寺Ⅱ遺跡、熊野堂遺跡、保渡田遺跡群、北原遺跡等において古墳時代以来の水田が検出されている。

本遺跡の南東約1.6kmに位置する中林遺跡(第1表・第4図146)では古代から水田が、同位置の堤上遺跡(第1表・第4図146)では畑が造られている。

第6項 中世

(1) 動向

中世前期 上野国内では、12世紀になると、保元2(1157)

年に新田郡を中心に新田荘が設置され、源義家の孫に当たる新田義重が荘司となった。やがて、仁安3(1168)年、新田荘は新田義重の末子である得川義季に譲られた。新田義重は、庶子の義俊を片岡都里見に、同じく庶子の義範を多胡郡山名に置くなど一族を国内に分離し、勢力を伸ばす一方、三国峠を越えて、越後国魚沼郡地方まで進出し、支配下に収めていった。

源賴朝の挙兵に当たって、新田義重は当初は傍観的な態度であったが、後に帰参を果たした。しかしながら、頼朝同族源氏一門の重鎮であったにも関わらず、頼朝への帰参が遅れたことで幕府内では冷遇され、源氏一門の最有力御家人として遇された同族足利氏との格差は大きくなってしまった。

一方、上野国内赤城山麓地域では、秀郷流藤原氏を称する大胡・洲名・山上などの諸氏がおこっている。

本遺跡が所在する群馬郡地域では上野国衙が所在したことから中世前期には有力な武士団の成長がなかった。

南北朝～室町前期 元弘3(1333)年、新田義貞は新田郡生品神社で挙兵すると、南下しつつ幕府方の軍勢を退けて鎌倉に入り、鎌倉幕府と執権北条氏を滅亡に追い込んだ。義貞はそれ以来、中部・近畿・中国・北陸地方を転戦し、越前国藤島の地で戦死したが、一族はその後も東北地方から九州地方まで分散して、南朝方として戦った。

一方、北朝を庇護下に置き、京都に幕府を開いた足利尊氏は、母の実家である有力御家人上杉氏を上野守護に任じた。上杉被官の長尾氏が守護代となり、上野国衙が所在した総社の地を本拠として蒼海城を築いた。これによって上野国衙が所在した旧群馬町域の東部はほぼ長尾氏の支配下に入った。

長尾氏は総社長尾氏を宗家として、越後国や群馬郡白井・佐位郡伊勢崎・邑楽郡館林等の諸家に分派し、勢力を張つた。

戦国期 やがて、関東管領上杉氏の被官であった長野氏が急成長を遂げ、本遺跡の北西約2.5kmの位置に箕輪城(第1表・第4図範囲外、国指定史跡)を築いて本拠地とし、旧群馬町の全域が箕輪長野氏の支配下に入った。

上野国内における戦国期の有力な国衆としては、箕輪城に長野氏、金山城に由良氏がいた。平井城には関東管領上杉憲政がいたものの、小田原北条氏に追われ、越後の長尾景虎を頼った。上杉氏の名跡と関東管領の地位を

譲られた長尾景虎は、関東地方支配の正当性を得て、関東管領上杉政虎として小田原北条氏攻略のため関東地方に出兵したため、上野国は越後上杉氏、甲斐武田氏、小田原北条氏等による激しい争奪戦の場となった。

天文18(1549)年、甲斐の武田信玄は上野国へ発向、三寺尾において安中氏等の国衆と対峙した。それ以後も武田氏は度々上野国へ軍事侵攻を繰り返して箕輪城の支城を次々と陥落させていった。永禄7(1564)年には倉賀野城、同9(1566)年には箕輪城を落し、箕輪長野氏を滅亡させた。皆谷長野氏はじめ多くの当地域の国衆たちも箕輪長野氏と運命を共にした一方、武田氏に降った国衆たちの多くは、武田氏の有力被官であった内藤氏の下に入った。その後、内藤氏は箕輪城代として、自らは本遺跡の北側に隣接する保渡田城(第1表・第4図1)を築城し、本拠地とした。保渡田城は当該地域に現存する中世城郭として最も良く遺構が遺存しており、現地には堀や高い土居等の痕跡が非常に良く残っている。

武田氏は西上州を完全に掌握し、和田兵衛大夫業繁などかつて上杉麾下にあった西上野の国衆たちが武田氏の軍役衆となっている。

天正元(1573)年武田信玄が没し、同3年には後を継いだ武田勝頼が三河国長篠において織田信長・徳川家康の連合軍に大敗し、武田氏に属した和田氏ら上野の国衆らも敗死し、上野国の武田氏旧領は織田氏の支配下に入った。織田信長は部将の滝川一益を関東管領に任じ、上野国厩橋城に置いて関東地方における武田氏旧領を支配させると共に、小田原北条氏に対峙させた。

天正10(1582)年に勃発した本能寺の変で織田信長が横死すると、織田家の関東管領滝川一益は小田原北条氏に敗退、上野国の武田氏旧領はほぼ小田原北条氏の支配するところとなり、同年末には北条氏政が倉賀野に伝馬制度を定めるなど上野支配を着々と進めた。

天正18(1590)年、豊臣秀吉による小田原北条氏攻めによって相模小田原城は落城、小田原北条氏は滅亡し、小田原城攻めの論功行賞で、小田原北条氏旧領の関東八箇国は徳川家康に与えられた。徳川家康は関東に入封すると江戸を本拠地に定め、同年、家康の重臣である井伊直政が12万石をもって箕輪に封じられた。井伊直政は家康の命を受けて慶長3(1598)年、和田に築城し、「高崎」と改称して城下町ごと移転し、箕

輪城は廢城となった。

(2) 城館

保渡田城 『上野調査村誌』5に築造時期の詳細は分からぬとしているが、「永禄年間箕輪城主長野信濃守業政ノ保若タリ...」、「長野氏滅亡後武田氏ノ臣内藤修理亮昌豊城代トシ在住シ...」とあり、『箕輪城及び鷹留城子孫記』には「箕輪城五代城主業政の次男業盛は、保渡田腹基九郎氏業右京進業盛...」とあるので、箕輪長野氏系の城館として築かれ、西上州が武田氏の支配下に移った後、武田氏の臣であった内藤氏の居城となったとの伝承を伝えるが、群馬県内における城郭研究の第一人者であった山崎一氏は、小規模ながらも螺旋形の構造である本城館はかなり進歩した武田氏系の城館構造であるとし、永禄年間に内藤昌豊が築城したものと見ており(同氏著『群馬県古城址の研究』補遺編下巻)、恐らくはその可能性が高いと考えられる。

なお、本城を築城したと考えられる内藤昌豊は、甲斐武田氏の下、子の昌月と2代に亘って西上州7郡支配した。本城はその拠点となったと考えられる。

なお、武田氏被官内藤昌豊は、天正3(1575)年、武田勝頼に従って織田信長・徳川家康連合軍と戦った長篠の戦いで討死している。その子内藤昌月は、甲斐武田氏滅亡後は最初、織田氏の関東管領滝川一益に、次いで小田原北条氏に属して箕輪城代を務めたが、天正17(1589)年、厩橋堀廻の城主中川武藏守らに攻められ自刃したと『総社記』は伝えている。

東側を東谷津川、西側を大清水川に挟まれ、東西最大幅約210m、南北最大幅約270mの規模を呈し、本遺跡調査区の北東側約0.21mの位置に近接する高崎市保渡田北部公会堂の位置が1ノ桟、1ノ桟の北側に2ノ桟・3ノ桟が、南側に4ノ桟、東側に5ノ桟がそれぞれ隣接し、西堀沿いに3つの屋敷跡が並んでいると言われている。

1ノ桟は一辺約70~80mの正方形に近く、周囲の堀は現状では消滅している。保渡田北部公会堂の南側に現存する天子塚(山)古墳の高さ約5m、西・北辺約50m、南辺約35mの南東部が歪んだ台形状を呈する墳丘上に櫓、その東側に虎口が存在したものと考えられている。

1ノ桟の北側にコの字形に広がる2ノ桟が、最も残存状態が良く、明確に遺っている。北西隅部から北辺にかけて高さ約4mの土塁と幅約10mの堀跡が残っており、

北辺の中央部に土橋を設けて3ノ桟へと通じる虎口を形成している。

1ノ桟、2ノ桟を北西から南面を囲むようにL字形の3ノ桟があり、1ノ桟南面部分は虎口付近を防備しており、南側の4ノ桟に連なる。

3・4ノ桟と大清水川との間の幅約100mほどの空間には単調な外郭を防御するために幅約5mの堀に囲まれた3か所の屋敷構えがあり、本遺跡の名称の元となった地名の由来となっているわけであるが、最も北側にある屋敷構えの北西隅の位置には高まりが認められ、檜台の可能性が高い。

4ノ桟は追手筋に続く桟で、南側には城下町が形成されていたと考えられている。

5ノ桟は1ノ桟と東谷津川との間の一段低い桟である。

井出5館 本遺跡の南東側に隣接する前掲の井出地区遺跡群に含まれる熊野館、花城寺館、元井出館、及び本遺跡の南東約1.4kmに位置する同道館(第1表・第4図90)、前掲井出村東遺跡内に位置する井出東館の5つの館が本遺跡の周辺には所在している。いずれも箕輪長野氏被官の屋敷と考えられる。

元井出の地に中世環濠集落や館が設けられたのは、戦国期の混乱の時期に、井野川と轟城の河岸に挟まれたこの地が天然の要害であったことによるものと考えられる。

井出地区遺跡群の中に含まれる熊野館は、花城寺館東西約0.08kmの位置にある。館の規模は東西約120m、南北約130m、堀幅は約10mである。

同じく井出地区遺跡群の中に含まれる花城寺館は東西約50m、南北約75m、幅約10mの規模を呈し、西方と南方に空堀を巡らし、南方中央部付近に虎口があり、土橋状の高まりも見られたという。

同じく井出地区遺跡群の中に含まれる元井出館は、花城寺館の南西約0.1kmの位置にあり、南北約65m、東西約60mの規模を呈し、花城館よりも約1m低い環濠が存在していたという。

井出村東遺跡に含まれる井出東館からは中世の五輪塔や貞治4(1365)年銘の板碑等が出土した。

保渡田VII遺跡 本遺跡の南東側に隣接する保渡田VII遺跡からも幅約1.6~2.4m、深さ0.6mの堀で区画された城

館の遺構が検出されたが、遺構の残存状態が悪く、余り明確ではない。東辺には土壘状の土盛も検出されている。出土遺物の年代観から15~16世紀頃のものと考えられている。

(3)その他の遺構

方形堅穴建物状遺構 前掲の井出村東遺跡から3基、同じく前掲の三ツ寺Ⅲ遺跡から1基の方形堅穴状遺構が検出されている。東日本を中心に、多くの中世の遺跡から検出されている中世特有の遺構である。

いずれも1辺約3~5mの長方形ないしは方形形状を呈し、方形状の壁の内側に壁に沿って小規模な柱穴が掘り込まれている。柱穴と柱穴の間には小規模な溝が掘られている事例があり、堅穴の壁の崩落を防止するための板壁が設けられていたものと考えられる。

いずれの遺跡においても遺物の出土が僅少であり、用途や機能については明らかにしがたい。

地下式土坑 また、井出村東遺跡と三ツ寺Ⅲ遺跡からそれぞれ2基の、堅穴を掘り、その底面から横へ掘り広げて地下に空間を造る地下式土坑が検出されている。地下式の貯蔵庫ないしは中世鎌倉に特有な横穴式の墳墓であるやぐらを模した地下式の墳墓ではないかと考えられているが、本遺跡周辺から検出された地下式土坑からは、いずれも遺物の出土が殆ど無いため、遺構の用途や機能を解明することは難しい。

墳墓 前掲の西浦北遺跡からは火葬墓が検出され、錢貨が1点出土した。

本遺跡の南東約1.3kmに位置する三ツ寺大下IV遺跡(第1表・第4図147)からは5基の土壙墓が検出された。1号土壙墓の頭骨の左脇から亀甲地双鳥鏡が出土している。

烟 前掲の熊野堂Ⅰ遺跡からは中世の烟が検出された。約30~40cmに歛溝が掘られている様子が判明するが、歛は削平されていた。

第7項 近世

(1)高崎藩の変遷

井伊家から酒井家、安藤家へ 井伊直政の高崎在城は僅か3年弱であったが、その間に城郭の構想と郭内の町割などを行っている。

慶長9(1604)年に井伊直政に代わって高崎に入封した

酒井家次は大坂夏の陣の後、元和2(1616)年に越後国高田へ移封され、元和5(1619)年には安藤重信が56600石で入封し、安藤家が元禄8(1695)年に備中松山に転封されるまでの3代77年に亘って在封した。安藤家藩主時代の寛文4(1664)年の領地目録(寛文印知帳)に拠れば、高崎藩領群馬郡90箇村の中に、井出、保渡田、中里、正觀寺、棟高、菅谷、中泉、中泉新田、三ツ寺等9か村が含まれている。安藤家が高崎藩主を務めていた時代に高崎城や城下町の整備はほぼ完了したと考えられ、寛永12(1635)年と寛文年間(1661~73)に高崎藩安藤家第3代藩主の重博は領内の検地を行っている。また、安藤家高崎藩主時代には唐沢川から用水を取り入れ、三ツ寺村地内に水田20町3反余を開発した。これによってそれまで畑作が多かった三ツ寺村、棟高村、中泉村では稻作が行われるようになつた。

間部詮房から大河内松平家へ 元禄8(1685)年、安藤家の移封後、下野國壬生から大河内松平家の松平輝貞が入封したが、宝永6(1709)年に越後国村上に転封となり、間部詮房が高崎に封じられた。間部詮房は領内において桑や漆の栽培を奨励するなど産業振興を図った。

享保2(1717)年、大河内松平家の輝貞が再度入封し、以降幕末まで大河内松平家の支配が続いた。関東平野の一角を占め、陸上及び河川交通の結節点であり要衝である高崎の地を、歴代、譜代大名が支配したことは、必然的なことと言える。

寛政5(1793)年に中山道と利根川・烏川筋をおさえる岩鼻村に岩鼻代官所が創設され、上野8郡の幕府領・旗本領の村々を支配した。寛文郷帳によると、高崎市域には群馬郡63村、碓氷郡9村、片岡郡3村、緑野郡4村が含まれ、元禄郷帳、天保郷帳でも大幅な変化はない。

(2)保渡田村周辺の支配の変遷

宝永7(1710)年に高崎藩主間部詮房が越後国村上に転封されると、群馬郡47か村は天領となり、その中には菅谷、井出、保渡田などの村々も含まれている。保渡田村(1190石)は高崎藩領・旗本領・幕府領の3給支配となつた。明和4(1767)年に安中藩主板倉勝清が幕府老中に就任して1万石を加増された時に、支配下の群馬郡6か村は行方村など5か村と相給の保渡田村であった。

旧群馬町域は、江戸時代を通じて高崎藩領・前橋藩領の村が多く、次いで幕府領・旗本領などがあり、一部に

沼田藩領や安中藩領が所在していた。

保渡田村の石高は、「寛文郷帳」では1190.837石、「元禄郷帳」では1197.837石、「天保郷帳」では1394.635石と、旧群馬町域内に所在した諸村の中では圧倒的に高い。農業生産高が高く、豊かな土地であったことが知られる。

第3節 基本土層(第5図、PL.46)

基本土層は調査区北東隅付近の東壁X=42812、Y=-76711.5付近(基本土層1)、調査区北東寄りの北壁X=42816、Y=-76723付近(基本土層2)、調査区のほぼ中央北壁X=42810.5、Y=-76763付近(基本土層3)において記録した。

基本土層1 A-A'

- 1 暗褐色土 表土、耕作土。
- 2 As-B。
- 3 暗褐色土 As-B下の畑耕作土。
- 4 黒色土 As-C混土。

基本土層2 B-B'

- 1 褐色土 盛土、現耕作土。
- 2 暗褐色土 表土、耕作土。
- 3 As-B。
- 4 暗褐色土 As-B下の畑耕作土。
- 5 黒色土 As-C混土。

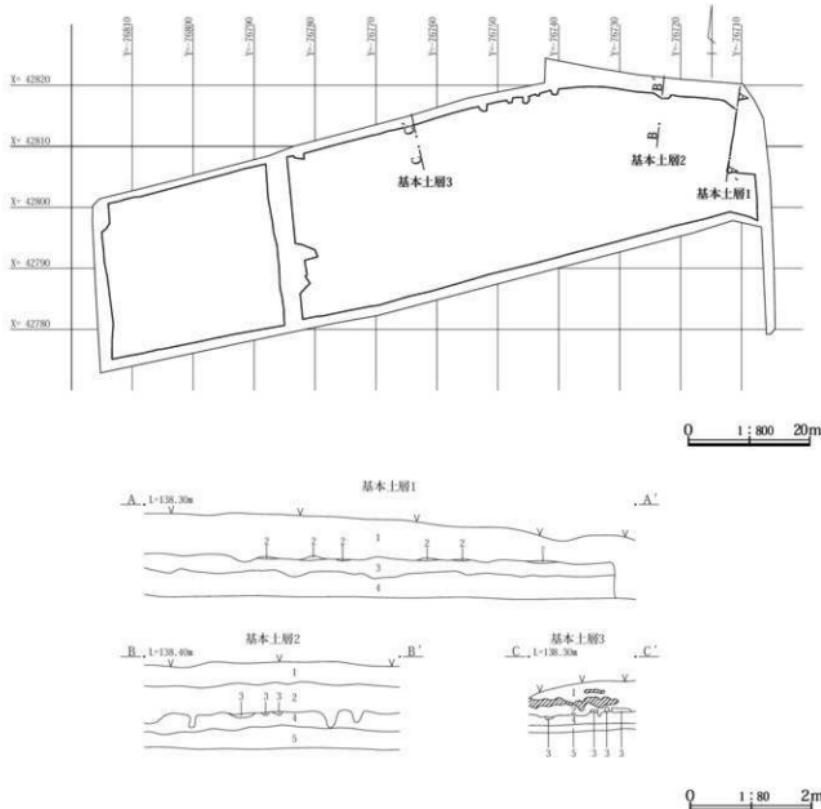
基本土層3 C-C'

- 1 表土、耕作土。
- 2 黒色土 As-C混土。
- 3 As-C。
- 4 褐色土
- 5 にぶい黄褐色土 ローム漸移層。

第2章 遺跡の地理的・歴史的環境

第2章参考文献

- 青木裕美ほか2012「『群国史』—上州の150年戦争—」、上毛新聞社
- 飯森康広2022「戦国期上野の城・紛争と地域変容」、岩田書院
- 井上定幸・近藤義徳・西畠晴次編1988「角川日本地名大辞典10 群馬県」、角川書店
- 尾崎喜佐雄監修1987「日本歴史地名大系10 群馬県の地名」、平凡社
- 京都市史編纂委員会編1968「諸本集成倭名類聚抄」本文
註、鷹川書店
- 熊谷市史編纂委員会編2018「熊谷市史通史編上 原始・古代・中世」
- 群馬県編1938「上毛古墳総覧」
- 群馬県文化事業委員会編1988「群馬県の中世城郭跡」
- 群馬県教育委員会編2017「群馬県古墳総覧」
- 群馬県史編纂委員会編1981「群馬県史」資料編3
- 群馬県史編纂委員会編1986「群馬県史」資料編2
- 群馬県史編纂委員会編1990「群馬県史」通史編1
- 群馬県史編纂委員会編1990「群馬県史」資料編6
- 群馬県史編纂委員会編1990「群馬県史」資料編7
- 群馬県総務部町村課編2015「平成27年度群馬県市町村要覧」
- 群馬県文化事業振興会編1977「上野国市村誌」1
- 群馬県埋蔵文化財調査事業団編1999「群馬県遺跡大事典」
- 群馬県編1998「群馬町誌」資料編1
- 群馬県編2001「群馬町誌」通史編1
- 国立歴史民俗博物館「高田領取調帳データベース」
https://www.rekihaku.ac.jp/up-cgi/login.pl?param/kyud/db_param
- 吉田英嗣・笠原友生2016「関東平野北西部、高崎台地から甲野田低地帯にかけての地下地質」(『地学雑誌』)125-5
- 山崎一1971・72「群馬県古城跡の研究」上・下、群馬県文化事業振興会
- 山崎一1979「群馬県古城跡の研究」被遺編上・下、群馬県文化事業振興会
- マッピングぐんま・遺跡まっぷ
<http://mapping-gunma.pref.gunma.jp/pref-gunma-iseki/Portal>



第5図 基本土層図

第3章 発見された遺構と遺物

保渡田屋敷廻り遺跡は、高崎市保渡田町地内、井野川と大清水川の合流地点付近の扇状地上に位置する。保渡田屋敷廻り遺跡の東側は保渡田城跡(推定)と接している。保渡田屋敷廻り遺跡は台地で現況は主に宅地、保渡田阿弥陀跡側は低地で現況は主に水田となっている。標高は約136~138mである。

本遺跡の周辺には古墳時代を中心に、多くの重要な遺跡が分布している。本遺跡の北西約2.3kmには国史跡箕輪城跡(中世)が、南東には隣接して国史跡保渡田古墳群(古墳時代)が、東南東約1.5kmには三ツ寺I遺跡(古墳時代)が存在する。

本遺跡は戦国期の城館遺跡である保渡田城跡に隣接しており、調査区北~西部に存在する土手状の高まりが土壘の遺構と想定されていた。しかしながら、調査区内は近現代における耕作によって著しく擾乱されており、土壘の存在を確認することは出来なかった。

調査の結果、2つの遺構面が確認された。1面目は、現耕作土直下の古墳時代~近世の遺構面で、古墳周濠、古墳時代~平安時代の竪穴建物5棟及び竪穴状遺構1基、中近世の掘立柱建物5棟、柵1条、溝14条、井戸6基、集石3基、土坑75基、ピット82基、烟等の遺構を確認した。烟は、調査区北部土手部分の一部、表土直下に100mほど残存していた。

2面目はAs-Cを含む黒色土下から検出された縄文時代~古墳時代前期の遺構面で、調査区北部および西部の土手部分の一部から土坑3基とピット19基を確認した。

なお、ピットについては一覧表に纏めて報告する。

第1節 中・近世の遺構と遺物

本遺跡において検出された中近世の遺構は、掘立柱建

物5棟、柵1条、溝14条、井戸6基、集石3基、土坑75基、ピット82基とそれらの遺構が検出された面よりも上の層から検出された、2次堆積のAs-Bによって覆われた烟1面であった。傾斜地を除く調査区のほぼ全域から検出されたが、5棟の掘立柱建物は調査区の北西部と中央部南寄りの位置、14条の溝、6基の井戸は調査区の東半分から、3基の集石は調査区の中央付近から検出されるなど、遺構によっては偏りがみられる。

なお、ピットについては後掲の第3表ピット一覧表を参照されたい。

1. 掘立柱建物

本遺跡から検出された掘立柱建物は5棟ある。古墳時代~古代の掘立柱建物は検出されなかつたので、本遺跡から検出された掘立柱建物はすべて中・近世のものと言ふことになる。

掘立柱建物は調査区の北西寄りの位置から2・3号掘立柱建物2棟が重複して、調査区のほぼ中央の南端付近から1・4・5号掘立柱建物の3棟が縦まつて検出された。1・4号掘立柱建物は重複している。

総柱の掘立柱建物は調査区北西寄りから検出された3号掘立柱建物1棟のみで、他はいずれも側柱建物である。廟が付くものも1棟もない。いずれも単純な構造で、あまり大型のものはない。

(1) 1号掘立柱建物(第7図、PL.2)

位置 調査区中央南端寄り。33号土坑の南側、6号井戸の南西側、29号土坑の西側に隣接する。X=42790~792、Y=-76753~757。

重複 P4が5号掘立柱建物P2を掘り込む。4号掘立柱建物、95・103号ピットが建物内にかかるが新旧関係は不

第2表 検出遺構一覧表

| 時代\遺構 | 古墳 | 竪穴建物 | 竪穴状遺構 | 掘立柱建物 | 柵 | 溝 | 井戸 | 集石 | 土坑 | ピット | 烟 | 計 |
|---------|----|------|-------|-------|---|----|----|----|----|-----|---|-----|
| 中・近世 | | | | 5 | 1 | 14 | 6 | 3 | 75 | 82 | 1 | 188 |
| 古代~古墳時代 | 1 | 5 | 1 | | | | | | | | | 7 |
| 4世紀後半以前 | | | | | | | | 3 | 19 | | | 22 |
| 計 | 1 | 5 | 1 | 5 | 1 | 14 | 6 | 3 | 78 | 101 | 1 | 217 |

明である。

主軸方向 N-87° -W。

検出面積 5.952m²。

規模 1×2間、長軸3.52m、短軸1.93m。

桁行 P2-3間1.82m、P3-4間1.55m、P5-6間1.70m、P6-1間1.83m。

梁間 P1-2間1.71m、P4-5間1.94m。

形状 西北西-東南東方向に長い長方形を呈する。梁間の長さは、西から1.94m・1.85m・1.71mと東に行くに従ってやや短くなる。一方、桁行の長さは北辺が3.5m、南辺が3.35mとなる。

柱穴 6基が検出された。いずれも平面形態は小規模で、概ね方形ではないし長方形を呈している。深さはまちまちである。

P1(北東隅)：平面形態は西北西-東南東方向に僅かに長い長方形を呈する。主軸方位はN-74° -W。長径0.31m、短径0.29m、確認面からの深さ0.75m、断面は幅が狭く深いU字形状を呈する。埋土は黒褐色気味の暗褐色土で、ローム粒を少量含む。

P2(南東隅)：平面形態は方形を呈する。主軸方位はN-83° -W。長径0.26m、短径0.25m、確認面からの深さ0.37m。断面は幅が狭くやや深いU字形状を呈する。埋土は黒褐色気味の暗褐色土で、ローム粒を少量含む。

P3(南辺中央)：平面形態は不整形を呈する。主軸方位はN-13° -E。長径0.29m、短径0.28m、確認面からの深さ0.33m。断面は幅が狭いU字形状を呈する。埋土は褐色土ブロックを少量、ローム粒を微量含む暗褐色土。

P4(南西隅)：平面形態は東西にやや長い不整隅丸長方形を呈する。主軸方位はN-87° -W。長径0.34m、短径0.28m、確認面からの深さ0.31m。断面は余り深くない不整逆台形状を呈する。埋土は褐色土ブロックを少量、ローム粒を微量含む暗褐色土。

P5(北西隅)：平面形態は西北西-東南東方向に僅かに長い長方形を呈する。主軸方位はN-85° -W。長径0.33m、短径0.28m、確認面からの深さ0.61m。断面は狭くやや深いU字形状を呈する。埋土は褐色土ブロックを少量、ローム粒を微量含む暗褐色土。

P6(北辺中央)：平面形態は西北西-東南東方向に長い長方形を呈する。主軸方位はN-83° -W。長径0.32m、短径0.24m、確認面からの深さ0.20m。断面はあまり深

くない逆台形状を呈する。埋土は褐色土ブロックを少量、ローム粒を微量含む暗褐色土。

所見 調査区中央南端付近から検出された1・4・5号の3棟の掘立柱建物の内の1棟で、調査区南壁際から検出された5号掘立柱建物が、調査区外へと伸びる南北棟建物である可能性が考えられるので、これら3棟の内、唯一、確実な東西棟建物である。先述した通り、P4が5号掘立柱建物P2に掘り込まれており、5号竪穴建物よりは先行することは明らかであるが、北西側に重複する。

なお、5号掘立柱建物が実際に南北棟であれば、3棟の中では最も規模が大きい掘立柱建物となるが、それにしてもこれら3棟の掘立柱建物は小規模であり、特に、北辺が斜め方向で、歪な平面形態を呈する本掘立柱建物は、仮設的な建物であったものと考えられる。

遺物 なし。

時期 中・近世。

(2) 2号掘立柱建物(第8図、Pl. 3)

位置 調査区の北西寄り。1号塙、51号土坑の南側に隣接する。X=42791～796、Y=-76794～803。

重複 3号掘立柱建物、44・49・53～55・58・61・65・70号ピットが建物内にかかるが新旧関係は不明である。

主軸方向 N-81° -W。

検出面積 26.004m²。

規模 1×4間、北辺が1間東側に張り出す。長軸9.86m、短軸3.49m。

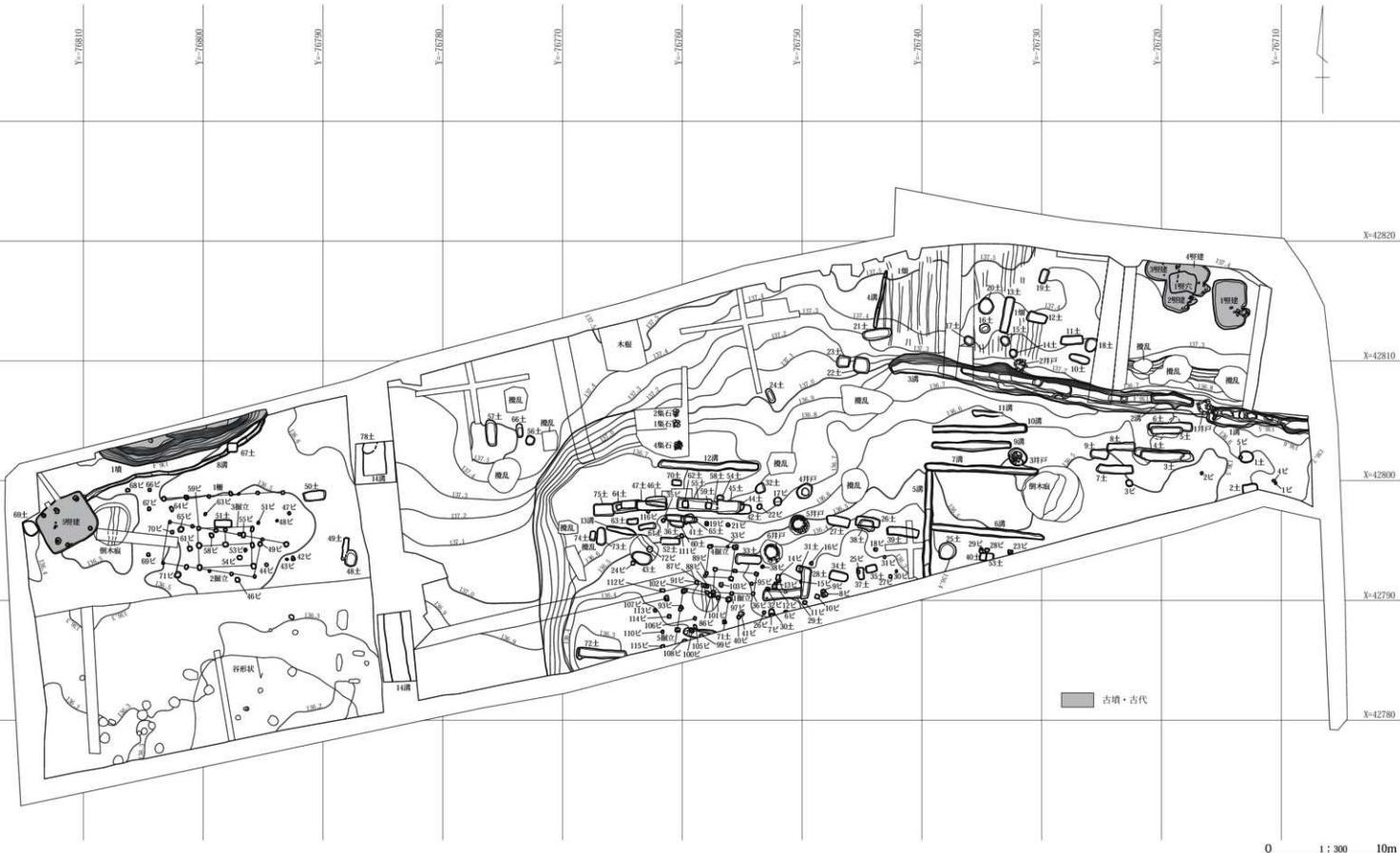
桁行 P1-2間1.98m、P2-3間1.86m、P3-4間1.98m、P4-5間1.94m、P6-7間1.92m、P7-8間1.94m、P8-9間1.91m、P9-10間1.99m、P10-11間2.10m。

梁間 P1-10間3.24m、P2-9間3.30m、P3-8間3.34m、P4-7間3.40m、P5-6間3.49m。

形状 西北西-東南東方向に長い長方形を呈する。梁間の長さは概ね3.3m前後、桁行の長さは1.95m前後と比較的均等である。

柱穴 11基が検出された。いずれも小規模で、平面形態は概ね円形ではない楕円形を呈し、掘方も浅い。

P1(南東隅) 平面形態は北東-南西方向に僅かに長い長方形を呈する。主軸方位はN-17° -E。長径0.24m、短径0.21m、確認面からの深さ0.19m。断面は小さな半椭円形を呈する。埋土はローム粒を微量含む黒褐色土。



第6図 古墳・古代～中・近世の遺構全体図

P2(南辺東から2番目)平面形態は北東-南西方向にやや長い楕円形状を呈する。主軸方位はN-12°-E。長径0.29m、短径0.24m、確認面からの深さ0.15m。断面は小さく、薄く、扁平な逆台形状を呈する。埋土はローム粒を微量含む黒褐色土。

P3(南辺中央)平面形態は北東-南西方向に僅かに長い梢円形状を呈する。主軸方位はN-11°-W。長径0.21m、短径0.19m、確認面からの深さ0.16m。断面は小さく幅がやや広いU字形状を呈する。埋土はローム粒を微量含む黒褐色土。

P4(南西側から2番目)平面形態は北東-南西方向に長い楕円形状を呈する。主軸方位はN-10°-E。長径0.37m、短径0.29m、確認面からの深さ0.14m。断面は小さく扁平な逆台形状を呈する。埋土はローム粒を微量含む黒褐色土。

P5(南西隅)平面形態は北東-南西方向に僅かに長い隅丸台形状を呈する。主軸方位はN-3°-E。長径0.21m、

短径0.18m、確認面からの深さ0.31m。断面はやや深いU字形状を呈する。埋土はローム粒を微量含む黒褐色土。P6(北西隅)平面形態は北東-南西方向に長い楕円形状を呈する。主軸方位はN-19°-E。長径0.44m、短径0.41m、確認面からの深さ0.34m。断面はU字形状を呈する。埋

主はローハム粒を微量含む暗褐色土。

P7(北西側から2番目)平面形態は東西に長い楕円形状を呈する。主軸方位はN-59°-W。長径0.24m、短径0.20m、確認面からの深さ0.13m。断面は半円形状を呈する。埋土はローム粒を微量含む暗褐色土。

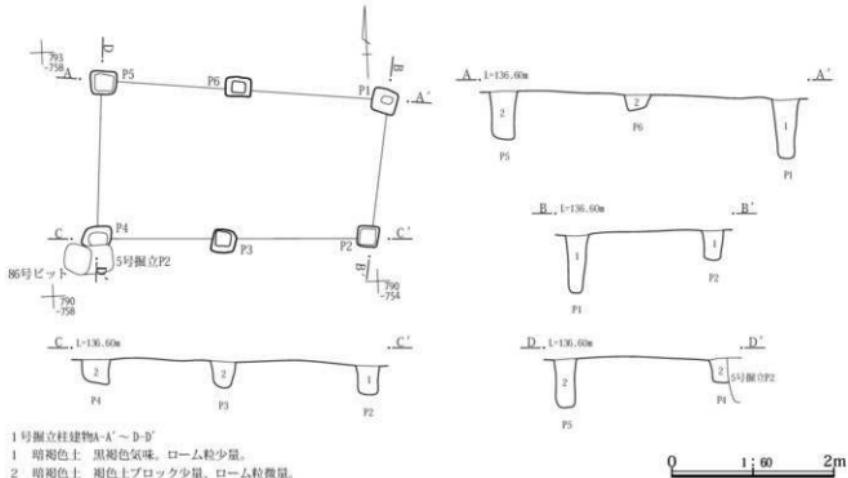
P8(北辺中央)平面形態はほぼ円形状を呈する。主軸方位はN-0°。長径0.24m、短径0.23m、確認面からの深度0.15m。断面は半円形状を呈する。埋土はローム粒を微量含む暗褐色土。

P9(北辺東から2番目)平面形態は東西に僅かに長い楕円形状を呈する。主軸方位はN-59°-E。長径0.36m、短径0.32m、確認面からの深さ0.20m。断面は長方形状を呈する。埋土はローム粒を微量含む暗褐色土。

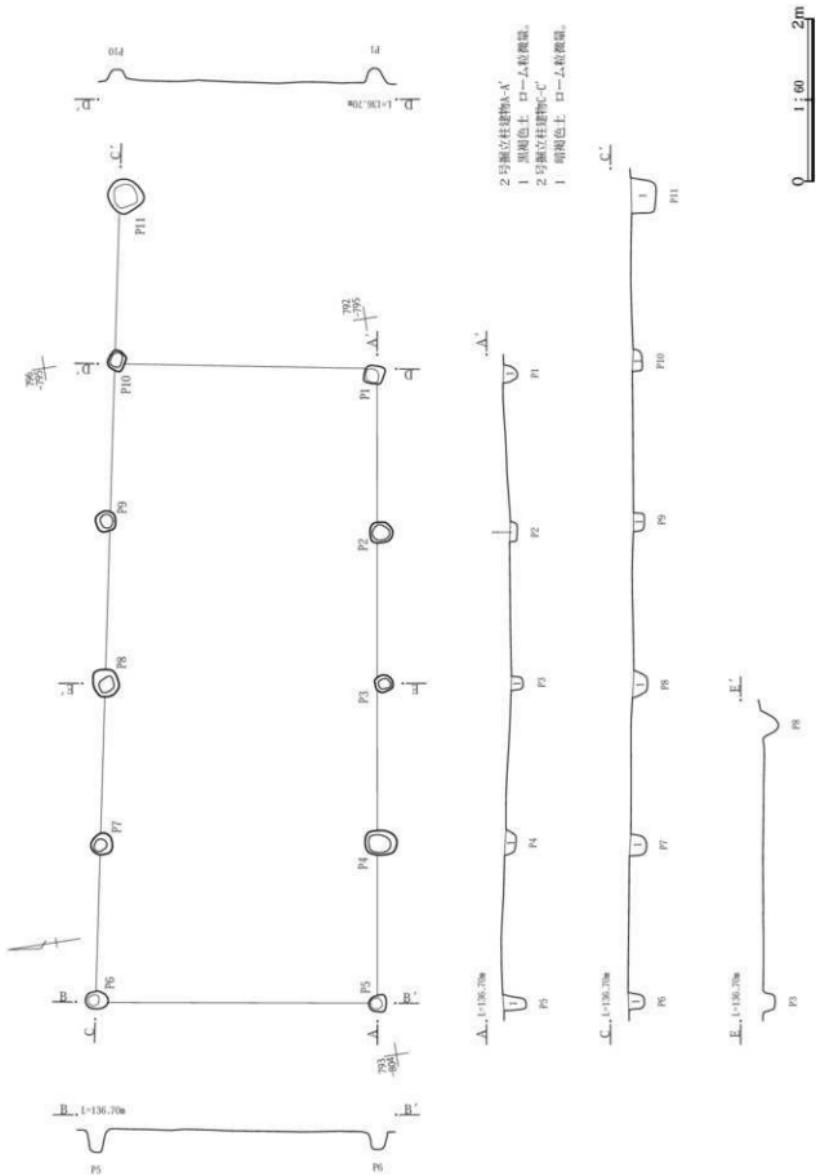
P10(東側)平面形態は東西に長い楕円形状を呈する。主軸方位はN-27°-W。長径0.28m、短径0.25m、確認面からの深さ0.24m。断面は半円形状を呈する。埋土はローム粒を微量含む暗褐色土。

P11(北辺北東張り出し)平面形態は南北に長い楕円形状を呈する。主軸方位はN-9°-E。長径0.27m、短径0.20m、確認面からの深さ0.23m。断面は長方形状を呈する。埋土はローム粒を微量含む暗褐色土。

所見 調査区北西寄りから検出された2・3号の2棟の



第7図 1号掘立柱建物



第8図 2号掘立柱建物

掘立柱建物の内の1棟で、本遺跡から検出された掘立柱建物の中で最大規模であるが、梁間は1間のみであり、柱穴の掘方も小規模で、構造も簡素であり、然程に重要性が高い建造物であったとは思えない。なお、ほぼ同位置にある3号掘立柱建物とは主軸方位や規模が異なっており、相関性は考えにくい。

北側に位置する1号櫛とも主軸方位が異なるので、本掘立柱建物に付随する施設とは見做しがたい。

本遺跡から検出された他の掘立柱建物と同様、作業小屋、農機具・収穫物等の一時保管施設ないしは某かの仮設建物であった可能性が高いものと考えられる。

遺物 なし。

時期 中・近世。

(3) 3号掘立柱建物(第9図、PL. 4・5)

位置 調査区の北西寄り。1号櫛、51号土坑の南側に隣接・近接する。X=42792~796、Y=-76795~800。

重複 2号掘立柱建物、53~55・58号ピットが建物内にかかるが新旧関係は不明である。

主軸方向 N-90°。

検出面積 14.076m²。

規模 2×2間、但し、南辺中央柱穴は検出されなかつた。長軸4.48m、短軸3.20m。

桁行 P3-4間4.45m、P6-7間2.24m、P7-1間2.24m、P5-8間2.22m、P8-2間2.26m。

梁間 P1-2間1.30m、P2-3間1.85m、P4-5間1.80m、P5-6間1.40m、P7-8間1.34m。

形状 東西に長い長方形状を呈する総柱建物。中央部から床東が検出された。梁間の長さは北側で概ね1.35m前後、南側では1.83m前後で、北側の梁間の方が短い構造になっている。但し、北側梁間と南側梁間の差は概ね0.5m前後であり、建物の北側部分を廂と解釈することは難しい。桁行の長さは中間部の柱穴が検出されなかつた南辺以外では概ね2.24m前後と比較的均等である。

柱穴 8基が検出された。いずれも小規模で、平面形態は概ね梢円形状ないし隅丸長方形状を呈し、掘方も浅い。

P1(北東隅)平面形態は南北に長い梢円形状を呈する。主軸方位はN-10°-E。長径0.46m、短径0.27m、確認面からの深さ0.18m。断面は小さな不整逆台形状を呈する。埋土は褐色土ブロックを少量、ローム粒を微量含む暗褐色土。

色土。

P2(東辺中央)平面形態は南北に長い梢円形状を呈する。主軸方位はN-13°-W。長径0.46m、短径0.29m、確認面からの深さ0.16m。断面は小さく浅く扁平な逆台形状を呈する。埋土は褐色土ブロックを少量、ローム粒を微量含む黒褐色土。

P3(南東隅)平面形態は南北に長い梢円形状を呈する。主軸方位はN-18°-W。長径0.46m、短径0.40m、確認面からの深さ0.22m。断面は小さく浅く扁平な逆台形状を呈する。埋土は褐色土ブロックを少量、ローム粒を微量、炭化物粒を微量含む暗褐色土。

P4(南西隅)平面形態は南北に長い梢円形状を呈する。主軸方位はN-4°-W。長径0.46m、短径0.35m、確認面からの深さ0.17m。断面は小さく浅く扁平な逆台形状を呈する。埋土は褐色土ブロックを少量、ローム粒を微量含む暗褐色土。

P5(西辺中央)平面形態は南北に長い梢円形状を呈する。主軸方位はN-14°-W。長径0.48m、短径0.44m、確認面からの深さ0.15m。断面は小さく浅く扁平な逆レンズ状を呈する。埋土は褐色土ブロックを少量、ローム粒を微量含む暗褐色土。

P6(北西隅)平面形態は南北に長い隅丸長方形状を呈する。主軸方位はN-0°。長径0.32m、短径0.23m、確認面からの深さ0.13m。断面は小さく浅く扁平な逆レンズ状を呈する。埋土は褐色土ブロックを少量、ローム粒を微量含む暗褐色土。

P7(北辺中央)平面形態は南北に僅かに長い梢円形状を呈する。主軸方位はN-39°-W。長径0.30m、短径0.27m、確認面からの深さ0.21m。断面は小さく逆台形状を呈する。埋土は褐色土ブロックを少量、ローム粒を微量含む暗褐色土。

P8(中央床東)平面形態は東西に僅かに長い梢円形状を呈する。主軸方位はN-81°-E。長径0.42m、短径0.39m、確認面からの深さ0.17m。断面は小さく逆台形状を呈する。埋土は褐色土ブロックを少量、ローム粒を微量含む暗褐色土。

所見 調査区北西寄りから検出された2・3号の2棟の掘立柱建物の内の1棟で、本遺跡から検出された掘立柱建物の中で唯一の総柱掘立柱建物であるが、南辺中央柱穴が検出されなかつたところに若干の疑問が残る。また、

第3章 発見された遺構と遺物

2間四方であり、全体の大きさも4.48m×3.20mと小規模で、かつ柱穴の掘方もいずれも小規模で、総柱建物とは言え、然程に頑丈なものや重要性が高い建造物とは言いかがたい。

本遺跡から検出された他の掘立柱建物と同様、仮設的な建造物ないしは農機具や農作物を一時に収納するような納屋的なものである可能性が高いと考えられる。

なお、先述したように、主軸方位を逸れて重複する2号掘立柱建物との新旧関係は不明であるが、約3m北側に位置する1号柵と主軸方位がほぼ共通していることから、1号柵が本建物の北側の障壁として造られた可能性が考えられる。ただし、本建物の規模や構造から見て、障壁を伴う程の重要性が高い建物とは考えにくい点に疑問が残る。

遺物 なし。

時期 中・近世。

(4) 4号掘立柱建物(第9図、PL. 5・6)

位置 調査区中央の南西寄り。5号掘立柱建物の北側に隣接する。33号土坑の西側に近接する。42・44・45・55・59号土坑の南側に位置する。X=42791~794、Y=-76755~758。

重複 3号掘立柱建物と重複するが、新旧関係は不明である。P3が89号ピットを掘り込む。

主軸方向 N-6°-E。

検出面積 5.448m²。

規模 1間×1間。長軸2.58m、短軸2.15m。

桁行 P1-2間2.58m、P3-4間2.54m。

梁間 P2-3間2.15m、P4-1間2.13m。

形状 南北に長い長方形を呈する。梁間の長さは概ね2.56m前後、桁行の長さは概ね2.14m前後と比較的均等である。

柱穴 4基が検出された。平面形態はいずれも小規模な隅丸長方形を呈する。掘方は概ねしっかりしているが、差が大きい。

P1(北東隅)平面形態は東西に長い隅丸長方形を呈する。主軸方位はN-88°-E。長径0.45m、短径0.37m、確認面からの深さ0.35m。断面は逆台形状を呈する。埋土は褐色土ブロックを僅量、ローム粒を微量含む暗褐色土。

P2(南東隅)平面形態は東西に僅かに長い隅丸長方形を呈する。主軸方位はN-79°-W。長径0.35m、短径0.34m、確認面からの深さ0.73m。断面は小さく深いU字形状を呈する。埋土は黒褐色気味でローム粒を少量含む暗褐色土。

P3(南西隅)平面形態は東西に僅かに長い隅丸長方形を呈する。主軸方位はN-90°。長径0.22m、短径0.20m、確認面からの深さ0.16m。断面は小さな逆台形状を呈する。埋土は褐色土ブロックを少量、ローム粒を微量含む暗褐色土。北側に位置する89号ピットを掘り込む。なお、89号ピットは位置から見て、本柱穴の旧態とは考えにくい。

P4(北西隅)平面形態は東西に長い隅丸長方形を呈する。主軸方位はN-88°-W。長径0.38m、短径0.29m、確認面からの深さ0.26m。小さいながらもしっかりとした掘方を有しており、断面は逆台形状を呈する。埋土はローム粒を少量含む暗褐色土。

所見 調査区中央の南端寄りから検出された1・4・5号の3棟の掘立柱建物の内の1棟で、本遺跡から検出された掘立柱建物の中で最小規模の、唯一の1間×1間の掘立柱建物である。また、1間四方であり、全体の大きさも2.58m×2.15mと小規模で、かつ柱穴の掘方もいずれも小規模であり、重要性が高い建造物とは言いかがたい。本遺跡から検出された他の掘立柱建物と同様、仮設的な建造物ないしは農機具や農作物を一時に収納するような納屋的なものである可能性が高いと考えられる。

なお、調査区中央の南端付近から検出された1・4・5号掘立柱建物は、3棟とも主軸方位が比較的類似しているが、本掘立柱建物の南側に重複する1号掘立柱建物の主軸方位とは若干異にしている。南側に隣接する5号掘立柱建物とは主軸方位が類似するが、3°異なるので、5号掘立柱建物との関連も、新旧関係を含めて不明である。

遺物 なし。

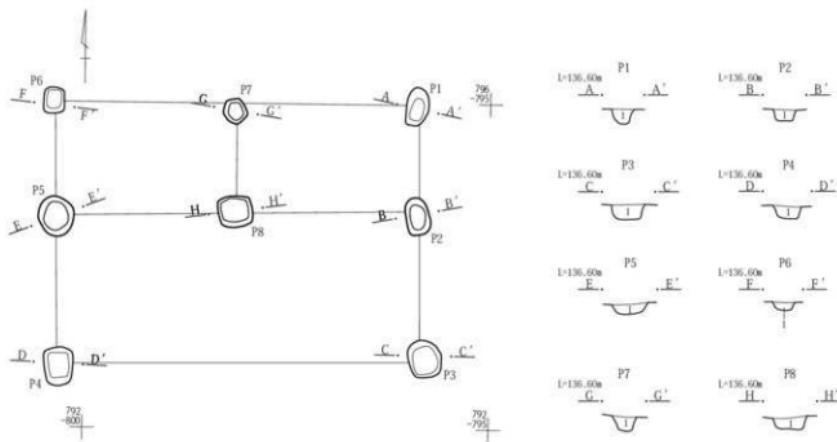
時期 中・近世。

(5) 5号掘立柱建物(第10図、PL. 6・48)

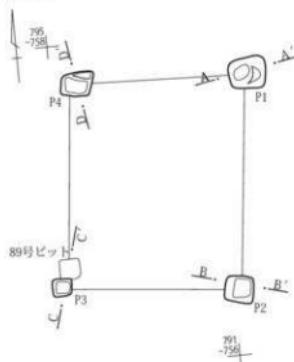
位置 調査区中央の南西寄り。4号掘立柱建物の南側に隣接する。X=42786~790、Y=-76755~760。

重複 P2が1号掘立柱建物P4と86号ピットに掘り込ま

3号掘立柱建物

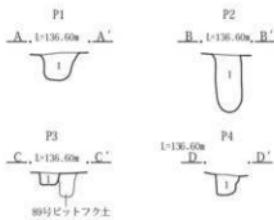


4号掘立柱建物



3号掘立柱建物P1A-A'

- 1 暗褐色土 褐色土ブロック少量、ローム粒微量。
- 3号掘立柱建物P2B-B'
- 1 暗褐色土 褐色土ブロック少量、ローム粒微量。
- 3号掘立柱建物P3C-C'
- 1 暗褐色土 褐色土ブロック少量、ローム粒微量、炭化物粒微量。
- 3号掘立柱建物P4D-B'
- 1 暗褐色土 褐色土ブロック少量、ローム粒微量。
- 3号掘立柱建物P5E-E'
- 1 暗褐色土 褐色土ブロック少量、ローム粒微量。
- 3号掘立柱建物P6F-F'
- 1 暗褐色土 褐色土ブロック少量、ローム粒微量。
- 3号掘立柱建物P7G-G'
- 1 暗褐色土 褐色土ブロック少量、ローム粒微量。
- 3号掘立柱建物P8H-H'
- 1 暗褐色土 褐色土ブロック少量、ローム粒微量。



4号掘立柱建物P1A-A'

- 4号掘立柱建物P1A-A'
- 1 暗褐色土 褐色土ブロック僅量、ローム粒微量。
- 4号掘立柱建物P2B-B'
- 1 暗褐色土 黒褐色氣味。ローム粒少量。
- 4号掘立柱建物P3C-C'
- 1 暗褐色土 褐色土ブロック少量、ローム粒微量。
- 4号掘立柱建物P4D-B'
- 1 暗褐色土 ローム粒少量。

0 1:60 2m

第9図 3・4号掘立柱建物

れる。P6が93号ピットに掘り込まれる。71号土坑、99・100・101・105・106・108号ピットと重複するが、新旧関係は不明である。なお、86号ピットは本掘立柱建物柱穴とは深さが大きく異なっており、P2の掘り直しとは考えにくい。

主軸方向 N-9°-E。

検出面積 12.432m²。

規模 現状では3間×2間の側柱掘立柱建物であるが、南側は調査区南壁外へと伸びていた可能性が考えられる。検出された範囲における長軸5.63m、短軸3.67m。

桁行 P3-4間1.94m、P1-6間2.00m、P6-5間2.13m。

梁間 P1-2間2.44m、P2-3間1.32m。

形状 南北に長い長方形を呈する。南側は調査区南壁外へと伸びていた可能性が考えられる。梁間の長さは西側と東側とで大きく異なる点にやや疑問が残る。桁行の長さは概ね2m前後と比較的均等である。

柱穴 6基が検出された。平面形態はいずれも小規模な隅丸長方形を呈する。掘方は概ねしっかりしている。

P1(北西隅) 平面形態は東西に長い不整台形状を呈する。

主軸方位はN-84°-W。長径0.45m、短径0.36m、確認面からの深さ0.34m。断面は逆台形状を呈する。埋土は褐色土ブロックを少量、ローム粒を微量含む暗褐色土。

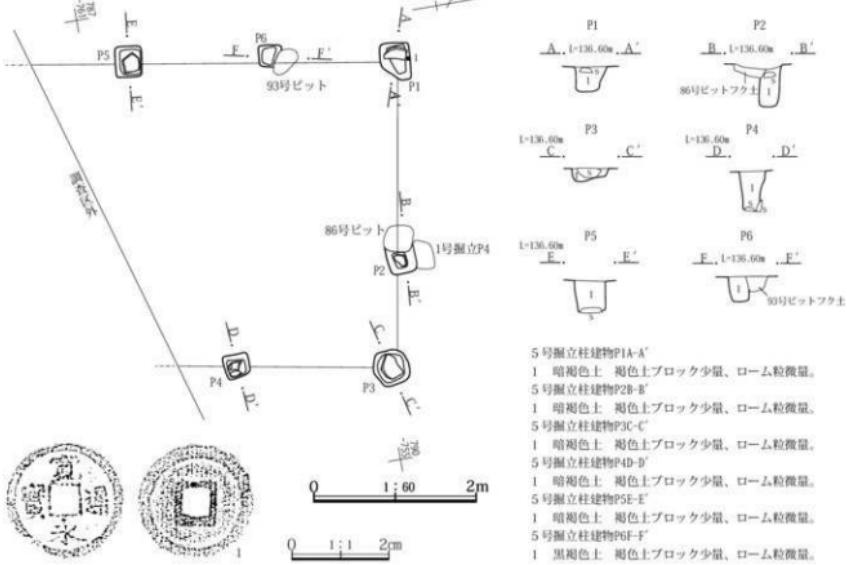
P2(北辺中央) 平面形態は東西に僅かに長い隅丸長方形を呈する。主軸方位はN-0°。長径0.33m、短径0.30m、確認面からの深さ0.54m。断面は小さいが深いU字形状を呈する。埋土は褐色土ブロックを少量、ローム粒を微量含む暗褐色土。

P3(北東隅) 平面形態は東西に長い隅丸不整長方形を呈する。主軸方位はN-19-W°。長径0.43m、短径0.42m、確認面からの深さ0.17m。断面は浅く扁平な逆台形状を呈する。断面形状は本掘立柱建物の他の柱穴と大きく異なっている。埋土は褐色土ブロックを少量、ローム粒を微量含む暗褐色土。

P4(東辺北から2番目) 平面形態はほぼ隅丸方形を呈する。主軸方位はN-3°-W。長径0.28m、短径0.27m、確認面からの深さ0.50m。小さいながらもしっかりとした掘方を有しており、断面は深い逆台形状を呈する。埋土は褐色土ブロックを少量、ローム粒を微量含む暗褐色土。

P5(北東隅) 平面形態は東西に長い不整台形状を呈する。

P6(93号ピットフク土) 平面形態は東西に長い不整台形状を呈する。



第10図 5号掘立柱建物と出土遺物

土。

P5(西辺北から3番目)平面形態は東西に長い隅丸長方形状を呈する。主軸方位はN-82°-W。長径0.39m、短径0.33m、確認面からの深さ0.46m。小さいながらもしっかりとした掘方を有しており、断面は深い長方形状を呈する。埋土は褐色土ブロックを少量、ローム粒を微量含む暗褐色土。

P6(西辺北から2番目)平面形態は東西に長い隅丸長方形状を呈する。主軸方位はN-11°-E。長径0.29m、短径0.26m、確認面からの深さ0.31m。小さいながらもややしっかりとした掘方を有しており、断面はやや深い長方形状を呈する。埋土は褐色土ブロックを少量、ローム粒を微量含む暗褐色土。

所見 調査区中央の南端寄りから検出された1・4・5号の3棟の掘立柱建物の内の1棟で、南側が調査区南壁外へと伸びる可能性があるため、全容は不明である。

本遺跡から検出された他の掘立柱建物と同様、柱穴の掘方もいずれも小規模であり、仮に、南側が調査区南壁外へと伸びるような大きさであったとしても、然程に重要性が高い建造物であったとは考えがたい。本遺跡から検出された他の掘立柱建物と同様、仮設的な建造物ないしは農機具や農作物を一時的に収納するような納屋的なものである可能性が高いと考えられる。

なお、先述したように調査区中央の南端付近から検出された4・5号掘立柱建物は、主軸方位がかなり類似しており、北側に隣接する4号掘立柱建物とは主軸方位が3°異なるだけであるが、関連性は、新旧関係を含めて不明である。

遺物 P1埋土中より完形の寛永通宝(古寛永=寛永13(1636)年創鋳、万治2(1659)年まで鋳造)が1点出土。

また、非掲載であるがP2埋土中から国産施釉陶器片1点が出土している。

時期 中・近世。

2. 櫃

櫃は、調査区北西寄りの位置から1条検出された。本遺跡から検出された唯一の櫃で、板棚のようなものと推測される。東西方向の櫃で、柱間は6間である。

1号櫃(第11図、PL. 7)

位置 調査区の北西寄り。2・3号掘立柱建物、51号土坑の北側、50号土坑の東側、67号土坑及び8号溝の南側に隣接する。X=42798~799、Y=-76793~803。

重複 なし。

主軸方向 N-87°-E。

規模 東西6間、全長9.92m。柱間はP1-2間2.09m、P2-3間1.60m、P3-4間0.64m、P4-5間1.83m、P5-6間1.84m、P6-7間1.92m。

柱穴 7基が検出された。全柱穴の埋土はローム粒を微量に含む暗褐色土。

P1(東端)平面形態は南北に僅かに長い隅丸長方形状を呈する。主軸方位はN-6°-W。長径0.27m、短径0.25m、確認面からの深さ0.15m。断面は小さく浅く扁平な逆台形状を呈する。

P2(東から2番目)平面形態は東西にやや長い楕円形を呈する。主軸方位はN-87°-W。長径0.30m、短径0.27m、確認面からの深さ0.11m。断面は薄く扁平な逆台形状を呈する。

P3(東から3番目)平面形態は北東-南西方向にやや長い隅丸長方形状を呈する。主軸方位はN-64°-E。長径0.20m、短径0.17m、確認面からの深さ0.10m。本櫃を構成する柱穴の中で最も小規模である。断面は小規模な半円形を呈する。

P4(東から4番目)平面形態は北西-南東方向に長い楕円形を呈する。主軸方位はN-26°-W。長径0.40m、短径0.26m、確認面からの深さ0.23m。断面は半円形を呈し、ややしっかりとした掘方を有する。

P5(西から3番目)平面形態は北西-南東方向に長い隅丸長方形状を呈する。主軸方位はN-27°-E。長径0.28m、短径0.26m、確認面からの深さ0.10m。断面は薄く扁平な長方形状を呈する。

P6(西から2番目)平面形態は北西-南東方向に僅かに長い不整隅丸形を呈する。主軸方位はN-36°-E。長径0.41m、短径0.38m、確認面からの深さ0.30m。断面は不整逆台形状を呈し、ややしっかりとした掘方を有する。

P7(西端)平面形態はほぼ円形を呈する。主軸方位はN-0°。長径0.38m、短径0.37m、確認面からの深さ0.12m。断面は浅く扁平な逆台形状を呈する。

遺物 なし。

所見 2・3号掘立柱建物の北側に位置するが、先述したように3号掘立柱建物と主軸方向はほぼ一致するものの、3号掘立柱建物の障壁として北側に設けられた1本塀としては、3号掘立柱建物が障壁を有するには余りにも貧弱な建物と思われる。2・3号掘立柱建物との関連は不明と言わざるを得ず、何を何から遮蔽しようとしたか、建造の意図は明確にしがたい。

各柱穴は小規模で、掘方も概ね浅いものが多い。P3とP4との間のみが異様に狭く、P2からP4までの距離が約2.10mとP1-2間の距離に類似する。また、他の柱穴間の距離から見ても、P2-3間の距離はいささか不自然に短くなっている。P3は、他の柱穴に比べて小規模に過ぎ、違和感を覚える。軸線上に載ってはいるものの、本塀を構成する柱穴でないか、あるいはP4との間でどちらかが掘り直されたものである可能性が高い。

柱穴の規模は小さいので、仮設なものである可能性が高いと考えられる。

時期 中・近世のものと考えられる。

3. 溝

本遺跡では中・近世の溝が14条検出された。古墳時代～古代及び縄文時代の溝は検出されていないので、本遺跡から検出された溝は全て中・近世のものと言うことになる。

調査区北西端付近から8号溝が検出された他は、中央から東寄りの位置から検出されている。

うち、4・6・7・9・10・11・12・13の各溝は、溝と言うよりも、所謂「芋穴」と称される長大な土坑と見た

方が良いと思われるが発掘調査時に溝として遺構名称を付しているので、溝として取り扱った。

南端が調査区南壁外へと伸びているため、全容が不明な5号溝も、規模や形状から見て、これらと同種の遺構である可能性がある。南北方向の4・5号溝、東西方向の6・7・9・10・11・12・13号溝それぞれ主軸方位は類似している。

調査区の中央からやや南西寄りの位置から検出された13号溝などは、調査区の東寄りから検出された3～13・26・27・39号土坑、調査区の中央部から検出された28・29・42・47・64・71号土坑、調査区の西寄りから検出された49～51号土坑に長さが類似しており、遺構の性格としてはそれらの土坑と同種のものと見るべきであろう。

(1) 1号溝(第12図、PL. 8)

位置 調査区東端の中央、調査区東壁に懸かる。1号土坑の北側に位置する。X=42803～806、Y=-76707～-716。

重複 北西端部を1号井戸に掘り込まれる。3号溝の東端を掘り込む。

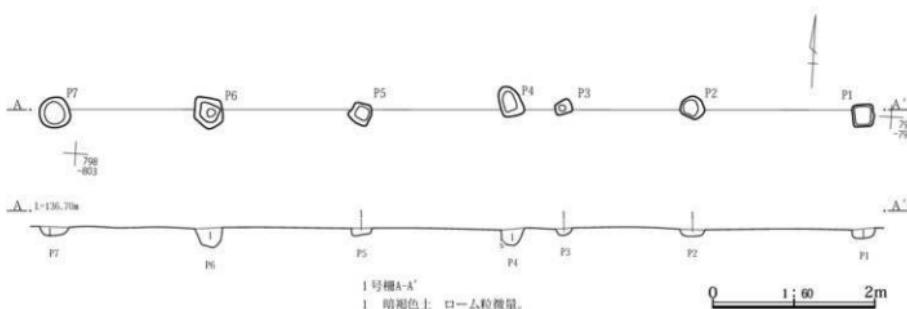
主軸方向 N-82° -W。

規模 検出全長8.50m、上幅0.61～1.63m、下幅0.15～0.70m、深さ0.16～0.45m。

埋土 記録なし。

遺物 なし。

所見 調査区の東端付近を西北西-東南東方向に走向する。東端は調査区東壁外へと延びており、西端はX=42805.2・Y=-46716付近で止まり、それ以西からは検出されなかった。



第11図 1号溝

溝東端の溝底の標高は136.01m、溝西端の溝底の標高は136.33m前後で、西から東へと傾斜しており、差は0.32mである。中央付近が一段深く掘り込まれている。しっかりととした掘方を有し、断面は口がやや大きく開いた逆台形状を呈する。

水流の痕跡は確認することが出来ず、土地利用の区画を明示するための溝であった可能性が高いと考えられる。

時期 中・近世のものと考えられる。

(2) 3号溝(2号溝を含む)(第13図、PL. 8)

位置 調査区の東寄り中央。11号溝、5・6号土坑の北側、10・14・15・17・21号土坑の南側、22号土坑の東側に隣接する。X=42805~810、Y=-76716~742。2号溝は3号溝の東端付近に一段深く掘り込まれた部分で、3号溝と一体のもので別個の溝ではない。なお、2号溝の位置はX=42806~807、Y=-76717~720。

重複 東端を1号溝に掘り込まれる。1・2号井戸に掘り込まれる。

主軸方向 N-81°-W。(2号溝もN-81°-W)。

規模 検出全長26.00m、上幅1.45~2.47m、下幅0.36~0.75m、深さ0.21~1.06m。2号溝は全長3.55m、上幅0.72~1.33m、下幅0.34~0.42m、深さ0.54m。

埋土 壁際にロームが堆積し、主体となるのはローム粒子を微量含む暗褐色土。

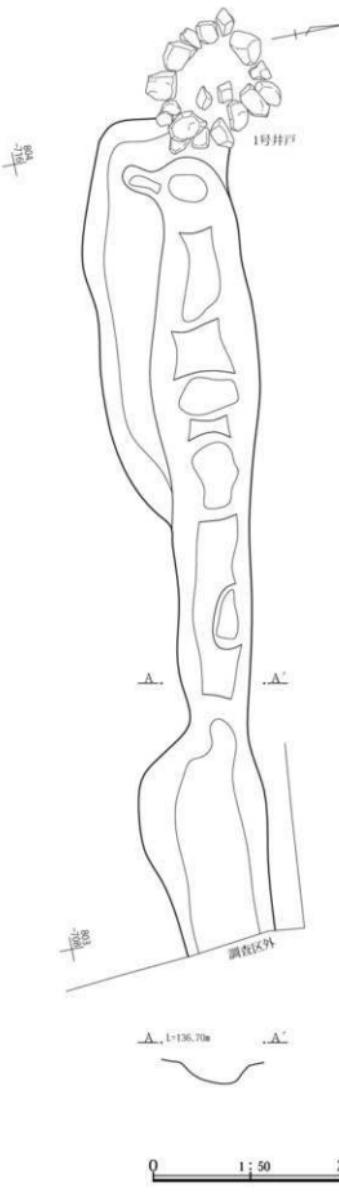
遺物 埋土中より18世紀末~20世紀前葉頃の肥前磁器染付広東碗蓋口縁部1/2欠片(1)が出土。

また、非掲載であるが、埋土中より古代の土師器片1点、近世の国産磁器片2点及び国産施釉陶器片1点、時期不明の土器・瓦類9点が出土している。

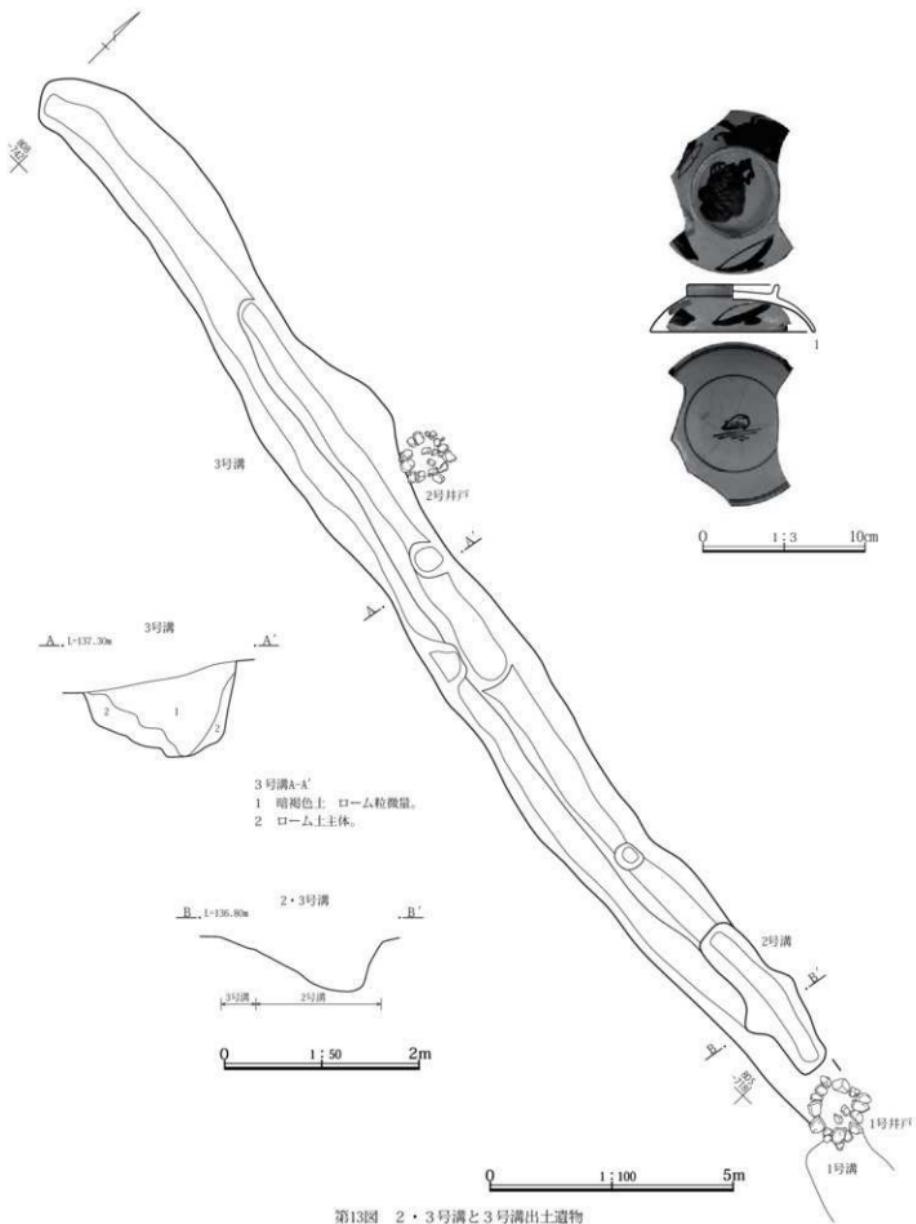
所見 調査区の東端寄りから調査区中央東寄りの位置を西北西~東南東方向に走向し、X=42809.4・Y=-76742.6付近で止まる。本遺跡にて検出された最大規模の溝である。

溝底が部分的に更に深く掘り込まれており、3号溝の溝底の標高は西端で136.64m、東端で136.36m、西から東へと傾斜しており、比高差は0.28mである。断面は深く大きい逆台形状を呈する。

なお、2号溝の溝底の標高は西端で136.13m、中部で136.07m、東端で136.18mと中央がやや深くなっているが、概ね平坦である。断面は逆台形状を呈する。



第12図 1号溝



第13図 2・3号溝と3号溝出土遺物

1号溝同様、土層断面の状況から、水流の痕跡は確認することが出来ず、土地利用の区画を明示するための溝であった可能性が高いと考えられる。

時期 中・近世のものと考えられる。

(3) 4号溝(第14図、PL. 8)

位置 調査区の中央よりやや東寄りの北端。21号土坑の直ぐ北側に近接する。 $X=42812\sim817$ 、 $Y=-76742\sim744$ 。

重複 なし。

主軸方向 $N-11^{\circ}-E$ 。

規模 全長4.88m、上幅0.18~0.31m、下幅0.05~0.18m、深さ0.04~0.14m。

埋土 ローム粒子を微量含む暗褐色砂質土。

遺物 なし。

所見 調査区中央から東寄りの北端付近を北北東-南南西方向に走向する。溝底の標高は概ね133.33m前後で、溝底はほぼ平坦で、傾斜はない。

1~3号溝と同様、土層断面の状況から、水流の痕跡は確認することが出来ない。

本溝及び6・7・9・10・11・12・13の各溝は、溝と言うよりも、所謂「芋穴」と称される長大な土坑と見た方が良いと思われる。南端が調査区南壁外へと伸びているため、全容が不明な5号溝も、規模や形状から見て、これらと同種の遺構である可能性がある。

こうした所謂芋穴状の遺構の内、南北方向に長いものは本溝と、調査区南端付近から検出された5号溝のみで、本溝と主軸方位は比較的類似している。他は全て東西方向である。

時期 中・近世のものと考えられる。

(4) 5号溝(第14図、PL. 9)

位置 調査区中央から東寄りの位置の南端。25号土坑の西側、39号土坑の東側に隣接する。 $X=42791\sim800$ 、 $Y=-76739$ 。

重複 7号溝の西端を本溝の先端が掘り込む。中央部が6号溝の西端を掘り込む。

主軸方向 $N-2^{\circ}-E$ 。

規模 検出全長8.91m、上幅0.59~0.72m、下幅0.34~0.47m、深さ0.21~0.43m。

埋土 暗褐色土主体。上層ではローム粒の混入が微量、

下層ではローム粒の混入が少量。

遺物 なし。

所見 調査区の中央からやや東寄りの南端付近から検出された南北方向の溝。南端は調査区南壁外へと伸びており、北端は7号溝の西端を掘り込んで、 $X=42800.9\sim Y=-76739.5$ 付近にて止まる。断面は深い長方形を呈するが、壁面が崩落し、一部でオーバーハングしている。

溝底の標高は北端で136.30m、南端で135.90m、北から南へと傾斜しており、比高差は0.40mである。1~4号溝と同様、土層断面の状況から、水流の痕跡は確認することが出来ない。

4・6・7・9・10・11・12・13の各溝は、溝と言うよりも、所謂「芋穴」と称される長大な土坑と見た方が良いと思われる、南端が調査区南壁外へと伸びているため、全容が不明な本溝も、規模や形状から見て、これらと同種の遺構である可能性がある。こうした所謂芋穴状の遺構の内、南北方向に長いものは本溝と、調査区北端付近から検出された4号溝のみで、本溝と主軸方位は比較的類似している。他は全て東西方向である。

時期 中・近世のものと考えられる。

(5) 6号溝(第14図、PL. 9)

位置 調査区中央から東南寄りの位置。25号土坑の北側に隣接し、7号溝の南側に位置する。 $X=42795\sim796$ 、 $Y=-76729\sim739$ 。

重複 5号溝に西端を掘り込まれる。

主軸方向 $N-84^{\circ}-W$ 。

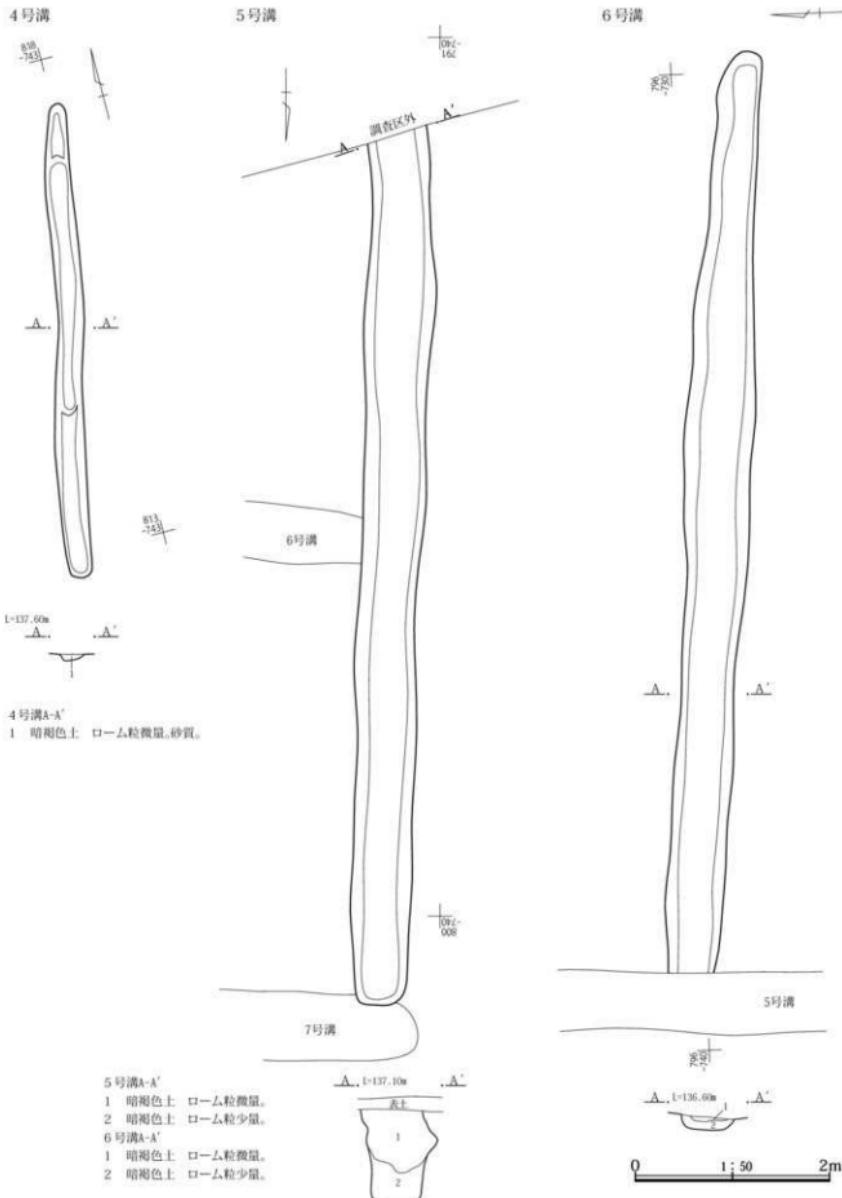
規模 検出全長9.46m、上幅0.43~0.68m、下幅0.20~0.41m、深さ0.11~0.29m。

埋土 暗褐色土主体。上層には薄くローム粒の混入が微量の土が堆積し、主体はローム粒の混入が少量の土である。

遺物 なし。

所見 調査区の南東寄りから検出された東西方向の溝。先述したように西端を5号溝に掘り込まれ、破壊されているが、全長は9.5m前後であったと推測される。東端は $X=42795.4\sim Y=-76929.6$ 付近にて止まる。断面は浅いレンズ状を呈する。

溝底の標高は概ね136.21~31mで傾斜はほぼ無いが、底面の凹凸が甚だしい。1~5号溝と同様、土層断面の



第14図 4～6号溝

状況から、水流の痕跡は確認することが出来ない。

本溝は4・5・7・9・10・11・12・13の各溝と同様、溝と言うよりも、所謂「芋穴」と称される長大な土坑と見た方が良いと思われ、こうした所謂芋穴状の遺構の内、東西方向に長いものは本溝と7・9・10・11・12・13の各溝で、主軸方位は比較的類似している。

時期 中・近世のものと考えられる。

(6) 7号溝(第15図、PL. 9)

位置 調査区中央から東南寄りの位置。6号溝の北側に位置し、9号溝、3号井戸の南側に隣接する。X=42800～801、Y=-76730～-739。

重複 5号溝に東端を掘り込まれる。

主軸方向 N-84°-W。

規模 全長9.49m、上幅0.46～0.71m、下幅0.25～0.46m、深さ0.11～0.30m。

埋土 ローム粒を少量ないし微量含む暗褐色土主体。上層には薄くレンズ状にローム粒を微量に含む褐色土が堆積している。

遺物 なし。

所見 調査区の南東寄りから検出された東西方向の溝。

先述したように西端を5号溝に掘り込まれ、破壊されているが、ごく一部であるため、全容が検出されている。

東端はX=42801、Y=-76730.2付近にて、西端はX=42801、Y=-76739.6付近で止まる。しっかりととした掘方を有しており、断面は逆台形状を呈する。

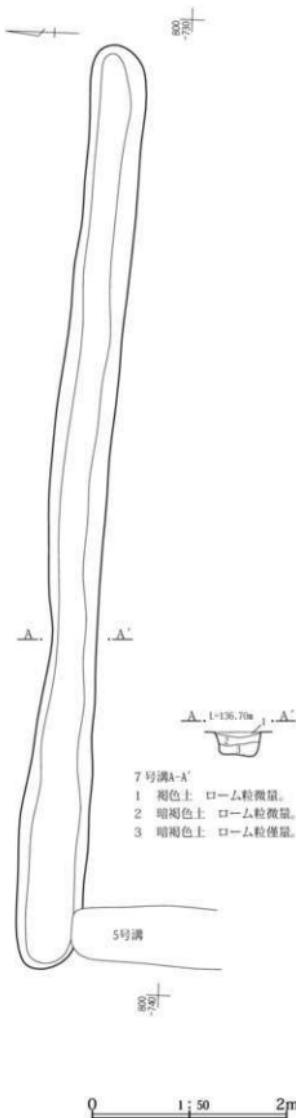
溝底の標高は西端で136.40m、東端で136.26m、西から東へと傾斜しており、比高差は0.14mである。底面は概ね平坦である。1～6号溝と同様、土層断面の状況から、水流の痕跡は確認することが出来ない。

本溝は4・5・6・9・10・11・12・13の各溝と同様、溝と言うよりも、所謂「芋穴」と称される長大な土坑と見た方が良いと思われ、こうした所謂芋穴状の遺構の内、東西方向に長いものは本溝と6・9・10・11・12・13の各溝で、主軸方位は比較的類似している。

時期 中・近世のものと考えられる。

(7) 8号溝(第16図、PL.10)

位置 調査区北西端部。1号墳の南側、1号柵の北側に隣接する。X=42798～805、Y=-76794～-809。



第15図 7号溝

第3章 発見された遺構と遺物

重複 67号土坑に東寄りの部分を掘り込まれる。1号墳周溝南東端、5号竪穴建物北西隅を掘り込む。

主軸方向 N-81° -N～N-89° -W

規模 検出全長16.84m、上幅0.25～0.48m、下幅0.13～0.26m、深さ0.03～0.16m。

埋土 ローム粒を微量含む黒色土主体。

遺物 なし。

所見 調査区の北西端部から検出された東北東～西南西方向に僅かに蛇行しながら走向する溝。東端は調査区北壁外へと伸びている。西端はX=42798.4、Y=-76809.8付近で止まる。底面の標高は136.38～44mで、比較的平坦である。断面は半円形状を呈する。1～7号溝と同様、土層断面の状況から、水流の痕跡は確認することが出来ない。

時期 中・近世のものと考えられる。

(8) 9号溝(第17図、PL.10)

位置 調査区中央から東南寄りの位置。7号溝、3号井戸の北側、10号溝の南側に隣接する。X=42802～803、Y=-76732～739。

重複 なし。

主軸方向 N-89° -W。

規模 全長6.61m、上幅0.52～0.91m、下幅0.25～0.55m、深さ0.04～0.14m。

埋土 上層にローム粒を微量含む暗褐色土、下層にロームブロックを少量含む褐色土が堆積している。

遺物 なし。

所見 調査区の南東寄りから検出された東西方向の溝。

7・10・11号溝と南北に並列している。東端はX=42803、Y=-76332.4付近、西端はX=42803、Y=-76739付近にてそれぞれ止まる。断面は浅く扁平なレンズ状を呈する。

溝底の標高は西端で136.40～46mとほぼ傾斜ではなく、底面は概ね平坦である。1～8号溝と同様、土層断面の状況から、水流の痕跡は確認することが出来ない。

本溝は4・5・6・7・10・11・12・13の各溝と同様、溝と言うよりも、所謂「芋穴」と称される長大な土坑と見た方が良いと思われ、こうした所謂芋穴状の遺構の内、東西方向に長いものは本溝と6・7・10・11・12・13の各溝で、主軸方位は比較的類似している。

時期 中・近世のものと考えられる。

(9) 10号溝(第17図、PL.10・11)

位置 調査区中央から東寄りの位置。9号溝、3号井戸の北側、11号溝の南側に隣接する。X=42803～804、Y=-76731～739。

重複 なし。

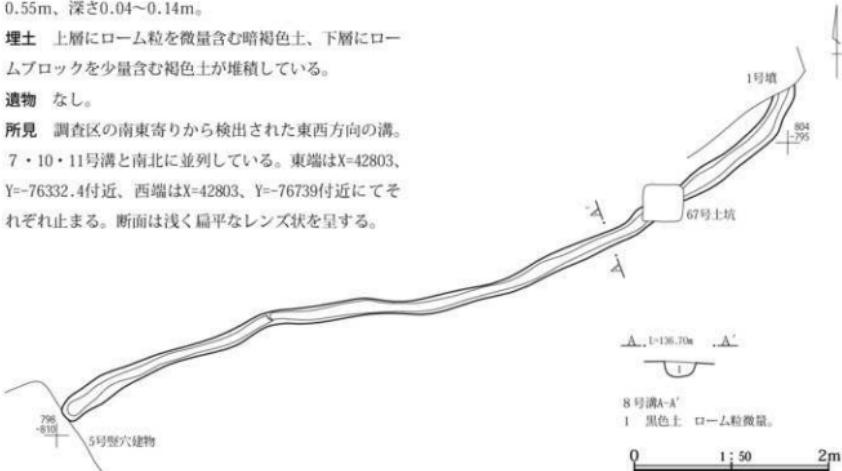
主軸方向 N-89° -E。

規模 検出全長7.87m、上幅0.53～0.82m、下幅0.33～0.47m、深さ0.18～0.24m。

埋土 上層にローム粒を微量含む暗褐色土、下層にロームブロックを少量含む暗褐色土が堆積している。

遺物 非掲載であるが、埋土中から近世の国産磁器片1点及び刻残施釉陶器片1点が出土している。

所見 調査区の東寄りから検出された東西方向の溝。7・



第16図 8号溝

9・11号溝と南北に並列している。東端はX=42804.5、Y=-76731.1付近で止まり、西側はX=42804.6、Y=-76739付近にて検出出来なくなる。断面は浅く扁平なレンズ状を呈する。

溝底の標高は136.35～40mとほぼ傾斜はなく、底面は概ね平坦である。1～9号溝と同様、土層断面の状況から、水流の痕跡は確認することが出来ない。

本溝は4・5・6・7・9・11・12・13の各溝と同様、溝と言うよりも、所謂「芋穴」と称される長大な土坑と見た方が良いと思われ、こうした所謂芋穴状の遺構の内、東西方向に長いものは本溝と6・7・9・11・12・13の各溝で、主軸方位は比較的類似している。

時期 中・近世のものと考えられる。

(10) 11号溝(第17図、PL.10・11)

位置 調査区中央から東寄りの位置。10号溝の北側、3号溝の南側に隣接する。X=42805、Y=-76733～735。

重複 なし。

主軸方向 N-87° -W。

規模 検出全長2.60m、上幅0.49m、下幅0.32m、深さ0.05m。

埋土 黒色氣味でローム粒を微量含む暗褐色土。

遺物 なし。

所見 調査区の東寄りから検出された東西方向の溝。7・9号溝と南北に並列している。東側はX=42805.5、Y=-76733付近で検出出来なくなる。西端はX=42805.5、Y=-76736付近にて止まる。断面は浅く扁平で、底部が盛り上がりの不整台形状を呈する。

溝底の標高は136.55mとほぼ傾斜はなく、底面は概ね平坦である。1～10号溝と同様、土層断面の状況から、水流の痕跡は確認することが出来ない。

本溝は4・5・6・7・9・10・12・13の各溝と同様、溝と言うよりも、所謂「芋穴」と称される長大な土坑と見た方が良いと思われ、こうした所謂芋穴状の遺構の内、東西方向に長いものは本溝と6・7・9・10・12・13の各溝で、主軸方位は比較的類似している。

時期 中・近世のものと考えられる。

(11) 12号溝(第17図、PL.11)

位置 調査区中央。70号土坑の北側、4号集石の南側に

隣接する。X=42800～801、Y=-76753～762。

重複 なし。

主軸方向 N-77° -W。

規模 全長8.37m、上幅0.76m、下幅0.51m、深さ0.10m。

埋土 褐色土を少量含む暗褐色土主体。底部中央にローム粒を僅かに含む暗褐色土が堆積している。

遺物 非掲載であるが、埋土中から近世の国産磁器片1点及び時期不明の土器・瓦類片1点が出土している。

所見 調査区中央から検出された東西方向の溝。中央から東寄りの部分でS字状に僅かに屈曲する。東側はX=42801.2、Y=-76753.5付近で、西端はX=42801.5、Y=-76762付近にて止まる。断面は浅く扁平なレンズ状を呈する。

溝底の標高は136.61～63mとほぼ傾斜はなく、底面は概ね平坦である。1～11号溝と同様、土層断面の状況から、水流の痕跡は確認することが出来ない。

本溝は4・5・6・7・9・10・11・13の各溝と同様、溝と言うよりも、所謂「芋穴」と称される長大な土坑と見た方が良いと思われ、こうした所謂芋穴状の遺構の内、東西方向に長いものは本溝と6・7・9・10・11・13の各溝で、主軸方位は比較的類似している。

時期 中・近世のものと考えられる。

(12) 13号溝(第17図、PL.11)

位置 調査区中央。61・63・64・75号土坑の南側、73号土坑の東側に隣接する。X=42795～796、Y=-76763～766。

重複 なし。

主軸方向 N-76° -W。

規模 全長2.51m、上幅0.54m、下幅0.41m、深さ0.08m。

埋土 褐色土粒を微量含む暗褐色土。

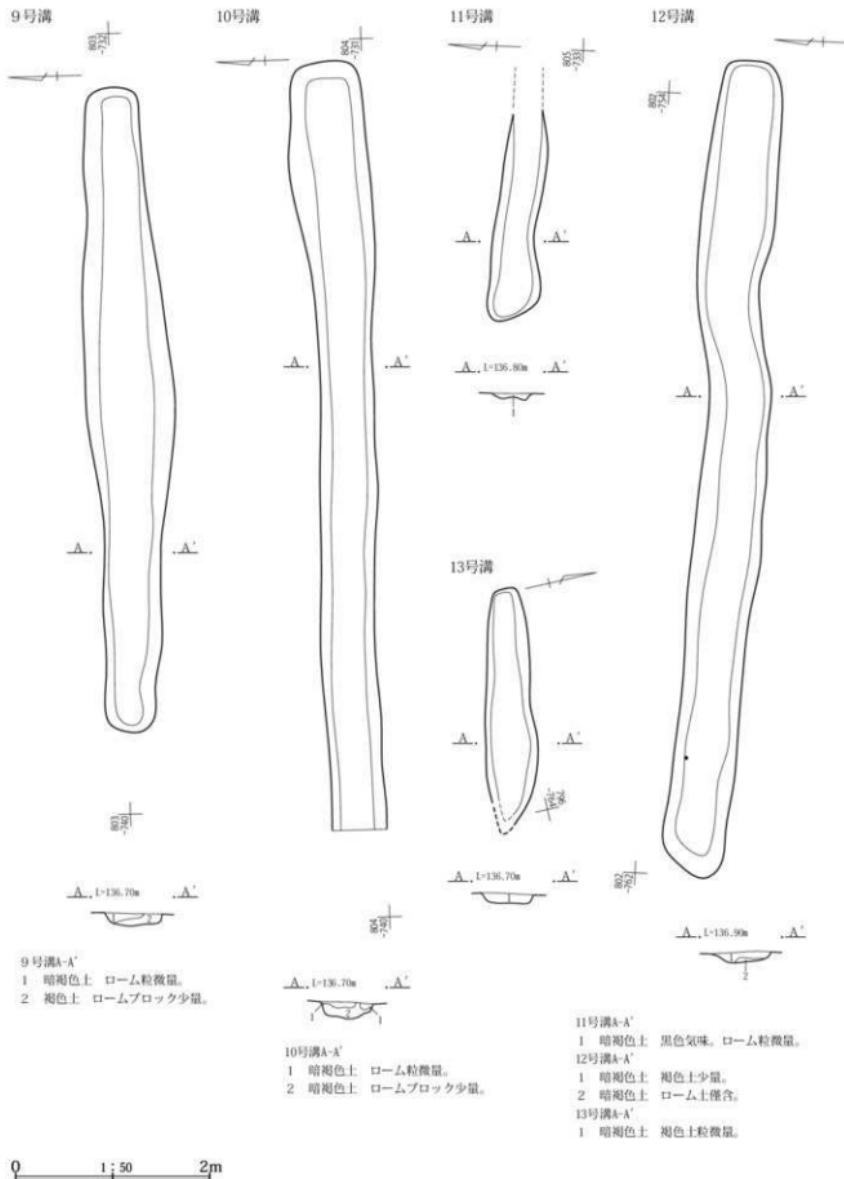
遺物 なし。

所見 調査区中央からやや南西寄りの位置から検出された西北西-東南東方向に走向する溝。東側はX=42795.6、Y=-76764付近で、西端はX=42796.3、Y=-76766.5付近にて止まる。断面は浅く扁平な隅丸逆台形状を呈する。

溝底の標高は136.55mとほぼ傾斜はなく、底面は概ね平坦である。1～12号溝と同様、土層断面の状況から、水流の痕跡は確認することが出来ない。

本溝は4・5・6・7・9・10・11・12の各溝と同様、溝と言うよりも、所謂「芋穴」と称される長大な土坑と見

第3章 発見された遺構と遺物



第17図 9～13号溝

た方が良いと思われ、その中でも小型でも短い部類のもので、規模は3~13・21・26~29・36・39・47・49・71号土坑等に比較的類似する。こうした所謂芋穴状の遺構の内、東西方向に長いものは本溝と6・7・9・10・11・12の各溝で、主軸方位は比較的類似している。

時期 中・近世のものと考えられる。

(13) 14号溝(第18図、PL.11・12)

位置 調査区中央から西寄りの位置。X=42783~803、Y=-76782~786。

重複 北端付近で78号土坑に掘り込まれる。

主軸方向 N-6°-W。

規模 推定全長20.14m、検出上幅1.50~1.93m、検出下幅0.10~0.30m、深さ0.89~1.07m。

埋土 上層にローム粒を微量含む黒褐色土、下層にAs-YP粒を少量含む褐色土。

遺物 非掲載であるが、埋土中から、時期不明の土器・瓦類片1点が出土している。

所見 調査区西寄りの位置の上面から検出された南北溝。部分的にしか検出されなかつたが、調査区を縱断し、北端・南端とも調査区外へと伸びる長大な溝であったと考えられる。なお、上面を後世に耕作に伴う客土によって、また北側では溝の東肩を、南側では溝の中央付近を水道管理設によってそれぞれ破壊されており、溝の下層と底部の一部が検出されたに過ぎない。

調査時には保渡田城の土壁に伴う堀と想定して調査が行われたが、長く土壁と考えられてきた高まりが、今回の調査によって人為的な盛土では無く、自然地形であったことが確認出来たことや、溝の確認面が浅いこと、堆積土や溝の規模・形状等の状況から、本遺跡から検出された他の溝よりもかなり新しい時期の、近世~近代頃の溝である可能性が高いものと考えられる。これらの点から、保渡田城の遺構とは無関係と考えられることが判明した。

しっかりとした掘方を有しており、断面は逆台形状を呈する。

溝底の標高は136.55mとほぼ傾斜はなく、底面は概ね平坦である。1~12号溝と同様、土層断面の状況から、水流の痕跡は確認することが出来ない。

時期 近世~近代頃のものと考えられる。

4. 井戸

本遺跡では近世の井戸が6基検出された。古墳時代~古代の井戸は検出されていないので、本遺跡から検出された井戸は全て近世のものと言うことになる。

調査区東寄りの部分から1~3号井戸、中央からやや南東寄りの位置から4~6号井戸が検出されている。調査区の西側半分のエリアからは井戸は1基も検出されていない。4号井戸以外、井戸の上部は石組みで丁寧に補強されている。

(1) 1号井戸(第19図、PL.12・48)

位置 調査区東寄りの中央。X=42805~806、Y=-76715~717。

重複 1・3号溝を掘り込む。

主軸方向 N-0°。

規模 長径1.55m、上幅1.51m、下幅0.69m、深さ2.50m。

平面形状 北西~南東方向に長い楕円形状を呈する。

断面形状 筒状を呈する。

掘方断面形状 上部約0.7mを石組みのための掘方で、約0.2~0.3m程度掘り広げられ、逆凸字状を呈する。

埋土 褐色土。

遺物 2点を陶化・掲載した。埋土中より粗粒輝石安山岩製石臼上下約1/4片各1点出土(1・2)。

また、非掲載であるが、埋土中から近世国産磁器片1点、時期不明土器・瓦類片2点が出土している。

所見 上端付近口縁部から約0.7m分、約6段に亘って石組みがなされている。周辺部の標高は136.45~58m前後。井戸周囲の標高は136.33~72m前後、口縁部縁辺の標高は136.69~83m前後。

時期 近世のものと考えられる。

(2) 2号井戸(第20図、PL.12・13・48)

位置 調査区東寄りの中央。14号土坑の南東側に隣接する。X=42808~810、Y=-76731~732。

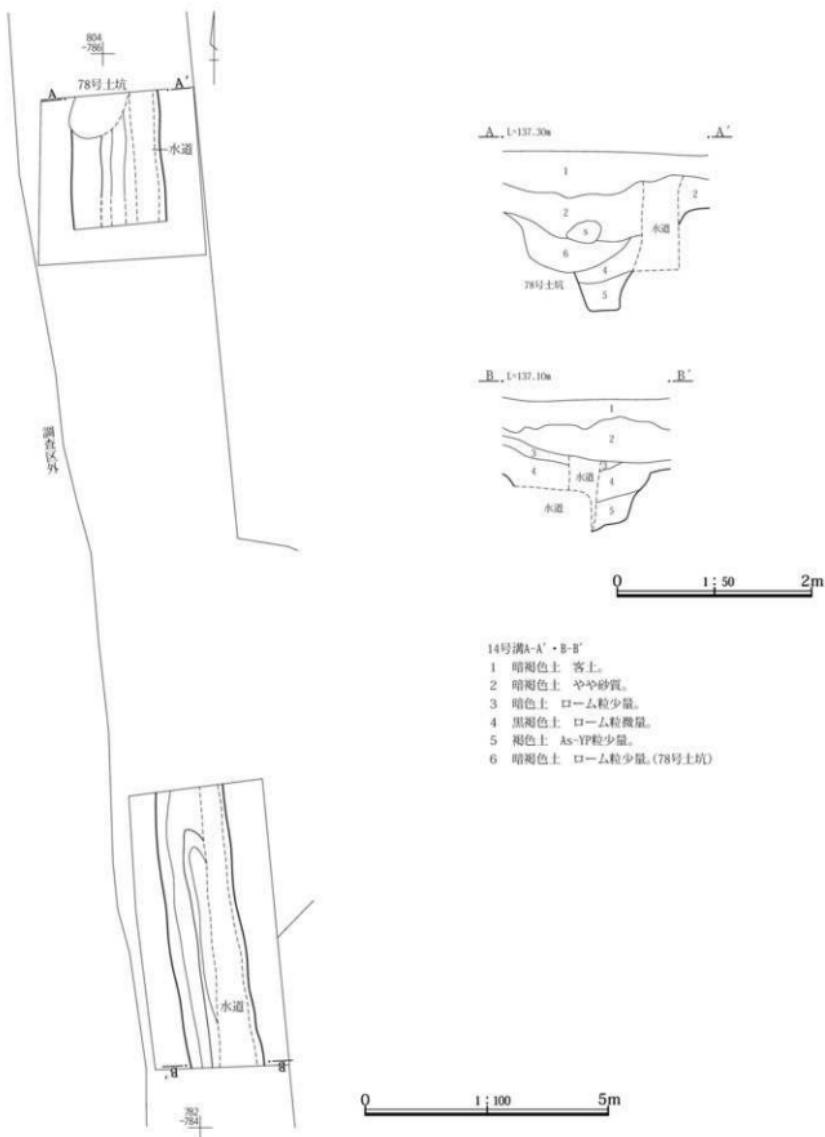
重複 3号溝を掘り込む。

主軸方向 N-21°-E。

規模 長径1.40m、上幅1.19m、下幅0.82m、深さ2.62m。

平面形状 南北に長い楕円形状を呈する。

断面形状 筒状を呈する。



第18図 14号溝

掘方断面形状 上部約1.3mを石組みのための掘方で、約0.2~0.35m程度掘り広げられ、逆凸字状を呈する。

埋土 褐色土。

遺物 8点を図化・掲載した。埋土中より19世紀前葉～中葉の肥前磁器染付碗口縁部1/4底部完存片1点(1)、近現代の製作地未詳陶器湯飲み口縁部1/2片1点(2)、近世の瀬戸・美濃産陶器擂鉢体部～底部1/3片1点(3)、近現代の在地系土器焰烙耳部片1点(4)、砥沢石製砥石片2点(5・6)、粗粒輝石安山岩製品石臼上部片1点(7)、粗粒輝石安山岩製石鉢1点(8)が出土。

また、非掲載であるが、埋土中から時期不明の土器・瓦類片5点が出土している。

所見 上端付近口縁部から約1.3m分、約9~10段に亘つ

て石組みがなされている。周辺部の標高は137.17~21m前後、口縁部縁辺の標高は136.02~10m前後。

時期 近世のものと考えられる。

(3) 3号井戸(第21図、PL.13・48)

位置 調査区の南東寄り。7号溝の直ぐ北側に近接し、9号溝の南側に隣接する。X=42801~802、Y=-76731~732。

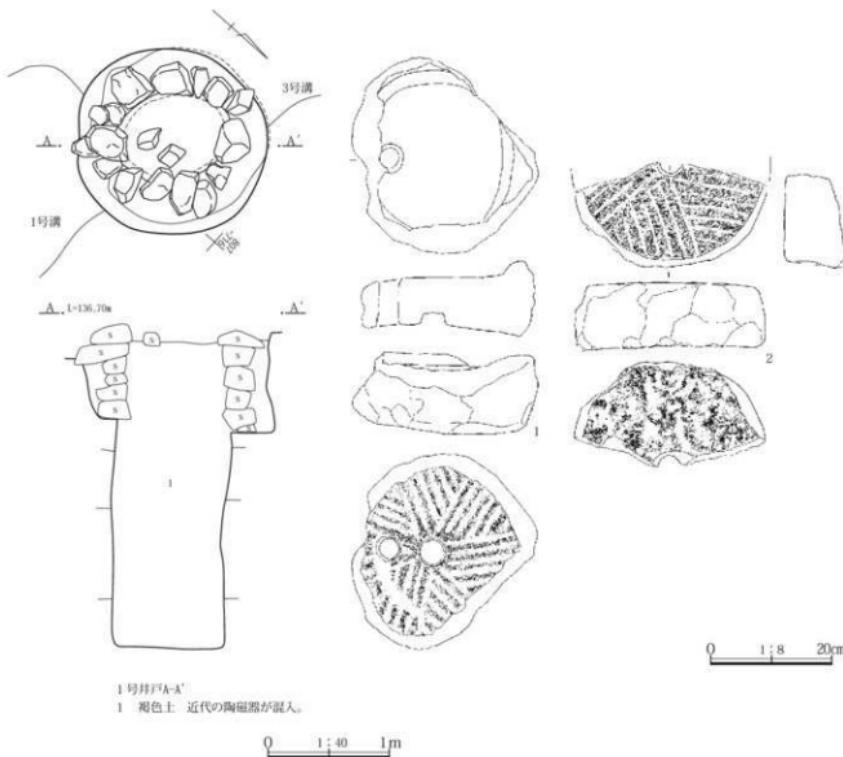
重複 なし。

主軸方向 N-39°-W。

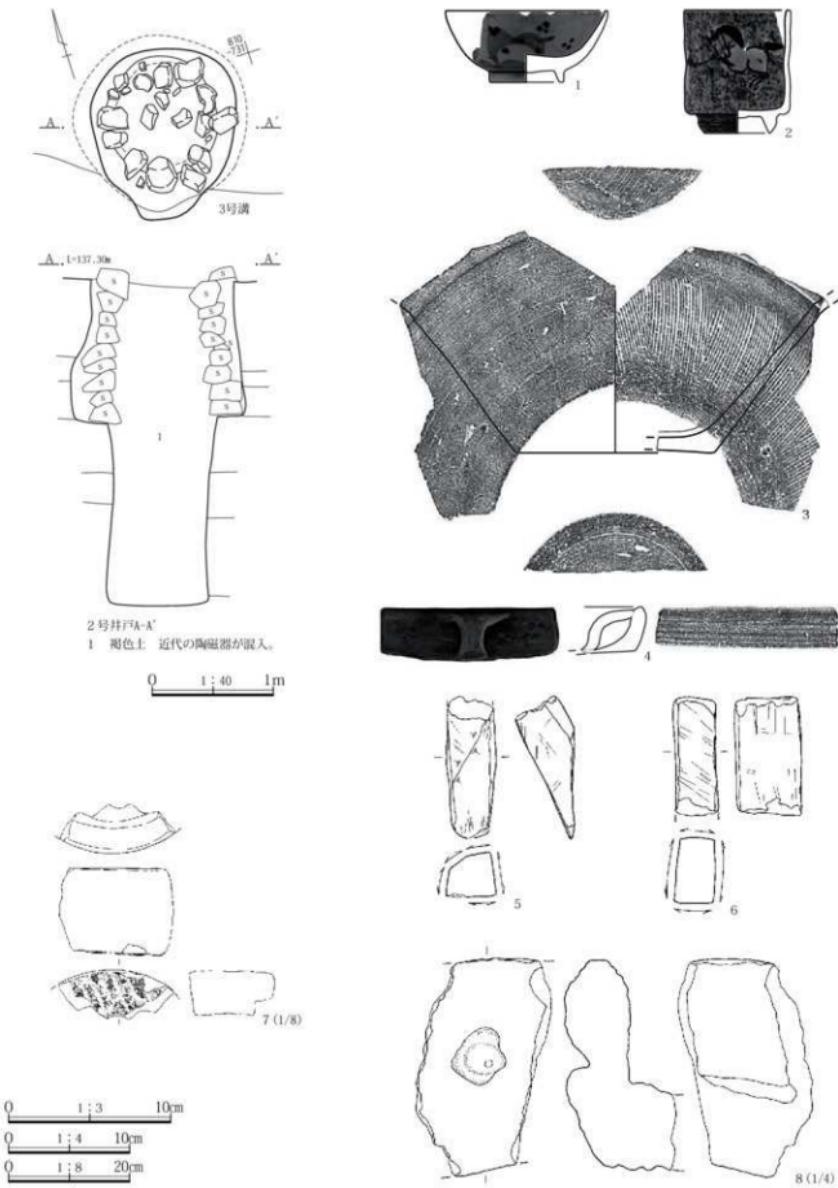
規模 長径1.56m、上幅1.39m、下幅0.70m、深さ2.68m。

平面形状 北西-南東方向に長い楕円形状を呈する。

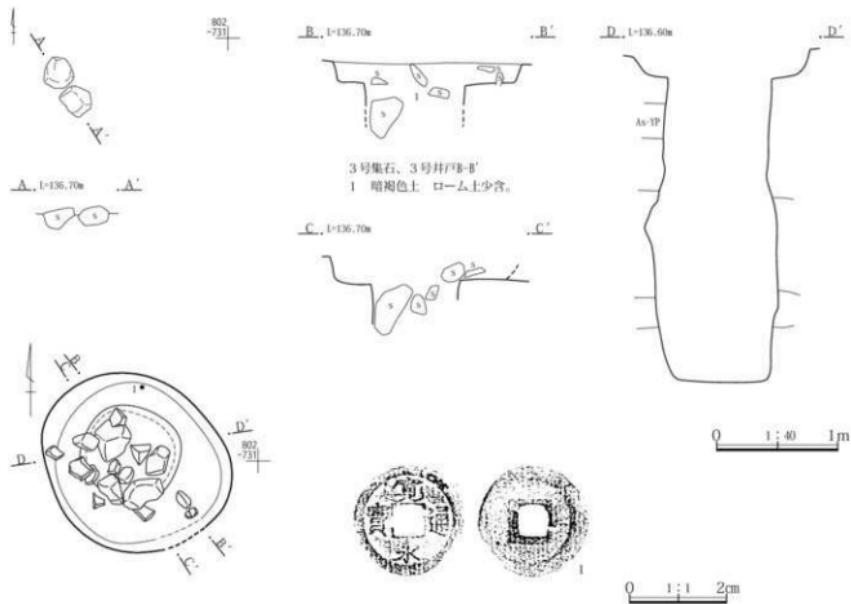
掘方断面形状 上面が大きく開いた漏斗状を呈する。



第19図 1号井戸と出土遺物



第20図 2号井戸と出土遺物



第21図 3号井戸と出土遺物

埋土 ローム土を少量含む暗褐色土。

遺物 1点を図化・掲載した。埋土中より完形であるが、全体が歪んだ寛永通宝(新寛永寛文8(1668)年以降鑄造)が出土した(1)。

なお、非掲載であるが、埋土中から古代の土師器片1点、近世の国産施釉陶器片4点が出土している。

所見 上層から自然礫が出土し、当初、集石として調査され始めたが、調査途上で井戸であったことが判明した。口縁部が石組みされた痕跡は発見されなかったが、上層から比較的の多量の自然礫が出土したので、口縁部が石組みされていた可能性も捨てきれない。壁面は崩落し、オーバーハングしている箇所も見受けられた。井戸周囲の標高は136.48~51m前後、口縁部縁辺の標高は136.28~34m前後。

時期 近世のものと考えられる。

(4) 4号井戸(第22図、PL.14・48)

位置 調査区の南東寄り。5号井戸の北側に隣接する。

X=42798~799、Y=-76749~750。

重複 なし。

主軸方向 N-48°-E。

規模 長径1.45m、上幅1.12m、下幅0.69m、深さ2.54m。

平面形状 北東-南西方向に長い梢円形状を呈する。

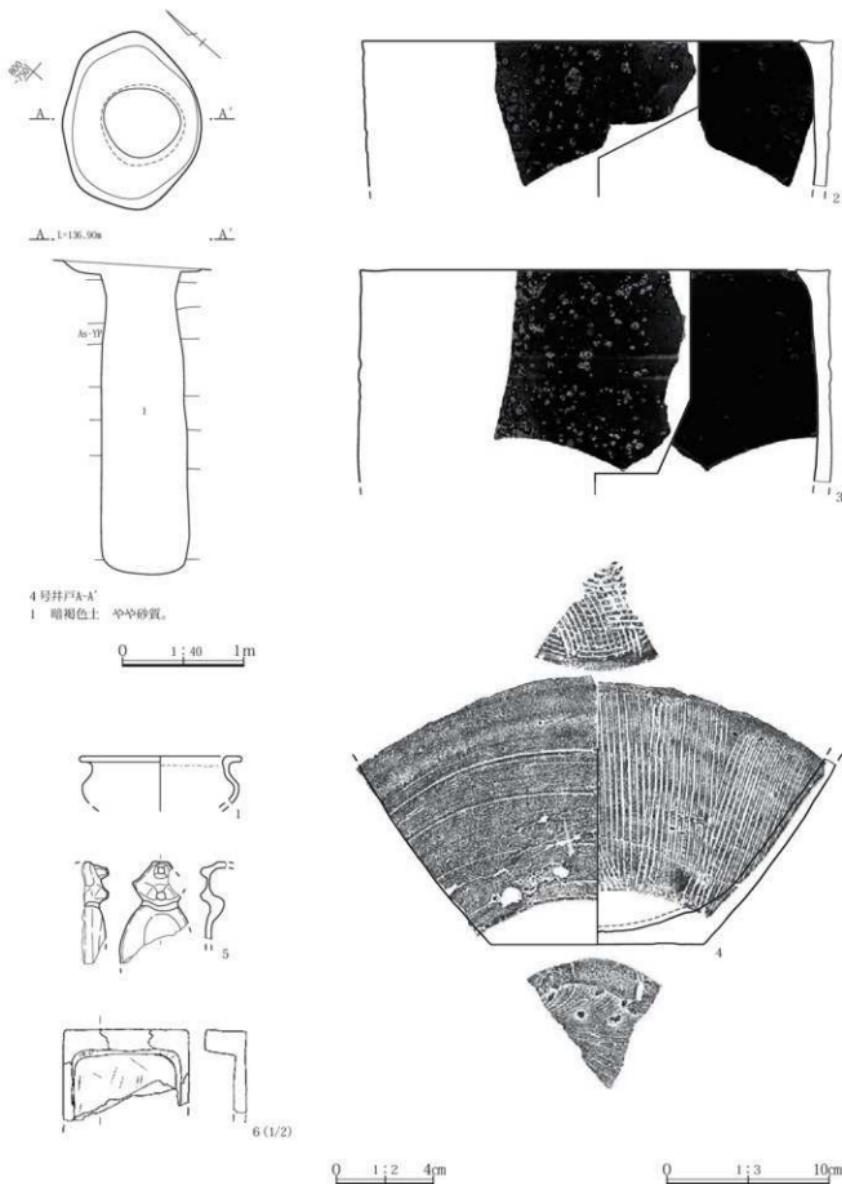
断面形状 上面が浅く大きく開いた漏斗状を呈する。掘方と本体が一致している。

埋土 やや砂質の暗褐色土。

遺物 6点を図化・掲載した。いずれも埋土中からの出土である。近世の肥前磁器青磁香炉口縁部～体部1/4片1点(1)、18世紀後葉の瀬戸・美濃陶器半銅窯口縁部1/9片2点(2・3)、近世の瀬戸・美濃陶器鉢体部～底部1/4片1点(4)、近世の搬入系土器人形1/4片1点(5)、粘板岩質頁岩製硯1/3片(6)。

また、非掲載であるが古代の須恵器片1点、近世の国産磁器片1点及び国産施釉陶器片2点が出土している。

所見 埋土中から自然礫は一切出土せず、また、上面にも石組み補強が施されていた痕跡は無い。木製の井戸枠



第22図 4号井戸と出土遺物

ないし曲物によって補強されていた可能性が考えられる。本体部分の断面は筒状を呈しており、壁面の崩落箇所は見受けられなかった。周辺部の標高は136.65~72m前後、口縁部縁辺の標高は136.62~65m前後。

時期 近世のものと考えられる

(5) 5号井戸(第23図、PL.14)

位置 調査区の南東寄り。4号井戸の南側、27号土坑の西側、6号井戸の北東側に隣接する。X=42795~797、Y=-76749~751。

重複 なし。

主軸方向 N-32°-W。

規模 長径1.69m、上幅1.61m、下幅0.81m、深さ2.50m。

平面形状 東西に長い楕円形状を呈する。

断面形状 上面が僅かに開いた筒状を呈する。

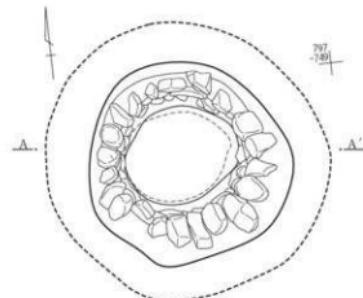
掘方断面形状 上面が大きく開いた幅広い漏斗状を呈する。本体部分よりも約0.1~0.35m幅広く掘られ、壁面の凹凸が甚だしい。

埋土 やや砂質の暗褐色土。

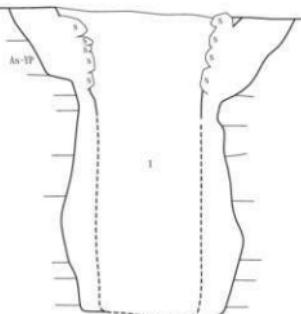
遺物 なし。

所見 口縁部から上部約0.6mを4~5段程度の石組みによって補強されているため、口縁部の掘方は朝顔状に広く開いた形となっている。本体部分の断面は筒状を呈していたものと思われるが、掘方は本体部分よりも約0.15~0.6m幅広く掘られている。周辺部の標高は135.35~60m前後、口縁部縁辺の標高は136.40~60m前

5号井戸

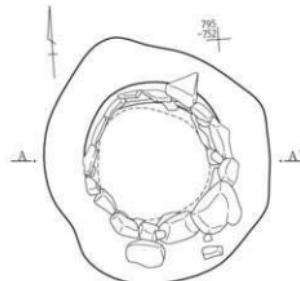


A-A', L=136.70m

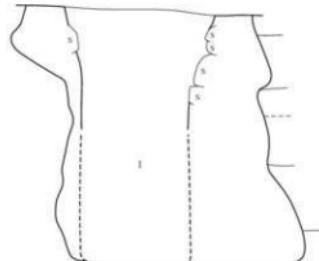


5号井戸A-A'
1 暗褐色土 やや砂質。

6号井戸



A-A', L=136.50m



6号井戸A-A'
1 暗褐色土 暗褐色土少含、ローム粒僅含。

0 1:40 1m

第23図 5・6号井戸

後。

時期 近世のものと考えられる。

(6) 6号井戸(第23図、PL.14)

位置 調査区の南東寄り。5号井戸の南西側、33号土坑の東側に隣接する。X=42793～794、Y=-76752～753、掘方X=42793～795、Y=-76751～753。

重複 なし。

主軸方向 N-0°、掘方N-17°-W。

規模 長径1.23m、掘方長径2.07m、掘方上幅1.86m、下幅0.92m、掘方下幅1.83m、深さ2.10m。

平面形状 北北西-南南東方向に長い楕円形状を呈する。

断面形状 上面が僅かに開いた筒状を呈する。

掘方断面形状 上面が大きく開いた不整漏斗状を呈する。本体部分も使用時壁よりもさらに0.12～0.8mも大きく掘削されている。

埋土 褐色土を少量、ローム粒子を僅かに含む暗褐色土。

遺物 なし。

所見 口縁部から上部約0.3～0.7mを3～4段程度の石組みによって補強されているため、口縁部の掘方は朝顔状に開いた形となっている。本体部分の断面は筒状を呈していたものと思われるが、先述のようにかなり大きく掘削されている。周辺部の標高は136.33m前後、口縁部緑辺の標高は不明。

時期 近世のものと考えられる。

5. 集石

本遺跡では近世の集石が3基検出された。古墳時代～古代、绳文時代の集石は検出されていないので、本遺跡から検出された集石は全て近世のものと言うことになる。

調査区のほぼ中央、Y=-76760ラインにほぼ沿って、約4mの範囲に北から2号集石、1号集石、4号集石の順にほぼ南北に継列して検出された。なお、3号集石は欠番である。

いずれも、規模・形状はほぼ同様で、隅丸方形ないし隅丸長方形状の掘方内に径約0.1～0.4m大的な自然礫が詰まっている。必ずしも均等かつ丁寧に敷き詰められているとは限らず、ランダムに石が詰め込まれているように見受けられる事例もあった。

最も北側に位置する2号集石とその南側に位置する1号集石との芯々間の距離は約1m、2号集石とその南側に隣接する4号集石との芯々間距離は約1.7mと、3基それぞれの芯々間距離も一定ではない。

南北に、ほぼ直線的に継列しているので、建物の礎石下に据えられた石である可能性も想定出来なくもないが、柱の基礎とすると、それぞれの距離がまちまちである点や、僅か3基しか確認出来なかったこと、並びが1条のみである点に疑問が残らないわけではない。また、墳墓の可能性も想定したが、焼土や炭化物、遺灰、遺骨の類いは全く検出されなかった。

これらの用途・機能は不明であると言わざるを得ない。

(1) 1号集石(第24図、PL.15)

位置 調査区の中央からやや北寄りの位置。2号集石の直ぐ南側に近接し、4号集石の北側に隣接する。X=42804～805、Y=-76760。

重複 なし。

主軸方向 N-3°-W。

規模 長径0.70m、上幅0.64m、下幅0.54m、掘方の深さ0.13m。

構成石数 6個

平面形状 ほぼ方形を呈する。

断面形状 薄く扁平で幅広い隅丸逆台形状を呈する。

掘方埋土 ローム土を少量含む暗褐色土。

遺物 なし。

所見 長径約0.35mの比較的大きな石塊を中心に、その周囲に幅0.14～0.25m前後の礫が敷き並べられる。北東側、北西側、南東側には大きめの礫が敷き並べられており、南西側のみ小型の礫が置かれていた。

石上面の標高は137.04～16m、周辺部の標高は137.01～06m前後。掘方底面の標高は136.90m前後。

遺構の性格は不明であるが、石塔などの基部である可能性も想定出来る。

時期 近世のものと考えられる。

(2) 2号集石(第24図、PL.15)

位置 調査区の中央からやや北寄りの位置。1号集石の直ぐ北側に近接する。X=42805～806、Y=-76760。

重複 なし。

主軸方向 N-0°。

規模 長径0.73m、上幅0.61m、下幅0.52m、掘方の深さ0.09m。

構成石数 5個

平面形状 南北に長い隅丸台形状を呈する。

断面形状 薄く扁平で幅広いレンズ状を呈する。

掘方埋土 ローム土を少量含む暗褐色土。

遺物 なし。

所見 長径約0.3m前後の比較的大きな石塊を4個、比較的均等に並列に敷並べ、南東隅部のみ長径約0.2m弱の小型の礫が置かれていた。

石正面の標高は137.11m前後。周辺部の標高は137.02~04m前後。掘方底面の標高は136.95m。

1号集石と同様、遺構の性格は不明であるが、石塔などの基部である可能性も想定出来る。

時期 近世のものと考えられる。

(3) 4号集石(第24図、PL.15)

位置 調査区のほぼ中央。1号集石の南側、12号溝の北

側に隣接する。X=42802~803、Y=-76760。

重複 なし。

主軸方向 N-5°-E。

規模 長径0.87m、上幅0.75m、下幅0.56m、掘方の深さ0.17m。

構成石数 14個

平面形状 南北に長い不整長方形状を呈する。

断面形状 ややしっかりとした掘方を有しており、薄く扁平で幅広い隅丸台形状を呈する。

掘方埋土 ローム土を少量含む暗褐色土。

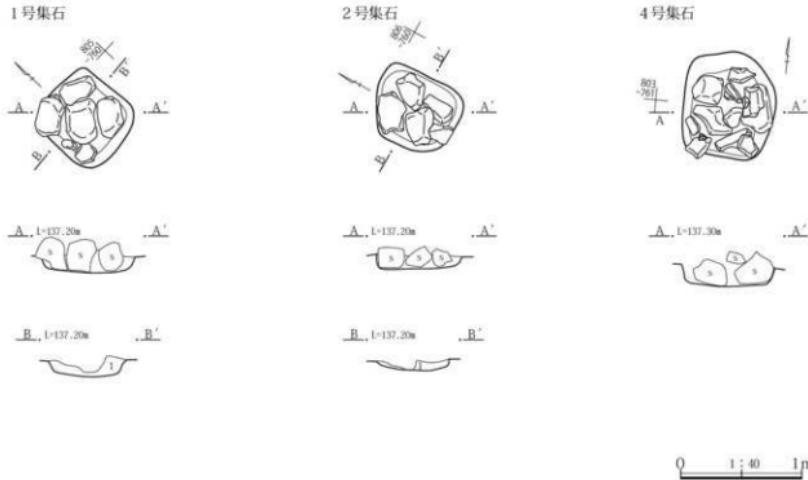
遺物 なし。

所見 長径約0.15m前後の小さな礫から長径0.4mの比較的大きな礫まで、ランダムに置かれている状態であった。

石正面の標高は137.11~19m前後。周辺部の標高は137.02~07m前後。掘方底面の標高は136.90m。

1・2号集石と同様、遺構の性格は不明であるが、石塔などの基部である可能性も想定出来る。

時期 近世のものと考えられる。



第24図 1・2・4号集石

6. 土坑

本遺跡からは78基の土坑が検出された。内、縄文時代の土坑が3基(68・76・77号土坑)あり、古墳時代～平安時代の土坑は皆無であった。よって、ここで報告する中・近世の土坑は75基である。なお、中・近世の土坑からの中・近世遺物の出土は非常に僅少であったため、遺構の年代を明確にすることは出来できなかった。

土坑は、概して調査区の中央南側から東側にかけて多く確認された。中央北寄りから東寄りにかけての自然の高まりの部分と調査区の西側にかけては余り多くは確認されなかつた。

先述したように、4～7・9～13号の各溝は、溝と言うよりも、所謂「芋穴」と称される長大な土坑を見た方が良いと思われるが、発掘調査時に溝として遺構名称を付しているので溝として取り扱った。調査区南東寄りから検出された2～8号土坑、調査区北東寄りから検出された13・21号土坑、調査区の中央から南寄りの位置から検出された26～29・39・47・55・71・72号土坑、調査区中央から北西寄りの位置からか検出された57号土坑、調査区西寄りの中央から検出された49号土坑なども、先述した4～7・9～13号の各溝には長大ではないものの、俗に「芋穴」と称されることが多い、比較的長大な溝状の土坑の類と見られよう。

本遺跡にて検出された中・近世の土坑は、概ね西北西～東南東方向に主軸を取るものが比較的多いものの、それらと恰も直交するかのような、北北東～南南西方向に主軸を取る13・19・28・48・49・57・66・73・74号土坑などのようなものもある。規則正しく計画的な配置がなされていたとは考えにくく、ランダムな分布である。また、等高線に沿って規則正しく分布しているようなものもないため、これらの土坑の中に、動物の捕獲を目的とした所謂陷阱が存在していたとは考えにくい。これら多くの用途・機能は不明と言わざるを得ない。

これら中・近世と考えられる土坑の分布の状況には、あまり特徴を見出すことが出来ない。

(1) 1号土坑(第25図、PL.16)

位置 調査区の南東隅付近。2号土坑の北側に位置する。
 $X=42801 \sim 802, Y=-76712 \sim 713$ 。

重複 5号ビットに西端を掘り込まれる。

平面形状 東西に長い楕円形状を呈する。

主軸方向 $N-87^{\circ}-W$ 。

規模 長さ1.11m、上幅0.96m、下幅0.80m、深さ0.12m。

埋土 As-YP粒を少量含む暗褐色土が堆積している。

遺物 なし。

所見 挖方は浅く、断面は浅く扁平なレンズ状を呈する。周辺部の標高は136.57～62m、底部の標高は136.50mである。

時期 中・近世

(2) 2号土坑(第25図、PL.16)

位置 調査区の南東隅付近。1号土坑の南側、1・4号ビットの西側に位置する。 $X=42799, Y=-76712 \sim 713$ 。

重複 なし。

平面形状 東西に長い隅丸長方形状を呈するものと思われる。

主軸方向 $N-86^{\circ}-E$ 。

規模 検出長1.26m、検出上幅0.70m、検出下幅0.61m、深さ0.14m。

埋土 As-YP粒を少量含む暗褐色土が堆積している。

遺物 なし。

所見 南側が調査区南壁外へ出ているので全容は不明である。比較的しっかりとした掘方を有しており、断面はやや浅く扁平な逆台形状を呈する。

周辺部の標高は136.53～61m、底部の標高は136.42～47m。

時期 中・近世

(3) 3・4号土坑(第25図、PL.16)

位置 調査区の南東。5・6号土坑の南側に隣接し、8号土坑の直ぐ東側に近接する。 $X=42801 \sim 802, Y=-76717 \sim 722$ 。

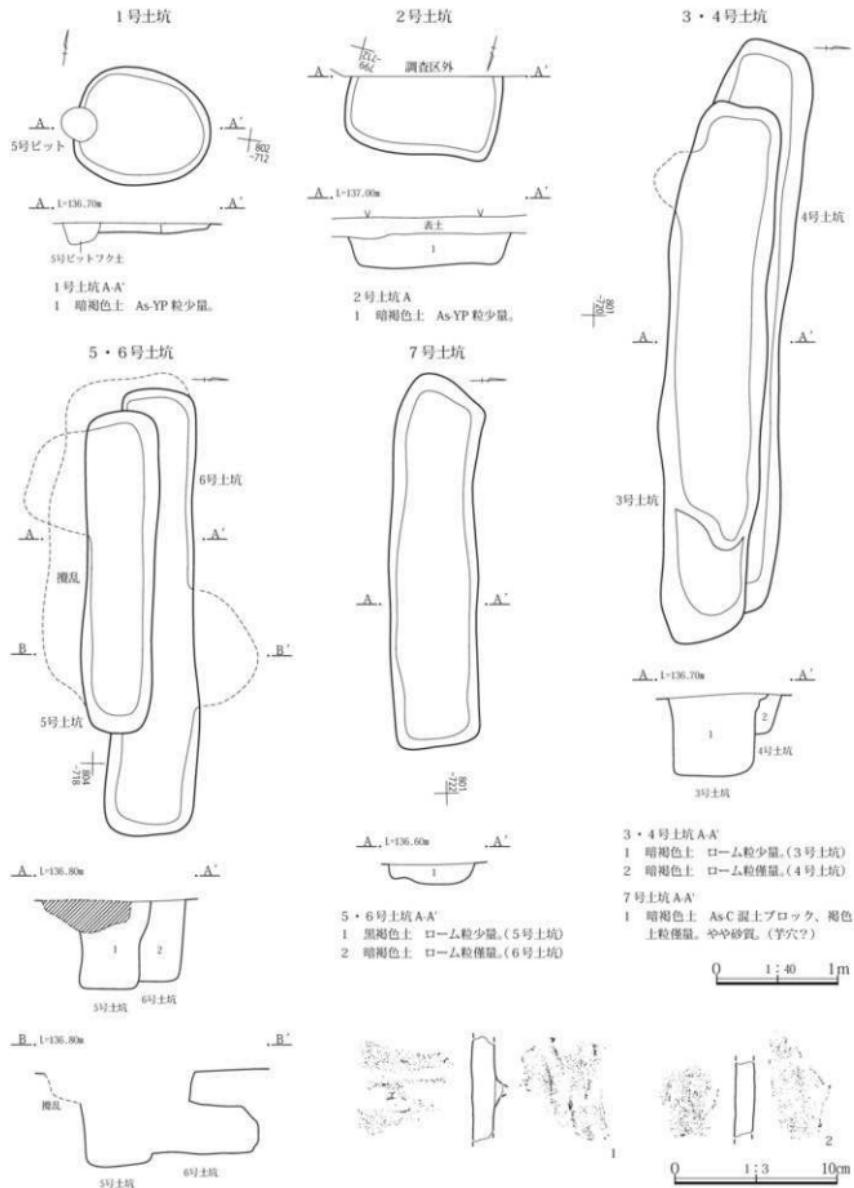
重複 3号土坑が4号土坑を南側から大きく掘り込む。

平面形状 東西に長い隅丸長方形状を呈する。

主軸方向 $N-86^{\circ}-E$ 。

規模 3号土坑：長さ4.40m、上幅0.81m、検出下幅0.58m、深さ0.64m。4号土坑：長さ4.64m、上幅0.79m、下幅0.51m、深さ0.39m。

埋土 3号土坑：ローム粒を少量含む暗褐色土。4号土



第25図 1～7号土坑と5・6号土坑出土遺物

第3章 発見された遺構と遺物

坑：ローム粒を僅かに含む暗褐色土。

遺物 なし。

所見 先述したように、調査区南東寄りから検出された2～8号土坑、調査区北東寄りから検出された13・21号土坑、調査区の中央から南寄りの位置から検出された26～29・39・47・55・71・72号土坑、調査区中央から北西寄りの位置から検出された57号土坑、調査区西寄りの中央から検出された49号土坑なども、先述した4～7・9～13号の各溝程には長大ではないものの、俗に「芋穴」と称されることが多い、比較的長大な溝状の土坑の類と見られよう。両土坑とも比較的しっかりとした掘方を有しており、3号土坑の断面はやや深い長方形状を呈し、4号土坑の断面は3号土坑の約半分程度の深さの逆台形状を呈している。

周辺部の標高は136.53～61m、3号土坑の底部の標高は135.99～136.06m、4号土坑の底部の標高は136.22m。
時期 中・近世

(4) 5・6号土坑(第25図、PL.16・48)

位置 調査区の南東。3・4号土坑の北側、1・2号溝の南側に隣接する。X=42803～804、Y=-76717～721。

重複 5号土坑が6号土坑を南側から大きく掘り込む。

平面形状 東西に長い隅丸長方形状を呈する。

主軸方向 N-90°。

規模 5号土坑：長さ2.64m、上幅0.60m、検出下幅0.43m、深さ0.76m。6号土坑：長さ3.64m、上幅0.75m、下幅0.56m、深さ0.70m。

埋土 5号土坑：ローム粒を少量含む黒褐色土。6号土坑：ローム粒を僅かに含む暗褐色土。

遺物 2点を圓化・掲載した。埋土中より出土した円筒埴輪脚部片である(1・2)。出土層位は5号土坑、6号土坑いずれの埋土に属するのか未詳であった。埴輪片は、他に1号竪穴建物から1点、遺構外から5点が出土している。土坑に伴う遺物では無く、後後に混入した遺物と考えられる。

なお、非掲載であるが、埋土中から近世の国産施釉陶器片3点及び在地系焰烙・銅片2点、時期不明の土器・瓦類片6点が出土している。

所見 上面を攤乱されている。3・4号土坑と同様、俗に「芋穴」と称されることが多い、比較的長大な溝状の土

坑の類と見られよう。両土坑とも比較的しっかりとした掘方を有しており、両土坑の断面はともにやや深い長方形状を呈している。

周辺部の標高は136.53～62m、5号土坑の底部の標高は135.79～135.89m、6号土坑の底部の標高は135.92～136.02m。

時期 中・近世

(5) 7号土坑(第25図、PL.16)

位置 調査区の南東。3号ビットの北側、9号土坑の南側に隣接する。X=42800～801、Y=-76722～725。

重複 なし。

平面形状 東西に長い隅丸長方形状を呈する。

主軸方向 N-88°～W。

規模 長さ3.04m、上幅0.74m、下幅0.59m、深さ0.18m。

埋土 As-C混土ブロックと褐色粒を僅かに含むやや砂質の暗褐色土。

遺物 非掲載であるが、埋土中から近世の在地系焰烙・銅片が1点と時期不明の土器・瓦類片1点が出土している。

所見 3～6号土坑と同様、俗に「芋穴」と称されることが多い、比較的長大な溝状の土坑の類と見られよう。断面は浅いレンズ状を呈する。

周辺部の標高は136.45～52m、底部の標高は135.34～42m。

時期 中・近世

(6) 8号土坑(第26図、PL.16)

位置 調査区の南東。4号土坑の直ぐ西側、9号土坑の直ぐ東側に近接する。X=42802～803、Y=-76722～724。

重複 なし。

平面形状 東西に長い隅丸長方形状を呈する。

主軸方向 N-89°～E。

規模 長さ2.30m、上幅0.69m、下幅0.48m、深さ0.24m。

埋土 As-C混土ブロックと褐色粒を僅かに含むやや砂質の暗褐色土。

遺物 非掲載であるが、埋土中から古代の土師器片2点、近世の国産施釉陶器片2点及び在地系焰烙・銅片1点、時期不明の土器・瓦類片1点が出土している。

所見 3～7号土坑と同様、俗に「芋穴」と称されることが多い、比較的長大な溝状の土坑の類と見られよう。断

面は浅いレンズ状を呈する。

周辺部の標高は136.53～61m、底部の標高は136.37～45m。

時期 中・近世

(7) 9号土坑(第26図、PL.16)

位置 調査区の南東。8号土坑の直ぐ南西側に近接し、7号土坑の北側に隣接する。X=42801～802、Y=-76724～725。

重複 なし。

平面形状 東西に長い隅丸長方形状を呈する。

主軸方向 N-86°-W。

規模 長さ1.53m、上幅0.86m、下幅0.65m、深さ0.12m。

埋土 ローム粒を僅かに含むやや砂質の暗褐色土。

遺物 なし。

所見 3～8号土坑に比べると長さが約半分程度であるが、俗に「芋穴」と称されることが多い長方形状の土坑の類と見られよう。断面は浅いレンズ状を呈する。

周辺部の標高は136.47～52m、底部の標高は136.39～41m。

時期 中・近世

(8) 10号土坑(第26図、PL.16・17)

位置 調査区の北東。11・18号土坑の南側に隣接する。X=42809～810、Y=-76726～727。

重複 なし。

平面形状 西北西-東南東方向に長い長円形状を呈する。

主軸方向 N-74°-W。

規模 長さ1.71m、上幅0.69m、下幅0.54m、深さ0.17m。

埋土 As-C混土ブロック及び褐色粒を僅かに含むやや砂質の暗褐色土。

遺物 なし。

所見 大きさは9号土坑に類似する、俗に「芋穴」と称されることが多い長円形ないし長方形状の土坑の類と見られよう。周辺では11・12・13号土坑と規模・形状が比較的類似している。断面は浅い逆台形状を呈する。

周辺部の標高は137.27～29m、底部の標高は137.12～15m。

時期 中・近世

(9) 11号土坑(第26図、PL.17)

位置 調査区の北東。18号土坑の直ぐ西側に近接し、10号土坑の北側に隣接する。X=42811～812、Y=-76726～728。

重複 なし。

平面形状 東西に長い隅丸長方形状を呈する。

主軸方向 N-87°-E。

規模 長さ1.84m、上幅0.74m、下幅0.57m、深さ0.28m。

埋土 As-C混土を少量含むやや砂質の暗褐色土。

遺物 非掲載であるが古代の土師器片及び須恵器片が各1点出土している。

所見 大きさは9・10号土坑に類似する、俗に「芋穴」と称されることが多い長円形ないし長方形状の土坑の類と見られよう。周辺では10・12・13号土坑と規模・形状が比較的類似している。断面は逆台形状を呈する。

周辺部の標高は137.29～33m、底部の標高は137.05～08m。

時期 中・近世

(10) 12号土坑(第26図、PL.17)

位置 調査区の北東。13号土坑の東側、19号土坑の南側に位置する。X=42813～814、Y=-76729～731。

重複 なし。

平面形状 西北西-東南東方向に長い隅丸長方形状を呈する。

主軸方向 N-74°-W。

規模 長さ1.61m、上幅0.88m、下幅0.72m、深さ0.28m。

埋土 As-C混土ブロックをごく僅かに含む暗褐色土。

遺物 非掲載であるが、埋土中から古代の土師器片及び須恵器片各2点と時期不明の土器・瓦類片1点が出土している。

所見 大きさは9～11号土坑に類似する、俗に「芋穴」と称されることが多い長円形ないし長方形状の土坑の類と見られよう。周辺では10・11・13号土坑と規模・形状が比較的類似している。断面は逆台形状を呈する。

周辺部の標高は137.37～39m、底部の標高は137.11～16m。

時期 中・近世

第3章 発見された遺構と遺物

(11) 13号土坑(第26図、PL.17)

位置 調査区の北東。15号土坑の直ぐ北側に近接し、12号土坑の西側、16・20号土坑の東側に隣接する。
 $X=42812\sim815$ 、 $Y=-76732\sim733$ 。

重複 なし。

平面形状 北北東-南南西方向に長い楕丸長方形状を呈する。

主軸方向 $N-11^{\circ}-E$ 。

規模 長さ3.02m、上幅0.77m、下幅0.57m、深さ0.17m。

埋土 やや砂質の暗褐色土。

遺物 なし。

所見 大きさは3~8号土坑に類似する、俗に「芋穴」と称されることが多い長円形ないし長大な長方形状の土坑の類と見られよう。周辺では突出して長い。断面は浅く扁平な逆台形状を呈する。

周辺部の標高は137.29~42m、底部の標高は137.25~34m。

時期 中・近世。

(12) 14号土坑(第26図、PL.17)

位置 調査区の北東。2号井戸の直ぐ北西側に近接し、15号土坑の南東側に隣接する。 $X=42812$ 、 $Y=-76732$ 。

重複 なし。

平面形状 南北に長い楕円形状を呈する。

主軸方向 $N-2^{\circ}-W$ 。

規模 長さ0.69m、上幅0.61m、下幅0.46m、深さ0.09m。

埋土 ローム粒を僅かに含む暗褐色土。

遺物 なし。

所見 断面は薄く浅いレンズ状を呈する。14~17号土坑は規模・形状が比較的類似する。

周辺部の標高は137.21~24m、底部の標高は137.15m。

時期 中・近世。

(13) 15号土坑(第26図、PL.17)

位置 調査区の北東。13号土坑の直ぐ南側に近接し、14号土坑の北西側に隣接する。 $X=42811\sim812$ 、 $Y=-76732\sim733$ 。

重複 なし。

平面形状 北西-南東方向に長い楕円形状を呈する。

主軸方向 $N-33^{\circ}-W$ 。

規模 長さ0.83m、上幅0.71m、下幅0.52m、深さ0.12m。

埋土 As-YP粒を少量含む暗褐色土。

遺物 なし。

所見 断面は浅く薄い逆台形状を呈する。14~17号土坑は規模・形状が比較的類似する。

周辺部の標高は137.26~29m、底部の標高は137.16m。

時期 中・近世。

(14) 16号土坑(第26図、PL.17)

位置 調査区の北東。13号土坑の西側、20号土坑の南側、17号土坑の北東側に隣接する。 $X=42812\sim813$ 、 $Y=-76734\sim735$ 。

重複 なし。

平面形状 東西に長い楕円形状を呈する。

主軸方向 $N-90^{\circ}$ 。

規模 長さ0.82m、上幅0.74m、下幅0.33m、深さ0.27m。

埋土 As-C混土ブロックを僅かに含む暗褐色土。

遺物 なし。

所見 断面はやや浅い逆台形状を呈する。14~17号土坑は規模・形状が比較的類似する。

周辺部の標高は137.31~37m、底部の標高は137.10m。

時期 中・近世。

(15) 17号土坑(第26図、PL.17)

位置 調査区の北東。3号溝の北側に位置し、16号土坑の南西側に隣接する。 $X=42811\sim812$ 、 $Y=-76735\sim736$ 。

重複 なし。

平面形状 北西-南東方向に長い楕円形状を呈する。

主軸方向 $N-60^{\circ}-W$ 。

規模 長さ0.87m、上幅0.70m、下幅0.48m、深さ0.33m。

埋土 暗褐色砂質土。

遺物 なし。

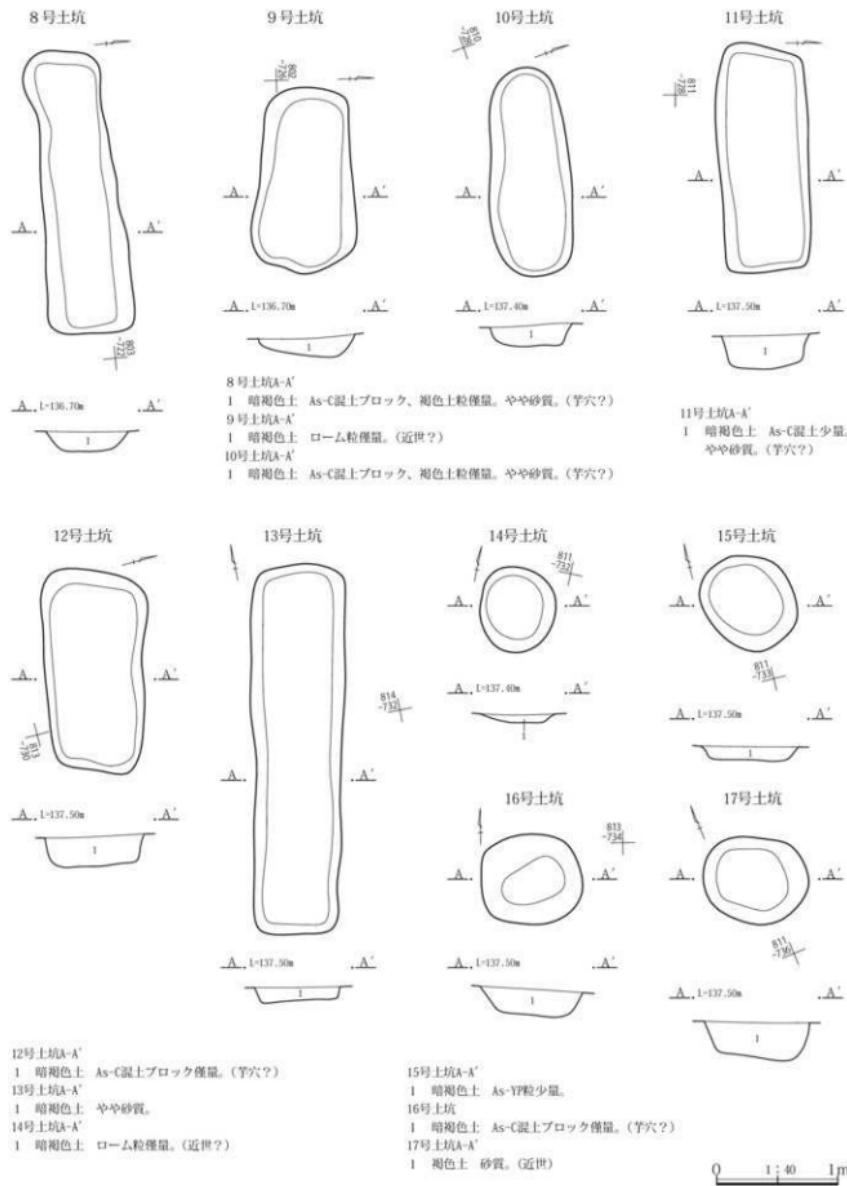
所見 断面はやや浅い逆台形状を呈する。14~17号土坑は規模・形状が比較的類似する。

周辺部の標高は137.24~35m、底部の標高は136.99m。

時期 近世。

(16) 18号土坑(第27図、PL.18)

位置 調査区の北東。11号土坑の直ぐ東側に近接し、10号土坑の北側に隣接する。 $X=42810\sim811$ 、 $Y=-76725\sim726$ 。



第26図 8~17号土坑

第3章 発見された遺構と遺物

726.

重複 なし。

平面形状 北東-南西方向に長い楕円形状を呈する。

主軸方向 N-30° -E。

規模 長さ1.22m、上幅1.00m、下幅0.88m、深さ0.17m。

埋土 褐色砂質土。

遺物 非掲載ではあるが、埋土中から古代の土師器片が1点出土している。

所見 断面は浅く扁平な逆台形状を呈する。周辺部の標高は137.29~31m、底部の標高は137.15m。

時期 近世。

(17) 19号土坑(第27図、PL.18)

位置 調査区の北東。X=42816~817、Y=-76729~730。

重複 なし。

平面形状 北東-南西方向に長い隅丸長方形状を呈する。

主軸方向 N-18° -E。

規模 長さ1.21m、上幅0.64m、下幅0.44m、深さ0.14m。

埋土 褐色砂質土。

遺物 なし。

所見 規模・形状は9~12号土坑に比較的類似している。9~13号土坑のような、俗に「芋穴」と称されることが多い長円形ないし長方形状の土坑の類と見られよう。断面は浅く扁平な逆台形状を呈する。

周辺部の標高は137.41~46m、底部の標高は137.30~36m。

時期 近世。

(18) 20号土坑(第27図、PL.18)

位置 調査区の北東。13号土坑の西側、16号土坑の北側に隣接する。X=42813~815、Y=-76734~735。

重複 なし。

平面形状 南北に長い楕円形状を呈する。

主軸方向 N-2° -W。

規模 長さ1.35m、上幅1.26m、下幅1.05m、深さ0.15m。

埋土 As-C混土を少量含む黒褐色土。

遺物 なし。

所見 断面は浅く扁平なレンズ状を呈する。

周辺部の標高は137.36~42m、底部の標高は137.27m。

時期 中・近世。

(19) 21号土坑(第27図、PL.18)

位置 調査区の北東。4号溝の直ぐ南側に近接し、3号溝、22号土坑の北側に隣接する。X=42811~812、Y=-76742~744。

重複 なし。

平面形状 東西に長い長円形状を呈する。

主軸方向 N-82° -E。

規模 長さ2.40m、上幅0.91m、下幅0.62m、深さ0.38m。

埋土 暗褐色砂質土。

遺物 なし。

所見 規模・形状は5・8~12号土坑に比較的類似しており、これらの土坑のような俗に「芋穴」と称されることが多い長円形ないし長方形状の土坑の類と見られよう。しっかりととした掘方を有しており、断面は逆台形状を呈する。

周辺部の標高は137.28~35m、底部の標高は136.99~137.00m。

時期 近世。

(20) 22号土坑(第27図、PL.18)

位置 調査区の北東。23号土坑の直ぐ東側に近接し、21号土坑の南側に隣接する。X=42808~810、Y=-76744~745。

重複 なし。

平面形状 ほぼ隅丸方形状を呈する。

主軸方向 N-6° -E。

規模 長さ1.30m、上幅1.28m、下幅1.07m、深さ0.37m。

埋土 褐色土粒を僅かに含む暗褐色土。

遺物 非掲載であるが、埋土中から時期不明の土器・瓦類片3点が出土している。

所見 断面はやや浅いレンズ状を呈する。

周辺部の標高は136.98~137.16m、底部の標高は136.79m。

時期 近世。

(21) 23号土坑(第28図、PL.18)

位置 調査区の北東。22号土坑の直ぐ西側に近接する。X=42809~810、Y=-76746~747。

重複 なし。

平面形状 ほぼ隅丸方形状を呈する。

主軸方向 N-83°-W。

規模 長さ1.07m、上幅0.99m、下幅0.67m、深さ0.28m。

埋土 暗褐色砂質土。

遺物 なし。

所見 22号土坑の直ぐ西側に近接し、22号土坑をおよそ二回り小さくしたような規模を呈する。両土坑間には密接な関連が存在していた可能性が考えられる。形状は22号土坑に類似している。断面はやや浅い逆台形状を呈する。

周辺部の標高は137.02~20m、底部の標高は136.79m。

時期 近世。

(22) 24号土坑(第28図、PL.18)

位置 調査区の中央の北寄り。X=42806~807、Y=-76752 ~753。

重複 なし。

平面形状 北西~南東方向に長い長円形を呈する。

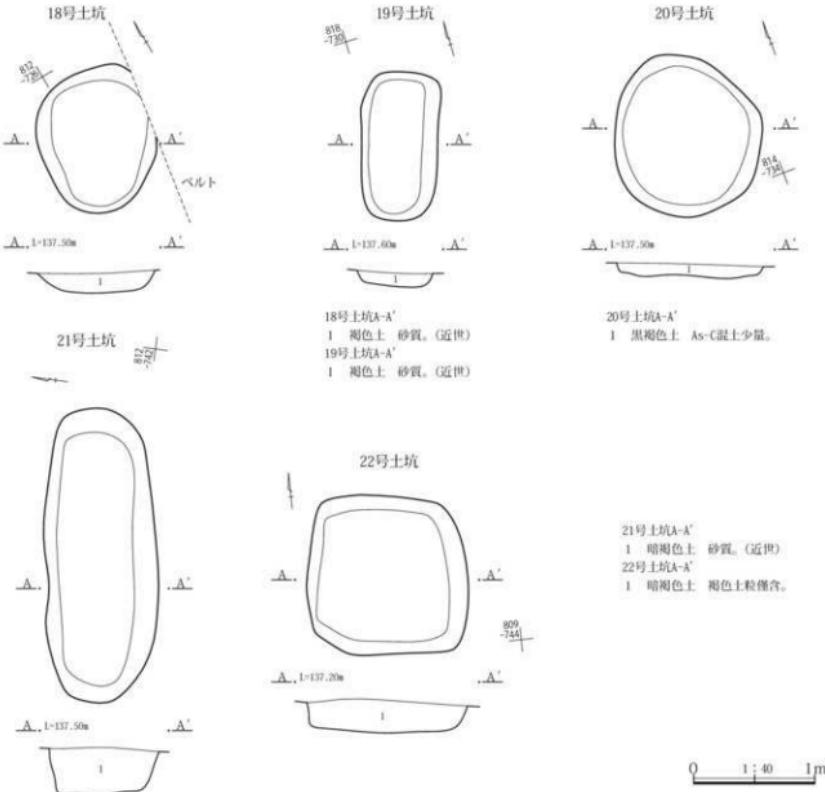
主軸方向 N-24°-W。

規模 長さ1.23m、上幅0.54m、下幅0.29m、深さ0.23m。

埋土 底部にローム粒を僅かに含む暗褐色土が堆積し、その上にAs-C混土を僅かに含む黒褐色土が堆積している。

遺物 なし。

所見 長円形を呈するが、俗に芋穴と称される形状の土坑群に比べると小規模である。断面はやや浅いレンズ



第27図 18~22号土坑

状を呈する。

周辺部の標高は137.01~10m、底部の標高は136.87m。

時期 中・近世。

(23) 25号土坑(第28図、PL.19)

位置 調査区の南東寄り。5号溝の東側、6号溝の南側に隣接する。X=42793~794、Y=-76737~738。

重複 なし。

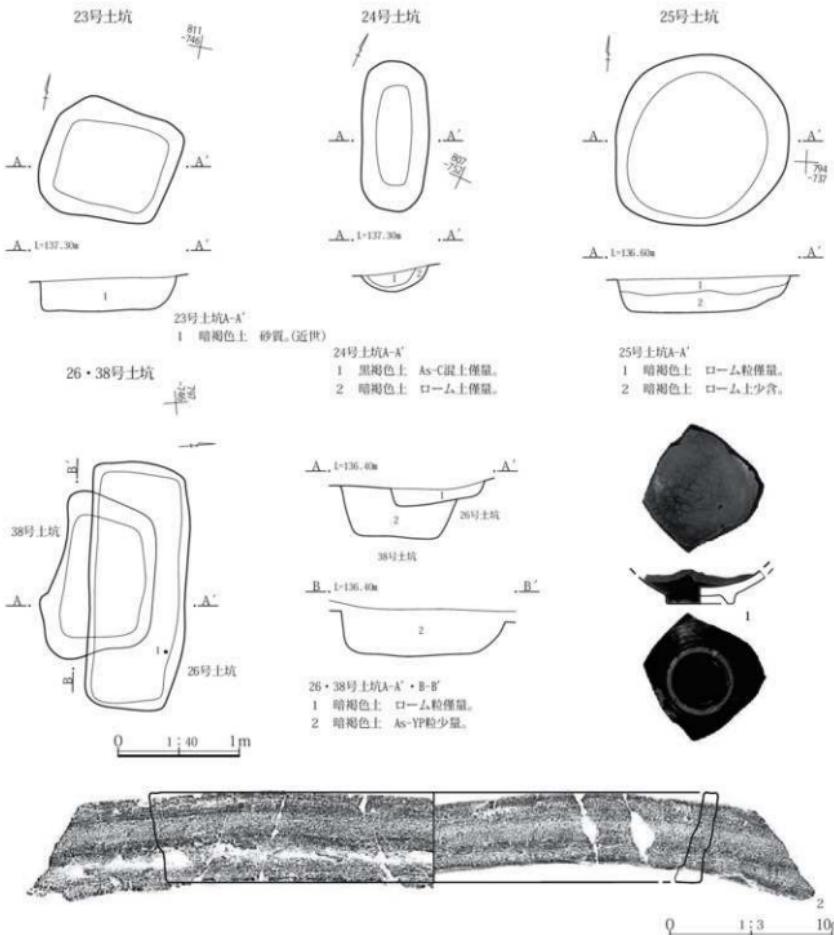
平面形状 東西に長い楕円形状を呈する。

主軸方向 N-44°-E。

規模 長さ1.54m、上幅1.41m、下幅1.08m、深さ0.30m。

埋土 上層にローム粒を僅かに含む暗褐色土が堆積し、下層にローム土を少量含む暗褐色土が堆積している。

遺物 なし。



第28図 22~26号土坑と26号土坑出土遺物

所見 断面はやや浅いレンズ状を呈する。

周辺部の標高は136.36～45m、底部の標高は136.15～20m。

時期 中・近世。

(24) 26・38号土坑(第28図、PL.19・20・48)

位置 調査区の南東寄り。27号土坑の東側、39号土坑の西側に隣接する。X=42795～797、Y=-76743～745。

重複 26号土坑が38号土坑の北側を掘り込むが、26号土坑の方が浅いため、36号土坑の北側を完全に破壊するには至っていない。

平面形状 ともに東西に長い隅丸長方形を呈する。

主軸方向 26号土坑:N-81°-W、38号土坑:N-78°-W。

規模 26号土坑:長さ2.01m、上幅0.78m、下幅0.69m、深さ0.24m。38号土坑:長さ1.38m、上幅0.92m、下幅0.66m、深さ0.38m。

埋土 26号土坑:ローム土を僅かに含む暗褐色土。38号土坑:As-YP粒を少量含む暗褐色土が堆積している。

遺物 26号土坑北壁際床面直上より18世紀後葉～19世紀前葉瀬戸・美濃陶器腰錫碗底部片が出土。標高136.227m(1)。また、26号土坑埋土中より近世の在地系土器焰烙1/4片(2)が各1点出土。なお、非掲載であるが、26号土坑埋土中からは近世の在地系焰烙・銅片が9点出土している。

38号土坑埋土中からは、非掲載であるが繩文土器片2点、近世の国産施釉陶器片1点及び在地系焰烙・銅片1点が出土した。

所見 26号土坑は規模・形状は5・8～12号土坑に比較的類似しており、俗に「芋穴」と称されることが多い長円形ないし長方形の土坑の類と見られる。周辺では東西に隣接する27・34・39号土坑と規模・形状が比較的類似している。断面は幅広く、薄く扁平な逆台形状を呈する。38号土坑はしっかりと掘方を有し、断面は逆台形状を呈する。

周辺部の標高は136.36～39m、26号土坑底部の標高は136.15～23m、38号土坑の底部の標高は135.87mである。

時期 近世。

(25) 27号土坑(第29図、PL.19)

位置 調査区の南東寄り。26・38号土坑の西側、5号井

戸の東側に隣接する。X=42796～797、Y=-76746～747。

重複 なし。

平面形状 北北西-東南東方向に長い不整隅丸長方形を呈する。

主軸方向 N-76°-W。

規模 長さ1.98m、上幅0.76m、下幅0.74m、深さ0.38m。

埋土 上層のごく一部にAS-YP粒を少量含む暗褐色土が堆積しているが、主たる埋土はローム土を僅かに少量含む暗褐色土で、底部壁際隔にローム土を多量に含む褐色土が一部三角形状に堆積している。

遺物 なし。

所見 規模・形状は5・8～12・26・29・34・39号土坑等に比較的類似する、俗に「芋穴」と称されることが多い長円形ないし長方形の土坑の類と見られる。しっかりと掘方を有し、断面は長方形を呈する。

周辺部の標高は136.39～49m、底部の標高は136.07～09mである。

時期 中・近世。

(26) 28・31号土坑(第29図、PL.19)

位置 調査区の中央から南東寄りの位置。34号土坑、8～10号ピットの西側、11号ピットの北側に隣接する。X=42790～794、Y=-76749～750。

重複 28号土坑が29・31号土坑及び15号ピットの東端を掘り込む。

平面形状 28号土坑はほぼ南北に長い隅丸長方形を、31号土坑は北北西-東南東方向に長い隅丸長方形を呈する。

主軸方向 28号土坑:N-5°-E。31号土坑:N-67°-W。

規模 28号土坑:長さ2.68m、上幅0.79m、下幅0.51m、深さ0.57m。31号土坑:長さ0.50m、上幅0.58m、下幅0.36m、深さ0.38m。

埋土 28号土坑:記録なし。31号土坑:As-YP粒を少量含む暗褐色土。

遺物 非掲載であるが、28号土坑埋土中からは古代の土製品片1点と時期不明の土器・瓦類片1点が出土している。

所見 28号土坑は規模・形状は5・8～12・26・29・34・39号土坑等に比較的類似する、俗に「芋穴」と称されることが多い長円形ないし長方形の土坑の類と見られる。

第3章 発見された遺構と遺物

る。しっかりととした掘方を有し、断面は逆台形状を呈する。31号土坑は東側を28号土坑に掘り込まれているが、東端が28号土坑よりも東側に出ていないので、然程に大型の土坑では無いと考えられる。規模・形状は30号土坑と比較的類似している。しっかりととした掘方を有しております、断面はやや幅が狭い逆台形状を呈している。

周辺部の標高は136.24～32m、28号土坑の底部の標高は135.75～81m、31号土坑の底部は段掘りされており、標高は135.94～136.13mである。

時期 中・近世。

(27) 29号土坑(第29図、PL.19)

位置 調査区の中央から南東寄りの位置。30号土坑、6・26号ピットの北側に隣接し、13号ピットの直ぐ南側に近接する。X=42789～791、Y=-76750～753。

重複 東端部を28号土坑に、北西隅付近を32号ピットに掘り込まれる。

平面形状 ほぼ東西に長い隅丸長方形を呈する。

主軸方向 N=87° -E。

規模 長さ3.28m、上幅0.93m、下幅0.66m、深さ0.34m。

埋土 上層にAs-YP粒を少量含む暗褐色土、下層にローム土を少量含む暗褐色土が堆積している。

遺物 なし。

所見 規模・形状は5・8～12・26・28・34・39号土坑等に比較的類似する、俗に「芋穴」と称されることが多い長円形ないし長方形状の土坑の類と見られる。比較的しっかりととした掘方を有しており、断面は隅丸逆台形状を呈する。

周辺部の標高は136.29～32m、底部の標高は135.95～136.03mである。

時期 中・近世。

(28) 30号土坑(第29図、PL.19)

位置 調査区中央から南端。調査区南壁に懸かる。29号土坑の南側、6号ピットの西側、26号ピットの東側に隣接する。X=42788～789、Y=-76752。

重複 調査区南壁際で7号ピットに掘り込まれる。

平面形状 南側が調査区南壁外へと伸びているので全容は不明であるが、南北に長い隅丸長方形を呈するものと思われる。

主軸方向 N=4° -W。

規模 檜出長0.62m、上幅0.48m、下幅0.40m、深さ0.17m。

埋土 As-YP粒を少量含む暗褐色土。

遺物 なし。

所見 規模・形状は31号土坑等に比較的類似する。深くしっかりととした掘方を有し、断面は幅が狭く深い逆台形状を呈している。

周辺部の標高は136.32～38m、底部の標高は136.15m前後である。

時期 中・近世。

(29) 32号土坑(第29図、PL.19)

位置 調査区の中央。44号土坑、17・22号ピットの北側、12号溝の南側に隣接する。X=42798～799、Y=-76753。

重複 なし。

平面形状 北東-南西方向に長い不整梢円形を呈する。

主軸方向 N=62° -E。

規模 長さ0.86m、上幅0.76m、下幅0.65m、深さ0.12m。

埋土 As-YP粒を少量含む暗褐色土。

遺物 なし。

所見 断面は浅く扁平なレンズ状を呈する。

周辺部の標高は136.76～80m、底部の標高は136.68m前後である。

時期 中・近世。

(30) 33号土坑(第29図、PL.19)

位置 調査区の中央から南寄りの位置。6号井戸の直ぐ西側、4号掘立柱建物の直ぐ東側、1号掘立柱建物の直ぐ北側に近接する。X=42793、Y=-76753～755。

重複 なし。

平面形状 北西-南東方向に長い隅丸長方形を呈する。

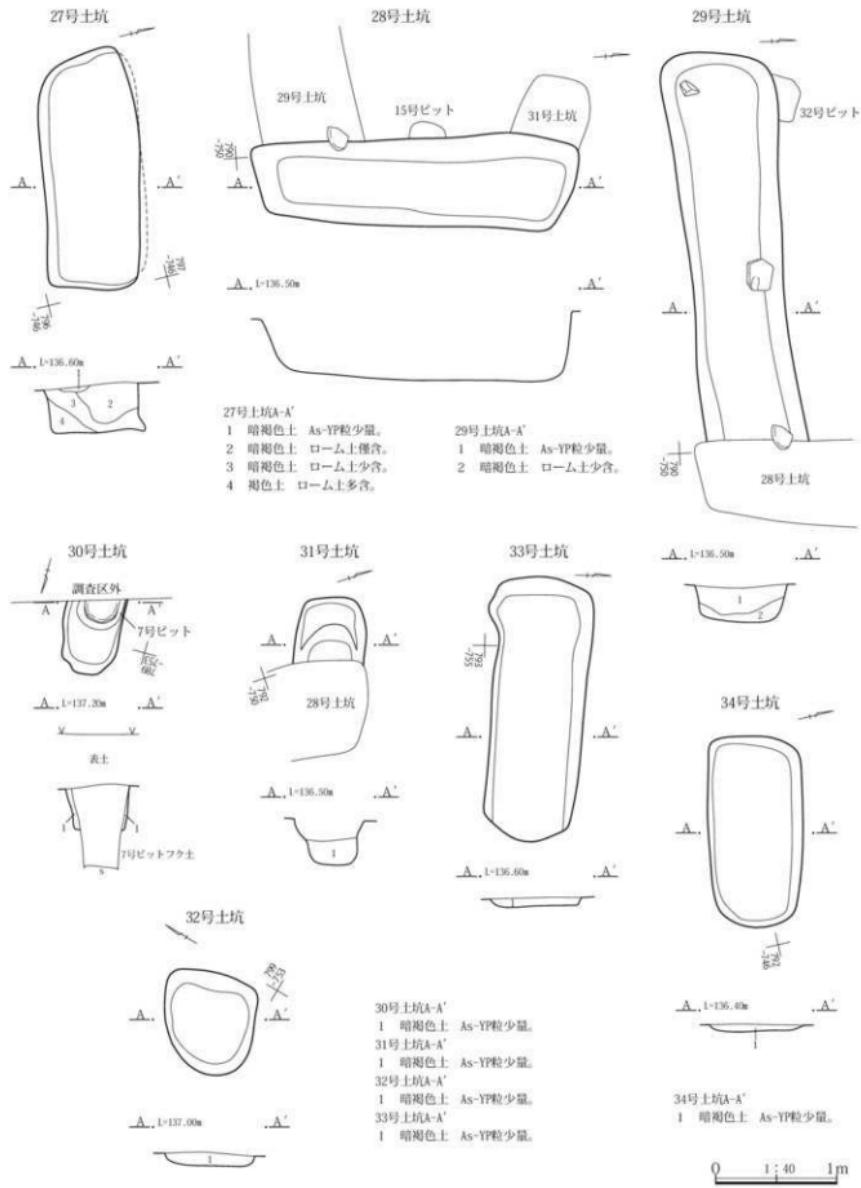
主軸方向 N=87° -W。

規模 長さ2.16m、上幅0.87m、下幅0.78m、深さ0.13m。

埋土 As-YP粒を少量含む暗褐色土。

遺物 なし。

所見 規模・形状は5・8～12・26・28・34・39号土坑等に比較的類似する、俗に「芋穴」と称されることが多い長円形ないし長方形状の土坑の類と見られる。断面は浅く扁平なレンズ状を呈する。



第29図 27~34号土坑

第3章 発見された遺構と遺物

周辺部の標高は136.41～45m、底部の標高は136.33～37mである。

時期 中・近世。

(31) 34号土坑(第29図、PL.20)

位置 調査区の中央から南寄りの位置。37号土坑、25号ピットの西側、8・9号ピットの北側、28号土坑の東側に隣接する。X=42791～792、Y=-76746～747。

重複 なし。

平面形状 北西-南東方向に長い隅丸長方形を呈する。

主軸方向 N-77°-W。

規模 長さ1.57m、上幅0.76m、下幅0.63m、深さ0.07m。

埋土 As-YP粒を少量含む暗褐色土。

遺物 なし。

所見 規模・形状は5・8～12・26・28・33・39号土坑等に比較的類似する、俗に「芋穴」と称されることが多い長円形ないし長方形状の土坑の類と見られる。断面は浅く扁平なレンズ状を呈する。

周辺部の標高は136.28～29m、底部の標高は136.22～25mである。

時期 中・近世。

(32) 35号土坑(第30図、PL.20)

位置 調査区の中央から南寄りの位置。37号土坑の直ぐ東側に隣接する。X=42792、Y=-76743～744。

重複 なし。

平面形状 東北東-西南西方向に長い隅丸長方形を呈する。

主軸方向 N-76°-E。

規模 長さ0.91m、上幅0.62m、下幅0.50m、深さ0.12m。

埋土 As-YP粒を少量含む暗褐色土。

遺物 なし。

所見 規模・形状は5・8～12・26・28・33・39号土坑等よりもかなり短く、俗に「芋穴」と称されることが多い長円形ないし長方形状の土坑の類とは別個のものと考えた方が良いかも知れない。断面は浅く扁平な逆台形状を呈する。

周辺部の標高は136.28～29m、底部の標高は136.17mである。

時期 中・近世。

(33) 36・60号土坑(第30図、PL.20)

位置 調査区の中央から若干南寄りの位置。55・62号土坑の直ぐ南側に近接し、52号土坑の北側に隣接する。X=42796～797、Y=-76759～761。

重複 30号土坑が60号土坑の北側を掘り込み、東側から65号土坑に掘り込まれる。

平面形状 両土坑とも西北西-東南東方向に長い隅丸長方形を呈する。

主軸方向 36号土坑はN-86°-W。60号土坑はN-81°-W。

規模 36号土坑は検出長1.30m、上幅0.55m、下幅0.36m、深さ0.32m。60号土坑は検出長1.20m、上幅0.50m、下幅0.38m、深さ0.28m。

埋土 両土坑共As-YP粒を少量含む暗褐色土。

遺物 なし。

所見 両土坑共規模・形状は5・8～12・26・28・33・39号土坑等よりも小規模ではあるが、俗に「芋穴」と称されることが多い長円形ないし長方形状の土坑の類と考えて良いと思われる。両土坑共しっかりとした掘方を有しており、断面は共に逆台形状を呈する。

周辺部の標高は136.53～71m、底部の標高は36号土坑で136.24～25m前後、60号土坑もほぼ同様である。

時期 中・近世。

(34) 37号土坑(第30図、PL.20)

位置 調査区の中央から南東寄りの南端付近。35号土坑の直ぐ西側に近接し、34号土坑の東側に隣接する。X=42791～792、Y=-76744～745。

重複 25号ピットに北西寄りを掘り込まれる。

平面形状 北北西-南南東方向に長い隅丸長方形を呈する。

主軸方向 N-6°-W。

規模 長さ0.99m、上幅0.58m、下幅0.47m、深さ0.09m。

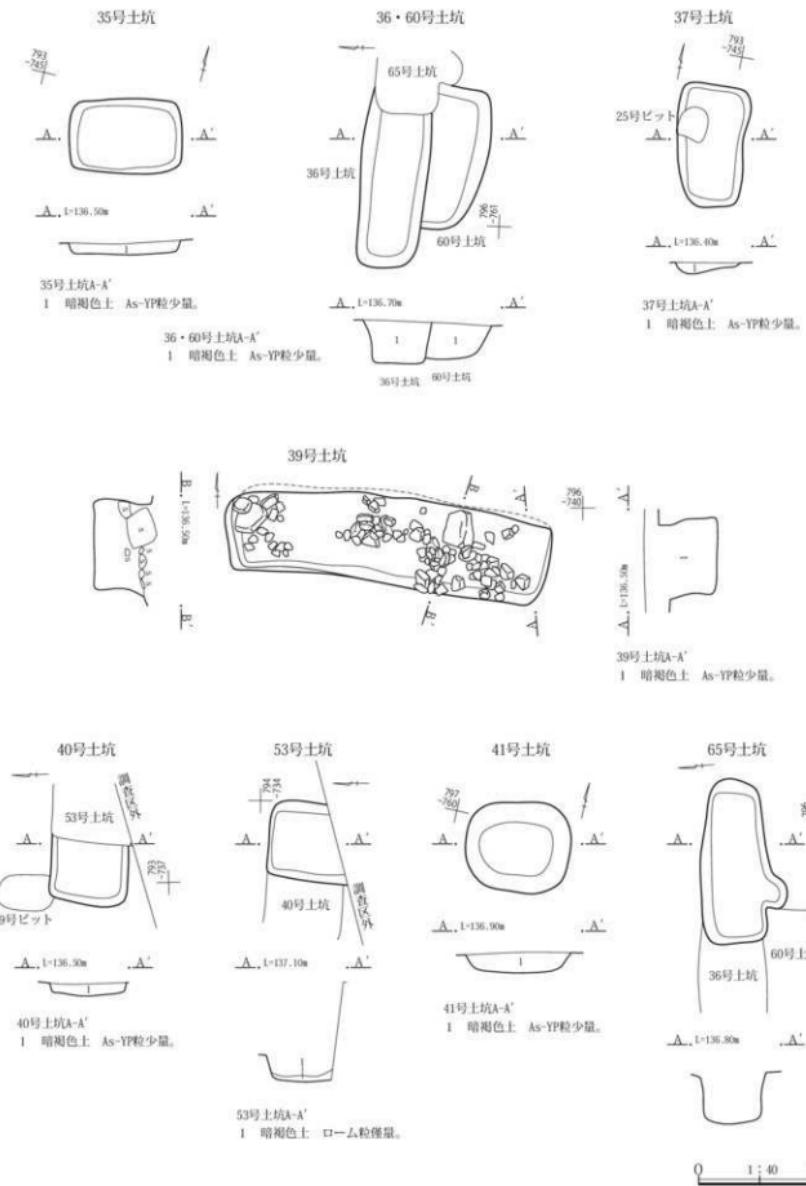
埋土 As-YP粒を少量含む暗褐色土。

遺物 なし。

所見 小規模な土坑で、断面は薄く扁平な不整レンズ状を呈する。

周辺部の標高は136.27～28m前後、底部の標高は136.19m前後である。

時期 中・近世。



第30図 35~37・39~41・53・60・65号土坑

第3章 発見された遺構と遺物

(35) 39号土坑(第30図、PL.20・21)

位置 調査区の中央から南東寄り。5号溝の直ぐ西側に近接し、26・38号土坑の東側に隣接する。X=42795～796、Y=-76740～742。

重複 なし。

平面形状 北北西～南南東方向に長い隅丸長方形を呈する。

主軸方向 N-82°-W。

規模 長さ2.68m、上幅0.68m、下幅0.63m、深さ0.49m。

埋土 As-YP粒を少量含む暗褐色土。

遺物 非掲載であるが、埋土中から古代の土師器片1点、近世の国産施釉陶器片3点及び国産焼締陶器片1点及び在地系焰培・鍋片1点が出土している。

所見 規模・形状は5・8～12・26・28・33・34号土坑等に比較的類似する、俗に「芋穴」と称されることが多い長円形ないし長方形を呈する。上面からは径0.05～0.2m程度の自然礫が大量に出土したが、焼土や炭化物、人骨等は検出されなかったため、墓壙の可能性は考えにくい。しっかりと掘方を有しており、断面は長方形を呈する。

周辺部の標高は136.26～28m前後、底部の標高は135.77～79mである。

時期 中・近世。

(36) 40・53号土坑(第30図、PL.21・22)

位置 調査区の中央から東寄りの南端。調査区南壁に懸かる。28号ピットの直ぐ南側に近接する。X=42793、Y=-76734～737。

重複 40号土坑は北西隅を29号ピットに掘り込まれ、東側を53号土坑に掘り込まれる。

平面形状 40号土坑は東側を53号土坑に掘り込まれてゐるため全容は不明であるが、東西に長い隅丸長方形を呈していたものと考えられる。また、53号土坑は南側が調査区南壁外へと伸びているので全容は不明であるが、南北に長い隅丸長方形を呈していたものと思われる。

主軸方向 40号土坑はN-85°-W。53号土坑はN-6°-E。

規模 40号土坑は検出長0.50m、上幅0.63m、下幅0.51m、深さ0.10m。53号土坑は検出長0.62m、上幅0.64m、下幅0.47m、深さ0.22m。

埋土 40号土坑はAs-YP粒を少量含む暗褐色土。53号土坑はローム粒を僅かに含む暗褐色土。

遺物 非掲載であるが53号土坑埋土中から近世の国産施釉陶器片が2点出土している。

所見 両土坑共規模・形状は不明である。40号土坑の断面は薄く扁平な長方形を呈し、53号土坑はしっかりと掘方を有しており、断面は逆台形状を呈する。

周辺部の標高は136.38～39m前後、40号土坑の底部の標高は136.28m、53号土坑の底部は136.17mである。

時期 中・近世。

(37) 41・65号土坑(第30図、PL.20・21)

位置 調査区の中央から東寄りの位置。55・62号土坑の直ぐ南側に近接する。X=42796～797、Y=-76759～760。

重複 41号土坑は65号土坑の中央部を掘り込む。65号土坑は36号土坑の西端と60号土坑の北東隅を掘り込む。

平面形状 41号土坑は東北東～西南西方向に長い楕円形を呈する。また、65号土坑は南西隅が南側に若干突出しているが、ほぼ東西に長い隅丸長方形を呈する。

主軸方向 41号土坑はN-77°-E。65号土坑はN-85°-W。

規模 41号土坑は長さ0.88m、上幅0.74m、下幅0.41m、深さ0.19m。65号土坑は長さ1.35m、上幅0.70m、下幅0.56m、深さ0.46m。

埋土 41号土坑はAs-YP粒を少量含む暗褐色土。65号土坑は調査時記録無く不明。

遺物 なし。

所見 41号土坑は掘り込みが浅いため、65号土坑を余り破壊していなかったため、65号土坑のほぼ全容が明らかに出来た。41号土坑の断面は薄く扁平なレンズ状を呈し、65号土坑はややしっかりと掘方を有しており、断面はU字状を呈している。

周辺部の標高は136.58m前後、41号土坑の底部の標高は136.53m、65号土坑の底部は136.15mである。

時期 中・近世。

(38) 42・44・45・54・55・58・59・62号土坑(第31図、PL.21～23)

位置 調査区のほぼ中央。36・41・60・65号土坑の直ぐ北側に近接し、70号土坑の南側に隣接する。X=42797～798、Y=-76754～760。

重複 42号土坑が44号土坑を、44号土坑が45号土坑を掘り込んでいるが、これら新旧関係の判断は土層断面の観察によって初めて判明したので、調査時にはこれら3土坑を一度に掘削してしまっているため、平面図とは齟齬が生じている。なお、45号土坑の北西隅が54号土坑の南端を、また45号土坑が58号土坑の東側を掘り込んでいる。55号土坑は58号土坑の西側を掘り込み、59号土坑に西端を、62号土坑に東端寄りの位置を掘り込まれているが、これらの土坑は55号土坑の底面から検出されているので、独立の土坑と言うよりも55号土坑内の掘り込みである可能性が高く、55号土坑と同時期である可能性が考えられる。

これらの土坑群は、新しい順に42・44・45・58号土坑となるが、45号土坑が54号土坑よりも新しいこと、55号土坑が58号土坑よりも新しいこと、59・62号土坑が55号土坑よりも新しいかあるいは同時期であることは判明するものの、それらと42・44・45号土坑との新旧関係、54号土坑と55・58・59・62号土坑等との新旧関係については不明である。

平面形状 42号土坑：東西に長い隅丸長方形状。

44号土坑：東西に長い楕円形状。

45号土坑：東西に長い隅丸長方形状。

54号土坑：東西に長い楕円形状。

55号土坑：東西に長い隅丸長方形状。

58号土坑：東西に長い楕円形状ないし隅丸長方形状。

59号土坑：南北にやや長い隅丸長方形状。

62号土坑：南北にやや長い隅丸長方形状。

主軸方向 42号土坑：N-90°。

44号土坑：N-79°-E。

45号土坑：N-90°。

54号土坑：N-78°-W。

55号土坑：N-85°-W。

58号土坑：N-85°-W。

59号土坑：N-7°-E。

62号土坑：N-1°-W。

規模 42号土坑：長さ2.20m、上幅0.82m、下幅0.71m、深さ0.18m。

44号土坑：長さ1.60m、上幅0.76m、下幅0.60m、深さ0.49m。

45号土坑：長さ1.95m、上幅1.18m、下幅0.92m、深さ0.70m。

54号土坑：長さ0.57m、上幅0.40m、下幅0.30m、深さ0.20m。

55号土坑：長さ2.82m、上幅1.01m、下幅0.73m、深さ0.82m。

58号土坑：検出長0.48m、上幅0.81m、下幅0.50m、深さ0.77m。

59号土坑：長さ0.52m、上幅0.50m、下幅0.39m、深さ0.15m。

62号土坑：長さ0.57m、上幅0.51m、下幅0.40m、深さ0.18m。

埋土 42号土坑：As-YPを少量含む暗褐色土。

44号土坑：ローム土を少量含む暗褐色土。

45号土坑：As-YPを少量含む暗褐色土主体。最下層にローム土を少量含む暗褐色土が堆積している。

54号土坑：As-YPを少量含む暗褐色土。

55号土坑：上層に薄くAS-YP粒を少量含む暗褐色土が堆積するが、主体となるのはローム土を少量含む暗褐色土。

58号土坑：調査時記録無いため不明。

59号土坑：As-YPを少量含む暗褐色土。

62号土坑：As-YPを少量含む暗褐色土。

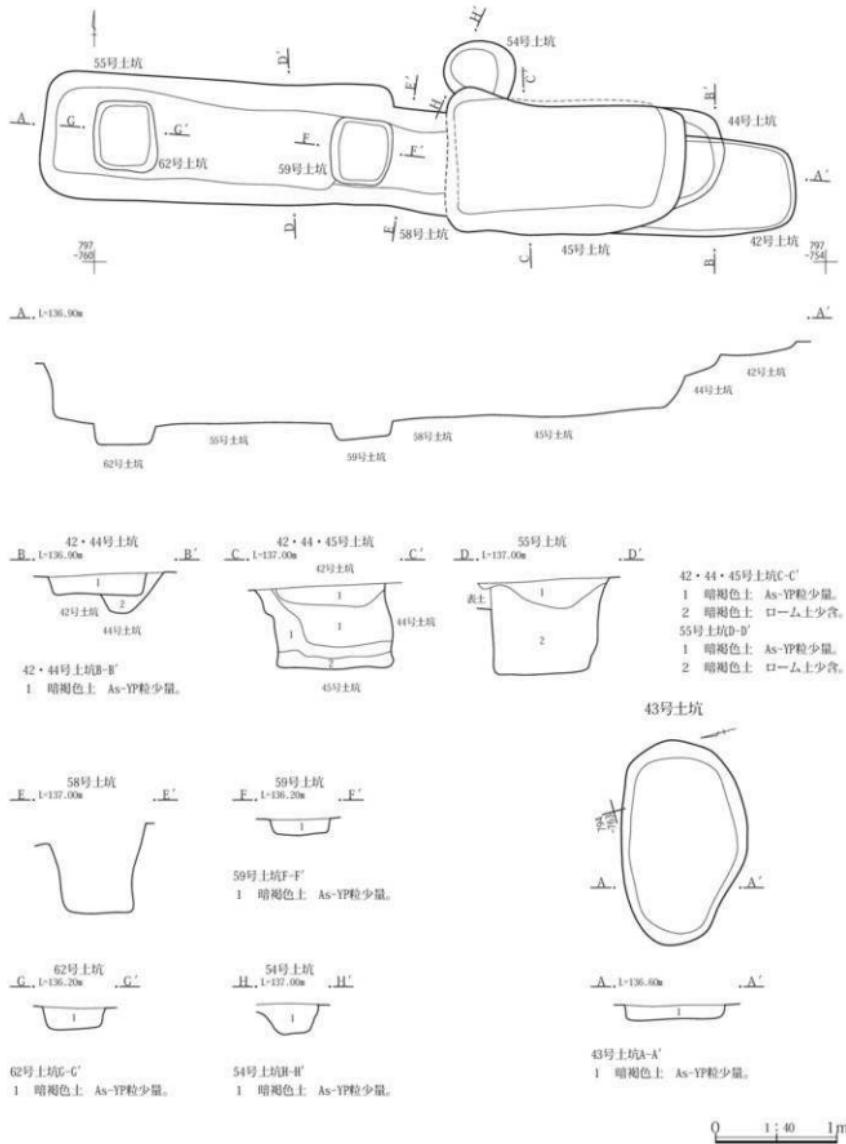
遺物 45号土坑埋土中からは、非掲載であるが、46号土坑埋土中からは近世の在地系熔塊・銅片1点が出土している。

所見 8基の土坑が位置をほぼ同じくして重複している。42・44・45・55・58号土坑の規模・形状は5・8～12・26・28・33・34号土坑等に比較的類似する、俗に「芋穴」と称されることが多い長円形ないし長方形状の土坑の類と見られる。42号土坑は浅いが、それ以外の44・45・55・58号土坑は、いずれもしっかりとした掘方を有しており、断面は長方形状を呈する。

54・59・62号土坑はいずれも小規模で、掘り込みも浅い。断面はいずれも比較的浅く扁平な長方形状ないし逆台形状を呈している。なお、先述したように59・62号土坑は55号土坑の底面から検出された土坑であり、それぞれの土坑自体の掘り込みは浅いものの、これらの土坑群の中では最も深い位置となっている。

第3章 発見された遺構と遺物

42・44・45・54・55・58・59・62号土坑



第31図 42～45・54・55・58・59・62号土坑

周辺部の標高は136.61~84m前後であり、各土坑の底部の標高は以下の通りである。

41号土坑：136.53m。

42号土坑：136.59m。

44号土坑：136.46m。

45号土坑：136.10~15m。

54号土坑：136.61m。

55号土坑：136.02~08m。

58号土坑：136.07~08m。

59号土坑：135.91m。

62号土坑：135.86m。

時期 中・近世。

(39) 43号土坑(第31図、PL.21)

位置 調査区の中央から南寄りの位置。24号ピットの直ぐ北側、72号ピットの直ぐ南側に近接する。X=42792~794、Y=-76762~764。

重複 なし。

平面形状 東西に長い不整橢円形状を呈する。

主軸方向 N-75°-W。

規模 長さ1.66m、上幅1.03m、下幅0.87m、深さ0.14m。

埋土 As-YP粒を少量含む暗褐色土。

遺物 なし。

所見 挖り込みは浅く、断面は薄く扁平なレンズ状を呈している。

周辺部の標高は136.45~50m前後、底部の標高は136.32~36mである。

時期 中・近世。

(40) 46・47号土坑(第32図、PL.21・22)

位置 調査区のほぼ中央。36号土坑の北東側、55号土坑の西側、61号土坑の北側に隣接する。X=42797~798、Y=-76761~763。

重複 46号土坑は47号土坑の北東側を掘り込む。47号土坑は46号土坑に北東側を掘り込まれ、84号土坑の東端と116号ピットの北側を掘り込む。

平面形状 46号土坑は東西に長く狭い隅丸台形状を呈する。また、47号土坑はほぼ東西に長い隅丸長方形状を呈する。

主軸方向 46号土坑はN-89°-W。47号土坑はN-88°-W。

規模 46号土坑は長さ1.72m、上幅0.86m、下幅0.53m、深さ0.38m。47号土坑は長さ2.49m、上幅0.77m、下幅0.68m、深さ0.72m。

埋土 両土坑ともAs-YP粒を少量含む暗褐色土が堆積している。

遺物 非掲載であるが、両土坑一括埋土中から近世の国産施釉陶器片1点が出土している。また、47号土坑埋土中からは、非掲載であるが国産施釉陶器片1点が出土している。

所見 46号土坑は47号土坑に比べて掘り込みが浅いため、47号土坑のほぼ全容が明らかに出来た。47号土坑は、規模・形状は5・8~12・26・28・33・34、42・44・45・55・58号土坑等に比較的類似する、俗に「芋穴」と称されることが多い長円形ないし長方形状の土坑の類と見られる。両土坑共しっかりとした掘方を有しており、46号土坑の断面は不整逆台形状を呈し、47号土坑の断面は深い長方形状を呈している。

周辺部の標高は136.83m前後、46号土坑の底部の標高は136.45~54m、47号土坑の底部の標高は136.04~06mである。

時期 中・近世。

(41) 48号土坑(第32図、PL.22)

位置 調査区の西寄りの中央。2・3号掘立柱建物の東側に位置する。X=42792~793、Y=-76787~788。

重複 49号土坑の南東側を掘り込む。

平面形状 ほぼ南北に長い隅丸長方形状を呈する。

主軸方向 N-9°-E。

規模 長さ1.36m、上幅0.95m、下幅0.69m、深さ0.30m。

埋土 主体となるのはAs-YP粒を少量含む暗褐色土で、下層の一部にローム土を少量含む暗褐色土が堆積している。

遺物 なし。

所見 調査区の西寄りからは、土坑は48~51・67・69号の6基しか検出されなかった。48号土坑は比較的しっかりとした掘方を有しており、断面は逆台形状を呈する。

周辺部の標高は136.60~64m前後、底部の標高は136.34mである。

時期 中・近世。

第3章 発見された遺構と遺物

(42) 49号土坑(第32図、PL.22)

位置 調査区の西寄りの中央。2・3号掘立柱建物の東側に位置する。X=42793～795、Y=−76787～788。

重複 48号土坑に南東側を掘り込まれる。

平面形状 ほぼ南北に長い隅丸長方形状を呈する。

主軸方向 N-5°-E。

規模 長さ1.91m、上幅0.48m、下幅0.40m、深さ0.20m。

埋土 As-YP粒を少量含む暗褐色土が堆積する。

遺物 なし。

所見 先述した通り、調査区の西寄りからは、土坑は48～51・67・69号の6基しか検出されなかった。南東隅部を48号土坑に掘り込まれているが、破壊されたのは一部に止まったため、ほぼ全容を明らかにすることが出来た。

規模・形状は5・8～12・26・28・33・34、42・44・45・49～52・55・58号土坑等に比較的類似する、俗に「芋穴」と称されることが多い長円形ないし長方形状の土坑の類と見られる。掘方は浅く、断面は長方形状を呈する。

周辺部の標高は136.56～64m前後、底部の標高は136.44～48mである。

時期 中・近世。

(43) 50号土坑(第32図、PL.22)

位置 調査区の北西寄り。I号柵の東側に隣接する。X=42798～799、Y=−76790～791。

重複 なし。

平面形状 東北東-西南西方向に長い隅丸長方形状を呈する。

主軸方向 N-81°-E。

規模 長さ1.86m、上幅0.81m、下幅0.71m、深さ0.14m。

埋土 As-YP粒を少量含む暗褐色土が堆積する。

遺物 なし。

所見 先述した通り、調査区の西寄りからは、土坑は48～51・67・69号の6基しか検出されなかった。

規模・形状は5・8～12・26・28・33・34、42・44・45・49～52・55・57・58号土坑等に比較的類似する、俗に「芋穴」と称されることが多い長円形ないし長方形状の土坑の類と見られる。特に、50～52号土坑は平面形状がかなり類似している。掘方は浅く、断面は薄く扁平なレンズ状を呈する。

周辺部の標高は136.48～50m前後、底部の標高は

136.36～40mである。

時期 中・近世。

(44) 51号土坑(第32図、PL.22)

位置 調査区の北西寄り。2・3号掘立柱建物の直ぐ北側に近接する。X=42796、Y=−76797～799。

重複 なし。

平面形状 東西に長い隅丸長方形状を呈する。

主軸方向 N-85°-W。

規模 長さ1.42m、上幅0.62m、下幅0.55m、深さ0.15m。

埋土 As-YP粒を少量含む暗褐色土が堆積する。

遺物 なし。

所見 先述した通り、調査区の西寄りからは、土坑は48～51・67・69号の6基しか検出されなかった。

規模・形状は5・8～12・26・28・33・34、42・44・45・49～52・55・58号土坑等に比較的類似する、俗に「芋穴」と称されることが多い長円形ないし長方形状の土坑の類と見られる。特に、50・51号土坑は規模・形状がかなり類似している。掘方は浅く、断面は薄く扁平なレンズ状を呈する。

周辺部の標高は136.44～45m前後、底部の標高は136.30～32mである。

時期 中・近世。

(45) 52号土坑(第32図、PL.22)

位置 調査区の中央から南寄りの位置。111号ピットの直ぐ南西側に近接する。X=42794～795、Y=−76760～761。

重複 なし。

平面形状 東西に長い隅丸長方形状を呈する。

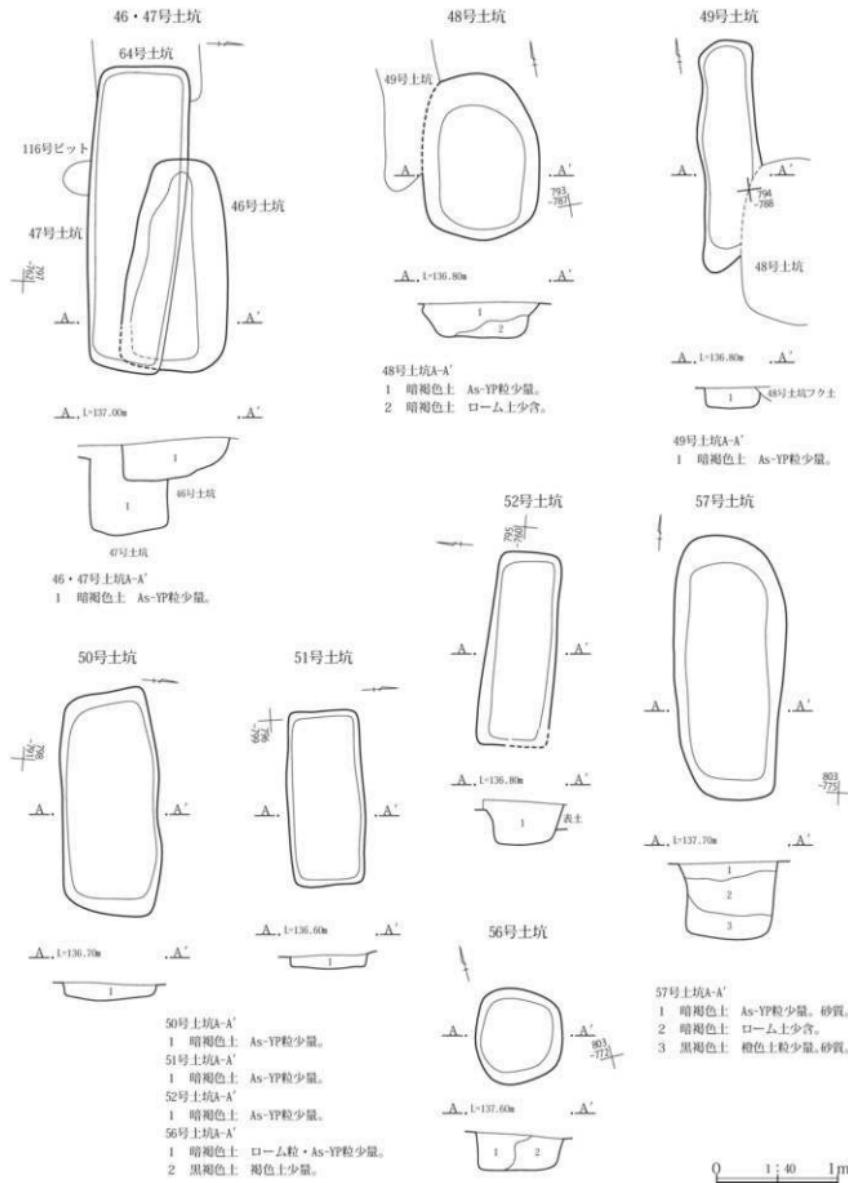
主軸方向 N-86°-W。

規模 長さ1.58m、上幅0.60m、下幅0.44m、深さ0.28m。

埋土 As-YP粒を少量含む暗褐色土が堆積する。

遺物 非掲載であるが、埋土中から国産施釉陶器片が1点出土している。

所見 規模・形状は5・8～12・26・28・33・34、42・44・45・49～51・55・57・58号土坑等に比較的類似する、俗に「芋穴」と称されることが多い長円形ないし長方形状の土坑の類と見られる。特に、50・51号土坑と平面形状がかなり類似している。しっかりととした掘方を有しており、断面は逆台形状を呈する。



第32図 46~52・56・57号土坑

第3章 発見された遺構と遺物

周辺部の標高は136.48～59m前後、底部の標高は136.31～33mである。

時期 中・近世。

(46) 56号土坑(第32図、PL.22・23)

位置 調査区の中央から北西寄りの位置。66号土坑の東側に隣接する。X=42803、Y=-76772～773。

重複 なし。

平面形状 南北に長い隅丸長方形状を呈する。

主軸方向 N-22°-E。

規模 長さ0.79m、上幅0.70m、下幅0.56m、深さ0.32m。

埋土 As-YP及びローム粒を少量含む暗褐色土と褐色土を少量含む黒褐色土が堆積する。

遺物 なし。

所見 調査区の中央から北西寄りのX=427800～810、Y=-76770～780の範囲からは殆ど遺構が検出されない中、北寄りの一角から56・57・66号土坑の3基の土坑のみがほぼ東西に並列して検出された。しかしながら、これら3基の土坑は、いずれも規模・形状がまちまちであり、共通性は余り見られない。56号土坑は、これら3基の土坑群の中で最も東寄りの位置から検出された土坑である。しっかりととした掘方を有しており、断面は長方形状を呈する。

周辺部の標高は137.40～46m前後、底部の標高は137.12mである。

時期 中・近世。

(47) 57号土坑(第32図、PL.23)

位置 調査区の中央から北西寄りの位置。66号土坑の西側に位置する。X=42802～805、Y=-76775～776。

重複 なし。

平面形状 南北に東西に長い隅丸長方形状を呈する。

主軸方向 N-4°-W。

規模 長さ2.17m、上幅0.91m、下幅0.66m、深さ0.67m。

埋土 上部に薄くAs-YPを少量含む暗褐色砂質土が堆積し、中層にローム土を少量含む暗褐色土が堆積し、下層に橙色土粒を少量含む黒褐色砂質土が堆積する。

遺物 なし。

所見 先述したように調査区の中央から北西寄りのX=427800～810、Y=-76770～780の範囲からは殆ど遺構が

検出されない中、北寄りの一角から56・57・66号土坑の3基の土坑のみがほぼ東西に並列して検出された。しかしながら、これら3基の土坑は、いずれも規模・形状がまちまちであり、共通性は余り見られない。57号土坑は、これら3基の土坑群の中で最も西寄りの位置から検出された土坑である。

規模・形状は5・8～12・26・28・33・34、42・44・45・49～51・55・58号土坑等に比較的類似する、俗に「芋穴」と称されることが多い長円形ないし長方形状の土坑の類と見られる。しっかりととした掘方を有しており、断面は隅丸逆台形状を呈する。

周辺部の標高は137.45～57m前後、底部の標高は136.91～137.01mである。

時期 中・近世。

(48) 61号土坑(第33図、PL.23)

位置 調査区の中央からやや南寄りの位置。63号土坑・13号溝の東側、35号ピットの西側に隣接する。X=42795～796、Y=-76762～763。

重複 なし。

平面形状 北東～南西方向に長い不整隅丸長方形状を呈する。

主軸方向 N-80°-E。

規模 長さ1.43m、上幅0.52m、下幅0.49m、深さ0.13m。

埋土 As-YPを少量含む暗褐色土が堆積する。

遺物 なし。

所見 小型ではあるが、5・8～12・26・28・33・34、42・44・45・49～51・55・58号土坑等に比較的類似する、俗に「芋穴」と称されることが多い長円形ないし長方形状の土坑の類と見られる。掘方は浅く、断面は扁平なレンズ状を呈する。

周辺部の標高は136.62～64m前後、底部の標高は136.51～52mである。

時期 中・近世。

(49) 63号土坑(第33図、PL.23)

位置 調査区の中央からやや南寄りの位置。47・64号土坑の南側、61号土坑の北西側、13号溝の北側に隣接する。X=42796、Y=-76763～764。

重複 なし。

平面形状 東西に長い隅丸長方形状を呈する。

主軸方向 N-87°-E。

規模 長さ0.95m、上幅0.50m、下幅0.37m、深さ0.11m。

埋土 As-YPを少量含む暗褐色土が堆積する。

遺物 なし。

所見 小型長方形状の土坑で、掘方は浅く、断面は扁平なレンズ状を呈する。

周辺部の標高は136.60m前後、底部の標高は136.49mである。

時期 中・近世。

(50) 64・75号土坑(第33図、PL.23)

位置 調査区の中央からやや南寄りの位置。13号溝、63・73・74号土坑の北側に隣接する。X=42797~798、Y=-76763~767。

重複 64号土坑は東端を47号土坑に掘り込まれ、75号土坑の東端を掘り込む。

平面形状 両土坑共東西に長い隅丸長方形状を呈する。

主軸方向 64号土坑：N-82°-E。75号土坑：N-90°

規模 64号土坑：長さ2.31m、上幅0.92m、下幅0.57m、深さ0.52m。75号土坑：長さ1.70m、上幅1.00m、下幅0.78m、深さ0.31m。

埋土 両土坑共As-YPを少量含む暗褐色土が堆積する。

遺物 非掲載であるが、64号土坑理土中からは、古代の土師器片1点と近世の国産磁器片1点及び近世の国産施釉陶器片1点、時期不明の土器・瓦類が1点出土している。

所見 両土坑共5・8~12・26・28・33・34、42・44・45・49~51・55・57・58号土坑等に比較的類似する、俗に「芋穴」と称されることが多い長円形ないし長方形状の土坑の類と見られる。64号土坑は底部の一部を更に深く段掘りされている。75号土坑の底部は平坦である。

両土坑共比較的しっかりと掘方を有しており、断面は逆台形状を呈する。

周辺部の標高は136.61~66m前後、64号土坑の底部の標高は136.13~27m、75号土坑の底部は136.35~36mである。

時期 中・近世。

(51) 66号土坑(第33図、PL.23)

位置 調査区の中央から北西寄りの位置。56号土坑の西側、57号土坑の東側に隣接する。X=42803~804、Y=-76773。

重複 なし。

平面形状 南北に東西に長い円形状を呈する。

主軸方向 N-4°-W。

規模 長さ1.14m、上幅0.54m、下幅0.36m、深さ0.18m。

埋土 暗褐色土。上層では薄くAs-YPを少量含んだ土が堆積し、下層に行くに従ってローム土の含有量が多くなる。

遺物 なし。

所見 先述した通り、調査区の中央から北西寄り=427800~810、Y=-76770~780の範囲からは殆ど遺構が検出されない中、北寄りの一角から56・57・66号土坑の3基の土坑のみがほぼ東西に並列して検出された。しかしながら、これら3基の土坑は、いずれも規模・形状がまちまちであり、共通性は余り見られない。66号土坑は、これら3基の土坑群の中の中央の位置から検出された土坑である。掘方は比較的浅く、断面は逆台形状を呈する。

周辺部の標高は137.45~51m前後、底部の標高は137.32mである。

時期 中・近世。

(52) 67号土坑(第33図、PL.24)

調査区の中央から北西寄りの位置。1号墳の直ぐ南側に近接し、1号柵の北側に位置する。X=42802~803、Y=-76797。

重複 8号溝を掘り込む。

平面形状 東西にやや長い隅丸長方形状を呈する。

主軸方向 N-90°。

規模 長さ0.84m、上幅0.74m、下幅0.64m、深さ0.33m。

埋土 As-YP粒を少量含む暗褐色土が堆積する。

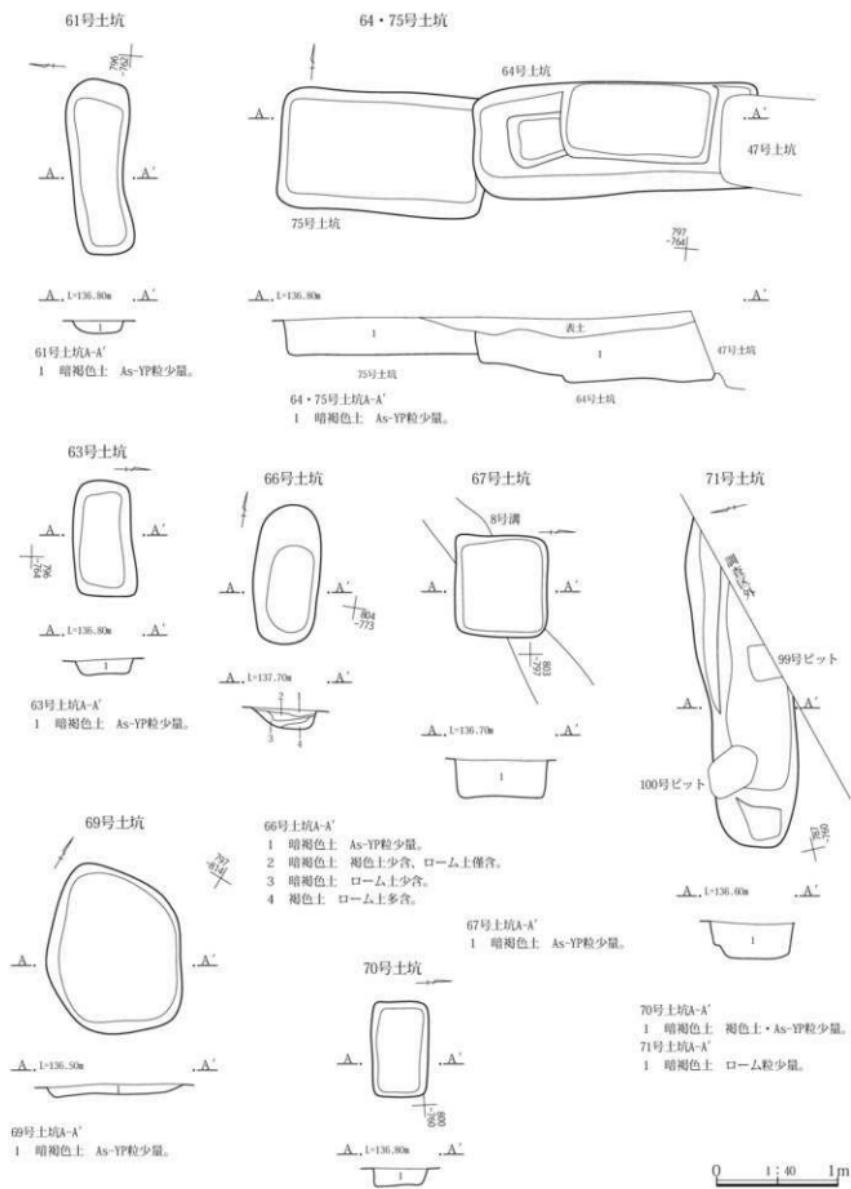
遺物 なし。

所見 調査区の北西付近から単独で検出された方形状の土坑である。しっかりと掘方を有しており、断面は長方形状を呈する。

周辺部の標高は136.50~52m前後、底部の標高は136.20mである。

時期 中・近世。

第3章 発見された遺構と遺物



第33図 61・63・64・66・67・69～71・75号土坑

(53) 69号土坑(第33図、PL.24)

位置 調査区の北西隅付近。5号竪穴建物の直ぐ西側に近接する。X=42795~796、Y=-76813~815。

重複 なし。

平面形状 北西~南東方向に長い不整椭円形状を呈する。

主軸方向 N-39° -W。

規模 長さ1.41m、上幅1.11m、下幅0.96m、深さ0.08m。

埋土 As-YPを少量含む暗褐色土が堆積する。

遺物 なし。

所見 調査区の北西隅付近から単独で検出された土坑。

掘方は浅く、断面は広く扁平なレンズ状を呈する。

周辺部の標高は136.36~37m前後、底部の標高は136.29~32mである。

時期 中・近世。

(54) 70号土坑(第33図、PL.24)

位置 調査区のほぼ中央。12号溝の南側、46・47・55・62号土坑の北側に隣接する。X=42799~800、Y=-76760。

重複 なし。

平面形状 西北西~東南東方向に長い長方形状を呈する。

主軸方向 N-85° -W。

規模 長さ0.78m、上幅0.46m、下幅0.37m、深さ0.19m。

埋土 暗褐色土及びAs-YP粒を少量含む暗褐色土が堆積する。

遺物 なし。

所見 調査区の中央から検出された小型長方形状の土坑。掘方は比較的浅く、断面は長方形状を呈する。

周辺部の標高は136.68~69m前後、底部の標高は136.50mである。

時期 中・近世。

(55) 71号土坑(第33図、PL.24)

位置 調査区中央の南端。調査区南壁に懸かる。105号ピットの直ぐ南側に近接し、5号掘立P4の東側、5号掘立P5の西側、108号ピットの北側に隣接する。X=42786~787、Y=-76757~759。

重複 中央部を99号ピットに、北西隅部を100号ピットに掘り込まれる。

平面形状 南東側が調査区南壁外に出るので全容は不明であるが、北西~南東方向に長い隅丸長方形状を呈する

ものと考えられる。

主軸方向 N-78° -W。

規模 検出長さ2.20m、上幅0.70m、下幅0.52m、深さ0.34m。

埋土 ローム粒を少量含む暗褐色土が堆積する。

遺物 なし。

所見 規模・形状が5・8~12・26・28・33・34、42・44・45・49~51・55・57・58号土坑等に比較的類似する、俗に「芋穴」と称されることが多い長円形ないし長方形状の土坑の類と見られる。

しっかりとした掘方を有しており、断面は逆台形状を呈する。

周辺部の標高は136.38~40m前後、底部の標高は136.08~10mである。

時期 中・近世。

(56) 72号土坑(第34図、PL.24)

位置 調査区中央からやや西寄りの位置の南端。調査区南壁に懸かる。X=42785~786、Y=-76764~768。

重複 なし。

平面形状 南東隅部が調査区南壁外に出るが、北西~南東方向に長大な隅丸長方形状を呈する。北西端に小規模なテラス状の段差が付く。

主軸方向 N-86° -W。

規模 長さ4.14m、上幅1.00m、下幅0.61m、深さ0.52m。

埋土 上部にAs-YP粒を少量含む暗褐色土が薄く堆積し、中層にローム粒を少量含む暗褐色土が、底部にローム粒を少量含むやや粘性の強い黒褐色土が堆積している。

遺物 非掲載であるが、埋土中から近世の国産施釉陶器片3点と時期不明の土器・瓦類片1点が出土している。

所見 規模・形状が5・8~12・26・28・33・34、42・44・45・49~51・55・57・58・71号土坑等に比較的類似する俗に「芋穴」と称されることが多い長円形ないし長方形状の土坑の類と見られる。

しっかりとした掘方を有しており、断面は逆台形状を呈する。

周辺部の標高は136.60~m前後、北西端のテラス状の部分の底部の標高は136.04~05m、底部の標高は135.78~85mである。

時期 中・近世。

第3章 発見された遺構と遺物

(57) 73号土坑(第34図、PL.24)

位置 調査区中央から南西寄りの位置。13号溝の直ぐ南西側、74号土坑の直ぐ東側に近接する。X=42794~796、Y=-76766~767。

重複 なし。

平面形状 南北に長い楕円形状を呈する。

主軸方向 N-0°。

規模 長さ1.49m、上幅0.78m、下幅0.63m、深さ0.14m。

埋土 As-YP粒を少量含む黒色気味の暗褐色土が堆積する。

遺物 なし。

所見 西側に近接する74号土坑と共に、周辺から検出された43・63・64・75号土坑とは主軸方位をほぼ直交させる。

掘方は浅く、断面は広く扁平な逆台形状を呈する。

周辺部の標高は136.60~64m前後、底部の標高は136.48~53mである。

時期 中・近世。

(58) 74号土坑(第34図、PL.24)

位置 調査区中央から南西寄りの位置。73号土坑の直ぐ西側に近接する。X=42794~795、Y=-76767。

重複 なし。

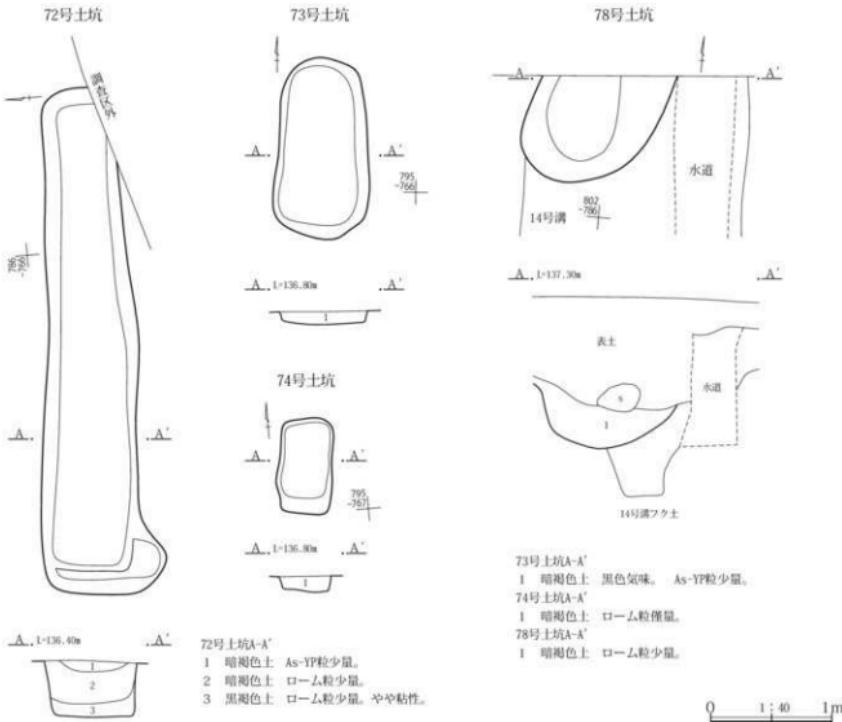
平面形状 ほぼ南北に長い隅丸長方形状を呈する。

主軸方向 N-4°~E。

規模 長さ0.78m、上幅0.46m、下幅0.37m、深さ0.14m。

埋土 ローム粒を僅かに含む暗褐色土が堆積する。

遺物 なし。



第34図 72~74・78号土坑

所見 先述したように、東側に近接する73号土坑と共に、周辺から検出された43・63・64・75号土坑とは主軸方位をほぼ直交させる。

掘方は浅く、断面は広く扁平な逆台形状を呈する。

周辺部の標高は136.61～62m前後、底部の標高は136.48mである。

時期 中・近世。

(59) 78号土坑(第34図、PL.24)

位置 調査区中央から北西寄りの位置。X=42802～803、Y=-76785～786。

重複 14号溝を掘り込む。

平面形状 北側が調査されていないので全容は不明であるが、北東-南西方向に長い梢円形状を呈していたものと考えられる。

主軸方向 N-24° E。

規模 檜出長1.00m、上幅1.00m、下幅0.55m、深さ0.56m。

埋土 ローム粒を少量含む暗褐色土が堆積する。

遺物 なし。

所見 第1面の上面から部分的に検出された14号溝と共に確認された。これまで述べてきた中・近世の土坑群とは確認面を異にする訳であるが、第1面の上に位置する遺構確認面は、調査区の中央から東寄りのY=-76785ライン付近から部分的に検出された本土坑及び14号溝と調査区北東側のX=42805～820、Y=-76724.5～747.5の範囲から検出された1号烟のみであるので、ここに併せて報告することにした。

しっかりととした掘方を有しており、断面は半円形状を呈する。

時期 近世。

7. ピット(第35～38図、PL.25～34)

中・近世のものと考えられるピットは82基検出された。殆どのピットは調査区の中央南寄りの部分、X=43786～800、Y=-76730～765の範囲から集中して検出された。また、調査区の南東寄りX=42799～803、Y=76710～724の範囲から5基、北西寄りX=42790～800、Y=-76790～807の範囲、2・3号掘立柱建物の周囲にも若干のピットが散在している。それ以外の場所からは

ピットは検出されなかった。

これらピットは、掘立柱建物や柵の柱穴を構成するものではなく、用途・機能は不明である。

なお、各ピットの詳細については、後掲の第3表ピット一覧表に、全時代のピットを纏めて掲載したので、参考照されたい。

8. 煙

これまで述べてきた中・近世の遺構群の内、14号溝と78号土坑を除く遺構の上面からは、調査区の北東側、X=42805～820、Y=-76724.5～747.5の範囲から部分的に煙が検出された。これまで述べてきた14号溝・78号土坑以外の中・近世の遺構とは確認面を異にする訳であるが、先述した通り、第1面の上に位置する遺構確認面は、調査区の中央から東寄りのY=-76785ライン付近から部分的に検出された14号溝・78号土坑と、調査区北東側から検出された1号煙のみであるので、ここに併せて報告する。

この煙については、発掘調査時にはAs-Bによって覆われた煙と認識されていた。しかしながら、その下層から3号・4溝、2号井戸、10～22号土坑などの中・近世の遺構群が良好な状態で確認・検出されているため、煙を覆っていたのは純堆積のAs-Bとは考えにくい。二次的に堆積したAs-Bと考えるべきであろう。よって、中・近世の煙として報告することにした。

検出されたのは南北方向に長く伸びる煙の歎間の溝状のサク14条で、1群のみである。

溝状に掘削されていたサク部分の掘り込みは全く検出出来ず、確認面における土の相違によって、サクの痕跡が部分的に辛うじて検出されたに過ぎ無い状態であった。歎の部分は完全に削平されており、残存状態は極めて悪い。

1号煙(第39図、PL.34)

位置 調査区北東側、X=42810～819、Y=-76730～743。

重複 下位の遺構確認面から3号・4溝、2号井戸、10～22号土坑等が検出された。

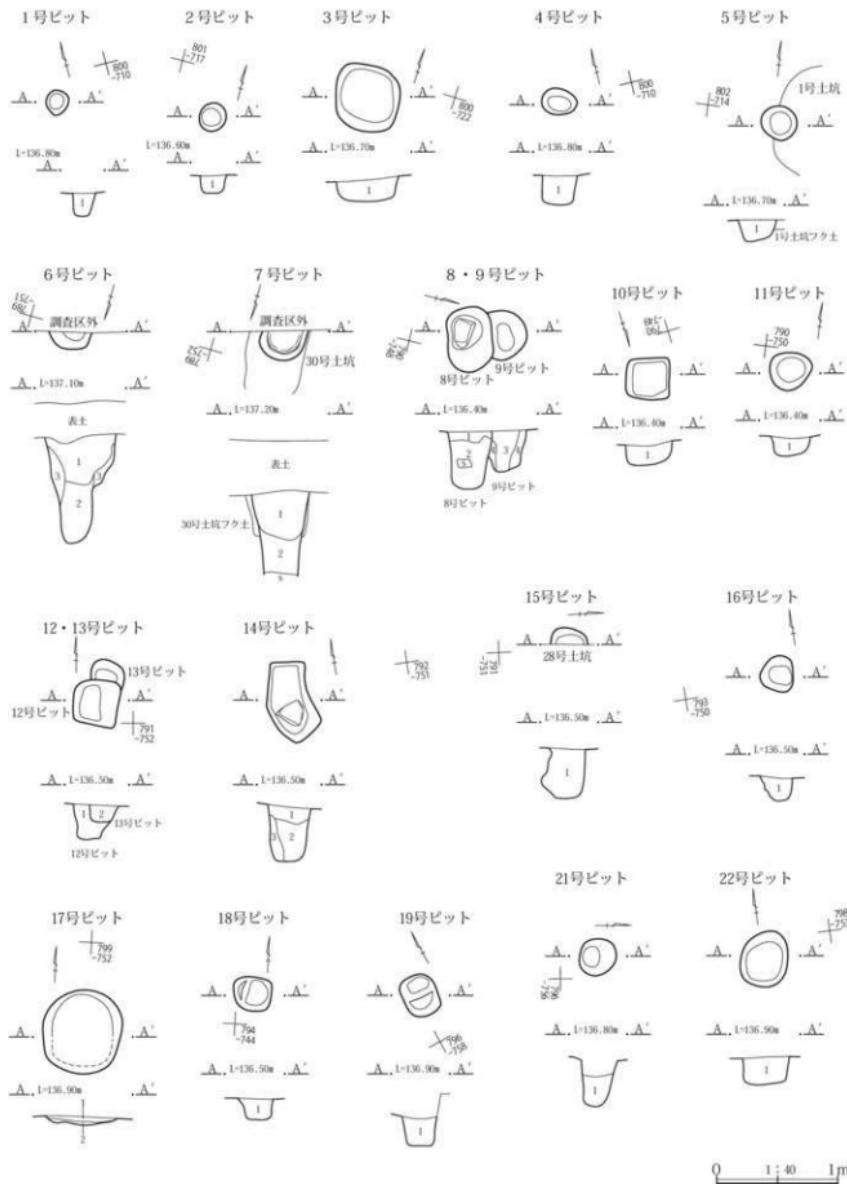
標高 137.59～77m前後

サクの埋土 As-B混土。

歎・サクの主軸方向 N-4°-W～N-9°-E。

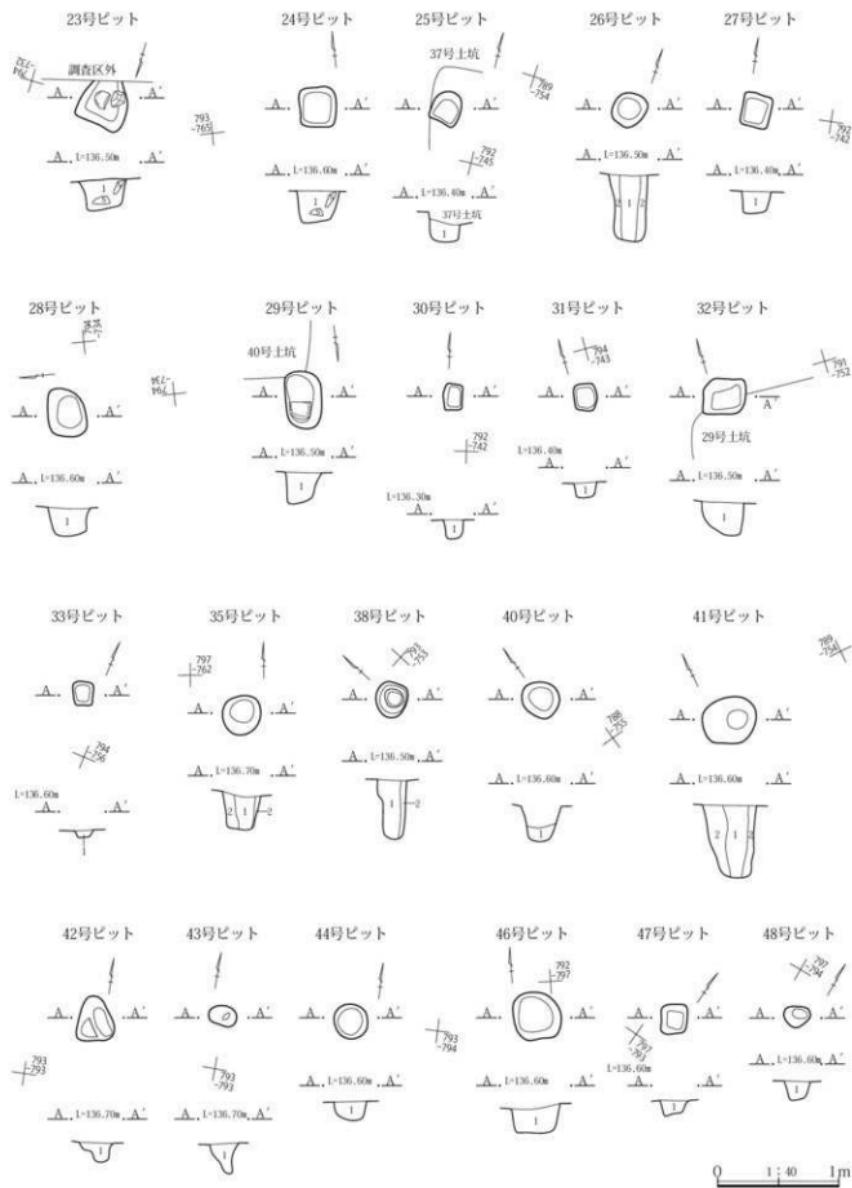
歎・サクの本数 各14条。

第3章 発見された遺構と遺物



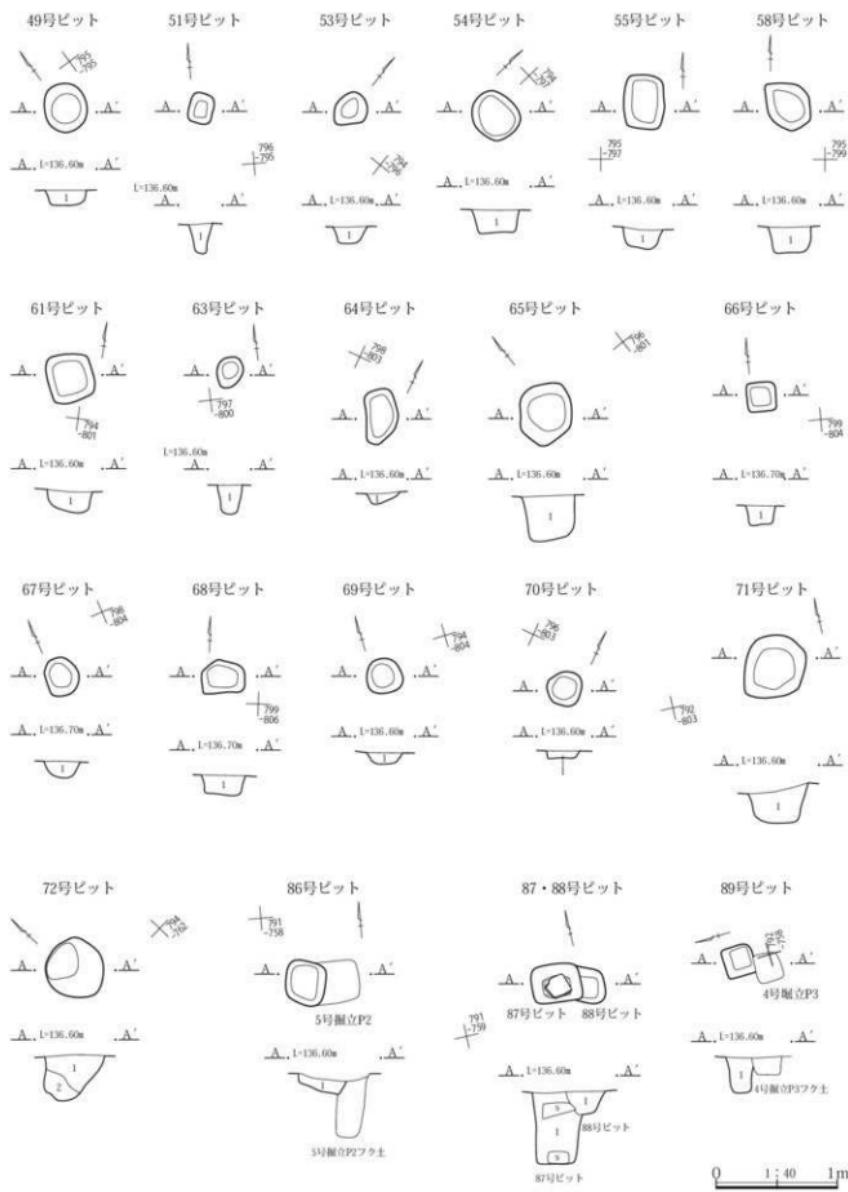
第35図 1~19・21・22号ピット

第1節 中・近世の遺構と遺物

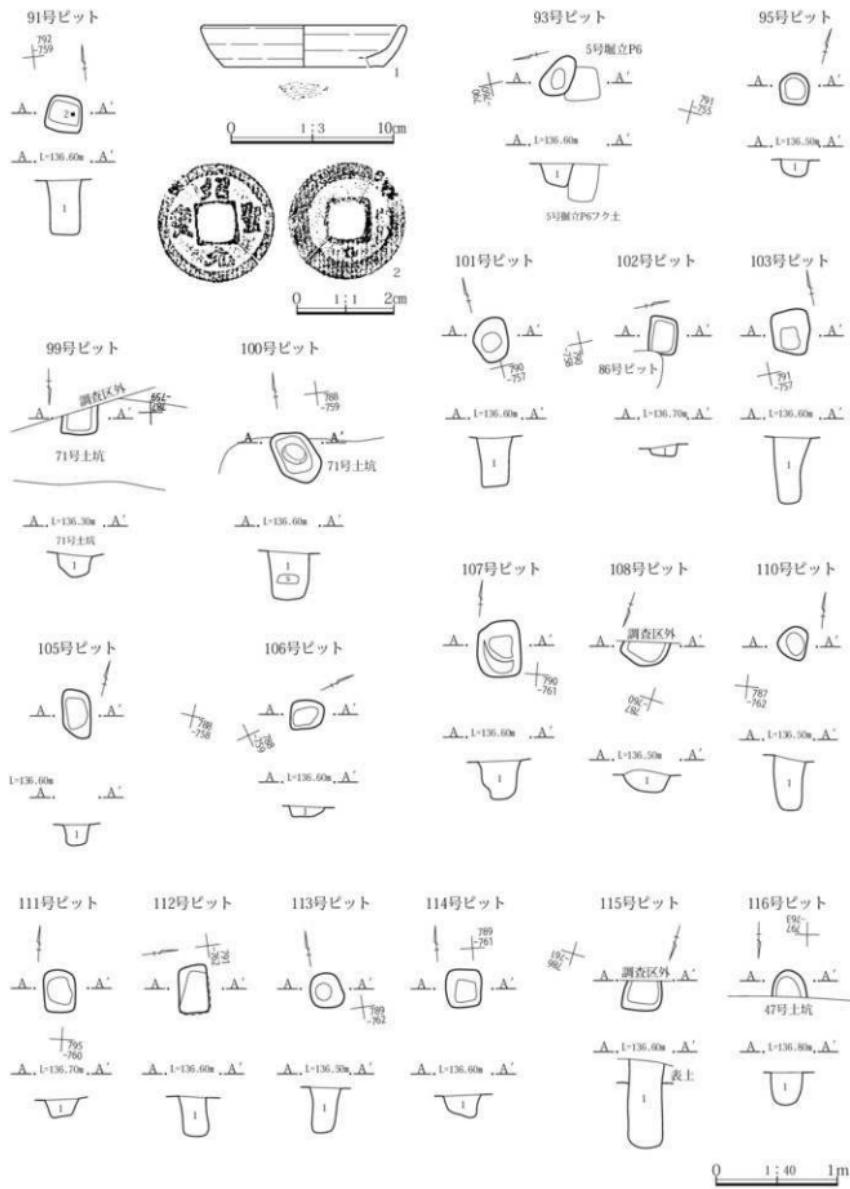


第36図 23~33・35・38・40~44・46~48号ピット

第3章 発見された遺構と遺物



第37図 49・51・53~55・58・61・63~72・86~89号ピット

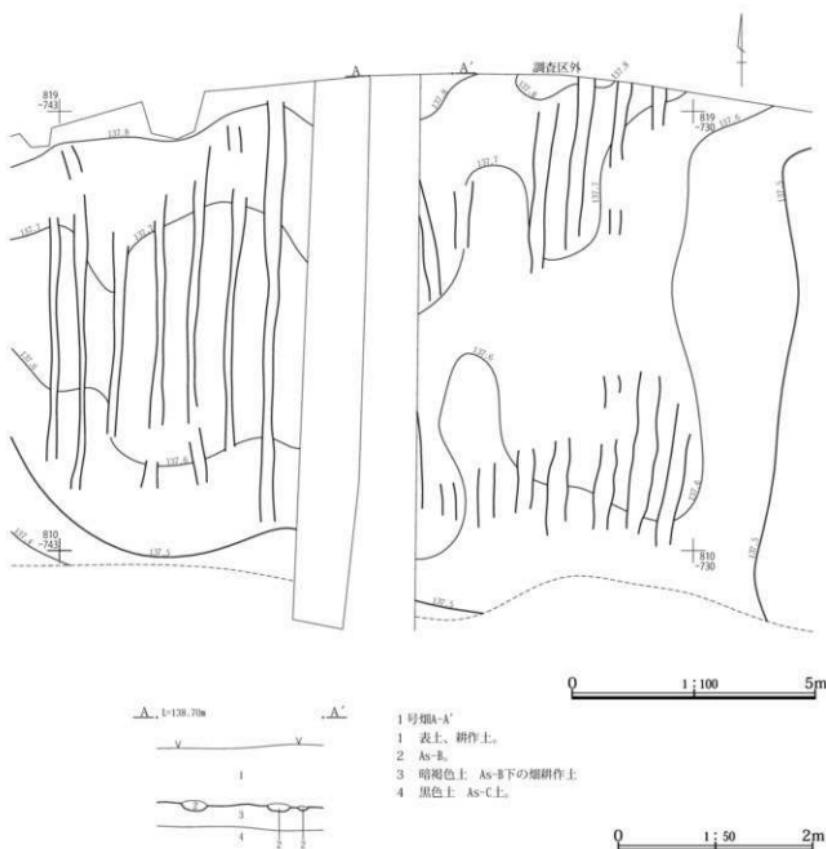


第38図 91・93・95・99~103・105~108・110~116号ピットと91号ピット出土遺物

第3章 発見された遺構と遺物

検出された歟の長さ 0.36~5.38m。
 検出されたサクの長さ 0.53~8.62m。
 検出された歟の幅 0.28~1.23m。
 検出されたサクの幅 0.11~0.48m。
 検出された歟の高さ 検出出来ず。
 検出されたサクの深さ 0.10m前後。
 歙間(芯々) 0.60~0.80m。
 サク間(芯々) 0.49~1.00m。

検出面積 113.1m²。
 平坦面 検出されなかった。
 遺物 なし。
 所見 北から南に向かって緩やかに傾斜している。検出範囲における南北の高低差はおよそ0.3m前後である。
 大きく削平を受け、全く検出されない部分も存在したが、歚間のサク・歚共に14条が部分的に検出された。
 時期 近世。



第2節 古代～古墳時代の遺構と遺物

先述したように、古代～古墳時代の遺構は、中・近世の遺構と同一の遺構確認面から検出された。

古代～古墳時代の遺構としては、10世紀の竪穴建物4棟、10世紀頃のものと見られる竪穴状遺構1基、4世紀後半と考えられる古墳時代前期の竪穴建物1棟、古墳1基が検出された。なお、古墳は周濠の南端部の一部が検出されたに過ぎず、墳丘は調査区外となる。

集落の本体は、調査区の北側の標高の高い場所に存在していたものと考えられる。10世紀の竪穴建物で、竈がある程度明瞭に検出来た1・2・4号竪穴建物では、いずれも竈は東側に設置されている。

調査区の中央及び南側からは、古代の遺構が全く検出されておらず、今回の調査において確認出来たのは古代の集落の南端と言うことになる。調査区の大半においては古代～古墳時代における土地利用の痕跡を見出すことは出来ず、今回の調査範囲においては、古代～古墳時代の土地利用は余りなされてはいなかった可能性が高い。

特に、本遺跡周辺は古墳時代の遺跡の密集地帯であるので、ある意味、意外な調査内容と言える。

1. 竪穴建物・竪穴状遺構

竪穴建物は、調査区北東隅付近から1～4号の10世紀の竪穴建物が4棟まとめて、また、調査区北西隅付近から4世紀後半頃のものと見られる5号竪穴建物が単独で1棟検出された。

また、2～4号竪穴建物が重複して検出された部分から、それらの竪穴建物と重複して1号竪穴状遺構が検出された。竈を有しない点を除いては、小型の竪穴建物に酷似する遺構である。各地における発掘調査事例では、10世紀後半から11世紀にかけて、必ずしも造り付けの竈を有しない小型の竪穴建物が造られるケースもあるので、そのような新しい時期の竪穴建物である可能性が考えられたが、遺物の出土をはじめ、生活の痕跡を全く検出することが出来なかつたので、居住施設とは考えにくくいように思われた。

(1) 1号竪穴建物(第40～42図、PL.35～37・49)

位置 調査区北東隅付近。4号竪穴建物の直ぐ東側に隣接する。X=23812～816、Y=-76712～715。

重複 なし。

平面形状 南北に長い隅丸長方形状を呈する。

主軸方位 N-0°。

規模 長径4.14m、短径2.82m、床面までの深さ約0.42m、掘方までの深さは0.57m。確認面の標高は137.30～42m、床面の標高は136.96～137.03m、掘方面的標高は136.83～90m。

面積 10.47m²。

埋土 上層に褐色土粒を僅かに含む暗褐色土が、下層にAs-YP粒を少量含む黒褐色土が堆積し、壁際にローム粒を僅かに含む暗褐色土が三角堆積している。

床面 主に褐色土を僅かに含む黒褐色土を0.04～0.14m貼って平坦な床面を形成している。竈の焚口の周囲、南北最大約2.2m、東西最大約1.42mの範囲に特に粘土が貼られた範囲があり、南側の部分ではやや厚く、北側の部分では薄く貼られていたが、土層断面では確認することが出来なかった。

竈 東壁の中央から南寄りに位置する。竈の主軸方位はN-90°-Eで、東西方向である。残存状態は余り良好ではなく、袖石も天井石も原位置を保っておらず、竈の構築材であったと考えられる自然石が奥壁から竪穴建物床面中央まで散乱した状態で検出され、竈が人為的に破壊された状況を示しているものと考えられる。

竈本体の全長は0.83m、全幅は0.73m、焚口の幅は0.39m、燃焼部の幅は0.47m×0.42m、燃焼部は竪穴建物の壁とほぼ同位置にある。中心部から焚口にかけて焼土が検出されたが良く焼けているというような状況ではない。焚口部から燃焼部の底面にかけては、建物床面よりも僅かに低くなっている。

竈掘方 左右の袖石の据え付け痕と燃焼部の掘り込みが検出された。

貯蔵穴 床面からは検出されず、掘方調査時に竪穴建物の南東隅の床面下から検出された。竪穴建物が機能していた最終段階においては使用されていなかったと見られる。

北東-南西方向に長い楕円形状を呈し、長径0.60m、短径0.52m、深さ0.16m、主軸方位はN-34°-E。

第3章 発見された遺構と遺物

埋土は主体となるのはローム土を少量含む褐色土で、上層に褐色土を僅かに含む黒褐色土が堆積している。

柱穴 検出されなかった。

周溝 検出されなかった。

掘方 全体に地山は比較的平坦に削り出されている。掘方の調査によって、北東隅～竈にかけて長さ約1.4m幅約0.23m分のテラス状の造作がなされていた様子が確認出来た。竪穴建物が在る段階で東側に若干拡張されていた可能性が考えられる。竈の位置が変えられた痕跡は全く見出すことが出来ず、拡張はごく一部にとどまったものと考えられる。

床下土坑 竈の焚口の北西側から床下土坑が1基検出された。北東～南西方向に長い楕円形を呈し、長径0.79m、短径0.60m、深さ0.19m、主軸方位はN=50°-E。埋土はローム土を少量含む褐色土である。

床下ピット 床下土坑よりも小規模なピットが掘方調査時において6基確認された。位置や規模・形状はランダムであり、柱穴としても極めてアンバランスな位置から検出されているので、廃棄された柱穴とは考えにくく、用途機能は不明である。

P1：竪穴建物北東隅。平面形態は東西に長い不整楕円形を呈する。長径0.35m、短径0.29m、深さ0.07m。掘方は浅く、断面はU字型を呈する。埋土は全ての床下ピットと共に通するやや砂質の褐色土が堆積する。

P2：竪穴建物北西隅。平面形態は北東～南西方向に長い楕円形を呈する。長径0.37m、短径0.30m、深さ0.15m。掘方は浅く、断面は薄く扁平な逆台形状を呈する。埋土はP1と全く同じ褐色土主体。

P3：竪穴建物南西寄り。P4・5の北側に隣接する。平面形態は南北に長い不整楕円形を呈する。長径0.65m、短径0.32m、深さ0.15m。掘方は浅く、断面はレンズ状を呈する。埋土はP1・2と同じ褐色土主体。平面形態が最も大きい床下ピットである。

P4：竪穴建物南西寄り。P3の南西側、P5の北西側に隣接する。平面形態は不整円形を呈する。長径0.20m、短径0.20m、深さ0.16m。掘方は浅く、断面はU字型を呈する。埋土はP1～3と同じ褐色土を主体とする。

P5：竪穴建物南西寄り。P3の南東側、P4の東側に隣接

する。平面形態は北西～南東方向に長い不整楕円形を呈する。長径0.32m、短径0.19m、深さ0.23m。小規模ながら比較的しっかりとした掘方を有しており、断面はU字形を呈する。埋土はP1～4と同じ褐色土主体。

P6：竪穴建物の中央から南寄り。1号床下土坑の南側に隣接する。平面形態は西北西～東南東方向に長い楕円形を呈する。長径0.34m、短径0.23m、深さ0.28m。小規模ながら深くしっかりとした掘方を有しており、断面はやや深いU字型を呈する。埋土はP1～5と同じ褐色土を主体とする。

遺物 出土した遺物量は然程に多くはない。10点を図化・掲載した。

3は東壁際床面直上から出土した9世紀第4四半期の須恵器有台碗2/3片。本竪穴建物は10世紀第1四半期頃のものと考えられるので、伝製品か流入したものか。

1は東寄りの床面直上から出土した10世紀第1四半期の須恵器杯3/4片。

4は中央部北寄りの床面直上から出土した10世紀第1四半期の土師器甕口縁部～胸部中位片。

5は竪左袖付近及び焚口の北側から出土した10世紀第1四半期の土師器甕口縁部～胸部下位片。

6は中央部から南寄りの床面直上から出土した10世紀第1四半期の土師器甕底部～胸部下位片。

9は中央部北壁付近の床面から約30cm上から出土した滑石製の紡輪。

これらの他、埋土中からは2の10世紀第1四半期の須恵器有台碗1/3片、7の10世紀第1四半期の土師器甕口縁部片、8の円筒埴輪片などが出土した。円筒埴輪片は混入したものと見られる。

掘方からは、竪穴建物中央部の掘方底面から約10cm上から10の鉄製紡輪1点が出土した。

なお非掲載であるが、埋土中より土師器片229点、須恵器片22点が出土している。

所見 本遺跡から検出された竪穴建物のうち、5号竪穴建物と並んで規模形状が明確に確認出来た竪穴建物である。しっかりとした掘方を有し、残存状態は比較的良好であった。

時期 出土した土器から平安時代中期、10世紀第1四半期のものと考えられる。

(2) 2号竪穴建物(第43・44・46・47図、PL.35・38・39・49)

位置 調査区北東隅付近。1号竪穴建物の直ぐ西側に近接する。X=42814~816、Y=-76717~719。

重複 4号竪穴建物及び1号竪穴状遺構に北側を大きく掘り込まれている。現状では3号竪穴建物との新旧関係は不明。

平面形状 北東～南西方向に長い卵円長方形を呈する。

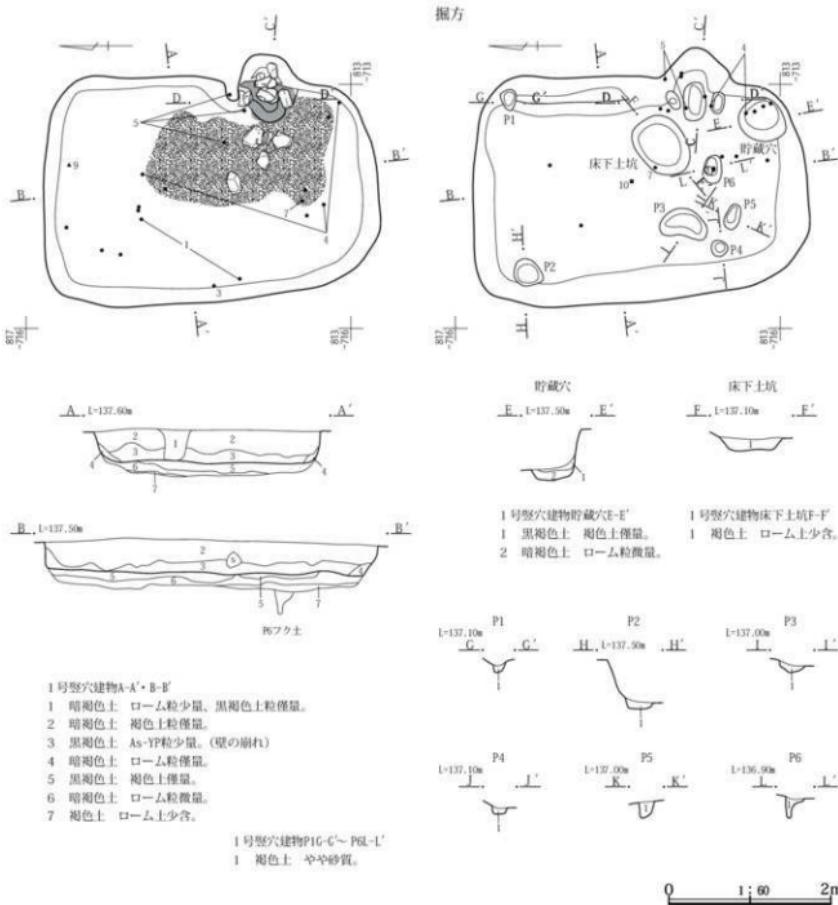
主軸方位 N-14°-E。

規模 檜出長2.44m、短径2.37m、床面までの深さ約0.36m、掘方までの深さは0.36m。確認面の標高は137.29~40m、床面の標高は137.04~17m。

検出面積 5.56m²。

埋土 As-YP粒及び炭化物粒を少量含む暗褐色土が堆積している。

床面 地山を削り出して平坦な床面を形成している。竪



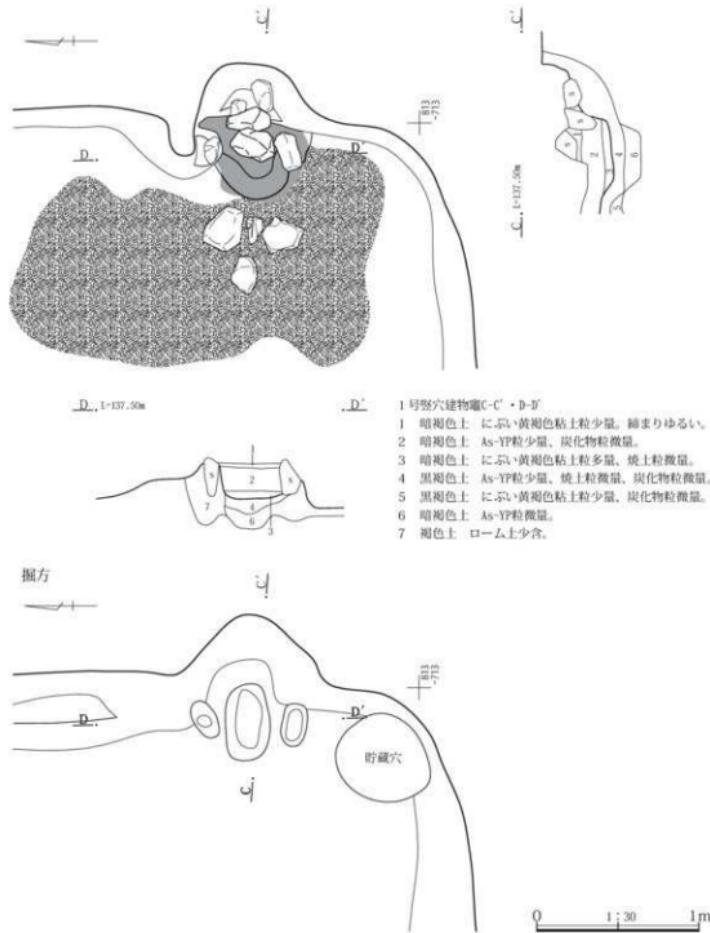
第40図 1号竪穴建物

の焚口の周囲、約2.5m×2.5mの範囲で特に粘土が貼られた範囲が確認出来た。

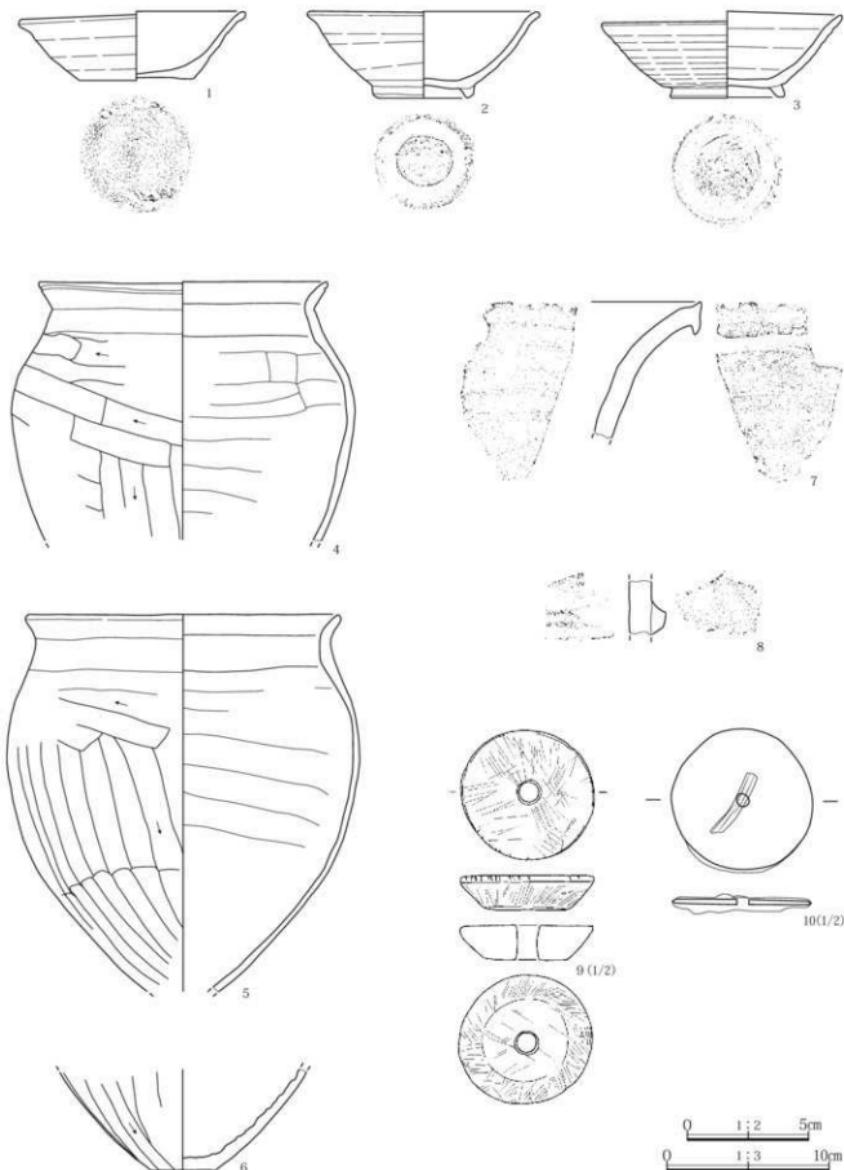
竈 竪穴建物の南東隅の直ぐ北側に位置する。左側を擾乱されている。竈の主軸方位はN-90°-Eで、北西-南東方向である。残存状態は余り良好ではなく、袖石も天井石も原位置を保っておらず、竈の構築材であったと考えられる自然石が奥壁から竪穴建物南東隅付近にまで散

乱した状態で検出され、竈が人為的に破壊された状況を示しているものと考えられる。

竈本体の全長は0.84m、全幅は0.65m、焚口の幅は0.37m、燃焼部の幅は0.23m×0.20m、燃焼部は竪穴建物の壁とほぼ同位置にある。中心部から焚口にかけて焼土が検出されたが良く焼けているというような状況ではない。焚口部から燃焼部の底面にかけては、建物床面よ



第41図 1号竪穴建物竈



第42図 1号竪穴建物出土遺物

第3章 発見された遺構と遺物

りも僅かに低くなっている。

竈掘方 左の袖石の据え付け痕と燃焼部の掘り込みが検出された。残存状態は悪い。

貯蔵穴 検出されなかった。

柱穴 検出されなかった。

周溝 検出されなかった。

掘方 全体に地山を比較的平坦に削り出されている。床面と掘方はほぼ一致している。

床下土坑 検出されなかった。

床下ピット 検出されなかった。

遺物 出土した遺物量は然程に多くはない。11点を図化・掲載した。いずれも竈の周辺から出土した遺物である。

1は竈燃焼部床面直上から出土した10世紀第2四半期の須恵器杯1/4片。

2は東寄りの床面直上から出土した10世紀第2四半期の須恵器椀1/2片。

5は竈燃焼部から焚口付近床面直上にかけて出土した10世紀第2四半期のロクロ土師器甕口縁部～胴部中位片。

7も同じく竈燃焼部から焚口の床面直上にかけて出土した10世紀第2四半期の土師器甕口縁部～胴部中位片。

6は焚口から南西約1mの床面から約8cm上から出土した10世紀第2四半期の土師器甕口縁部～胴部中位片。

8は竈燃焼部から竈燃焼部から焚口南東にかけての床面から約10cm上から出土した10世紀第2四半期の須恵器甕口縁部～胴部上位片。

10は竈燃焼部から焚口南東にかけての床面から約10cm上から出土した10世紀第2四半期の須恵器甕胴部片。

9は竈左袖前の床面直上から出土した10世紀第2四半期の須恵器甕胴部上位片。

3・4は竈燃焼部から竈左袖前にかけての床面直上から出土した10世紀第2四半期の須恵器甕口縁部～胴部中位片及び底部～胴部下位片。

11は埋土中から出土した縄文時代前期後葉諸磧C式土器の深鉢口縁部1/3片。遺構の年代とは無関係の混入した遺物と考えられる。

なお、非掲載であるが、埋土中より土師器片21点、須恵器片16点、竈埋土より硬質泥岩剥片1点(23.7g)が出土している。また、2～4号竪穴建物及び1号竪穴状遺

構埋土一括で土師器片97点、須恵器片24点、縄文土器片1点が出土している。

所見 北側に4号竪穴建物や1号竪穴状遺構によって掘り込まれ、破壊されているため、全容を解明することは出来なかったが、1号竪穴建物と同様、竈が東壁の南東隅寄りに造られた南北に長い隅丸長方形状の竪穴建物であったと考えられる。

先述したように、1号竪穴建物の直ぐ西側に近接して2～4号の3棟の竪穴建物と1号竪穴状遺構が重複して検出された。上面の観察からはそれらの重複の新旧関係を判断することが出来ず、3棟の竪穴建物と1基の竪穴状遺構は同時に発掘調査され、土層断面の観察から4号竪穴建物が最も新しく、1号竪穴状遺構を掘り込んで破壊していること、2・3号竪穴建物はそれぞれ4号竪穴建物と1号竪穴状遺構に掘り込まれていることは判明したもの、2号竪穴建物と3号竪穴建物の新旧関係を明らかにすることは出来なかった。

時期 出土した土器から平安時代中期、10世紀第2四半期のものと考えられる。

(3) 3号竪穴建物(第43・45・47図、PL.35・38・39)

位置 調査区北東隅付近。1号竪穴建物の直ぐ西側に近接する。X=42816～818、Y=76718～721。

重複 4号竪穴建物及び1号竪穴状遺構に北側を大きく掘り込まれている。南東側が2号竪穴建物と重複するが、現時点では両竪穴建物の新旧関係は不明である。

平面形状 北側に4号竪穴建物及び1号竪穴状遺構に掘り込まれて破壊され、北側が大きく調査区北壁外に出ているため全容は不明であるが、北東～南西方向に長い隅丸長方形状を呈していたものと考えられる。

主軸方位 N-7°-E。

規模 検出長径2.80m、検出短径1.48m、床面までの深さ約0.39m、掘方までの深さは0.39m。確認面の標高は137.29～40m、床面の標高は137.03～137.12m。

検出面積 3.83m²。

埋土 炭化物粒を少量含む暗褐色土が堆積する。

床面 地山を削り出して平坦な床面を形成している。

竈 検出されなかった。

貯蔵穴 検出されなかった。

柱穴 検出されなかった。

周溝 検出されなかった。

掘方 全体に地山を比較的平坦に削り出されている。床面と掘方はほぼ一致している。

床下土坑 検出されなかった。

床下ピット 検出されなかった。

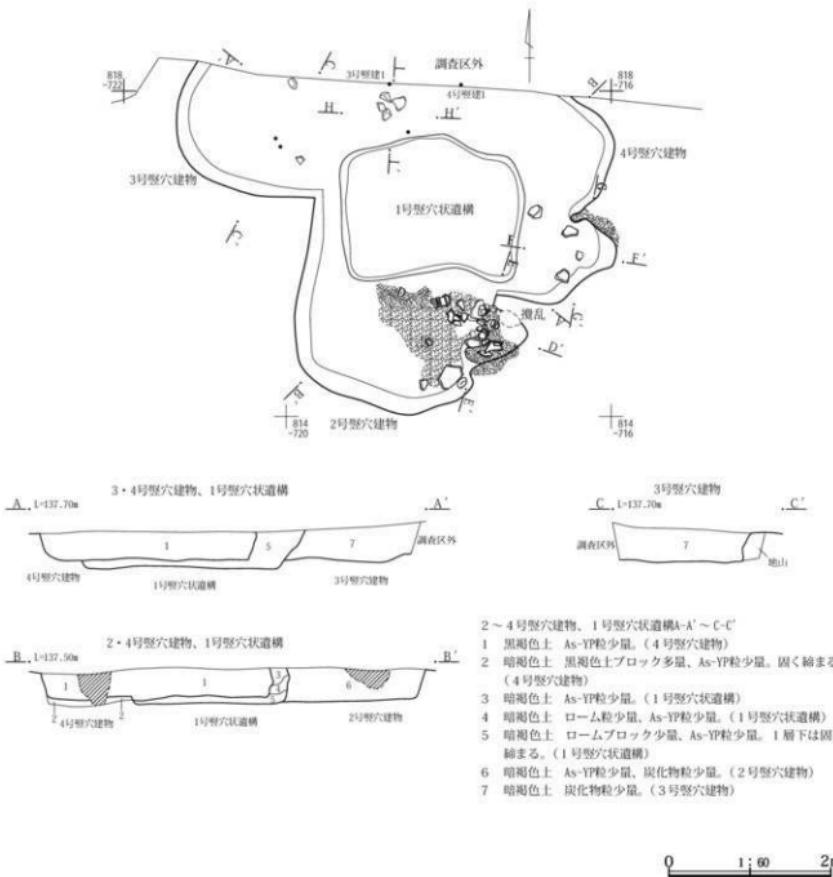
遺物 1点を図化・掲載した。1は調査区北壁際の床面から約13.3cm上から出土した10世紀後半の土師器底部～脚部下位片。

なお、非掲載であるが、埋土中より土師器片13点が出

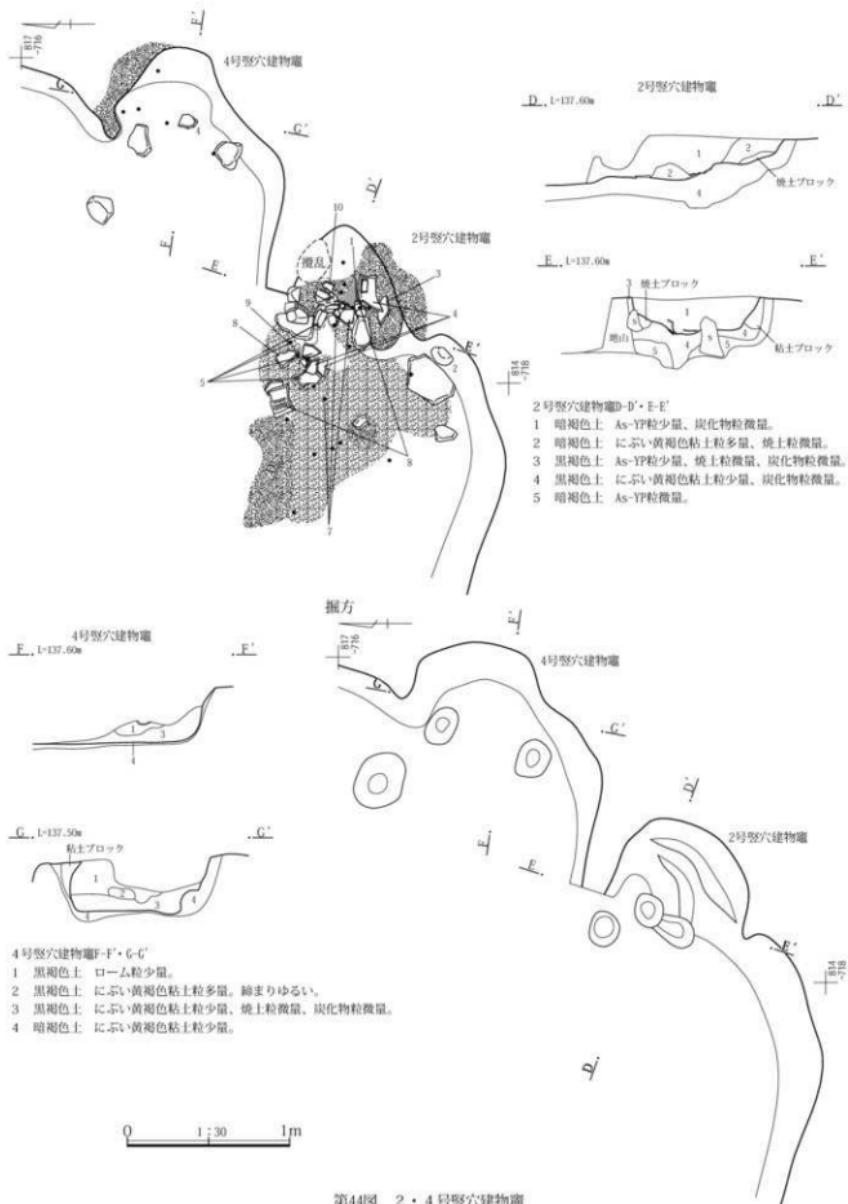
ししている。

所見 東側を4号竪穴建物や1号竪穴状遺構によって掘り込まれ、破壊され、北側は調査区北壁外へと伸びているため、全容を解明することは出来なかった。竪も検出されず、竪穴建物の南西隅を含む約1/4程度の範囲が検出されたに過ぎない。

時期 年代観が明らかな土器の出土が僅少であるため、正確な年代は不明であるが、平安時代中期、10世紀中葉～後半頃のものと考えられる。



第43図 2～4号竪穴建物、1号竪穴状遺構



第44図 2・4号竪穴建物竈

(4) 4号竪穴建物(第43・44・48図、PL.35・38・40・50)

位置 調査区北東隅付近。1号竪穴建物の直ぐ西側に近接する。X=42815~818、Y=-76715~719。

重複 1号竪穴状遺構を掘り込む。

平面形状 北側が調査区外に出るため全容は不明であるが、北東-南西方向に長い潤丸長方形を呈していたものと思われる。

主軸方位 N-72°-W。

規模 検出長径2.74m、短径2.52m、床面までの深さ約0.32m、掘方までの深さは0.32m。確認面の標高は137.29~40m、床面の標高は137.05~137.12m。

検出面積 6.45m²。

埋土 As-YP粒を少量含む黒褐色土が主体で、下層に黒褐色土ブロックを多量に、As-YP粒を少量含み、固く締まった暗褐色土が薄く堆積している。

床面 地山を削り出して平坦な床面を形成している。竪の焚口の周囲、約2.5m×2.5mの範囲で特に粘土が貼られた範囲が確認出来た。

竪 竪穴建物の南東隅の直ぐ北側に位置する。竪の主軸方位はN-74°-Wで、北西-南東方向である。残存状態は余り良好ではなく、袖石も天井石も原位置を保っておらず、竪が人為的に破壊された状況を示しているものと考えられる。

竪本体の全長は1.40m、全幅は1.25m、焚口の幅は0.39m、燃焼部の幅は1.12m×0.58m、燃焼部は竪穴建物の壁よりも若干外側に造られている。焚口部から燃焼部の底面にかけても、建物床面とほぼ同レベルであり、顕著な掘り込みは成されていない。

竪掘方 両袖石の据え付け痕が検出された。残存状態は悪い。

貯藏穴 検出されなかった。

柱穴 検出されなかった。

周溝 検出されなかった。

掘方 全体に地山を比較的平坦に削り出されている。床面と掘方はほぼ一致している。

床下土坑 検出されなかった。

床下ピット 検出されなかった。

遺物 出土した遺物量は然程多くはない。7点を図化・掲載した。

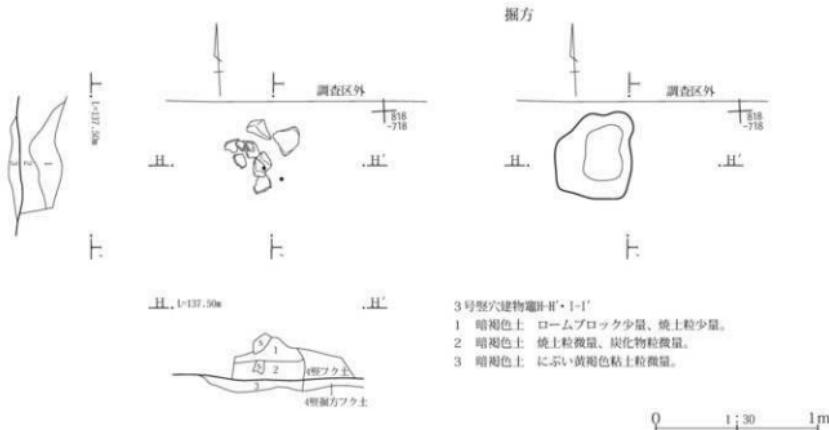
1は竪穴建物の北西寄り、調査区北壁際の床面直上から出土した10世紀第3四半期の須恵器杯1/4片。

4は竪燃焼部床面直上から出土した10世紀第3四半期の須恵器有台椀底部～体部片。

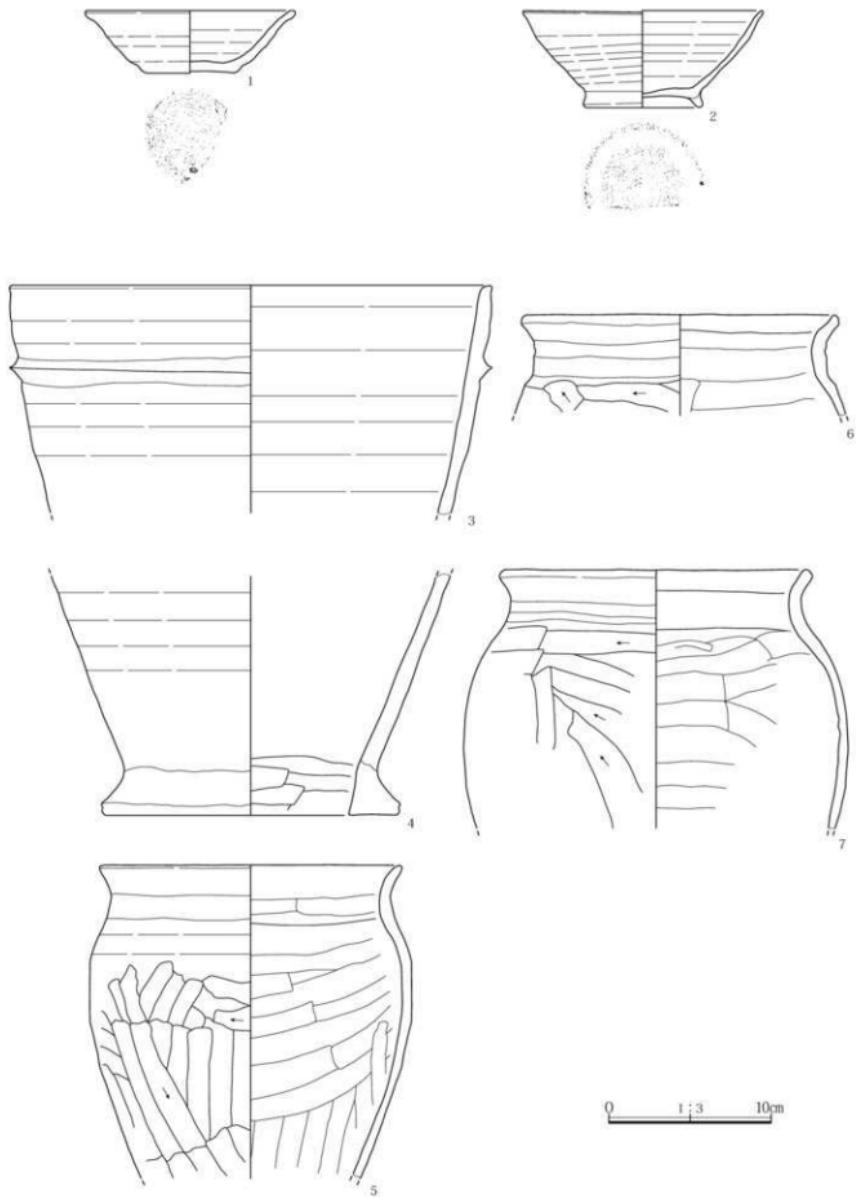
2・3・5～7はいずれも埋土中からの出土である。

5は10世紀第3四半期の須恵器有台椀底部～体部片。

6も同じく10世紀第3四半期の須恵器有台椀底部片。

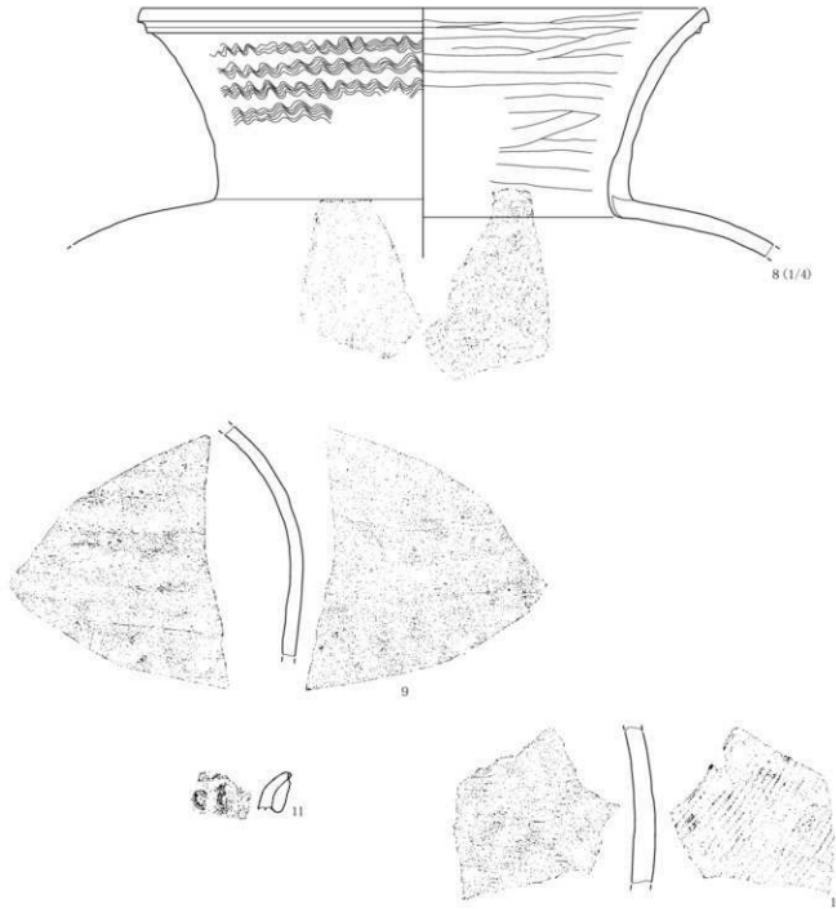


第45図 3号竪穴建物自然石集中簡所微細図



第46図 2号竖穴建物出土遺物(1)

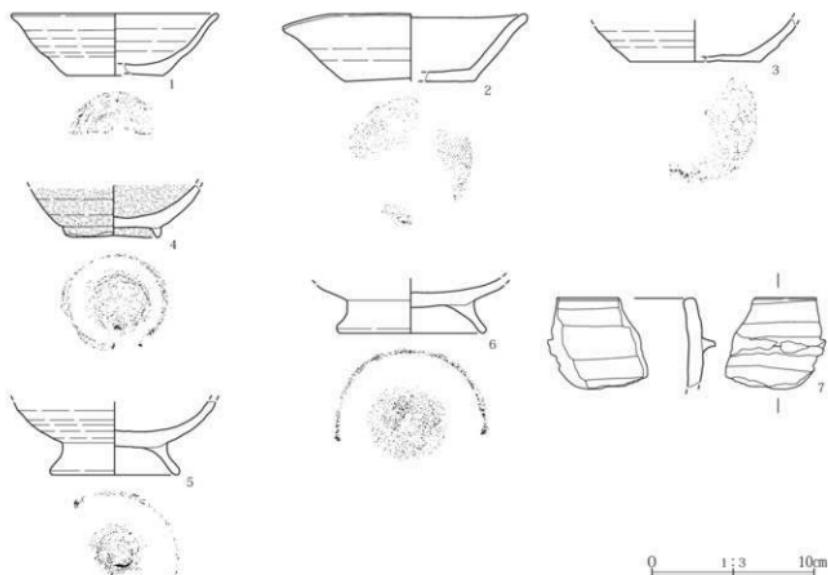
2号竪穴建物



3号竪穴建物



第47図 2号竪穴建物出土遺物(2)、3号竪穴建物出土遺物



第48図 4号竖穴建物出土遺物

7は10世紀第3四半期の須恵器羽釜口縁部～胴部上位片。

2は10世紀第3四半期の須恵器杯1/2片。

3は10世紀第3四半期の須恵器杯底部～体部片。

また、非掲載であるが、埋土中より土師器片29点、須恵器片8点が出土している。

所見 北側が調査区北壁外に出ているため全容を解明することは出来なかったが、1・2号竖穴建物と同様、竈が東壁の南東隅寄りに造られた隅丸長方形状の竖穴建物であったと考えられる。

土層断面の観察から判明した遺構の重複関係から見れば、1～3号竖穴建物や1号竖穴状遺構よりも新しい時期の竖穴建物在るにも拘わらず、出土遺物の量は1・2号竖穴建物よりも少なく、また、竈の残存状態も極めて悪い状態であった。竈の人の為的な廃棄や生活者移転の際ににおける生活用具の撤収ないし廃棄がかなり厳格に行われたであろうことが予想される。

時期 出土した土器から平安時代中期、10世紀第2四半

期のものと考えられる。

(5) 5号竖穴建物(第49・50図、PL.40～42・50)

位置 調査区北西隅付近。69号土坑の直ぐ東側、8号溝の直ぐ西側に近接する。X=42793～799、Y=-76808～814。重複なし。

平面形状 北東～南西方向に長い隅丸長方形状を呈する。

主軸方位 N=58°-E。

規模 長径4.72m、短径4.08m、床面までの深さ約0.03～0.19m、掘方までの深さは0.10～0.23m。確認面の標高は136.39～56m、床面の標高は136.32～136.45m。掘方の標高は136.30～42m。

面積 17.63m²。

埋土 暗褐色土主体。上層の一部には暗褐色土とロームの混土が部分的に堆積する。メインとなるのは黄白色粒子を微量含む暗褐色土。

床面 地山を覗ね削り出した上にロームブロックを微量含む暗褐色土を0.02～0.1m貼り、平坦な床面を形成し

ている。

炉 竪穴建物の中央部から北西に寄った位置に造られる。炉の主軸方位はN-59°-Wで、北西-南東方向である。北西-南東方向に長い不整楕円形状を呈し、南東側に、恰も炉の主軸方向と直交するように南西北東方向に長い、長さ約0.4m、幅約0.2mの自然石が置かれている。炉の大きさは長径0.46m、短径0.32m、深さ0.05mで、主たる埋土はローム粒を微量含む黒褐色土で、底部のごく一部にロームブロックを微量含み、固く締まった暗褐色土が堆積している。残存状態は余り良好ではない。

炉掘方 掘方面から長径0.64m、短径0.55m、深さ0.08mの北西-南東方向に長い、浅い窪状の炉の掘方が検出された。

その西側から、炉の掘方の西端の一部を掘り込んだ、長径0.41m、短径0.32m、深さ0.13mの南北に長い楕円形状の小規模な掘り込みが検出されており、炉の造り替えが企画された可能性が考えられるが、床面における造作は成されていないので、結果的に使用された炉は、竪穴建物造営時に設けられた位置を勤かなかったものと思われる。

貯蔵穴 検出されなかった。

柱穴 竪穴建物の北西・北東・南東・南西の隅部から柱穴と考えられるピットが検出された。いずれも平面形態は小規模ながら、深く、しっかりとした掘方を有している。

P1：北西隅柱穴。平面形態は北西-南東方向に長い不整楕円形状を呈する。主軸方位はN-51°-W。長径0.35m、短径0.30m、深さ0.62m。断面は深いU字型を呈する。埋土はローム粒を微量含む黒褐色土が堆積する。

P2：北東隅柱穴。平面形態は北西-南東方向に長い楕円形状を呈する。主軸方位はN-47°-W。長径0.47m、短径0.38m・深さ0.65m。断面は深く、下部が窄んだU字形状を呈する。埋土はP1と同じ黒褐色土主体。

P3：南東隅柱穴。平面形態は北西-南東に長い楕円形状を呈する。主軸方位はN-28°-W。長径0.33m、短径0.30m、深さ0.52m。断面は深いU字形状を呈する。埋土はP1・2と同じ黒褐色土主体。

P4：南西隅柱穴。平面形態は南北に長い不整楕円形状

を呈する。主軸方位はN-0°。長径0.54m、短径0.44m、深さ0.70m。断面は深い漏斗状を呈する。埋土はP1-3とは異なり、ロームブロックを少量、ローム粒子を微量含む黒褐色土を主体とする。

また、竪穴建物南西側の南壁際、南西隅柱穴P4の南東側からP5が検出された。位置的には柱穴とは考えにくいが、床面から掘り込まれていてことや、規模・形態や断面の形態、埋土などの状況が、これら柱穴と酷似しており、補助的な柱穴として利用されていた可能性が全く考えられなくもない。併せてここに報告しておく。

P5：竪穴建物南西寄り。P4の南東側に隣接する。平面形態は東西に長い不整楕円形状を呈する。主軸方位はN-61°-E。長径0.32m、短径0.29m、深さ0.46m。小規模ながら比較的しっかりとした掘方を有しており、断面はやや口縁部が開いたU字形状を呈する。埋土はP1-3と同じ褐色土主体。

周溝 検出されなかった。

掘方 全体に地山を比較的平坦に削り出されているが中央部から南寄りにかけて、若干凹凸が見られ、やや深く掘り込まれた場所もあるが、床下土坑的な掘り込みではなく、竪穴建物造営時における掘削痕と考えられる。

床下土坑 検出されなかった。

床下ピット 検出されなかった。

遺物 出土した遺物量は然程多くはない。3点を図化・掲載した。

1は竪穴建物の中央西寄りの床面直上から出土したほぼ完形の4世紀後半の土師器甕。

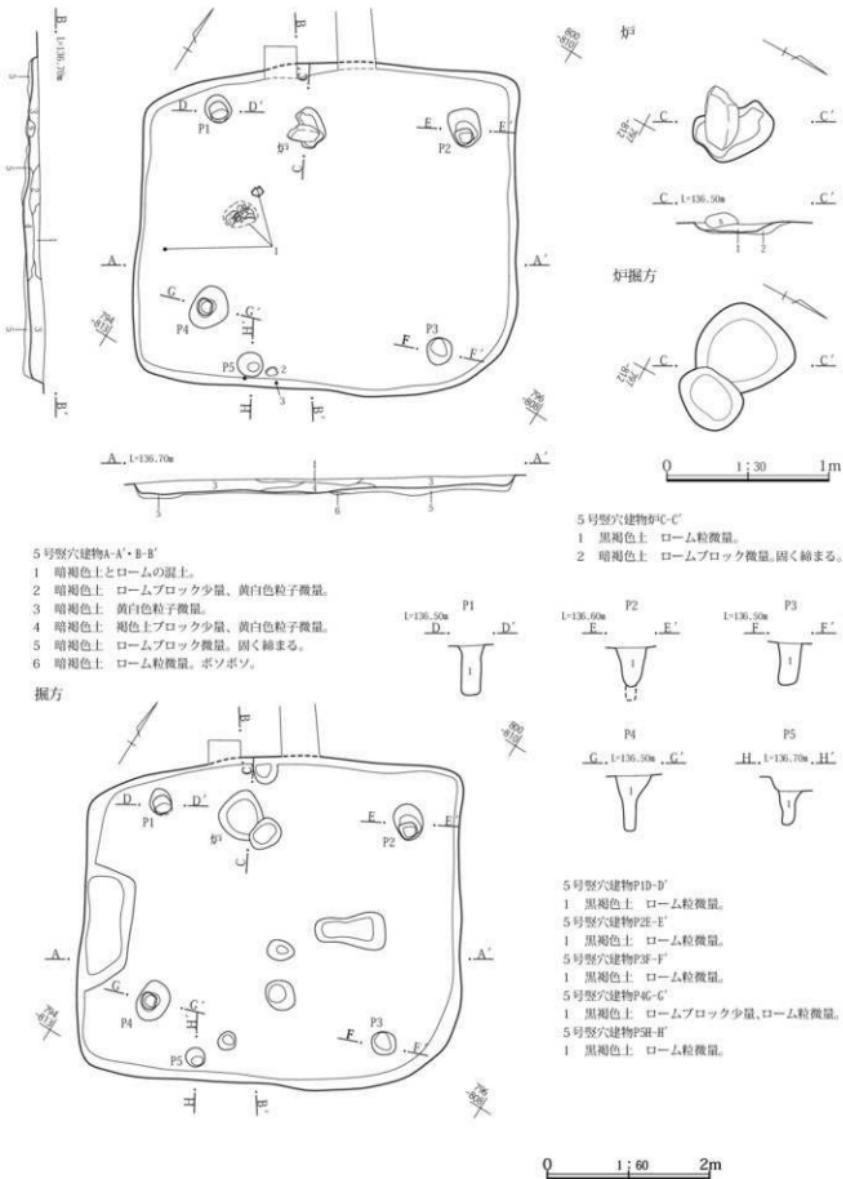
2はP5の直ぐ東側の竪穴建物南壁際床面直上から出土した粗粒輝石安山岩製敲石。

3はその南側、竪穴建物南壁に懸かって出土した粗粒輝石安山岩製敲石。

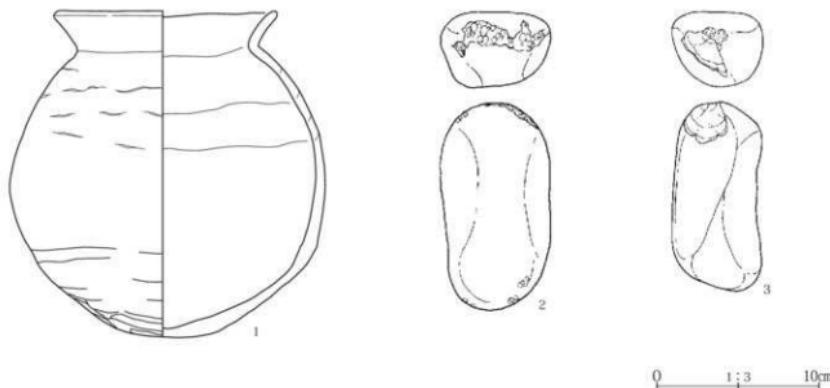
なお、非掲載であるが、埋土中から土師器片33点が出土している。

所見 本遺跡において唯一検出された古墳時代前期の竪穴建物である。上面を削平され、残存状態は極めて悪く、辛うじて貼床も検出されたものの、ほぼ掘方に近い状態での検出であった。

北側に隣接して検出された古墳周濠から出土した埴輪



第49図 5号壁穴建物



第50図 5号竪穴建物出土遺物

片の年代観は5世紀後半頃であり、本竪穴建物と古墳との間には100年近い年代の相違があるので、本竪穴建物と古墳との関連は考えにくい。

この時期の竪穴建物が1棟だけ単独で検出されたわけであるが、単独での竪穴建物の形成は考えにくいので、集落の本体部分が、偶々調査区内に掛からなかっただけのことと見られるが、遺構外から出土した土器には、古墳時代前期の土器は余り見られない点に疑問が残る。

時期 出土した土器から古墳時代前期、4世紀後半頃のものと考えられる。

(6) 1号竪穴状遺構(第43図 PL.35・38)

位置 調査区北東隅付近。1号竪穴建物の直ぐ西側に近接する。X=42815~817、Y=-76717~719。

重複 4号竪穴建物に掘り込まれる。2・3号竪穴建物を掘り込む。

平面形状 東西に長い不整圓丸長方形状を呈する。

主軸方位 N-86°-E。

規模 長径2.25m、短径1.63m、床面までの深さ約0.10m。確認面の標高は137.06m前後、床面の標高は137.07~09m。

検出面積 3.36m²。

埋土 上層にAs-YP粒を少量含む暗褐色土が、中層にローム粒及びAs-YP粒を少量含む暗褐色土が、下層にローム粒及びAs-YP粒を少量含み固く締まった暗褐色土が堆積

している。

床面 地山を削り出して平坦な床面を形成している。

遺物 なし。

所見 上面を4号竪穴建物によって掘り込まれ、破壊されているため、4号竪穴建物の下に残存した部分のみ検出された。

小型の竪穴建物とほぼ同様の規模・形状を有しており、10世紀後半以降、造り付けの窓を有しない竪穴建物の検出事例が各地から報告されていることもあって、平安時代中～後期の竪穴建物の可能性も想定したが、遺物の出土が皆無であり、生活の痕跡が全く検出出来ないことや、北辺及び南辺が屈曲している様子が竪穴建物の状況とは異なることなど、竪穴建物と見るには違和感も少くない。本遺構の用途・機能、性格等については不明と言わざるを得ない。

時期 本遺構を掘り込んでいる4号竪穴建物が10世紀第3四半期のものと考えられているので、本遺構は、10世紀第3四半期以前の、平安時代中期のものと考えられる。

2. 古墳

調査区北東隅から古墳が1基検出された。本遺跡は保渡田古墳群に接しており、保渡田古墳群との関連が想定出来る。

周濠の南端部が約14mに亘って検出されただけで、墳丘部分は調査区に全く懸かっていない。調査区の北側に隣接する場所の現地形に若干の高まりが見られる程度で、墳丘はかなり削平されてしまっているものと見られる。

かつては、この若干の高まりが戦国期の保渡田城の土塁の一部と見做されてきたわけであるが、今回の調査で、保渡田城の土塁の一部では無く、古墳の墳丘の残骸であることが判明した。しかしながら、古墳の墳丘を城郭・

城館の土塁の一部に利用した事例は数多いので、この古墳の墳丘の高まりが、保渡田城と全く無関係であるとまでは言いがたい。いずれにせよ、墳丘部分は調査区外であるため、詳細は不明である。

1号墳(第51図、PL.35・50)

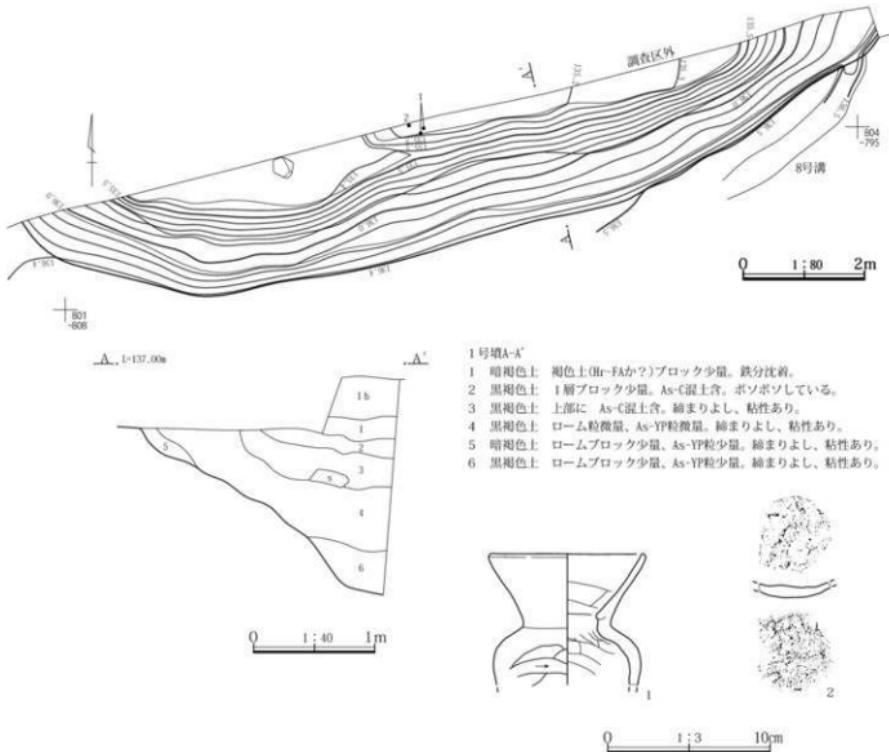
位置 調査区北西隅付近、調査区北壁に懸かる。67号土坑の直ぐ北側に近接する。X=42801~805、Y=-76794~808。

重複 8号溝に東端付近を掘り込まれる。

主軸方位 N-38°~74° -E ~62° -W。

規模 検出全長13.54m、上幅2.12m、下幅0.42m、深さ1.29m。

埋土 締まりよく粘性ある黒褐色土主体。



第51図 1号墳と出土遺物

遺物 2点を図化・掲載した。いずれも調査区北壁際中央の周濠埋土から出土した。

1は5世紀後半の土師器壺口縁部～体部中位片で2と同一個体である可能性が高い。2は同じく5世紀後半の土師器壺底部片で、1と同一個体である可能性が高い。

また、非掲載であるが、埋土中より土師器片2点が出土している。

所見 先述した通り、調査区の北西隅付近から円弧状に巡る古墳周濠の南端部分が検出されたに過ぎず、墳丘部分は完全に調査区北壁外に出ているため、古墳の規模や形状については全く不明である。

古墳周濠周辺の標高は136.30～59m前後、周濠底部の標高は135.15～37m、しっかりとした掘方を有し、断面は口が大きく開いた逆台形状を呈する。

時期 古墳時代中期、5世紀後半頃のものと見られる。

3. 遺構外出土遺物

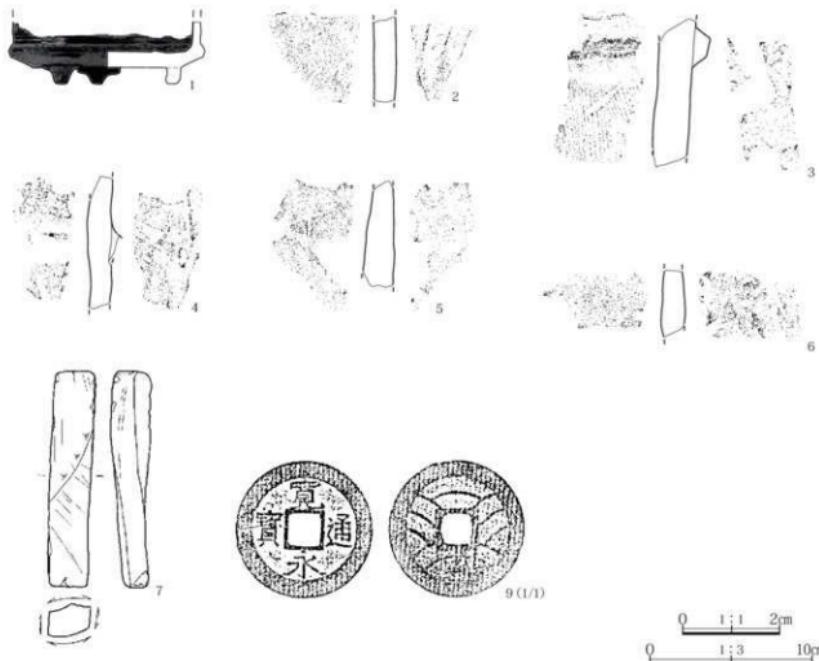
遺構外から出土した中・近世～古墳時代の遺物について述べる。図化・掲載した遺構外出土の遺物は、近世陶器1点、古墳時代の埴輪片5点、近世の磁石1点とディサイド製石製品1点、寛永通宝1点である。土師器・須恵器は遺構外からは出土していない。

なお、細かな調整や特徴等については、後掲の第5表遺物観察表に明示してあるので、詳細については参照されたい。

なお、非掲載であるが、硬質泥岩剥片1点(28.2g)が出土している。

(1) 遺構外出土近世陶器(第52図)

遺構外出土遺物の中、中・近世陶器は1点(1)を図



第52図 遺構外出土近世陶器、埴輪片、石製品、金属製品

第3章 発見された遺構と遺物

化・掲載した。近世の瀬戸・美濃陶器底部片である。

なお、この他、非掲載であるが中世中国磁器片1点、中世国産焼締陶器片3点、中世在地系鉢・鍋片2点、近世国産磁器片30点、近世国産施釉陶器片35点、近世在地系培培・鍋片10点、時期不明陶磁器・土器・瓦類片230点が出土した。

(2) 遺構外出土埴輪片(第52図、PL.50)

遺構外出土遺物の内、埴輪片5点(2~6)を図化・掲載した。いずれも円筒埴輪片と見られる。

円筒埴輪片は他にも5・6号土坑からも出土しており、調査区内から古墳の周濠が検出されていることもあります。また、周辺地域は保渡田古墳群に隣接した古墳の密集地帯であり、埴輪片の出土も頗る。

(3) 遺構外出土石製品(第52図、PL.50)

遺構外出土の石器の内、砥石1点を図化・掲載した。7は砥沢石製砥石1/3片。細長く渦曲した角柱状を呈する。4面とも使用面で特に表裏両面は著しく擦り減っている。他に8はデイサイト製石製品で、写真図版のみ掲載した。

なお、この他、非掲載であるが、ホルンフェルス製砥石片1点と珪質頁岩製砥石片1点が出土している。いずれも中・近世のものと考えられる。

(4) 遺構外出土金属製品(第52図、PL.50)

遺構外出土金属製品の内、古銭1点(23)を図化・掲載した。寛永通宝(四文)で、11波。面、背ともに文字、輪、郭が明瞭。寶の一部がわずかに鑄詰まっている。

第3節 古墳時代前期4世紀後半

以前の遺構と遺物

先述した通り、中・近世～古墳時代前期の遺構確認面の下層、As-Cを含む黒色土下の遺構確認面において、調査区の北東部および南西端部のほぼ南北分部の、調査区内では比較的標高が高い、標高約136.5～137.1mの範囲から縄文時代の土坑3基とピット19基を確認した。調査区北東部からは68号土坑と73～83号ピットが、調査区南西端部からは76・77号土坑と118～125号ピットが検出された。

これらの土坑・ピットの用途・機能については不明である。また、出土遺物も皆無であるため、上面で検出された最も古い時期の遺構である4世紀後半よりも以前であるとしか言いようがない。

なお、各ピットの詳細については、後掲の第3表ピット一覧表に、全時代のピットを纏めて掲載したので、参照されたい。

1. 土坑

先述した通り、本遺跡から検出された縄文時代の土坑は、68・76・77の3基であり、先述したように、68号土坑のみが調査区の北東部から、76・77号が調査区の南西端から検出された。それら縄文時代の土坑は径約0.7m以下の円形ないし不整円形状の平面形状を呈し、深さもほぼ0.1m程度であり、小型で掘方も浅く、規模・形状も比較的類似している。

(1) 68号土坑(第54図、PL.43)

位置 調査区の北東寄り。X=42815～816、Y=-76738。

重複 なし。

主軸方位 N-34° -W。

規模 長径0.63m、上幅0.51m、下幅0.42m、深さ0.13m。

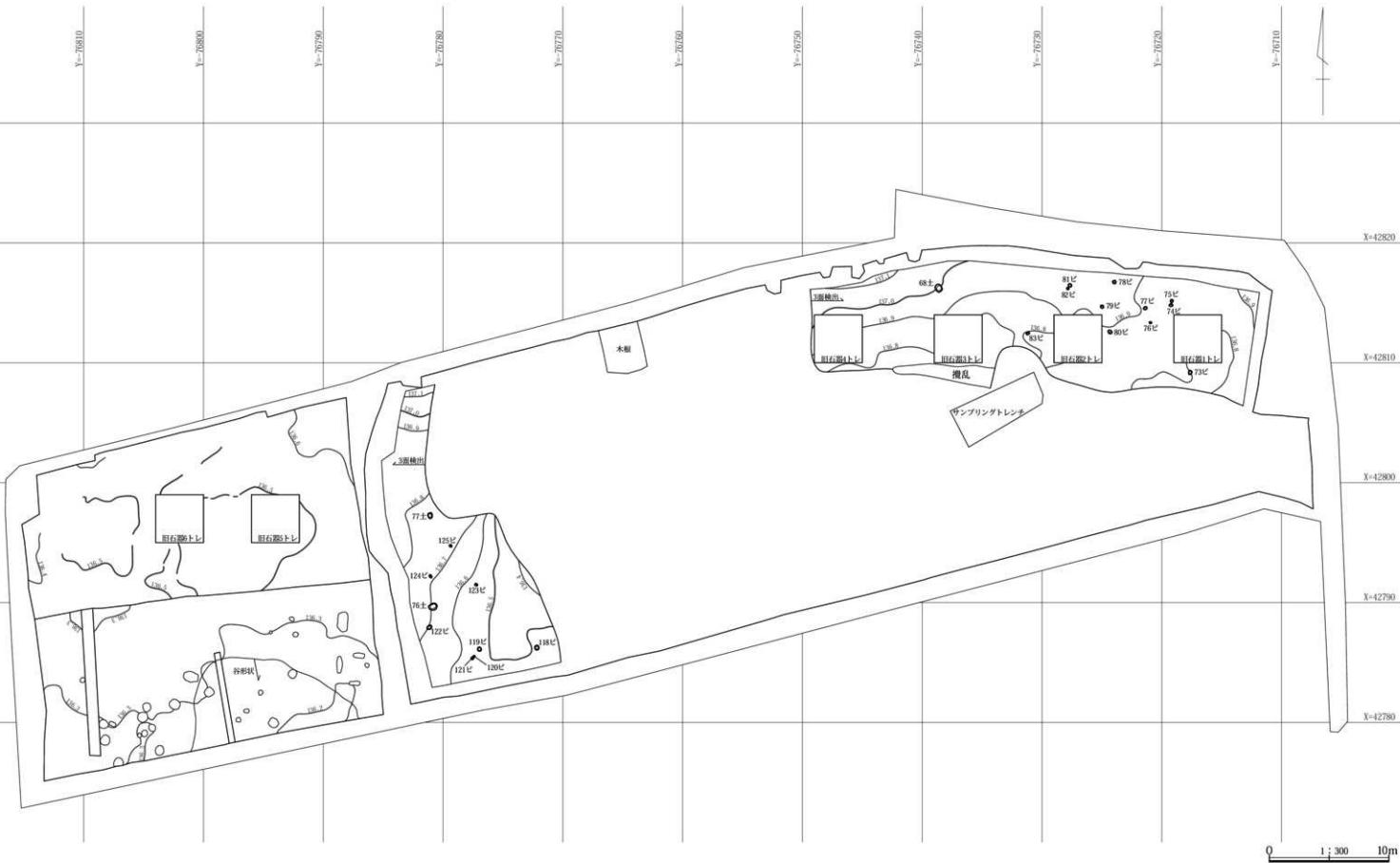
平面形状 南北に長い梢円形状を呈する。

断面形状 浅いレンズ状を呈する。

埋土 白色粒を少量、褐色土ブロック及び褐色粒を僅かに含む黒褐色土が堆積する。

遺物 なし。

所見 用途や機能は不明である。確認面の標高は136.97



第53図 古墳時代前期4世紀後半以前の遺構全体図

～99m前後、底面の標高は136.86m前後である。掘方は浅い。

時期 遺構確認面及び埋土の状態から古墳時代前期である4世紀後半以前のものと考えられる。

(2) 76号土坑(第54図、PL.43)

位置 調査区の南西端。X=42789、Y=-76780～781。

重複 なし。

主軸方位 N-70°-E。

規模 長径0.69m、上幅0.54m、下幅0.34m、深さ0.13m。

平面形状 東西に長い橢円形状を呈する。

断面形状 浅いレンズ状を呈する。

埋土 褐色土ブロック及びAs-Cを僅かに含む黒褐色土が堆積する。

遺物 なし。

所見 用途や機能は不明である。確認面の標高は136.67～71m前後、底面の標高は136.58m前後である。掘方は浅い。

時期 遺構確認面及び埋土の状態から古墳時代前期である4世紀後半以前のものと考えられる。

(3) 77号土坑(第54図、PL.43)

位置 調査区の西端付近のほぼ中央。X=42796～797、Y=-76800～801。

重複 なし。

主軸方位 N-19°-W。

規模 長径0.46m、上幅0.36m、下幅0.24m、深さ0.07m。

平面形状 北西～南東方向に長い橢円形状を呈する。

断面形状 浅いレンズ状を呈する。

埋土 As-Cを僅かに含む黒褐色土が堆積する。

遺物 なし。

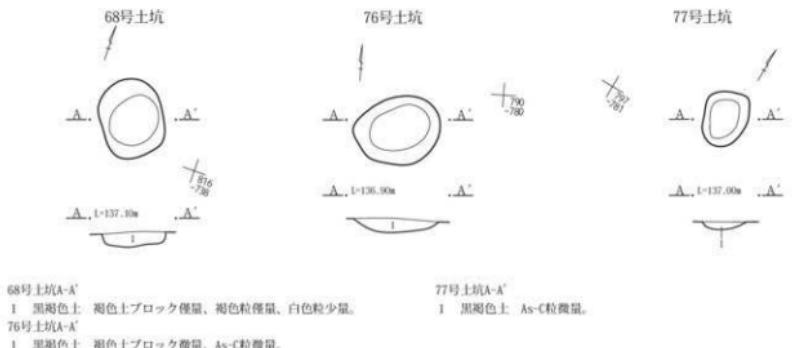
所見 古墳時代前期の4世紀後半よりも古い時期の3基の土坑の中で、最も小規模な土坑である。用途や機能は不明である。確認面の標高は136.78～79m前後、底面の標高は136.72m前後である。掘方は極めて浅い。

時期 遺構確認面及び埋土の状態から古墳時代前期である4世紀後半以前のものと考えられる。

2. ピット(第55図、PL.43～45)

先述した通り、中・近世～古墳時代前期の遺構確認面の下層、As-Cを含む黒色土下の遺構確認面において、調査区東部からは73～83号の11基ピットが、調査区南西部からは118～125号の8基のピットが検出された。

これらのピットの用途・機能については不明である。また、検出された確認面から見て、上面において検出された古墳時代前期である4世紀後半頃の5号竪穴建物よりも古い時期のものであることは確実であるが、いずれにしてもこれらのピットの年代については、古墳時代前



第54図 68・76・77号土坑

期である4世紀後半以前としか言えない。

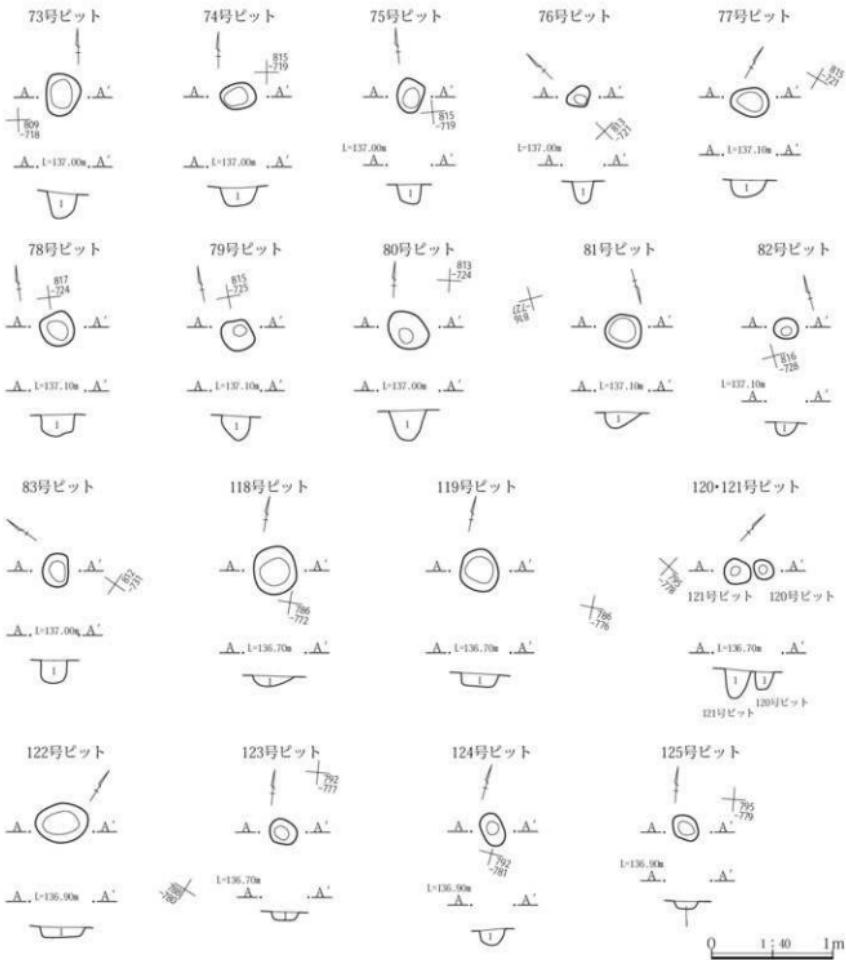
なお、各ピットの詳細については、後掲の第3表ピット一覧表に、全時代のピットを総めて掲載したので、参考照されたい。

3. 遺構出土遺物

遺構外出土縄文土器(第56図、PL.50)

遺構外出土遺物の内、縄文時代の土器について述べる。

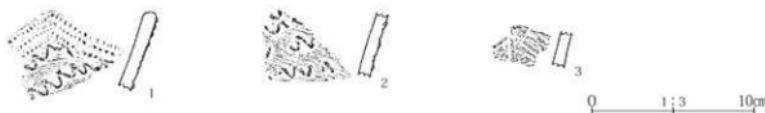
1~3の3点を図化、掲載した。いずれも縄文時代前期後葉の土器である。



第55図 73~83・118~125号ピット

1・2は共に縄文時代前期後葉下島式土器の深鉢1/3片である。1は口縁部片、2は胴部片で共に同一個体と考えられる。

3は縄文時代前期後葉諸磈a式土器の深鉢胴部片である。



第56図 遺構外出土縄文土器

第4節 旧石器確認調査

(第57図、PL.46・47)

すべての遺構の調査を終了した後、旧石器時代の遺物の包蔵の有無を確認するために、X=42810～816、Y=-76713～749の範囲に東西に並列して1～4号の4か所、X=42795～799、Y=-76792～804の範囲に東西に並列して5・6号の2か所の計6か所のトレンチを設定し、確認調査を行った。

最深で、確認面から約1.00mまで掘削したが、旧石器の出土は全く見られなかった。

(1) 1号トレンチ

位置 X=42810～816、Y=-76713～721

規模 東西8.0m×南北6.0m

埋土 1層はローム漸移層。2層は軟質ローム。3層はAs-YP(浅間一板鼻黄色軽石)。4層は硬質ローム。

(2) 2号トレンチ

位置 X=42810～816、Y=-76725～731

規模 東西6.0m×南北6.0m

埋土 1層はローム漸移層。2層は軟質ローム。3層はAs-YP(浅間一板鼻黄色軽石)。4層は硬質ローム。

(3) 3号トレンチ

位置 X=42810～814、Y=-76735～739

規模 東西4.0m×南北4.0m

埋土 1層はローム漸移層。2層は軟質ローム。3層は

As-YP(浅間一板鼻黄色軽石)。4層は硬質ローム。

(4) 4号トレンチ

位置 X=42810～814、Y=-76745～749

規模 東西4.0m×南北4.0m

埋土 1層はローム漸移層。2層は軟質ローム。3層はAs-YP(浅間一板鼻黄色軽石)。4層は硬質ローム。

(5) 5号トレンチ

位置 X=42795～799、Y=-76792～796

規模 東西4.0m×南北4.0m

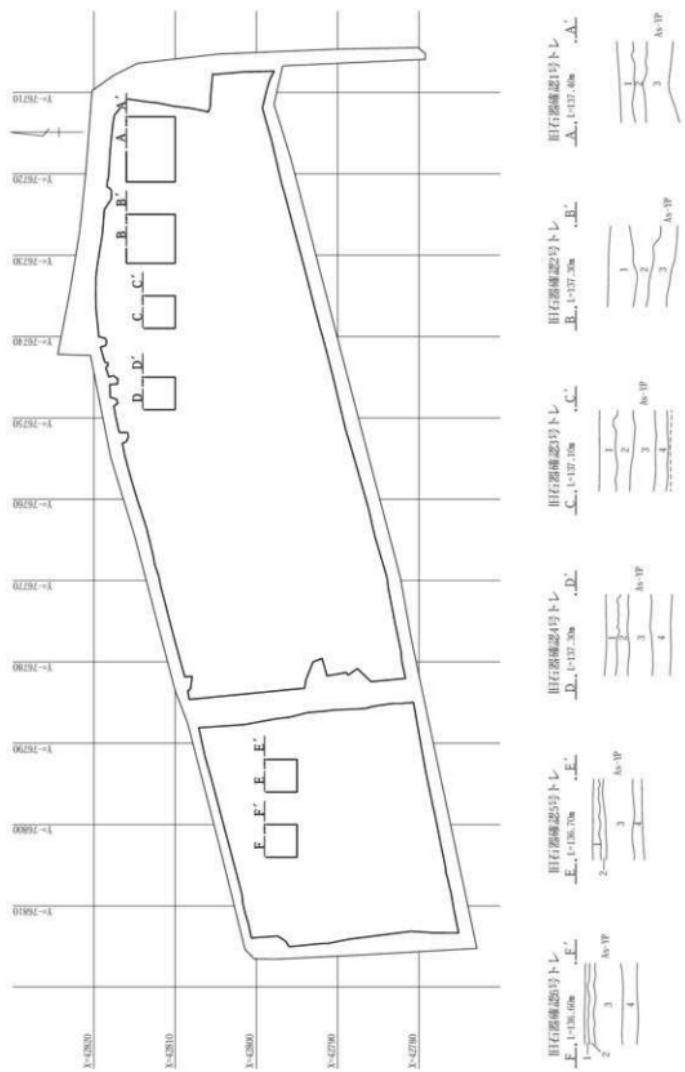
埋土 1層はローム漸移層。2層は軟質ローム。3層はAs-YP(浅間一板鼻黄色軽石)。4層は硬質ローム。

(6) 6号トレンチ

位置 X=42795～799、Y=-76800～804

規模 東西4.0m×南北4.0m

埋土 1層はローム漸移層。2層は軟質ローム。3層はAs-YP(浅間一板鼻黄色軽石)。4層は硬質ローム。



第357図 旧石器窯跡レンチ

第3表 ピット一覧表

| 種別 | 写真用 通番 | ピット 通番 | 位置(座標値) X=42 Y=76 | 平面形状 | 縦横比幅(m) | 重視 | 遺物 | 理土 | 主軸方位 | 時代 参考 |
|----|-----------|-----------|----------------------|------------------------|------------|----------------|-------------------------------|---|---------|----------|
| 1 | 3508 | PL_25 | 1 | 799 719 | 楕円形 | 0.20 0.18 0.22 | | 褐色色土 褐色土ブロック少量、ローム粘膜質。 | N=15° E | 中・近世 |
| 2 | 3508 | PL_25 | 2 | 800 716 | 楕円形 | 0.24 0.21 0.15 | | 褐色色土 褐色土ブロック少量、ローム粘膜質。 | N=8° E | 中・近世 |
| 3 | 3508 | PL_25 | 3 | 799 800 722 | 楕円丸形 | 0.54 0.52 0.23 | | 褐色色土 褐色土ブロック少量、ローム粘膜質。 | N=16° E | 中・近世 |
| 4 | 3508 | PL_25 | 4 | 799 800 710 | 楕円形 | 0.39 0.22 0.23 | | 褐色色土 褐色土ブロック少量、ローム粘膜質。 | N=66° W | 中・近世 |
| 5 | 3508 | PL_25 | 5 | 801 802 713 | 楕円形 | 0.38 0.26 0.19 | 1土坑 | 褐色色土 褐色土ブロック少量、ローム粘膜質、砂粒。 | N=67° W | 中・近世 |
| 6 | 3508 | PL_25 | 6 | 789 751 | 不明 | 0.34 0.14 0.88 | | 1層 褐褐色色土 褐色土ブロック少量、ローム粘膜質。 褐色土、ローム多含。 | N=16° W | 中・近世 |
| 7 | 3508 | PL_19 | 7 | 788 752 | 楕丸長方形 か | 0.36 0.35 0.70 | | 1層 褐褐色色土 褐色土ブロック少量、ローム粘膜質。 褐色土、ローム少含。 | N=0° E | 中・近世 |
| 8 | 3508 | PL_25 | 8 | 790 747 748 | 楕円形 | 0.34 0.37 0.49 | 9ピット | 1層 褐褐色色土 褐色土ブロック少量、ローム少含。 褐色土、ローム少含。 | N=73° E | 中・近世 |
| 9 | 3508 | PL_25 | 9 | 790 748 | 楕円形か | 0.30 0.40 0.33 | 8ピット | 1層 褐褐色色土 褐色土ブロック少量、ローム粘膜質。 褐色土ブロック少量。 | N=13° W | 中・近世 |
| 10 | 3508 | PL_25 | 10 | 790 748 | ほぼ長方形 | 0.26 0.24 0.25 | | 褐色色土 褐色土ブロック少量、ローム粘膜質。 | N=72° E | 中・近世 |
| 11 | 3508 | PL_26 | 11 | 798 749 | 楕円形 | 0.35 0.30 0.18 | | 褐色色土 褐色土ブロック少量、ローム粘膜質。 | N=61° E | 中・近世 |
| 12 | 3508 | PL_26 | 12 | 790 791 752 | 不整方形 | 0.36 0.36 0.27 | 12ピット | 褐色色土 褐色土ブロック少量、ローム粘膜質。 | N=4° E | 中・近世 |
| 13 | 3508 | PL_26 | 13 | 791 752 | 楕円形か | 0.32 0.22 0.19 | 12ピット | 褐色色土 褐色土ブロック少量、ローム少含。 | N=15° E | 中・近世 |
| 14 | 3508 | PL_26 | 14 | 791 792 751 752 「L」の字形 | 楕円形 | 0.67 0.36 0.49 | 井田遺物土跡群 3分 在地系砂場 (廻) 1片 | 褐色色土 褐色土ブロック少量、ローム粘膜質。 褐色色土、褐色土ブロック少量。 褐色色土、ローム少含。 | N=26° W | 中・近世 |
| 15 | 3508 | PL_26 | 15 | 791 750 | 楕円形か | 0.30 0.14 0.34 | 28土坑 | 褐色色土 褐色土ブロック少量、ローム粘膜質。 | N=16° E | 中・近世 |
| 16 | 3508 | PL_26 | 16 | 792 793 749 | 楕円形 | 0.29 0.26 0.19 | | 褐色色土 褐色土ブロック少量、ローム粘膜質。 | N=23° E | 中・近世 |
| 17 | 3508 | PL_26 | 17 | 797 798 751 752 | 楕円形 | 0.69 0.64 0.06 | | 1層 褐褐色色土 褐色土ブロック少量、ローム粘膜質。 褐色色土、褐色土ブロック少量。 褐色色土、ローム少含。 | N=0° E | 中・近世 |
| 18 | 3508 | PL_26 | 18 | 791 743 744 | 不整方形 | 0.30 0.27 0.18 | | 褐色色土 褐色土ブロック少量、ローム粘膜質。 | N=87° E | 中・近世 |
| 19 | 3508 | PL_26 | 19 | 796 757 758 | 楕丸長方形 | 0.35 0.22 0.34 | | 褐色色土 褐色土ブロック少量、ローム粘膜質。 | N=6° E | 中・近世 |
| 20 | 3508 | PL_27 | 21 | 796 756 | 楕円形 | 0.31 0.28 0.40 | 井田遺物土跡群 輪郭跡1片 | 褐色色土 褐色土ブロック少量、ローム粘膜質。 | N=35° E | 中・近世 |
| 21 | 3508 | PL_27 | 22 | 797 798 753 | 楕円形 | 0.47 0.38 0.23 | | 褐色色土 褐色土ブロック少量、ローム粘膜質。 | N=19° E | 中・近世 |
| 22 | 3508 | PL_27 | 23 | 793 794 732 | 不整三角形 か | 0.40 0.38 0.25 | | 褐色色土 褐色土ブロック少量、ローム粘膜質。 | N=4° E | 中・近世 |
| 23 | 3508 | PL_27 | 24 | 792 793 763 764 | 楕丸長方形 | 0.33 0.30 0.25 | | 褐色色土 褐色土ブロック少量、ローム粘膜質。 | N=6° E | 中・近世 |
| 24 | 3508 | PL_27 | 25 | 796 745 | 不整形 | 0.26 0.23 0.25 | 37土坑 | 褐色色土 褐色土ブロック少量、ローム粘膜質。 | N=11° E | 中・近世 |
| 25 | 3508 | PL_27 | 26 | 788 789 753 | 楕円形 | 0.28 0.26 0.38 | | 1層 褐褐色色土 褐色土ブロック少量、ローム粘膜質。 | N=19° E | 中・近世 |
| 26 | 3508 | PL_27 | 27 | 791 792 742 | 長方形 | 0.27 0.23 0.18 | | 褐色色土 褐色土ブロック少量、ローム粘膜質。 | N=5° E | 中・近世 |
| 27 | 3508 | PL_27 | 28 | 794 734 | 楕円形 | 0.39 0.31 0.29 | | 褐色色土 褐色土ブロック少量。 | N=88° E | 中・近世 |
| 28 | 3508 | PL_27 | 29 | 793 794 734 735 | 楕円形 | 0.46 0.30 0.28 | 80土坑 | 褐色色土 褐色土ブロック少量。 | N=4° E | 中・近世 |
| 29 | 3508 | PL_28 | 30 | 790 742 | ほぼ円形 | 0.22 0.16 0.16 | | 褐色色土 褐色土ブロック少量。 | N=2° E | 中・近世 |
| 30 | 3508 | PL_28 | 31 | 793 743 | ほぼ長方形 | 0.22 0.18 0.13 | | 褐色色土 褐色土ブロック少量、砂や小石質。 | N=11° E | 中・近世 |
| 31 | 3508 | PL_28 | 32 | 790 791 752 753 | 長方形 | 0.35 0.29 0.28 | 29土坑 | 褐色色土 褐色土ブロック少量、腐物粘膜質。 | N=73° E | 中・近世 |
| 32 | 3508 | PL_28 | 33 | 794 756 | 楕丸長方形 | 0.19 0.17 0.06 | | 褐色色土 褐色土ブロック少量。 | N=24° E | 中・近世 |
| 33 | 3508 | PL_28 | 35 | 796 761 | 楕円形 | 0.34 0.30 0.38 | | 1層 褐褐色色土 褐色土ブロック少量、(科系) 2 層 褐褐色色土、黒褐色灰質、ローム少含。 | N=33° E | 中・近世 |
| 34 | 3508 | PL_28 | 36 | 792 753 | 楕円形 | 0.29 0.26 0.51 | | 1層 褐褐色色土 褐色土ブロック少量、(科系) 2 層 褐褐色色土、黒褐色灰質、ローム少含。 | N=48° E | 中・近世 |
| 35 | 3508 | PL_28 | 40 | 788 755 | 楕円形 | 0.32 0.28 0.28 | | 褐色色土 褐色土ブロック少量、ローム粘膜質。(科系) | N=37° E | 中・近世 |
| 36 | 3508 | PL_28 | 41 | 788 789 754 755 | 楕円形 | 0.43 0.37 0.66 | | 1層 黑褐色色土 褐色土ブロック少量、(科系) 2 層 褐褐色色土、黒褐色灰質、ローム少含。 | N=64° E | 中・近世 |
| 37 | 3508 | PL_29 | 42 | 793 792 | 楕丸長方形 | 0.35 0.30 0.18 | | 褐色色土 褐色土ブロック少量、(科系) 2 褐色色土、褐色土ブロック少量、(科系) 2 | N=12° E | 中・近世 |
| 38 | 3508 | PL_29 | 43 | 795 792 793 | 楕円形 | 0.23 0.16 0.25 | | 褐色色土 褐色土ブロック少量、(科系) 2 | N=78° E | 中・近世 |
| 39 | 3508 | PL_29 | 44 | 792 793 794 | 円形 | 0.28 0.28 0.15 | | 褐色色土 褐色土ブロック少量、ローム粘膜質。 | N=0° E | 中・近世 |
| 40 | 3508 | PL_29 | 45 | 795 797 798 799 | 楕円形 | 0.44 0.39 0.24 | | 褐色色土 褐色土ブロック少量、ローム粘膜質。 | N=43° E | 中・近世 |
| 41 | 3508 | PL_29 | 47 | 795 792 | 楕丸長方形 | 0.24 0.21 0.25 | | 褐色色土 褐色土ブロック少量。 | N=32° E | 中・近世 |
| 42 | 3508 | PL_29 | 48 | 796 793 | 楕円形 | 0.22 0.17 0.20 | | 褐色色土 褐色土ブロック少量、ローム粘膜質。 | N=43° E | 中・近世 |
| 43 | 3508 | PL_29 | 49 | 794 799 | 楕円形 | 0.43 0.35 0.13 | | 褐色色土 褐色土ブロック少量、ローム粘膜質。 | N=33° E | 中・近世 |
| 44 | 3508 | PL_29 | 51 | 796 795 | 楕丸長方形 | 0.25 0.19 0.25 | | 褐色色土 褐色土ブロック少量、ローム粘膜質。 | N=17° E | 中・近世 |
| 45 | 3508 | PL_30 | 53 | 794 796 | 不整円形 | 0.31 0.26 0.14 | | 褐色色土 褐色土ブロック少量、ローム粘膜質。 | N=0° E | 中・近世 |
| 46 | 3508 | PL_30 | 54 | 793 796 797 798 | 楕円形 | 0.41 0.35 0.20 | | 褐色色土 褐色土ブロック少量、ローム粘膜質。 | N=82° E | 中・近世 |
| 47 | 3508 | PL_30 | 55 | 795 796 | 楕丸長方形 | 0.44 0.34 0.19 | | 褐色色土 ロームブロック多量。 | N=3° E | 中・近世 |
| 48 | 3508 | PL_30 | 58 | 795 799 | 不整円形 | 0.45 0.36 0.23 | | 褐色色土 褐色土ブロック少量、ローム粘膜質。 | N=37° E | 中・近世 |
| 49 | 3508 | PL_30 | 61 | 794 800 801 | ほぼ円形 | 0.39 0.38 0.21 | | 褐色色土 ローム粘膜質。 | N=21° E | 中・近世 |
| 50 | 3508 | PL_30 | 63 | 797 799 | 楕円形 | 0.28 0.21 0.23 | | 褐色色土 褐色土ブロック少量、ローム粘膜質。 | N=29° E | 中・近世 |
| 51 | 3508 | PL_30 | 64 | 798 802 | 不整形 | 0.44 0.25 0.09 | | 褐色色土 褐色土ブロック少量、ローム粘膜質。 | N=32° E | 中・近世 |
| 52 | 3508 | PL_30* | 65 | 795 796 801 802 | 不整円形 | 0.51 0.42 0.37 | | 褐色色土 褐色土ブロック少量、ローム粘膜質。 | N=36° E | 中・近世 |
| 53 | 3508 | PL_31 | 66 | 799 804 | 方形 | 0.24 0.24 0.17 | | 褐色色土 褐色土ブロック少量、ローム粘膜質。 | N=0° E | 中・近世 |
| 54 | 3508 | PL_31 | 67 | 798 804 | 楕円形 | 0.31 0.26 0.14 | | 褐色色土 褐色土ブロック少量、ローム粘膜質。 | N=3° E | 中・近世 |
| 55 | 3508 | PL_31 | 68 | 799 806 | 不整円形 | 0.36 0.27 0.17 | | 褐色色土 ローム粘膜質。 | N=87° E | 中・近世 |
| 56 | 3508 | PL_31 | 69 | 793 803 | 楕円形 | 0.27 0.26 0.10 | | 褐色色土 褐色土ブロック少量、ローム粘膜質。 | N=2° E | 中・近世 |
| 57 | 3508 | PL_31 | 70 | 795 802 | 楕円形 | 0.31 0.28 0.06 | | 褐色色土 褐色土ブロック少量、ローム粘膜質。 | N=29° E | 中・近世 |

第3章 発見された遺構と遺物

| 横列 | 写真用 ビット 通番 | 位置(座標値) X=42 Y=76 | 平面形状 | 補助断面(m) | | | 重複 | 遺物 | 埋土 | 主軸方位 備考 | |
|-----|------------------|----------------------|---------|---------|--------------|------|------|------|------------------------|--|---------------------|
| | | | | 長径 | 短径 | 深さ | | | | | |
| 58 | 37回 PL-31 | 71 | 791・792 | 801・802 | 楕円形 | 0.51 | 0.47 | 0.38 | 非開掘遺物項垂岩 1片 | 褐色土 褐色土ブロック少量、ローム粒微量。 | N-17°-E 中・近世 |
| 59 | 37回 PL-31 | 72 | 794 | 762 | 楕円形 | 0.50 | 0.47 | 0.34 | | 1個 褐色土 褐色土ブロック少量、ローム粒微量。 2個 褐色土 ローム土塊合。 | N-3°-E 中・近世 |
| 60 | 55回 PL-43 | 73 | 809 | 717 | 楕円形 | 0.34 | 0.27 | 0.19 | | 褐色土 褐色土ブロック少量、ローム粒微量。 | N-10°-E 4世紀後半 以前 |
| 61 | 55回 PL-43 | 74 | 814 | 719 | 楕円形 | 0.28 | 0.20 | 0.17 | | 褐色土 褐色土ブロック少量、ローム粒微量。 | S-7°-N 4世紀後半 以前 |
| 62 | 55回 PL-43 | 75 | 815 | 719 | 不整梢円形 | 0.28 | 0.20 | 0.20 | | 褐色土 褐色土ブロック少量、ローム粒微量。 | N-18°-E 4世紀後半 以前 |
| 63 | 55回 PL-43 | 76 | 813 | 720・721 | 不整梢 | 0.18 | 0.18 | 0.17 | | 褐色土 褐色土ブロック少量、ローム粒微量。 | S-45°-E 4世紀後半 以前 |
| 64 | 55回 PL-43-44 | 77 | 814 | 721 | 楕円形 | 0.32 | 0.24 | 0.13 | | 褐色土 褐色土ブロック少量、ローム粒微量。 | N-67°-E 4世紀後半 以前 |
| 65 | 55回 PL-44 | 78 | 816 | 723・724 | 不整梢円形 | 0.27 | 0.27 | 0.19 | | 褐色土 褐色土ブロック少量、ローム粒微量。 | N-17°-E 4世紀後半 以前 |
| 66 | 55回 PL-44 | 79 | 814 | 724・725 | 不整梢円形 | 0.25 | 0.25 | 0.23 | | 褐色土 褐色土ブロック少量、ローム粒微量。 | N-18°-E 4世紀後半 以前 |
| 67 | 55回 PL-44 | 80 | 812 | 724 | 楕円形 | 0.34 | 0.29 | 0.26 | | 褐色土 褐色土ブロック少量、ローム粒微量。 | N-35°-E 4世紀後半 以前 |
| 68 | 55回 PL-44 | 81 | 816 | 727 | 楕円形 | 0.39 | 0.27 | 0.11 | | 褐色土 褐色土ブロック少量、ローム粒微量。 | N-73°-E 4世紀後半 以前 |
| 69 | 55回 PL-44 | 82 | 816 | 727 | 楕円形 | 0.19 | 0.16 | 0.14 | | 褐色土 褐色土ブロック少量、ローム粒微量。 | N-75°-E 4世紀後半 以前 |
| 70 | 55回 PL-44 | 83 | 812 | 731 | ほぼ梢円形 | 0.27 | 0.19 | 0.21 | | 黒褐色土 黑色土ブロック少量、ローム粒微量。 | N-58°-E 4世紀後半 以前 |
| 71 | 37回 PL-32 | 86 | 790 | 757 | 楕丸長方形 | 0.36 | 0.32 | 0.16 | 1断立P4 5断立 P2 102ビット | 黒褐色土 黑色土ブロック少量、ローム粒微量。 | N-12°-E 中・近世 |
| 72 | 37回 PL-32 | 87 | 791 | 957・958 | 長方形 | 0.40 | 0.31 | 0.60 | 88ビット | 褐色土 褐色土ブロック少量、ローム粒微量。 | N-83°-W 中・近世 |
| 73 | 37回 PL-32 | 88 | 791 | 757・758 | 楕円形か | 0.30 | 0.27 | 0.19 | 87ビット As-YP粒微量。 | 褐色土 褐色土ブロック少量、ローム粒微量。 | N-80°-W 中・近世 |
| 74 | 37回 PL-32 | 89 | 792 | 757・758 | 方形 | 0.25 | 0.24 | 0.30 | 4断立P3 | 褐色土 褐色土ブロック少量、ローム粒少量。 | N-0°-E 中・近世 |
| 75 | 38回 PL-32 | 91 | 791 | 758 | 円形 | 0.30 | 0.30 | 0.44 | 開拓遺物 滅多器 古瓦 粗型瓦質 | 褐色土 褐色土ブロック少量、ローム粒微量。 | N-17°-E 中・近世 |
| 76 | 38回 PL-32 | 93 | 789 | 759・760 | 楕円形 | 0.37 | 0.23 | 0.18 | 5断立P6 | 褐色土 褐色土ブロック少量、ローム粒微量。 | N-43°-W 中・近世 |
| 77 | 38回 PL-32 | 95 | 791 | 754 | ほぼ楕丸方 形 | 0.25 | 0.25 | 0.14 | | 褐色土 褐色土ブロック少量、ローム粒微量。 | N-17°-E 中・近世 |
| 78 | 38回 PL-32 | 99 | 786・787 | 758 | 方形又は長 方形か | 0.20 | 0.28 | 0.20 | 71土机 | 褐色土 褐色土ブロック少量、ローム粒微量。 | N-3°-E 中・近世 |
| 79 | 38回 PL-32 | 100 | 787 | 759 | 楕円形 | 0.44 | 0.32 | 0.43 | 非開掘遺物在地系 始終(編)111 | 褐色土 褐色土ブロック少量、ローム粒微量。 | N-10°-W 中・近世 |
| 80 | 38回 PL-32 | 101 | 790 | 756・757 | 不整梢円形 | 0.38 | 0.28 | 0.43 | | 褐色土 褐色土ブロック少量、ローム粒微量。 | N-24°-E 中・近世 |
| 81 | 38回 PL-33 | 102 | 790 | 757・758 | ほぼ長方形 | 0.30 | 0.24 | 0.19 | 86ビット | 褐色土 褐色土ブロック少量、ローム粒微量。 | N-70°-W 中・近世 |
| 82 | 38回 PL-33 | 103 | 791 | 756 | 不整梢円形 | 0.36 | 0.31 | 0.36 | | 褐色土 褐色土ブロック少量、ローム粒微量。 | N-12°-E 中・近世 |
| 83 | 38回 PL-33 | 105 | 787 | 758・759 | 不整梢丸形 | 0.39 | 0.23 | 0.20 | | 褐色土 褐色土ブロック少量、ローム粒微量。 | N-14°-E 中・近世 |
| 84 | 38回 PL-33 | 106 | 788 | 758・759 | ほぼ楕丸形 右 | 0.26 | 0.23 | 0.10 | | 褐色土 褐色土ブロック少量、ローム粒微量。 | N-25°-E 中・近世 |
| 85 | 38回 PL-33 | 107 | 789・790 | 761 | 楕円形 | 0.45 | 0.36 | 0.34 | | 褐色土 褐色土ブロック少量、ローム粒微量。 | N-6°-W 中・近世 |
| 86 | 38回 PL-33 | 108 | 786 | 759 | 楕円形か | 0.25 | 0.34 | 0.19 | | 褐色土 褐色土ブロック少量、ローム粒微量。 | N-6°-E 中・近世 |
| 87 | 38回 PL-33 | 110 | 787 | 761 | 不整梢 | 0.27 | 0.25 | 0.45 | | 褐色土 褐色土ブロック少量、ローム粒微量。 | N-28°-E 中・近世 |
| 88 | 38回 PL-33-34 | 111 | 791 | 759・760 | 楕丸長方形 | 0.34 | 0.26 | 0.18 | | 褐色土 褐色土ブロック少量、ローム粒微量。 | N-7°-W 中・近世 |
| 89 | 38回 PL-34 | 112 | 790 | 761 | ほぼ直方形 | 0.39 | 0.25 | 0.32 | | 褐色土 褐色土ブロック少量、ローム粒微量。 | N-84°-E 中・近世 |
| 90 | 38回 PL-34 | 113 | 789 | 762 | 不整梢円形 | 0.27 | 0.26 | 0.38 | | 褐色土 褐色土ブロック少量、ローム粒微量。 | S-4°-E 中・近世 |
| 91 | 38回 PL-34 | 114 | 788 | 760・761 | 楕丸長方形 | 0.31 | 0.29 | 0.18 | | 褐色土 褐色土ブロック少量、ローム粒微量。 | S-5°-E 中・近世 |
| 92 | 38回 PL-34 | 115 | 786 | 761 | 円形か | 0.28 | 0.31 | 0.70 | | 褐色土 褐色土ブロック少量、ローム粒微量。 | N-17°-E 中・近世 |
| 93 | 38回 PL-34 | 116 | 791 | 762・763 | 楕円形か | 0.20 | 0.27 | 0.26 | | 褐色土 褐色土ブロック少量、ローム粒微量。 | N-1°-E 中・近世 |
| 94 | 38回 PL-44 | 118 | 796 | 771・772 | 楕円形 | 0.39 | 0.34 | 0.10 | | 褐色土 褐色土ブロック少量、ローム粒微量。 | N-19°-E 4世紀後半 以前 |
| 95 | 38回 PL-45 | 119 | 785・786 | 776・777 | 楕円形 | 0.35 | 0.29 | 0.10 | | 褐色土 褐色土ブロック少量、ローム粒微量。 | N-26°-E 4世紀後半 以前 |
| 96 | 38回 PL-45 | 120 | 795 | 777 | 楕円形 | 0.18 | 0.15 | 0.14 | | 褐色土 褐色土ブロック少量、ローム粒微量。 | N-88°-E 4世紀後半 以前 |
| 97 | 38回 PL-45 | 121 | 795 | 777 | 楕円形 | 0.22 | 0.20 | 0.25 | | 褐色土 褐色土ブロック少量、ローム粒微量。 | N-55°-E 4世紀後半 以前 |
| 98 | 38回 PL-45 | 122 | 787・788 | 780・781 | 楕円形 | 0.42 | 0.31 | 0.14 | | 褐色土 褐色土ブロック微量。As-C粒微量。 | N-43°-E 4世紀後半 以前 |
| 99 | 38回 PL-45 | 123 | 791 | 777 | 楕円形 | 0.24 | 0.20 | 0.08 | | 褐色土 ローム土少含。 | N-45°-E 4世紀後半 以前 |
| 100 | 38回 PL-45 | 124 | 792 | 780・781 | 楕丸長方形 | 0.24 | 0.17 | 0.15 | | 褐色土 ローム土少含。 | N-38°-E 4世紀後半 以前 |
| 101 | 38回 PL-45 | 125 | 794 | 779 | 楕円形 | 0.25 | 0.19 | 0.08 | | 褐色土 ローム土少含。 | N-48°-E 4世紀後半 以前 |

第4章 火山灰分析の成果とまとめ

1. 調査の目的と意義

榛名山南麓の井野川の左岸、扇状地形の左端の微高地に位置する本遺跡では、ローム台地上で浅間山起源のテフラの存在が推定されたため、中・近世の井戸を掘削する際に、(株)火山灰考古学研究所に委託して、テフラの確認作業を実施することとした。

基本土層の暗褐色土やローム漸位層上面で確認された井戸と考えられる遺構を人力で掘削したものの約4mもの深さがあるために、重機で掘削することとした。その結果、テフラ検出分析で認められたのは、下位から約2.2万年前に浅間火山から噴出した浅間白系軽石(As-Sr)、約2万年前の浅間大窪沢第1軽石(As-Ok1)や大窪沢第2軽石(As-Ok2)などの浅間大窪沢軽石群(As-Ok Group)、浅間板鼻黄色軽石(As-YP)、それにAs-HIに由来する可能性が高い地層も確認された。

このうち、少なくとも比較的厚く堆積した砂質水成堆積物は、層位から相馬ヶ原扇状地の堆積物と考えられる。この堆積層の下位からは植物痕跡が確認される黒色粘質層も確認されたが、その成因は今後の課題である。

また、上位の黒ボク土の基底部に灰色の細粒軽石が含まれており、テフラ検出分析では、約1.2万年前の浅間総社軽石(As-Sj)と思われる。黒ボク土の中位には、淡色黒ボク土(早田1990)と考えられる比較的明色の土層も認められた。

さらに、3世紀後半に浅間火山から噴出した浅間C軽石(As-C)、6世紀初頭の榛名二ツ岳渋川テフラ(Hr-FA)や、6世紀中葉の榛名二ツ岳伊香保テフラ(Hr-FP)、1108(天仁元)年の浅間Bテフラ(As-B)が検出されている。

一方、調査区の北側と西側に認められる土壌状の高まりについて、その堆積状況でAs-Cの濃集層を含む黒ボク土の上位に、Hr-FAの二次堆積物、Hr-FPの最上部の火山灰層、Hr-FP火山泥流堆積物、As-B、そしてその上に盛土が認められた。盛土は中世と推定されているが、それは指標テフラとの層位関係とも矛盾しない。

2. 成果

保渡田屋敷廻り遺跡において、野外調査(地質調査)とテフラ分析(テフラ検出分析)を実施した。

その結果、上位から順に、浅間A軽石(As-A、1783年)、浅間Bテフラ(As-B、1108年)、榛名二ツ岳伊香保テフラ(Hr-FA、6世紀中葉)、榛名二ツ岳渋川テフラ(Hr-FA、6世紀初頭)、浅間C軽石(As-C、3世紀後半)、浅間総社軽石(As-Sj、約1.2万年前)、浅間板鼻黄色軽石(As-YP、約1.65~1.5万年前)、浅間大窪沢軽石群(As-Ok Group、約2万年前)、浅間白糸軽石(As-Sr、約2.2万年前)などの浅間山や榛名山起源のテフラ層がいくつも検出されたが、浅間板鼻褐色軽石(As-BP)の堆積は確認されなかった。

その結果、相馬ヶ原扇状地上に位置する保渡田屋敷廻り遺跡では、As-YP以前での相馬ヶ原扇状地の堆積の状況を把握できた。さらに、As-BとAs-Aの間から中世と推定される盛土が検出され、屋敷廻りの地名を想定される状況が認められた。

(1)はじめに

北関東地方西部の榛名山南東麓には、榛名や浅間など北関東地方とその周辺に分布する火山のほか、中部地方や中国地方、さらには九州地方など遠方の火山から噴出したテフラ(火山碎屑物、火砕物)が数多く降灰している。とくに、後期更新世以降に降灰したそれらの多くについては、層相や年代、さらに岩石記載的な特徴がテフラ・カタログ(たとえば町田・新井2011)などに収録されており、考古遺跡などでテフラに関する調査分析を行って、年代や層位が明らかな指標テフラを検出することで、遺物包含層や遺構の年代などに関する情報が得られるようになっている。

保渡田屋敷廻り遺跡の発掘調査においても、層位や年代が不明なテフラや土層などが検出されたことから、野外調査(地質調査)を実施して、土層やテフラの層序記載ならびに高純度での分析試料の採取を行った。さらに、

実験室内でテフラ分析(テフラ検出分析)を行って、指標テフラの検出同定を実施した。

(2) 調査分析地点の土層層序

①深掘地点・調査区北壁

深掘地点(2号深掘トレーナー)と調査区北壁で、本遺跡の比較的下位の堆積物をよく観察できた(図1・2)。ここでは、下位より、褐色砂層(層厚8cm以上)、黒泥層(層厚2cm)、褐色シルト層(層厚16cm)、やや褐色がかったやや淘汰の良い灰色砂層(層厚13cm)、黄色砂層(層厚3cm)、紫灰色シルト層(層厚1cm)、黄白色シルト層(層厚2cm)、灰色砂質シルト層(層厚10cm)、下部13cmに礫を含むラミナが発達した灰色砂層(層厚43cm、礫の最大径11mm)、桃白色シルト層(層厚3cm)、逆化成構造をもつ灰色砂層(層厚25cm)、黄灰色砂層(層厚8cm)、鉄分に富む褐色砂層(層厚3cm)、灰色砂層(層厚19cm)、黄色細粒軽石を含む黄色砂層(層厚11cm)、軽石の最大径2mm)、黄色泥層(層厚3cm)、鉄分に富む暗褐色泥層(層厚2cm)、上部12cmが成層しやや細粒の黄色粗粒軽石層(層厚32cm、軽石の最大径37mm)、石質岩片の最大径8mm)、締まった褐色砂質土(層厚6cm)、やや褐色がかった褐色砂質土(層厚3cm)、黄色粗粒火山灰層(レンズ状、最大層厚3cm)、やや褐色がかった灰色砂質土(層厚5cm)、灰白色軽石混じり黒灰褐色土(層厚10cm)、軽石の最大径3mm)、暗灰褐色土(層厚8cm)、黒灰褐色土(層厚8cm)が認められる。

このうち、成層した黄色粗粒軽石層は、層相から約1.5~1.65万年前に浅間火山から噴出した浅間板鼻黄色軽石層(As-YP、新井1962、町田・新井2011など)に同定される。その上位の黄色粗粒火山灰層は、層位や層相から、浅間掘戸テフラ層(As-HI、早田1995・1996)の一部の可能性が高い。

②調査区南壁

調査区南壁では、下位より暗灰褐色土(層厚11cm以上)、黑色土(層厚17cm)、やや褐色がかった白色軽石層(層厚3cm)、軽石の最大径27mm、石質岩片の最大径2mm)、黄灰色軽石混じり黒色土(層厚7cm)、軽石の最大径6mm)、薄汚れた感じの黄色砂質細粒火山灰層(層厚5cm)、灰色土(層厚5cm)、やや赤味を帯びた暗褐色土(層厚2cm)、黄色細粒火山灰層(レンズ状、最大層厚1cm)、やや赤味

を帯びた暗褐色土(層厚5cm)、黄白色軽石礫を含む灰褐色土(礫の最大径9mm)、やや褐色がかった灰色土(層厚7cm)、黄色凝灰質シルト層(層厚1cm)、黄灰色シルト層(層厚1cm)、灰色土(層厚9cm)、成層した火山灰層(層厚3.4cm)、砂混じり暗灰色表土(層厚14cm)が認められる(図3)。

このうち、成層した火山灰層は、下部の青灰色砂質細粒火山灰層(層厚0.4cm)と、上部の黄灰色粗粒火山灰層(層厚3cm)からなる。

③調査区北壁(基本土層3)

中世の館状遺構に關係すると推定されている範囲における基本的な土層断面である調査区北壁(基本土層3)では、下位より暗灰褐色土(層厚15cm以上)、黒灰色土(層厚18cm)、黄色軽石層(層厚5cm)、軽石の最大径6mm、石質岩片の最大径2mm)、黄色軽石を多く含む黒色土(層厚8cm)、軽石の最大径7mm)、灰褐色細粒火山灰質土ブロック混じり灰色土(層厚16cm)、灰色土(層厚10cm)、青灰色細粒火山灰ブロック混じり黄灰色粗粒火山灰層(層厚4cm)、砂を多く含む灰褐色土(層厚10cm)が認められる(図4)。

④調査区北壁中部

調査区北壁中部では、下位より暗灰色土(層厚8cm)、灰褐色土(層厚12cm)、暗灰褐色土(層厚11cm)、黄色軽石を少量含む黒灰褐色土(層厚7cm)、軽石の最大径7mm)、黄色軽石を多く含む黒色土(層厚8cm)、軽石の最大径12mm、石質岩片の最大径2mm)、黄色軽石を多く含む暗灰褐色土(層厚13cm)、軽石の最大径14mm)、灰色砂質土(層厚5cm)、暗灰褐色土(層厚14cm)、青灰色細粒火山灰混じり黄灰色粗粒火山灰層(層厚3cm)、砂分を多く含む暗灰褐色土(層厚21cm)、砂混じり暗灰褐色土(層厚17cm)、砂混じり暗灰褐色表土(層厚18cm)が認められる(図5)。

⑤調査区北壁西部

調査区北壁西部では、下位より砂混じり灰褐色土(層厚6cm以上)、黄灰色砂礫層(層厚7cm)、礫の最大径29mm)、砂混じり灰褐色土(層厚11cm)、黄灰色細粒軽石を多く含む青灰色細粒火山灰層(層厚3cm)、砂混じり灰褐色土(層厚5cm)、やや灰色がかった白色軽石混じり暗灰作土(層厚8cm)、軽石の最大径6mm)が認められる(図6)。

このうち、耕作土中に含まれるやや灰色がかった白色軽石は、層位や岩相から、1783(天明3)年に浅間火山か

ら噴出した浅間A軽石(As-A、荒牧1968、新井1979)に由来すると考えられる。

(3) テフラ分析(テフラ検出分析)

① 分析試料と分析方法

土層観察の際に採取された試料のうちの24試料を対象に、テフラ粒子の量や特徴を定性的に把握するテフラ検出分析を行って、指標テフラの検出・同定を実施した。分析の手順は次のとおりである。

- 1) 砂分に応じて電子天秤で試料3~10gずつを秤量。
- 2) 超音波洗浄装置により泥分を除去。
- 3) 恒温乾燥器により80°Cで恒温乾燥。
- 4) 実体顕微鏡下で観察。

② 分析結果

テフラ検出分析の結果を表1に示す。テフラ検出分析で認められた特徴的なテフラ粒子には、下位より次のように多様な軽石や火山ガラスがある。

タイプa: スポンジ状や細かい纖維束状の白色の軽石(最大径2.1mm)や軽石型ガラス。これらの多産層準では、斜方輝石や單斜輝石が多く認められることが多い。

タイプb: 淡灰色、淡褐色、灰色、無色透明の分厚い中間型ガラス。

タイプc: スポンジ状に良く発泡した灰白色の軽石(最大径10.3mm)や軽石型ガラス。多産層準には、斜方輝石や單斜輝石が認められる。

タイプd: 白色や、やや風化した場合には黄色がかかった白色の発泡がさほど良くない軽石(最大径2.4mm)やスponジ状軽石型ガラス。角閃石や斜方輝石が共存する。

タイプe: テフラ層に含まれる淡灰色、淡褐色、褐色の軽石(最大径5.3mm)やスponジ状軽石型ガラス。斑晶には斜方輝石や單斜輝石が認められる。

1) 保渡田屋敷廻り遺跡・深掘地点および調査区北壁

保渡田屋敷廻り遺跡深掘地点下部の試料2および1には、タイプaやタイプbのテフラ粒子が認められ、下位の試料2に比較的多い。深掘地点上部・調査区北壁では、試料2にはタイプaやタイプbのテフラ粒子がごくわずかに、また試料1にはタイプaやタイプbのテフラ粒子

が多く含まれている。

2) 保渡田屋敷廻り遺跡・調査区南壁

調査区南壁では、試料7にタイプcのテフラ粒子が多く含まれている。また、試料6~2の多くにタイプcのほかに、タイプdのテフラ粒子が少量ずつ含まれている。試料1では、タイプeのテフラ粒子が多く認められる。

3) 保渡田屋敷廻り遺跡・調査区北壁中部

調査区北壁中部の試料1では、タイプeのテフラ粒子が多く認められる。

4) 保渡田屋敷廻り遺跡・調査区北壁西部

調査区北壁西部の試料1でも、タイプeのテフラ粒子が多く認められる。

(4) 考察

① テフラ粒子の由来

テフラ検出分析で認められた火山ガラスのうち、タイプaのテフラ粒子は、層位や岩相から約2.2万年前に浅間火山から噴出した浅間白糸軽石(As-Sr、町田ほか1984、早田2019など)や、約2万年前の浅間大窪沢第1軽石(As-Ok1)や大窪沢第2軽石(As-Ok2、中沢ほか1984、早田1996・2019)などの浅間大窪沢軽石群(As-Ok Group)に由来する可能性がある。また、タイプbの火山ガラスは、As-Ok Groupや、As-YP上部、さらにAs-HIに由来する可能性が高い。

タイプcの軽石や火山ガラスは、層位、層相、岩相などから、3世紀後半に浅間火山から噴出した浅間C軽石(As-C、荒牧1968、新井1979、坂口2010)に由来すると考えられる。また、タイプdのテフラ粒子は、岩相から6世紀初頭の榛名二ツ岳渋川テフラ(Hir-FA、新井1979、坂口1986、早田1989、町田・新井2011)や、6世紀中葉の榛名二ツ岳伊香保テフラ(Hir-FP、新井1962、坂口1986、早田1989、町田・新井2011)に由来すると考えられる。さらに、タイプdのテフラ粒子は、層相や岩相から1108(天仁元)年の浅間Bテフラ(As-B、荒牧1968、新井1979)に由来すると考えられる。

② 調査分析地点の地質・土層層序について

1) 保渡田屋敷廻り遺跡深掘地点・調査区北壁

保渡田屋敷廻り遺跡深掘地点・調査区北壁では、本遺跡の比較的下部の土層をよく観察できた。ここでは下位より、As-SrのほかにAs-Ok Groupの少なくとも一部を含

むと考えられる水成堆積物、比較的厚い成層した砂質水成堆積物、As-YP、As-HIと考えられるテフラ層を挟在するローム層、そして黒ボク土の堆積が認められた。このうち、少なくとも比較的厚い成層した砂質水成堆積物は、層位から相馬ヶ原扇状地の堆積物と考えられる。

また、黒ボク土の基底部に灰色の細粒輕石が含まれている。テフラ検出分析では、処理の際消失した可能性が高いが、これは層位や岩相から、約1.2万年前の浅間総社輕石(As-Sj)、早田1990・2019など)と思われる。黒ボク土の中位には、淡色黒ボク土(早田1990)と考えられる比較的明色の土層も認められた。

2)保渡田屋敷廻り遺跡調査区南壁

本地点では、黒ボク土の上半部がよく観察できた。ここでは、黒ボク土中に、下位よりAs-C、Hr-FAの二次堆積物、Hr-FPの最上部の火山灰層(Soda1996、早田1998)、Hr-FP火山泥流堆積物(早田1989など)、As-Bが認められる。

3)保渡田屋敷廻り遺跡調査区北壁(基本土層3)

黒ボク土中に下位よりAs-C、土壤化を受けたHr-FAのプロック、As-Bの堆積が認められた。

4)保渡田屋敷廻り遺跡調査区北壁中部

館状造構内に位置する本地点では、As-Cの濃集層準を含む黒ボク土の上位に、As-B、そしてその頂上に盛土が認められた。盛土は中世と推定されているが、それは指標テフラとの層位関係とも矛盾しない。

5)保渡田屋敷廻り遺跡調査区北壁西部

黒ボク土中に下位より砂礫の薄層、As-B、As-Aが認められた。

(5)まとめ

保渡田屋敷廻り遺跡および保渡田阿弥陀遺跡において、野外調査(地質調査)とテフラ分析(テフラ検出分析)を実施した。その結果、下位より、浅間白糸輕石(As-Sr、約2.2万年前)、浅間大窪津輕石群(As-Ok Group、約2万年前)、浅間板鼻黃色輕石(As-YP、約1.65~1.5万年前)、浅間總社輕石(As-Sj、約1.2万年前)、浅間C輕石(As-C、3世紀後半)、榛名二ツ岳渋川テフラ(Hr-FA、6世紀初頭)、榛名二ツ岳伊香保テフラ(Hr-FP、6世紀中葉)、浅間Bテフラ(As-B、1108年)、浅間A輕石(As-A、1783年)などのテフラ層やテフラ粒子を検出できた。

相馬ヶ原扇状地上に位置する保渡田屋敷廻り遺跡では、As-BとAs-Aの間から中世と推定される盛土が検出された。

文献

- 新井房夫1962「関東盆地北西部地域の第四紀編年」(『群馬大学紀要自然科学編』10 p.1-79.)
 新井房夫1979「関東地方北西部の雑文時代以降の示標テフラ層」(『考古学ジャーナル』53 p.41-52.)
 荒牧英雄1968「浅間火山の地質」(『地団研專報』14, p.1-45.)
 町田洋・新井房夫2011「新編火山灰アトラス-日本列島とその周辺(第2刷)」(東京大学出版社、p.339p.)
 中沢英俊・新井房夫・道藤邦彦1984「浅間火山。黒雲～前掛期のテフラ層序」(『日本第四紀研究学会講演要旨集』14, p.69-70.)
 板山一1986「榛名二ツ岳起源FP・FP層下の土師器と須恵器」(群馬県教育委員会編「荒砥北原遺跡・今井神社古墳群・荒砥青柳遺跡」p.103-119.)
 板山一2010「高崎市・中居町一丁目遺跡周辺集落の動向-中居町一丁目遺跡22号水田耕作地と周辺集落との関係-」(群馬県埋蔵文化財調査事業編「中居町一丁目遺跡3」p.17-22.)
 早田勉1989「6世紀における榛名火山の2回の噴火とその災害」(『第四紀研究』27 p.297-312.)
 早田勉1990「群馬県の自然と風景」(群馬県史編さん委員会編「群馬県史」通史編I 原始古代 I, p.37-129.)
 早田勉1995「テフラからさぐる浅間火山の活動史」(御代田町誌編纂委員会編「御代田町誌」自然編,p.22-43.)
 早田勉1996「関東地方～東北地方南部の示標テフラの諸特徴～とくに御岳第1テフラより上のテフラについて」(『名古屋大学加速器質量分析研究業績報告書』7, p.256-267.)
 Soda,T.1996 Explosive activities of Haruna volcano and their impacts on human life in the 6th century A.D. Geogr. Rept. Tokyo Metropol. Univ. no.31, p.37-52.
 早田勉1998「榛名火山-古墳時代の大噴火をさぐる」(高橋正樹・小林哲大編「関東・甲信越の火山 I. 災害書類」, p.74-92.)
 早田勉2019「北関東地方西部における旧石器時代の火山噴火と環境変化」(『令和元年度岩宿フォーラム講演要旨集』, p.19-25.)

第4表 テフラ輸出分析結果

| 道跡 | 地点 | 試料 | 斜石 | | 原岩 | 形態 | 色調 | 火山ガラス | | 重複物 (不透明物以外) |
|----------|-------------|-------|-------|--------------|-------|-----------------|------------|-------------|-------------|-----------------|
| | | | 量 | 色調 | | | | pm (sp), md | pm (sp), md | |
| 保渡田駒ヶ岳通路 | 深地点上部・調査区上部 | 1 | | | *** | | 白, 淡灰 | | | |
| | | 2 | | | (*) | pm (sp), md | 白, 淡褐色 | | | opx, cpx |
| | | 3 | | | | | | | | opx, cpx |
| 深地点下部 | | 1 | | | * | pm (sp), md | 白, 淡灰 | | | opx, cpx |
| | | 2 (e) | 白 | 2.1mm | ** | pm (sp, fb), md | 白, 淡灰 | | | opx, cpx |
| | | | | | | | | | | |
| 調査区南端 | | 1 | ** | 淡灰, 淡褐色, 褐 | 4.2mm | ** | 淡灰, 淡褐色, 褐 | | | opx, cpx |
| | | 2 (e) | 灰白 | 2.8mm | ** | pm (sp) | 灰白, 白 | | | opx, am, cpx |
| | | 3 (e) | (D) 白 | 3.0mm | ** | pm (sp) | 白 | | | am, opx |
| | | 4 * | 灰白 | 5.1mm | ? | pm (sp) | 灰白, 白 | | | opx, am, cpx |
| 調査区北端中部 | | 5 | | | (*) | pm (sp) | 白 | | | am, opx |
| | | 6 * | 灰白, 白 | 6.3mm, 2.0mm | ** | pm (sp) | 白, 灰白 | | | am, opx |
| 調査区北端西部 | | 7 *** | 灰白 | 10.3mm | *** | pm (sp) | 灰白 | | | opx, cpx |
| | | 1 | ** | 淡灰, 淡褐色, 褐 | 4.4mm | *** | 淡灰, 淡褐色, 褐 | | | opx, cpx |
| | | 1 | ** | 淡灰, 淡褐色, 褐 | 5.7mm | *** | 淡灰, 淡褐色, 褐 | | | opx, cpx |

**** : 多く ; *** : 多く ; ** : 中程度 ; * : 少ない ; (*) : ごく少ないと示す。

bw : ブル型, md : 中間型, pm : 斜石型, sp : スボンジ型, fb : 繊維束状, sc : スコリア型。

ol : カルラン石, opx : 斜方輝石, cpx : 鉄輝石, am : 角閃石, bi : 黑碧母岩, 重複物の(*) : 他の非常に少ないことを示す。

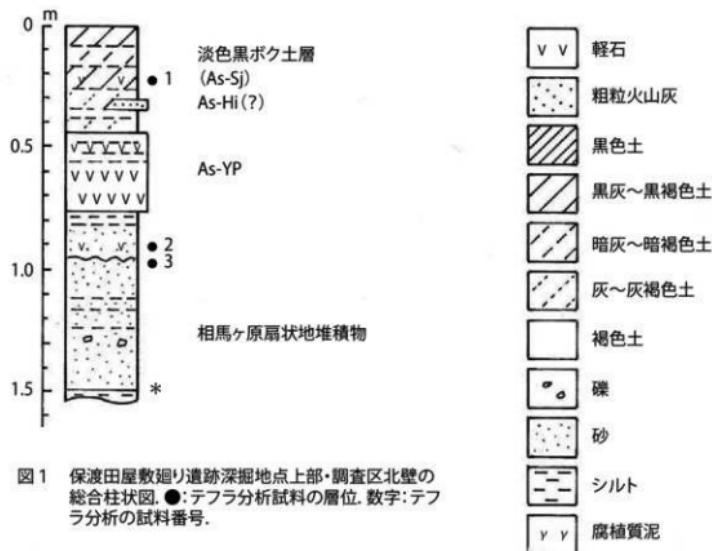


図1 保渡田屋敷廻り遺跡深掘地点上部・調査区北壁の総合柱状図. ●: テフラ分析試料の層位. 数字: テフラ分析の試料番号.

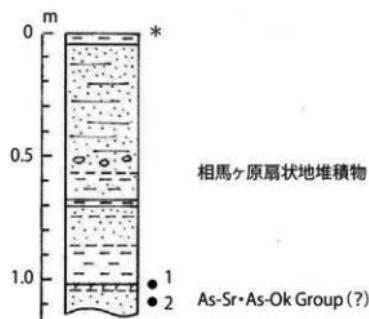


図2 保渡田屋敷廻り遺跡深掘地点下部の土層柱状図.
●: テフラ分析試料の層位. 数字: テフラ分析の試料番号.

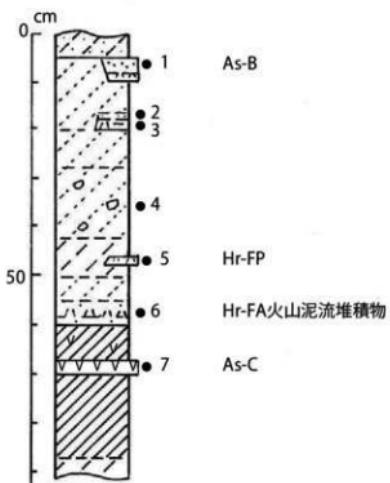


図3 保渡田屋敷廻り遺跡調査区南壁の土層柱状図
●:テフラ分析試料の層位. 数字:テフラ分析試料の層位.

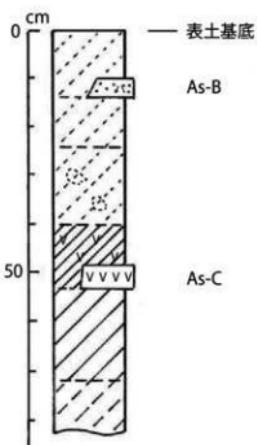


図4 保渡田屋敷廻り遺跡調査区北壁基本土層3の土層柱状図

第59図 テフラ分析試料の層位2

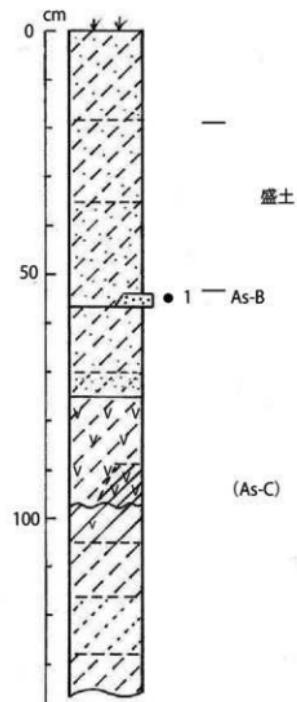


図5 保渡田屋敷廻り遺跡調査区北壁の土層柱状図
●:テフラ分析試料の層位. 数字:テフラ分析の試料番号.

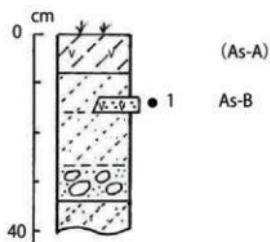


図6 保渡田屋敷廻り遺跡調査区北壁西部の土層柱状図
●:テフラ分析試料の層位. 数字:テフラ分析の試料番号.

第60図 テフラ分析試料の層位3



調査区北壁



調査区南壁



深掘トレンチ上部



調査区北壁(基本土層 3)



深掘トレンチ下部



調査区北壁中部

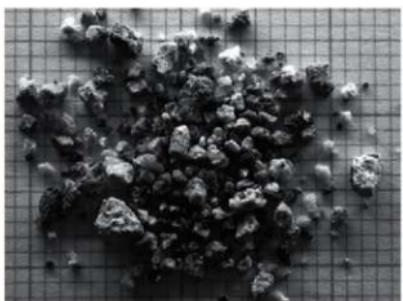
第61図 テフラ分析試料の層位写真 1



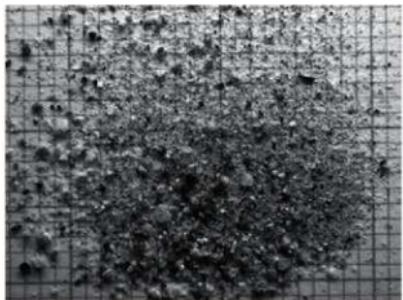
調査区北壁西部



調査区北壁中央・試料1(As-B)



深掘トレンチ調査区北壁 試料2(As-Sr混在)



調査区南壁・試料5(Hr-FP)

第62図 テフラ分析試料の層位写真2、テフラ分析試料写真

第5章 調査成果の整理とまとめ

本遺跡地は、近・現代の宅地造成及び耕作により、大きく削平を受けていたり、擾乱されてたりして、遺構の遺存状態は決して良くは無かったが、縄文時代前期後葉、古墳時代前期・中期、平安時代中期、中・近世の各時代の遺構及び遺物が検出された。

近・現代の耕作土の直下からは調査区北東側の標高が高い部分において、2次堆積のAs-Bによって覆われた近世の烟と、調査区の中央から西に寄った位置において調査区を南北に継続する近世の溝とそれを掘り込んだ小規模な土坑が検出された。この時期の遺構は、調査区全面ではなく、ごく限られた範囲において、部分的に検出された。

その下面からは、調査区のほぼ全域において、近世から古墳時代前期4世紀後半に至る掘立柱建物5棟、柵1条、竪穴建物5棟、竪穴状遺構1基、溝13条、井戸6基、集石3基、土坑74基、ピット82基が同一の遺構確認面から検出された。

さらにその下層のAs-Cを含む黒色土のさらに下層からは、調査区の北東側と南西端の、やはり標高が高い部分のみにおいて、ごく部分的にではあるが、上面の古墳時代前期4世紀後半よりも遡る時期の土坑3基とピット19基が検出された。

1. 上面から部分的に検出された遺構

本遺跡において検出された中・近世の遺構で、最も新しい時期のものは、先述したように、調査区北東側の標高が高い部分において、近・現代の耕作土直下から検出された2次堆積のAs-Bによって覆われた1号烟と、調査区の中央から西に寄った位置から検出された調査区を南北に継続する14号溝及びそれを掘り込む78号土坑である。14号溝及びそれを掘り込む78号土坑は近世末期～近代のものと考えられる。

一方、調査区の北東寄り、調査区内でも標高が高い地域から部分的に検出された1号烟については、発掘調査時にはAs-Bによって覆われた烟と認識されていた。しかしながら、その下の面から3・4号溝、2号井戸、10～

22号土坑などの中・近世の遺構群が良好な状態で検出されており、また、それらの遺構にまで、烟の耕作に伴う掘削が上の面から及んでいない。これらの点から、烟を覆っていたのは1次堆積のAs-Bとは考えにくく、2次的に堆積したAs-Bと見るべきであろう。よって、近世の烟として報告した。下の面から検出された2号井戸からは、近世末～近代の遺物が出土しているので、その上の面において確認された1号烟も、先述した14号溝や78号土坑と同様、近代ないしは、近世でも近代に近いかなり新しい時期のものである可能性が高い。

検出されたのは南北方向に長く伸びる煙の歓間の溝状のサク14条で、1群のみである。

溝状に掘削されていたサク部分の掘り込みは全く検出出来ず、確認面における土の相違によって、サクの痕跡が部分的に、辛うじて検出された状態であった。歓の部分は完全に削平されており、残存状態は極めて悪い。

2. 中・近世の遺構

近世末期ないしは近代の遺構と考えられる14号溝、78号土坑、1号烟以外の中・近世～古墳時代前期の遺構は、14号溝、78号土坑、1号烟等が確認された面の下の面から検出されることになるが、前述したように、14号溝や1号烟は調査区のごく一部から部分的に検出されたので、中・近世から古墳時代前期に至る遺構の大部分は、近・現代の耕作土のほぼ直下に当たる遺構確認面において検出された遺構である。これらの遺構は、調査区のほぼ全域において検出された。

中・近世の遺構は、掘立柱建物5棟、柵1条、溝13条、井戸6基、集石3基、土坑74基、ピット82基である。

(1) 掘立柱建物

本遺跡から検出された掘立柱建物は1～5号の5棟である。すべて中・近世のものである。調査区北西寄りから2・3号掘立柱建物2棟が重複して、また、調査区中央南端付近から1・4・5号掘立柱建物の3棟が隣接して検出された。1・4号掘立柱建物は重複している。

各建物の大きさは不同で、調査区中央南端から繋まつて検出された1・4・5号掘立柱建物の主軸方位は比較的類似するものの、全体的には余り規則性は感じられない。総柱の掘立柱建物は調査区北西寄りから検出された3号掘立柱建物1棟のみで、他はいずれも側柱建物である。廟が付くものも1棟もない。いずれも単純な構造で、あまり大型のものではなく、柱穴の掘方もいずれも小規模であり、然程に重要性が高い建造物であったとは考えがたい。仮設的な建造物ないしは農機具や農作物を一時的に収納するような納屋的なものである可能性が高いと考えられる。

(2) 柵

柵は、調査区北西寄りから1条検出された。本遺跡から検出された唯一の柵で、板塀のようなものと推測される。東西方向の柵で、柱間は6間である。

2・3号掘立柱建物の北側に位置し、3号掘立柱建物と主軸方向はほぼ一致するものの、障壁が付随する建物としては余りにも貧弱な建物と言える。よって、柵と2・3号掘立柱建物との関連は不明と言わざるを得ず、何を何から遮蔽しようとしたか、建造の意図は明確にしがたい。

柱穴の規模も小さいので、仮設的なものである可能性が高い。

(3) 溝

上面から検出された近世末期～近代のものと考えられる14号溝を除くと、中・近世の溝は13条検出された。

調査区北西端付近から検出された8号溝の他は、いずれも調査区の中央から東寄りから検出されている。

これらの溝の内、2号溝は3号溝の部分的な掘り込みの一部と見られ、4～7・9～13号溝は、溝と言うよりも、所謂「芋穴」と称される長大な土坑と見た方が良いと思われる。溝として機能していたのは調査区北東部から検出された1・3号溝と、調査区の北西隅付近から検出された8号溝の3条と言うことになる。3条とも、概して東西方向に走向する。土層断面の観察からは水流の痕跡を見出せないため、土地の利用や所有、使用等の区分を示すための区画溝であったと考えられる。

(4) 井戸

井戸は6基検出された。出土遺物等から全て近世のものと考えられる。

調査区東寄りで1～3号井戸の3基がそれぞれ離れた位置から、中央やや南東寄りで4～6号井戸の3基がそれぞれ近い場所に北東～南西方向に斜めに並んで検出された。いずれも径約1.5～1.6m程度、深さ約2.2～2.6m程度で、4号井戸以外は、上部が石組みで丁寧に補強されているなど、規模・形状が概ね類似した傾向にあることが特徴である。

なお、調査区西半エリアからは井戸は1基も検出されていない。

(5) 集石

集石は3基検出された。調査区のほぼ中央、Y=-76760ラインにはほぼ沿って南北約4mの範囲に3基の集石が縦列している。いずれも径約0.7～0.8m前後、掘方の深さ約0.1～0.2m前後と規模はほぼ同様で、隅丸方形ないし長方形状の掘方内に径約0.1～0.4m大の自然礫が詰まっている。必ずしも均等かつ丁寧に敷き詰められているとは限らない。

ほぼ直線的に縦列して検出されたので、建物等の礎石基礎の可能性を考えたが、3基それぞれの芯間距離は一定しておらず、僅か3基しか確認出来なかつたことや、並びが1条のみである点に疑問が残る。また、墳墓の可能性も想定したが、焼土や炭化物、遺灰、遺骨の類いは全く検出されなかつたので、これらの遺構の用途・機能は不明である。出土遺物はなかつたが、埋土の状況から見て近世のものと考えられる。

(6) 土坑

上面から検出された近世末期～近代のものと考えられる78号土坑を除くと、中・近世の土坑は74基検出された。概して調査区の中央南側から東側にかけて多く確認された。中央北寄りから東寄りにかけての自然の高まりの部分と調査区の西側にかけては余り多くは確認されなかつた。

先述したように、4～7・9～13号の各溝は、溝と言うよりも、所謂「芋穴」と称される長大な土坑と見た方が良いと思われるが、これら各溝程には長大ではないもの

の、同類の比較的長大な溝状の土坑が多数検出されている。

概ね西北西-東南東方向に主軸を取るもののが比較的多いものの、それらと恰も直交するかのような、北北東-南南西方向に主軸を取るものもある。規則正しく計画的な配置がなされていたとは考えにくく、ランダムな分布である。また、等高線に沿って規則正しく分布しているようなものもないため、これらの土坑の中に、動物の捕獲を目的とした所謂陷阱穴が存在していたとは考えにくい。これらの多くの用途・機能は不明と言わざるを得ない。

これら中・近世と考えられる土坑の分布の状況には、あまり特徴を見出すことが出来ない。

(7) ピット

中・近世のものと考えられるピットは82基検出された。殆どのピットは調査区中央南寄りから集中して検出された。また、調査区南東寄りから5基、北西寄りにも若干のピットが散在している。それ以外の場所からはピットは検出されなかった。これらピットは、掘立柱建物や柵の柱穴を構成するものではなく、用途・機能は不明である。

3. 平安・古墳時代の遺構

古代～古墳時代の遺構としては、10世紀の竪穴建物4棟、10世紀頃と見られる竪穴状遺構1基、4世紀後半の竪穴建物1棟、5世紀後半頃と見られる古墳1基が検出された。なお、古墳は周濠の南端部の一部が検出されたに過ぎなかった。

調査区の中央及び南側からは、古代の遺構が全く検出されておらず、3000m²を超える調査範囲において、平安時代中期と古墳時代前期の竪穴建物及び竪穴状遺構が検出されたのは、ごく僅かの範囲に過ぎなかつたことから考へるならば、今回の調査対象地は、偶々、古代集落の南端の縁辺に相当する部分で、集落の本体は、調査区よりも北側の、より標高が高い部分に展開していたと推測するのが妥当であろう。

検出された遺構が僅少であることから見れば、今回の調査範囲においては、平安時代中期～古墳時代前期には土地利用が余りなされてはいなかった場所であると考え

ざるを得ない。本遺跡周辺が、古墳時代の遺跡の密集地帯であることを鑑みるならば、偶々、空白地帯に当たつたとも言うべき調査内容と言える。

(1) 竪穴建物・竪穴状遺構

調査区北東隅付近から1～4号の10世紀の竪穴建物が4棟と竪穴状遺構1基が、また調査区北西隅付近から4世紀後半頃のものと見られる5号竪穴建物が単独で1棟検出された。

1～4号竪穴建物はいずれも10世紀第1四半期から10世紀後半にかけてのもので、いずれも竪穴建物の南東隅に窓を有し、南北に長い隅丸長方形形状を呈していたものと考えられる。

竪穴状遺構は2～4号竪穴建物と重複して検出された。小型の竪穴建物と類似した規模・形状を有しているが、窓が無いことや、やや歪んだ不自然な平面形状を呈することなど、竪穴建物を見るには違和感が多く、居住施設とは考えにくい。用途・機能、性格等については不明である。

(2) 古墳

調査区北東隅から古墳が1基検出された。周濠の南端の一部が検出されたのみで、墳丘部分は完全に調査区外に出ているため、古墳の規模や形状については全く不明である。墳丘はかなり削平されてしまっているものと見られる。出土遺物から古墳時代中期である5世紀後半頃の古墳と推測される。

本遺跡は保渡田古墳群に接しており、関連が想定出来る。

4. 古墳時代前期以前の遺構

先述した通り、中・近世～古墳時代前期の遺構確認面の下層、As-Cを含む黒色土下の遺構確認面において、調査区の北東部および南西端部の比較的標高が高い部分から土坑3基とピット19基を確認した。これらの遺構からは遺物が全く出土していないため正確な年代を絞り込むことは難しく、4世紀後半まで遡る遺構が検出されていることを根拠に、4世紀後半以前のものと考えるより他はない。

調査区北東部からは1基の土坑と11基のビットが、調査区南西端部からは2基の土坑と8基のビットが検出された。3基の土坑はいずれも小型で浅く、規模・形状は比較的類似している。これらの土坑・ビットの用途・機能については不明である。

遺構外から少量ではあるが縄文時代前期後葉下島式及び諸磯a式の深鉢片が出土しているので、これらの遺構の年代を考える上での参考となろう。

まとめ

以上、本遺跡からは、調査区のごく一部から近世末期～近代の溝1条、土坑1基、畑1面が、調査区の全面から中・近世の掘立柱建物5棟、柵1条、溝13条、井戸6基、集石3基、土坑74基、ビット82基が、調査区のごく一部から平安時代中期の竪穴建物4棟と竪穴状遺構1基と古墳時代前期の竪穴建物1棟が、調査区のごく一部から古墳時代前期以前の土坑3基とビット19基が検出された。調査区の全面に亘って遺構が検出されたのは中・近世であり、それ以外の時期においては調査区のごく一部においてのみ土地利用が為されていたものと見られる。

中・近世の遺構は土坑主体であると言え、とりわけ「芋穴」と称される類の長大な土坑ないし土坑様の溝が多かったことから見れば、調査区の全面で畑作が行われていた様子が窺える。調査区中央南端部や北西端付近から検出された計5棟の簡素な掘立柱建物は、農具や収穫物の仮置きや、作業のための納屋のような農作業に関わる簡易かつ仮設的な小屋状の建物であったと考えられる。

平安時代中期及び古墳時代前期においては、検出された竪穴建物の僅少さから見れば集落の本体から離れた縁辺部分であり、古墳時代中期においても、検出されたのが古墳1基の周濠南端部分であったことから見るならば、周辺における古墳の分布状況から見て、古墳群の縁辺部であると想定することが出来よう。

先述したように、本遺跡が保渡田古墳群に隣接し、周辺に古墳時代の遺跡が密集する地域に所在していることから見れば、意外とも言うべき調査内容であったが、大規模な古墳群や大集落の周辺における土地利用の一端を知ることが出来る貴重な事例の一つとなったところに、本遺跡調査の意義が存在すると言うことが出来る。

第5表 遺物観察表

5号掘立柱建物

| 補 図 PL.No. | No. | 種類 器種 | 出土位置 残存率 | 計測値 | 胎土/焼成/色調 石材・素材等 | 成形・整形の特徴 | 備考 |
|---------------|-----|-----------|-------------|--|--------------------|-------------------------------|----|
| 第10回 PL.48 | 1 | 古鉢 古寛永 | 埋上 完形 | 外 径 1,435 内 径 1,985 厚 重 0.174 3.1 | | 面の鄭は深く文字、輪、郭が明瞭だが、背の輪、郭はやや浅い。 | 近世 |

3号溝

| 補 図 PL.No. | No. | 種類 器種 | 出土位置 残存率 | 計測値 | 胎土/焼成/色調 石材・素材等 | 成形・整形の特徴 | 備考 |
|---------------|-----|--------------------|---------------|---------------------------------|--------------------|---|------------------|
| 第13回 PL.48 | 1 | 肥前磁器 染付広東模 蓋 | 埋上 口縁部1/2欠 | 口 幅 10.1 口 底 5.5 | 高 2.9 白 | 外面植物等の染付。口縁部内面2重脚線。天井部1重脚線 内に不明文様。粗い貫入孔。 | 18世纪末～ 20世纪前葉 |

1号井戸

| 補 図 PL.No. | No. | 種類 器種 | 出土位置 残存率 | 計測値 | 胎土/焼成/色調 石材・素材等 | 成形・整形の特徴 | 備考 |
|---------------|-----|--------------|-------------|---|--------------------|---|----|
| 第19回 PL.48 | 1 | 石製品 石臼(上) | 埋上 約7割残存 | 長 幅 (32.2) (30.4) 厚 重 13.4 12400 | 粗粒輝石安山岩 | 6分画した上臼。物入れ孔は両側穿孔で深さ7mm、中央に 深さ20mmの輪孔。 | 近世 |
| 第19回 PL.48 | 2 | 石製品 石臼(下) | 埋上 約1/2片 | 径 幅 (33.0) 厚 重 11.1 7600 | 粗粒輝石安山岩 | 約1/2欠損であるが主溝から6分画と推測。中央に穿孔された深さ68mmの輪孔、側面と底面には粗い加工痕が残る。 | 近世 |

2号井戸

| 補 図 PL.No. | No. | 種類 器種 | 出土位置 残存率 | 計測値 | 胎土/焼成/色調 石材・素材等 | 成形・整形の特徴 | 備考 |
|---------------|-----|--------------------|----------------------|----------------------------|---------------------------|--|---------------|
| 第20回 PL.48 | 1 | 肥前磁器 染付桜 | 埋上 口縁部1/4、底 部欠 | 口 底 (9.9) 4.5 | 高 4.4 灰白 | 外面簡略化した雪輪梅桜文。 | 19世纪前葉～ 中葉 |
| 第20回 PL.48 | 2 | 製作地不詳 陶器 雨滴み | 埋上 口縁部1/2欠 | 口 底 6.6 4.0 | 高 7.5 黒色粒含む/灰白 | 体部に凹凸を設け、外面に杭と馬を白模りで模り、頭を緑色上のイッヂンで描く。馬はこげ茶色絞糸で輪部と腰や尾を描く。内面から高台輪に灰釉。貫入はない。相馬燒風。 | 近現代 |
| 第20回 PL.48 | 3 | 瀬戸・美濃 陶器 すり鉢 | 埋上 体部から底部 1/3 | 口 底 (12.1) | 高 淡黄 | 内外面輪輪。内面の使用痕顯著。底面外周輪の擦れも著しい。 | 近世 |
| 第20回 PL.48 | 4 | 在地系土器 培燒 | 埋上 耳部片 | 口 底 | 高 微細な片岩?含む /にぶい粒 | 外表面器皿に煤付着。丸底。 | 近現代 |
| 第20回 PL.48 | 5 | 石製品 磁石 | 埋上 上半部欠 | 長 幅 (8.7) 3.1 | 厚 重 (3.6) 83.5 | 砥沢石 角柱状を呈し上半部欠損、4面とも使用面で特に表面は著しく使用され斜めに摩り減る。 | |
| 第20回 PL.48 | 6 | 石製品 磁石 | 埋上 下半部欠 | 長 幅 (7.2) 2.7 | 厚 重 4.1 155 | 偏平角柱状を呈し下半部欠損、4面とも使用面である。 | |
| 第20回 PL.48 | 7 | 石製品 石臼(上) | 埋上 破片 | 径 幅 (36.0) 14 | 厚 重 2589.2 | 上臼破片、剥落の痕跡が残存、物入れ孔の深さ48mm、側面 は平滑に加工されている。 | |
| 第20回 PL.48 | 8 | 石製品 石鉢 | 埋上 | 長 幅 (17.9) (11.1) | 厚 重 (9.2) 1185.7 | 粗粒輝石安山岩 破片、内面使用面は平坦、表面中央に深さ20mmのくぼみ、 | |

3号井戸

| 補 図 PL.No. | No. | 種類 器種 | 出土位置 残存率 | 計測値 | 胎土/焼成/色調 石材・素材等 | 成形・整形の特徴 | 備考 |
|---------------|-----|-----------|-------------|--|--------------------|--|----|
| 第21回 PL.48 | 1 | 古鉢 新寛永 | 埋上 ほぼ完形 | 外 径 2,298 内 径 1,790 厚 重 0.087 1.2 | | 全体がひしゃげている。一部文字の横に鉛不足、輪の一部 が欠けているが、破損の可能性もある。 | 近世 |

4号井戸

| 補 図 PL.No. | No. | 種類 器種 | 出土位置 残存率 | 計測値 | 胎土/焼成/色調 石材・素材等 | 成形・整形の特徴 | 備考 |
|---------------|-----|--------------------|----------------------|------------------------|-------------------------|---|-------------------|
| 第22回 PL.48 | 1 | 肥前磁器 青磁香炉 | 埋上 口縁部から体部 1/4 | 口 底 (9.7) | 高 灰白 | 口縁部内面から外面に青磁釉。二次被熱。 | 近世 |
| 第22回 PL.48 | 2 | 瀬戸・美濃 陶器 手刷焼 | 埋上 口縁部1/9 | 口 底 (28.8) | 高 灰白 | 口縁部上面窪み、口縁部内面は内側に突き出る。外外面 鐵輪。外外面口縁部下に2条の凹線。外外面の器表ハツリ痕 状の凹凸。第22回3と同一個体か。 | 18世纪後葉か 19世纪初葉 |
| 第22回 PL.48 | 3 | 瀬戸・美濃 陶器 手刷焼 | 埋上 口縁部1/9 | 口 底 (28.8) | 高 灰白 | 口縁部上面窪み、口縁部内面は内側に突き出る。外外面 鐵輪。外外面口縁部下に2条の凹線。外外面の器表ハツリ痕 状の凹凸。第22回3と同一個体か。 | 18世纪後葉か 19世纪初葉 |
| 第22回 PL.48 | 4 | 瀬戸・美濃 陶器 すり鉢 | 埋上 体部から底部 1/5 | 口 底 (13.0) | 高 灰白 | 内外面輪輪。底部外周回転糸切無調整。内面体部下位以下 使用によりやや摩耗。 | 近世 |
| 第22回 PL.48 | 5 | 在地系土器 か 人形 | 埋上 1/4 | 高 幅 | 厚 黑色粘物少量含む /橙・暗灰/ | 前後の貼り付け部で剥離。女性の背中から後頭部片。黒變 部は二次被熱である。 | 近世 |
| 第22回 PL.48 | 6 | 石製品 硯 | 埋上 1/3 | 長 幅 (3.7) 5.2 | 厚 重 1.7 32.8 | 粘板岩質の頁岩を素材、縁と陸が残存し海は欠損、本体の 約2/3以上が欠損。 | 近世 |

遺物觀察表

5・6号土坑

| 補 図 PL.No. | No. | 種 類 器 種 | 出土位置 残 存 率 | 計測値 | 胎土/焼成/色調 石 材・材 料 等 | 成 形・整 形 の 特 徴 | 備 考 |
|---------------|-----|------------------|---------------|-----|-----------------------|---|------|
| 第25図 PL.48 | 1 | 埴輪 円筒か 内筒部 | 埋上 軸部片 | | 細砂粒・粗砂粒/ 酸化焰/橙 | 外面は縱方向ハケメ(2cm当たり11本)。内面は縱方向ナデ。残存部上部に円形の透孔がみられる。 | 古墳時代 |
| 第25図 PL.48 | 2 | 埴輪 円筒か 内筒部 | 埋上 軸部片 | | 細砂粒・粗砂粒/ 酸化焰/橙 | 外面は縱方向ハケメ(2cm当たり14本)。内面は縱方向ナデ。残存部下位にナデ部分がみられることから下位か。 | 古墳時代 |

26号土坑

| 補 図 PL.No. | No. | 種 類 器 種 | 出土位置 残 存 率 | 計測値 | 胎土/焼成/色調 石 材・材 料 等 | 成 形・整 形 の 特 徴 | 備 考 | |
|---------------|-----|--------------------|---------------|----------------------------|-----------------------|--------------------------|---|-------------------|
| 第28図 PL.48 | 1 | 瀬戸・美濃 陶器 腰飾施 | 埋上 底部 | 口 底 | 器 高 | にびい黄褐 | 内面貫入の入る灰釉。外面高台端部を除き鉄釉。 | 18世紀後葉～ 19世紀前葉 |
| 第28図 PL.48 | 2 | 在地系土器 炻器 | 埋上 1/4 | 口 底 (34.6) (32.6) | 器 高 | 5.5 微細な片岩? 含む にびい橙 | 断面中央暗灰黄、外面裏表黒褐色、内面暗灰褐色。器壁厚く、外面の器壁凸多い。内面中央窪様に窪む。 | 近世 |

91号ピット

| 補 図 PL.No. | No. | 種 類 器 種 | 出土位置 残 存 率 | 計測値 | 胎土/焼成/色調 石 材・材 料 等 | 成 形・整 形 の 特 徴 | 備 考 | |
|---------------|-----|------------|---------------|------------------------------------|---------------------------|-------------------------|-----------------------------|------|
| 第38図 PL.48 | 1 | 須恵器 杯 | 埋上 口縁部～体部片 | 口 底 12.2 9.8 | 底 2.6 細砂粒・酸化焰/ 相 | クロ形、回転は右回り。底部は回転糸切り無調整。 | 10世紀末 | |
| 第38図 PL.48 | 2 | 古鉢 縦茎元直 | 埋上 完形 | 外 径 内 径 2.411 1.925 | 厚 重 0.085 1.5 | 厚 0.5 にびい黄 | 面の文字はやや模糊まる。面、背の輪、郭はやや彫が深い。 | 中・近世 |

1号竪穴建物

| 補 図 PL.No. | No. | 種 類 器 種 | 出土位置 残 存 率 | 計測値 | 胎土/焼成/色調 石 材・材 料 等 | 成 形・整 形 の 特 徴 | 備 考 |
|---------------|-----|------------|---------------------------------|------------------------|--|---|---------------|
| 第42図 PL.49 | 1 | 須恵器 杯 | 西寄り床面直上 3/4 | 口 底 13.6 7.1 | 高 4.3 細砂粒/還元焰/灰 黄 | クロ形、回転は右回り。底部は回転糸切り無調整。 | 10世紀第1四 半期 |
| 第42図 PL.49 | 2 | 須恵器 有台輪 | 埋上 1/3 | 口 底 14.0 6.2 | 台 高 5.4 5.4 細砂粒・酸化焰/に ぶい黄 | クロ形、回転は右回り。底部は回転糸切り、高台は貼付。 | 10世紀第1四 半期 |
| 第42図 PL.49 | 3 | 須恵器 有台輪 | 東寄り中央床直 2/3 | 口 底 14.5 7.5 | 台 高 6.7 5.4 細砂粒・酸化焰/に ぶい黄相 | クロ形、回転は右回り。底部は回転糸切り、高台は貼付。内面は全体的に煤が付着。 | 9世紀第4四 半期 |
| 第42図 PL.49 | 4 | 土師器 甕 | 中央から北寄り の床直 口縁部～胴部中 位片 | 口 底 17.6 21.2 | 良好/にぶ い赤褐 細砂粒/良好/にぶ い赤褐 | 口縁部から胴部はヨコナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部にヘラナデ。 | 10世紀第1四 半期 |
| 第42図 PL.49 | 5 | 土師器 甕 | 東左袖迎辺直 口縁部～胴部下 位片 | 口 底 19.2 21.8 | 細砂粒/良好/にぶ い褐 細砂粒/良好/にぶ い褐 | 口縁部から胴部はヨコナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部にヘラナデ。 | 10世紀第1四 半期 |
| 第42図 PL.49 | 6 | 土師器 甕 | 中央部から南寄 り床直 底部～胴部下 位片 | 底 4.0 | 細砂粒/良好/黒褐 底部と胴部はヘラ削り。内面は底部から胴部にヘラナデ、蓋面が剥離のため單位不明。 | 10世紀第1四 半期 | |
| 第42図 PL.49 | 7 | 須恵器 甕 | 埋上 口縁部片 | | 細砂粒・粗砂粒/ 還元焰/灰 | クロ形、回転は右回り。口縁部は上下に引き出し、幅2.2cmの面を作る。 | 10世紀第1四 半期 |
| 第42図 PL.49 | 8 | 埴輪 円筒 | 埋上 破片 | | 細砂粒・酸化焰/相 | 外面は縱方向ハケメ(2cm当たり本数不明)後凸巻(台形状)を貼付。内面はハナナデ。 | 古墳時代 |
| 第42図 PL.49 | 9 | 石製品 鋸輪 | 埋上 完形 | 長 5.3 5.5 | 厚 重 1.5 63 滑石 | 断面は偏平台形状、中央孔は径8mmで垂直孔。全面摩耗し光沢を持つ部分もある。線状痕も全面に残り表面には深い擦痕状痕も残る。 | 古代 |
| 第42図 PL.49 | 10 | 鉄製品 鋸輪 | 中央の掘方面よ り約11cm上 定形 | 径 5.8 43.9 | 厚 重 (0.4) | 全体が厚く鎚に覆われている。中心部の穴に近い部分に木質が残存しているが、穴に伴っている柱子は見られない。 | 古代 |

2号竪穴建物

| 補 図 PL.No. | No. | 種 類 器 種 | 出土位置 残 存 率 | 計測値 | 胎土/焼成/色調 石 材・材 料 等 | 成 形・整 形 の 特 徴 | 備 考 |
|---------------|-----|------------|---|------------------------|--|---|---------------|
| 第46図 PL.49 | 1 | 須恵器 杯 | 壠燃焼部床直上 1/4 | 口 底 12.6 5.8 | 高 3.9 細砂粒・酸化焰/灰 | クロ形、回転は右回り。底部は回転糸切り無調整。焼成は還元焰に近い。 | 10世紀第2四 半期 |
| 第46図 PL.49 | 2 | 須恵器 甕 | 東寄りの床直上 1/2 | 口 底 14.6 7.0 | 台 高 7.0 6.0 細砂粒・酸化焰/灰 黄 | クロ形、回転は右回り。底部は回転糸切り、高台は貼付。内面の一部に煤が付着。 | 10世紀第2四 半期 |
| 第46図 PL.49 | 3 | 須恵器 甕 | 壠燃焼部から壠 左袖前にかけて の床直 底部～胴部中 位片 | 口 底 29.6 29.8 | 細砂粒・酸化焰/相 | クロ形、回転は右回り。甕は貼付、口唇端部は面を作る。 | 10世紀第2四 半期 |
| 第46図 PL.49 | 4 | 須恵器 甕 | 壠燃焼部から壠 左袖前にかけて の床直 底部～胴部下 位片 | 底 18.0 12.0 | 細砂粒・酸化焰/相 | クロ形、回転は右回り。底部は器面磨滅のため整形不明。内面は底部付近にヘラ削り。 | 10世紀第2四 半期 |

| 拂 国 PL.No. | No. | 種類 器種 | 出土位置 残存率 | 計測値 | 胎土/焼成/色調 石材・素材等 | 成形・整形の特徴 | 備考 |
|---------------|-----|-------------|--|------------------------|--------------------|--|---------------|
| 第46回 PL.49 | 5 | ロクロ上唇 西甕 | 電線底部から焚 口付近底直にかけ て 口縫部～胸部上 位片 | 口 軸 18.4 20.0 | 細砂粒/良好/浅黄 褐 | ロクロ成形、口縫部から頸部はヨコナデ、胸部は上位にナ デ部分が残り、中位から下位はヘラ削り。内面は胸部にヘ ラナデ。 | 10世紀第2四 半期 |
| 第46回 PL.49 | 6 | 土師器 甕 | 壇左袖手前の床 直上 口縫部～胸部上 位片 | 口 19.0 | 細砂粒/良好/褐 | 口縫部から頸部はヨコナデ、胸部はヘラ削り。内面は胸部にヘ ラナデ。 | 10世紀第2四 半期 |
| 第46回 PL.49 | 7 | 土師器 甕 | 壇左袖手前の床 直上 口縫部～胸部上 位片 | 口 軸 18.5 24.2 | 細砂粒/良好/にぶ い赤褐 | 口縫部から頸部はヨコナデ、胸部はヘラ削り。内面は胸部にヘ ラナデ。 | 10世紀第2四 半期 |
| 第47回 PL.49 | 8 | 須恵器 甕 | 電線底部から焚 口付近東にかけ ての床表面から約 10cm上 口縫部～胸部上 位片 | 口 46.0 | 細砂粒・粗砂粒/ 還元焰/灰 | 口縫部はロクロ成形、胸部は叩き締め成形。頸部にて口縫部と胸部を接合。口縫部は口縫部に面をつくり、下に断面 三角形の小凸帯を貼付。口縫部は上位に4段の波状文を施す。胸部は平行叩き痕が残る。内面は口縫部がヘラナデ、胸 部は同心円状アテ貝痕が残る。外側胸部に降灰が厚く付着。 | 10世紀第2四 半期 |
| 第47回 PL.49 | 9 | 須恵器 甕 | 壇左袖手前の床 直上 胸部上位片 | | 細砂粒/還元焰/灰 | 胸部は叩き締め成形。内外面ともヘラナデで叩き痕とアテ 貝痕を消している。外側に降灰が付着。 | 10世紀第2四 半期 |
| 第47回 PL.49 | 10 | 須恵器 甕 | 電線底部から焚 口付近東にかけ ての床表面から約 10cm上 胸部 | | 細砂粒・粗砂粒/ 還元焰/灰 | 胸部は叩き締め成形。外側は平行叩き痕が残り、内面のア テ貝痕も平行文が残る。 | 10世紀第2四 半期 |
| 第47回 PL.49 | 11 | 陶文土器 深鉢 | 理上 口縫部破片 | | 粗砂・輝石/ふつ う | 口縫部が緩く外反。口縫下に棒状、ボタン状貼付文を付す。 口縫外端に刻みを施す。 | 諸葛式 |

3号竪穴建物

| 拂 国 PL.No. | No. | 種類 器種 | 出土位置 残存率 | 計測値 | 胎土/焼成/色調 石材・素材等 | 成形・整形の特徴 | 備考 |
|---------------|-----|----------|--|-----------|--------------------|----------------------------|--------|
| 第47回 PL.49 | 1 | 土師器 甕 | 調査区北壁際 の床表面から約 13.3cm上 底部～胸部下位 片 | 底 11.0 | 細砂粒・粗砂粒/ 良好/褐 | 底部と胸部はヘラ削り。内面は底部から胸部にヘラナデ。 | 10世紀後半 |

4号竪穴建物

| 拂 国 PL.No. | No. | 種類 器種 | 出土位置 残存率 | 計測値 | 胎土/焼成/色調 石材・素材等 | 成形・整形の特徴 | 備考 |
|---------------|-----|------------|--------------------------------------|-----------------------|---|--|---------------|
| 第48回 PL.50 | 1 | 須恵器 杯 | 9号建物の北西 寄り、調査区北 壁際の床面直上 1/4 | 口 底 12.4 6.0 | 3.8 細砂粒/酸化焰/赤 褐 | ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転糸切り無調整。 | 10世紀第3四 半期 |
| 第48回 PL.50 | 2 | 須恵器 杯 | 理上 1/2 | 口 底 14.5 7.9 | 4.2 細砂粒/酸化焰/灰 黄泥 | ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転糸切り無調整。 | 10世紀第3四 半期 |
| 第48回 PL.50 | 3 | 須恵器 杯 | 理上 底部～体部片 | 底 8.0 | 細砂粒・粗砂粒/ 酸化焰/灰黄 | ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転糸切り無調整。 | 10世紀第3四 半期 |
| 第48回 PL.50 | 4 | 須恵器 有台椀 | 須燃燒部底直上 底 6.0 | 細砂粒/酸化焰/ 灰/灰/灰黄 | ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転糸切り、高台は貼 付。内外面とも焼成。 | 10世紀第3四 半期 | |
| 第48回 PL.50 | 5 | 須恵器 有台椀 | 理上 底 6.5 | 細砂粒/酸化焰/灰 黄 | ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転ヘラナデ、高台は 貼付。内面は二次成形によって捺部が残っている。 | 10世紀第3四 半期 | |
| 第48回 PL.50 | 6 | 須恵器 有台椀 | 理上 底 8.0 | 細砂粒/酸化焰/に ぶい黄 | ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転ヘラナデ、高台は 貼付。 | 10世紀第3四 半期 | |
| 第48回 PL.50 | 7 | 須恵器 羽釜 | 理上 口縫部～胸部上 位片 | | 細砂粒/酸化焰/に ぶい黄褐 | ロクロ成形、回転方向不明。薄は貼付、薄の先端部を間隔 をあけて打ち欠いている。 | 10世紀第3四 半期 |

5号竪穴建物

| 拂 国 PL.No. | No. | 種類 器種 | 出土位置 残存率 | 計測値 | 胎土/焼成/色調 石材・素材等 | 成形・整形の特徴 | 備考 |
|---------------|-----|------------|---------------------------|---------------------------------------|--|---|-------|
| 第50回 PL.50 | 1 | 土師器 甕 | 中央西寄り床上 ほぼ完形 | 口 底 13.4 19.4 | 6.5× 5.5 20.1 細砂粒・粗砂粒/ 良好/黒褐 | 外面胸部上半に輪積み痕が残る。口縫部はヨコナデ、胸部 はヘラ削り後上位から中位はナデ、底部はヘラ削り。内面 は底部から胸部にヘラナデ。底部は不正形にヘラ削りされ ている。この甕の形態から4世紀後半か。未発掘遺物には 高台or器台の脚部が存在。 | 4世紀後半 |
| 第50回 PL.50 | 2 | 石製品 蔽蔽石 | 5号側の窓穴建 物南壁際床直 上は完形 | 長 幅 12.7 6.8 4.7 644.3 | 粗粒輝石安山岩 | 棒状礫を素材、上端部に截打痕が顯著に残る。 | 不明 |
| 第50回 PL.50 | 3 | 石製品 蔽蔽石 | 南壁に横かる ほぼ完形 | 長 幅 11.5 5.5 4.6 460.4 | 粗粒輝石安山岩 | 棒状礫を素材、上端部に截打痕がわずかに残る。 | 不明 |

遺物観察表

1号墳

| 種類 PL.No. | No. | 種類 器種 | 出土位置 周溝理上 口縁部～体部中 位 | 残存率 | 計測値 | 胎土/焼成/色調 石材・素材等 | 成形・整形の特徴 | 備考 |
|---------------|-----|----------|------------------------------|----------------------|-----|--------------------|--|-------|
| 第51回 PL.50 | 1 | 土師器 壺 | 周溝理上 口縁部～体部中 位 | 口 縁 9.4 9.0 | | 細砂粒/良好/にぶ い黄柾 | 口縁部はヨコナデ、胴部は上位がナデ、中位はヘラ削り。 内面は口縁部から胴部へヘラナデ。2と同一個体か。 | 5世紀後半 |
| 第51回 PL.50 | 2 | 土師器 壺 | 周溝理上 底部片 | | | 細砂粒/良好/にぶ い黄柾 | 底部は外側がヘラ削り、内面はナデ。1と同一個体か。 | 5世紀後半 |

遺構外

| 種類 PL.No. | No. | 種類 器種 | 出土位置 周溝理上 底部 | 残存率 | 計測値 | 胎土/焼成/色調 石材・素材等 | 成形・整形の特徴 | 備考 | |
|---------------|-----|--------------------|--------------------|--------|--------------|--------------------|--|---|----|
| 第52回 PL.50 | 1 | 瓶 陶器 香炉 | 表上 底部 | 口 底 | 高 9.1 | 淡黄 | 体部外面沈線。底部外面に3脚貼り付け。内面から体部外 面下端に施輪。底部内面目痕3カ所。 | 近世 | |
| 第52回 PL.50 | 2 | 埴輪 不明 | 表上 破片 | | | 細砂粒/酸化焰/相 底部分 | 外表面ともナデ。比較的径が小さいことから形象埴輪の基 底部分。 | 古墳時代 | |
| 第52回 PL.50 | 3 | 埴輪 不明 | 表上 破片 | | | 細砂粒/酸化焰/相 付 | 外表面は縱方向ハケメ(2cm当たり9本)後凸帶(台形状)を貼 付。内面はヘラナデ。大型の円筒埴輪か。 | 古墳時代 | |
| 第52回 PL.50 | 4 | 埴輪 不明 | 表上 破片 | | | 細砂粒/酸化焰/相 付 | 外表面は縱方向ハケメ(2cm当たり14本)後凸帶(形状不明)を貼 付。内面は斜めのヘラナデ。大型の円筒埴輪か。 | 古墳時代 | |
| 第52回 PL.50 | 5 | 埴輪 不明 | 表上 破片 | | | 細砂粒/酸化焰/相 | 外表面ともナデか。 | 古墳時代 | |
| 第52回 PL.50 | 6 | 埴輪 不明 | 表上 破片 | | | 細砂粒/酸化焰/相 | 外表面はナデ。内面はヘラナデ、一部にハケメが残る。 | 古墳時代 | |
| 第52回 PL.50 | 7 | 石製品 礁石 | 表上 完形 | 長 幅 | 13.2 2.8 | 厚 重 | 2.4 112.6 | 礁沢石 礁長く湾曲した角柱状を呈する。4面とも使用面で特に表 裏面は著しく擦り減っている。 | 近世 |
| PL.50 | 8 | 石製品 不明石製品 | 表上 | 長 幅 | (7.0) 7.8 | 厚 重 | 5.4 484.6 | デイサイト | 不明 |
| 第52回 PL.50 | 9 | 古鏡 寛永通宝 (四文) | 表上 完形 | 外 径 | 2.828 | 厚 | 0.124 | 口波、面、背ともに文字、輪、郭が明瞭。實の一部がわず かに剥落する。 | 近世 |
| 第56回 PL.50 | 1 | 礪文土器 深鉢 | 表上 口縁部破片 | | | 粗砂、輝石/良好 | 波状口縁。地文に平行沈線を多段に施し、口縁に沿って3 条の結節浮線を貼付。以下、波状素浮線を多段に付す。 | 下島式 | |
| 第56回 PL.50 | 2 | 礪文土器 深鉢 | 表上 胴部破片 | | | 粗砂、輝石/良好 | 第56回1と同一個体。 | 下島式 | |
| 第56回 PL.50 | 3 | 礪文土器 深鉢 | 表上 胴部破片 | | | 粗砂、輝石/良好 | 複数平行沈線、弧状の集合沈線を施す。地文に虹礪文を模 倣文。 | 諸磯a式 | |

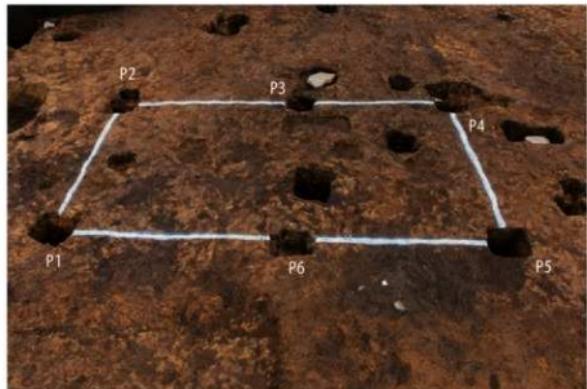
写 真 図 版



1 調査区全景(東から)



2 調査区全景(北から)



1 1号掘立柱建物全景(北から)



2 1号掘立柱建物P 1全景(南から)



3 1号掘立柱建物P 1断面(南から)



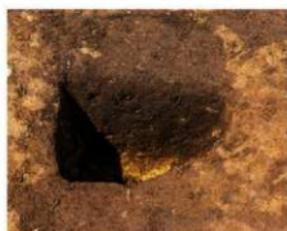
4 1号掘立柱建物P 2全景(南から)



5 1号掘立柱建物P 2断面(南から)



6 1号掘立柱建物P 3全景(南から)



7 1号掘立柱建物P 3断面(南から)



8 1号掘立柱建物P 4全景(北から)



9 1号掘立柱建物P 4断面(北から)



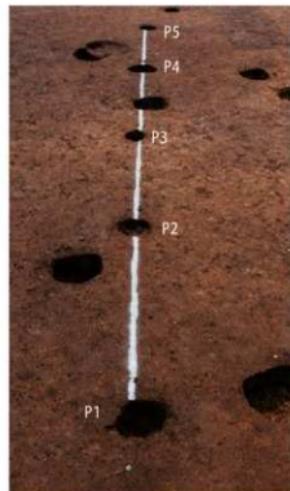
10 1号掘立柱建物P 5全景(南から)



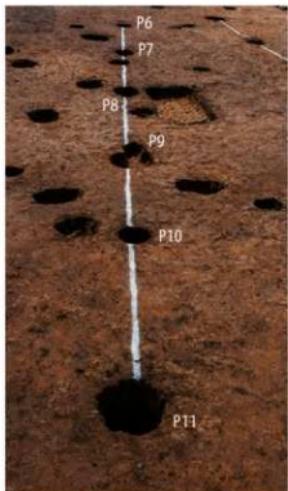
11 1号掘立柱建物P 5断面(南から)



12 1号掘立柱建物P 6全景(東から)



1 2号掘立柱建物南側柱穴全景(東から)



2 2号掘立柱建物北側柱穴全景(東から)



3 2号掘立柱建物P 1全景(南から)



4 2号掘立柱建物P 2全景(南から)



5 2号掘立柱建物P 3全景(南から)



6 2号掘立柱建物P 4全景(南から)



7 2号掘立柱建物P 5全景(南から)



8 2号掘立柱建物P 6全景(南から)



9 2号掘立柱建物P 7全景(南から)



10 2号掘立柱建物P 8全景(南から)



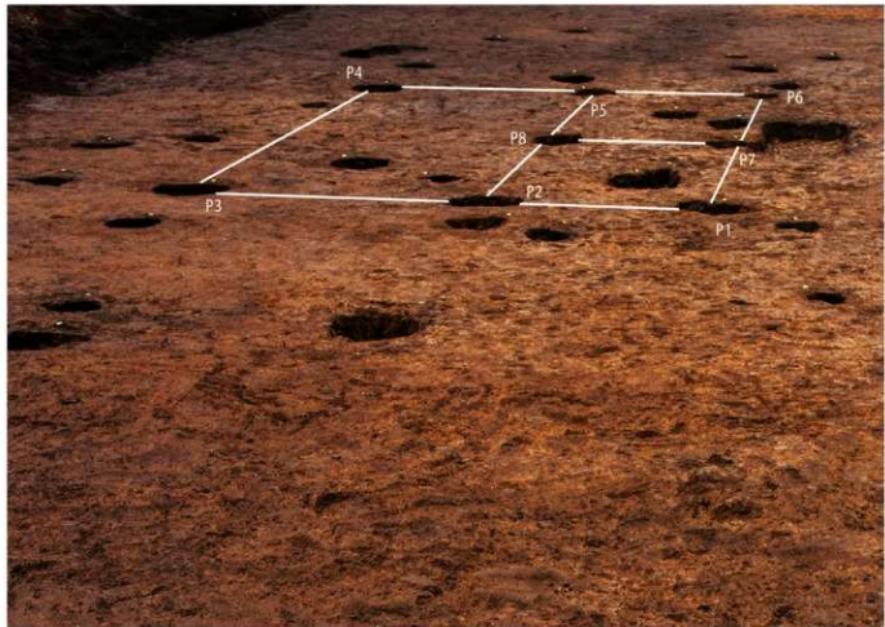
11 2号掘立柱建物P 9全景(南から)



12 2号掘立柱建物P 10全景(南から)



13 2号掘立柱建物P 11全景(南から)



1 3号掘立柱建物全景(南東から)



2 3号掘立柱建物 P 1 全景(南から)



3 3号掘立柱建物 P 1 断面(南から)



4 3号掘立柱建物 P 2 全景(南から)



5 3号掘立柱建物 P 3 全景(南から)



6 3号掘立柱建物 P 3 断面(南から)



7 3号掘立柱建物 P 4 全景(南から)

中・近世



1 3号掘立柱建物 P 4断面(南から)



2 3号掘立柱建物 P 5全景(南東から)



3 3号掘立柱建物 P 5断面(南東から)



4 3号掘立柱建物 P 6全景(南から)



5 3号掘立柱建物 P 6断面(南から)



6 3号掘立柱建物 P 7全景(南東から)



7 3号掘立柱建物 P 7断面(南から)



8 3号掘立柱建物 P 8全景(南から)



9 3号掘立柱建物 P 8断面(南から)



10 4号掘立柱建物 P 1全景(南から)



11 4号掘立柱建物 P 1断面(南から)



12 4号掘立柱建物 P 2全景(南から)



13 4号掘立柱建物 P 2断面(南から)



14 4号掘立柱建物 P 3全景(西から)



15 4号掘立柱建物 P 3断面(西から)



1 4号掘立柱建物 P 4 全景(東から)



2 4号掘立柱建物 P 4 断面(東から)



3 調査状況(南東から)



4 5号掘立柱建物 P 1 全景(南から)



5 5号掘立柱建物 P 1 断面(南から)



6 5号掘立柱建物 P 2 全景(南から)



7 5号掘立柱建物 P 2 断面(南から)



8 5号掘立柱建物 P 3 全景(南から)



9 5号掘立柱建物 P 3 断面(南から)



10 5号掘立柱建物 P 4 全景(南から)



11 5号掘立柱建物 P 4 断面(南から)



12 5号掘立柱建物 P 5 全景(南から)



13 5号掘立柱建物 P 5 断面(南から)

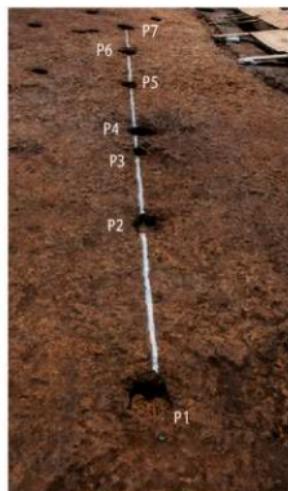


14 5号掘立柱建物 P 6 全景(西から)



15 5号掘立柱建物 P 6 断面(西から)

中・近世



1 1号柵全景(東から)



2 1号柵 P 1 全景(南から)



3 1号柵 P 1 断面(南から)



6 1号柵 P 3 全景(南から)



7 1号柵 P 4 全景(南から)



8 1号柵 P 4 断面(南から)



9 1号柵 P 5 全景(南から)



10 1号柵 P 5 断面(南から)



11 1号柵 P 6 全景(南から)



12 1号柵 P 6 断面(南から)



13 1号柵 P 7 全景(南から)



14 1号柵 P 7 断面(南から)



1 1・2号溝全景(西から)



2 1号溝全景(東から)



3 2号溝全景(南東から)



4 3号溝全景(東から)



5 3号溝A-A'断面(東から)

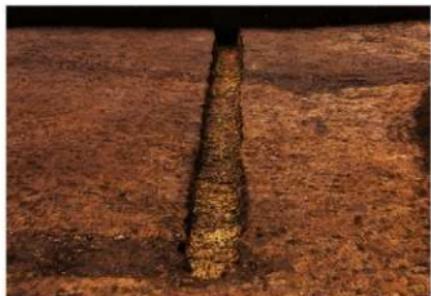


6 4号溝全景(北から)



7 4号溝断面(南から)

中・近世



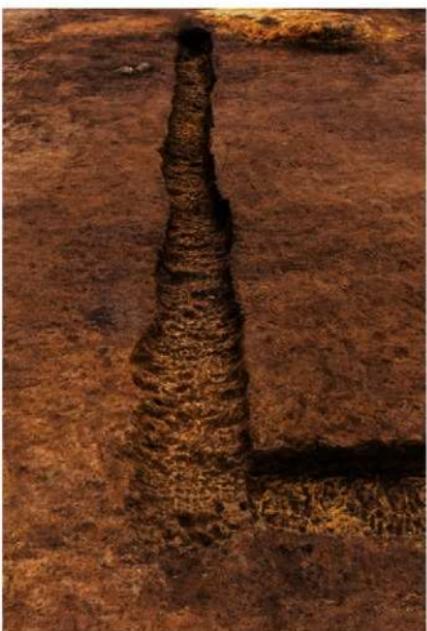
1 5号溝全景(北から)



2 5号溝断面(北から)



3 6号溝全景(西から)



4 7号溝全景(西から)



5 6号溝断面(西から)



6 7号溝断面(西から)



1 8号溝全景(東から)



2 8号溝断面(東から)



3 9号溝断面(西から)



4 9～11号溝全景(東から)

中・近世



1 10号溝断面(西から)



2 11号溝断面(西から)



3 12号溝全景(東から)



4 12号溝断面(東から)



5 13号溝全景(東から)



6 13号溝断面(東から)



7 14号溝北側全景(南から)



8 14号溝A-A'断面(南から)



1 14号溝南側全景(北から)



2 14号溝B-B'断面(北から)



3 1号井戸検出状況(南から)



4 1号井戸全景(東から)



5 1号井戸掘方全景(南から)



6 1号井戸完掘全景(南から)



7 2号井戸検出状況(南から)



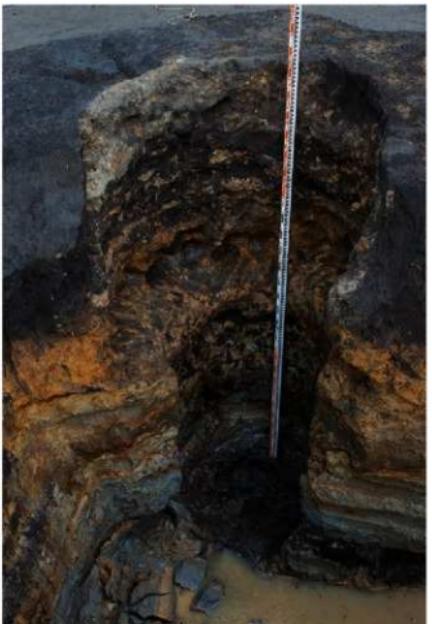
8 2号井戸全景(南から)



1 2号井戸断面(南から)



2 2号井戸掘方全景(南から)



3 2号井戸完掘全景(南から)



4 3号井戸検出状況(南から)



5 3号井戸全景(南から)



6 3号井戸6掘方全景(東から)



7 3号井戸完掘全景(東から)



1 4号井戸全景(東から)



2 4号井戸断面(南西から)



3 4号井戸完掘全景(南から)



4 5号井戸全景(南から)



5 5号井戸断面(南から)



6 5号井戸完掘全景(南から)



7 6号井戸全景(南から)



8 6号井戸完掘全景(南から)

中・近世



1 1・2号集石全景(南から)



2 1号集石 B-B'断面(南から)



3 1号集石掘方全景(南から)



4 2号集石 B-B'断面(南から)



5 2号集石掘方全景(南から)



6 4号集石全景(南から)



7 4号集石断面(南から)



8 4号集石掘方全景(南から)



1 1号土坑全景(南から)



2 1号土坑断面(南から)



3 2号土坑全景、断面(北から)



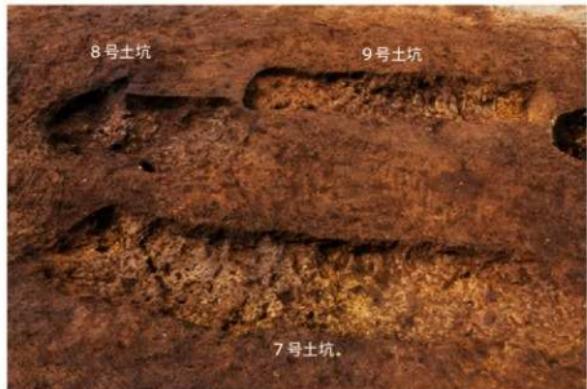
4 3・4号土坑全景(東から)



5 3・4号土坑断面(東から)



6 5・6号土坑全景(東から)



7 7～9号土坑全景(南から)



8 5・6号土坑断面(東から)



9 7号土坑断面(東から)



10 8号土坑断面(東から)



11 9号土坑断面(東から)



12 10号土坑全景(南から)



1 10号土坑断面(東から)



2 11号土坑全景(南から)



3 11号土坑断面(東から)



4 12号土坑全景(南から)



5 12号土坑断面(東から)



6 13号土坑全景(南から)



7 13号土坑断面(南から)



8 14号土坑全景(南から)



9 14号土坑断面(南から)



10 15号土坑全景(南から)



11 15号土坑断面(南から)



12 16号土坑全景(南から)



13 16号土坑断面(南から)



14 17号土坑全景(南から)



15 17号土坑断面(南から)



1 18号土坑全景(南西から)



2 18号土坑断面(南西から)



3 19号土坑全景(南から)



4 19号土坑断面(南から)



5 20号土坑全景(南から)



6 20号土坑断面(南から)



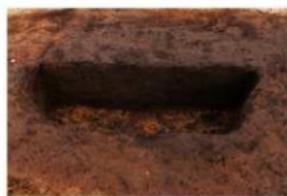
7 21～23号土坑全景(南から)



8 21号土坑断面(西から)



9 22号土坑断面(南から)



10 23号土坑断面(南東から)



11 24号土坑全景(南東から)



12 24号土坑断面(南東から)



1 25号土坑全景(南から)



2 25号土坑断面(南から)



3 26号土坑全景(南から)



4 26号土坑断面(東から)



5 27号土坑全景(南から)



6 27号土坑断面(東から)



7 28・31号土坑全景(東から)



8 31号土坑断面(東から)



9 29号土坑全景(南から)



10 29号土坑断面(東から)



11 30号土坑、7号ピット全景(北から)



12 32号土坑全景(南から)



13 32号土坑断面(南西から)



14 33号土坑全景(南から)



15 33号土坑断面(東から)



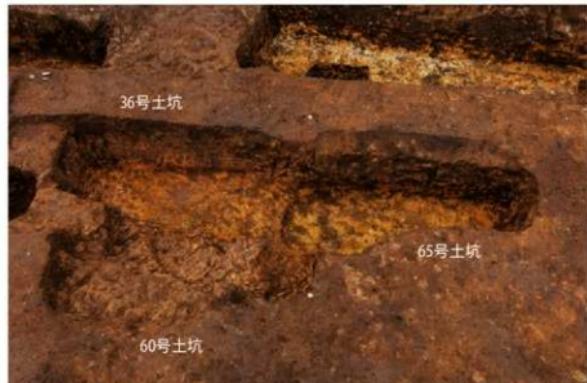
1 34号土坑全景(南から)



2 34号土坑断面(東から)



3 35号土坑全景(南から)



4 36・60・65号土坑全景(南から)



5 35号土坑断面(南から)



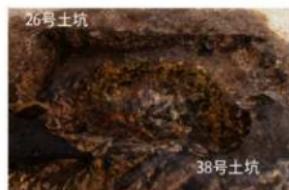
6 36・60号土坑断面(西から)



7 37号土坑全景(東から)



8 37号土坑断面(南から)



9 38号土坑全景(南から)



10 38号土坑断面(北から)



11 39号土坑砾出土状況(東から)

中・近世



1 39号土坑全景(東から)



2 39号土坑A-A'断面(東から)



3 40号土坑全景(北から)



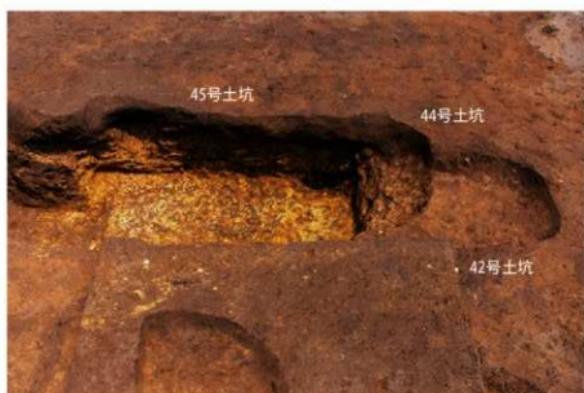
4 40号土坑断面(西から)



5 41号土坑全景(南から)



6 41号土坑断面(南から)



7 42・44・45号土坑全景(南から)



8 42・44・45号土坑断面(東から)



9 43号土坑全景(南から)



10 43号土坑断面(西から)



11 46号土坑全景(南から)



12 46・47号土坑全景(東から)



1 46・47号土坑断面(東から)



2 48・49号土坑全景(東から)



3 48号土坑断面(南から)



4 49号土坑断面(南から)



5 50号土坑全景(南から)



6 50号土坑断面(東から)



7 51号土坑全景(南から)



8 51号土坑断面(東から)



9 52号土坑全景(南から)



10 52号土坑断面(西から)



11 53号土坑全景(北から)



12 53号土坑断面(西から)



13 54号土坑全景(南から)



14 54号土坑断面(南東から)

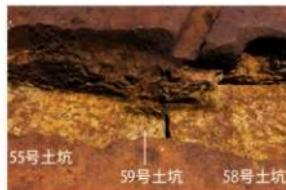


15 56号土坑全景(南から)

中・近世



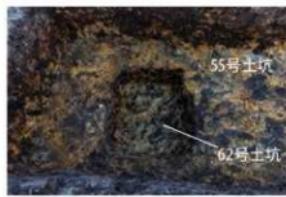
1 56号土坑断面(南から)



2 55・58・59号土坑全景(南から)



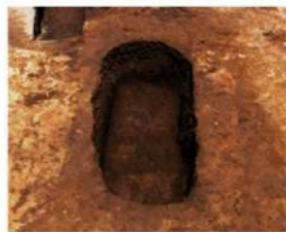
3 55号土坑断面(東から)



4 55・62号土坑全景(南から)



5 62号土坑断面(南から)



6 57号土坑全景(南から)



7 57号土坑断面(南から)



8 61号土坑全景(南から)



9 61号土坑断面(西から)



10 63号土坑全景(南から)



11 63号土坑断面(東から)



12 64・74・75号土坑全景(東から)



13 64号土坑断面(南から)



14 75号土坑断面(南から)



15 66号土坑全景(東から)



1 67号土坑全景(東から)



2 67号土坑断面(東から)



3 69号土坑全景(南東から)



4 69号土坑断面(南東から)



5 70号土坑全景(北から)



6 70号土坑断面(東から)



7 71号土坑全景(北から)



8 71号土坑断面(西から)



9 72号土坑全景(西から)



10 72号土坑断面(西から)



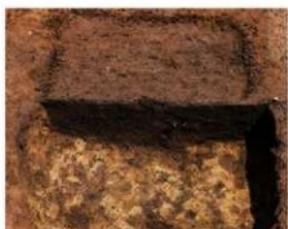
11 73・74号土坑全景(南から)



12 73号土坑断面(南から)



13 74号土坑全景(南から)



14 74号土坑断面(南から)



15 78号土坑全景、断面(南東から)

中・近世



1 1号ピット全景(南から)



2 1号ピット断面(南から)



3 2号ピット全景(南から)



4 2号ピット断面(南から)



5 3号ピット全景(南から)



6 3号ピット断面(南から)



7 4号ピット全景(南から)



8 4号ピット断面(南から)



9 5号ピット全景(南から)



10 5号ピット断面(南から)



11 6号ピット断面(北から)



12 8・9号ピット全景(南から)



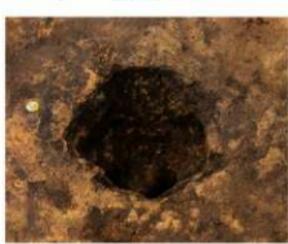
13 8・9号ピット断面(東から)



14 10号ピット全景(南から)



15 10号ピット断面(北から)



中・近世



1 21号ピット全景(南から)



2 21号ピット断面(東から)



3 22号ピット全景(南から)



4 22号ピット断面(南から)



5 23号ピット全景(北から)



6 23号ピット断面(北から)



7 24号ピット全景(南から)



8 24号ピット断面(南から)



9 25号ピット全景(南から)



10 25号ピット断面(南から)



11 26号ピット全景(北から)



12 26号ピット断面(南東から)



13 27号ピット全景(南から)



14 28・29号ピット全景(北から)



15 28号ピット断面(西から)



1 30号ピット全景(南から)



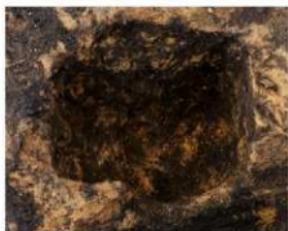
2 30号ピット断面(南から)



3 31号ピット全景(南から)



4 31号ピット断面(南から)



5 32号ピット全景(南から)



6 32号ピット断面(南から)



7 33号ピット全景(南東から)



8 33号ピット断面(南東から)



9 35号ピット全景(南から)



10 35号ピット断面(南から)



11 38号ピット全景(南から)



12 40号ピット全景(南西から)



13 40号ピット断面(南西から)



14 41号ピット全景(南から)



15 41号ピット断面(南西から)

中・近世



1 42号ピット全景(南から)



2 42号ピット断面(南から)



3 43号ピット全景(南から)



4 43号ピット断面(南から)



5 44号ピット全景(南から)



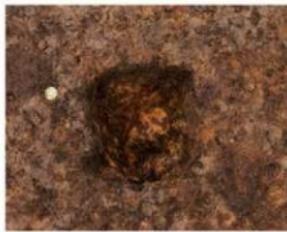
6 44号ピット断面(南から)



7 46号ピット全景(南から)



8 46号ピット断面(南から)



9 47号ピット全景(南東から)



10 47号ピット断面(南東から)



11 48号ピット全景(南東から)



12 48号ピット断面(南東から)



13 49号ピット全景(南から)



14 49号ピット断面(南西から)



15 51号ピット全景(南から)



1 51号ピット断面(南から)



2 53号ピット全景(南東から)



3 53号ピット断面(南東から)



4 54号ピット全景(南から)



5 54号ピット断面(南東から)



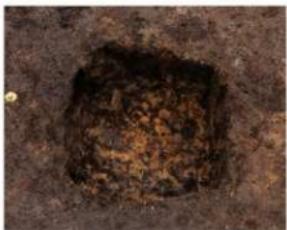
6 55号ピット全景(南から)



7 55号ピット断面(南から)



8 58号ピット全景(南から)



9 61号ピット全景(南から)



10 61号ピット断面(南から)



11 63号ピット全景(南から)



12 63号ピット断面(南から)



13 64号ピット全景(南から)



14 64号ピット断面(南東から)



15 65号ピット全景(南から)



1 65号ピット断面(南西から)



2 66号ピット全景(南から)



3 66号ピット断面(南から)



4 67号ピット全景(南から)



5 67号ピット断面(南から)



6 68号ピット全景(南から)



7 68号ピット断面(南から)



8 69号ピット全景(南から)



9 69号ピット断面(南から)



10 70号ピット全景(南から)



11 70号ピット断面(南東から)



12 71号ピット全景(南から)



13 71号ピット断面(南から)



14 72号ピット全景(南から)



15 72号ピット断面(南西から)



1 86号ピット全景(南から)



2 87・88号ピット全景(南から)



3 87・88号ピット断面(南から)



4 89号ピット全景(西から)



5 91号ピット全景(南から)



6 91号ピット断面(南から)



7 93号ピット全景(西から)



8 95号ピット全景(南から)



9 95号ピット断面(南から)



10 99号ピット全景(北から)



11 99号ピット断面(北から)



12 100号ピット全景(南から)



13 100号ピット断面(南から)



14 101号ピット全景(南から)



15 101号ピット断面(南から)

中・近世



1 102号ピット全景(東から)



2 102号ピット断面(東から)



3 103号ピット全景(南から)



4 103号ピット断面(南から)



5 105号ピット全景(南から)



6 105号ピット断面(南から)



7 106号ピット全景(東から)



8 106号ピット断面(東から)



9 107号ピット全景(南から)



10 107号ピット断面(南から)



11 108号ピット全景(北から)



12 108号ピット断面(北から)



13 110号ピット全景(北から)



14 110号ピット断面(北から)



15 111号ピット全景(南から)



1 111号ビット断面(南から)



2 112号ビット全景(東から)



3 112号ビット断面(東から)



4 113号ビット全景(南から)



5 113号ビット断面(南から)



6 114号ビット全景(南から)



7 114号ビット断面(南から)



8 115号ビット全景(北から)



9 115号ビット断面(北から)



10 116号ビット全景(北から)



11 116号ビット断面(北から)



12 1号煙西側全景(南から)



13 1号煙東側全景(南から)



14 1号煙断面(南から)

古代～古墳時代



1 1号填全景(東から)



2 1号填断面(東から)



3 1号填遺物出土状況(南から)



4 1～4号竖穴建物、1号竖穴状遺構全景(南から)



1 1号竖穴建物全景(西から)



2 1号竖穴建物 A-A'断面(北から)



3 1号竖穴建物 B-B'断面(西から)



4 1号竖穴建物扉全景(西から)



5 1号竖穴建物発掘方全景(西から)

古代～古墳時代



1 1号竖穴建物掘方全景(西から)



2 1号竖穴建物掘方B-B'断面(西から)



3 1号竖穴建物貯藏穴E-E'断面(西から)



4 1号竖穴建物床下土坑F-F'断面(北西から)



5 1号竖穴建物P1G-G'断面(西から)



6 1号竖穴建物P2H-H'断面(南から)



7 1号竖穴建物P3I-I'断面(南西から)



8 1号竖穴建物調査状況(西から)



1 2～4号竪穴建物、1号竪穴状遺構全景(西から)



2 3・4号竪穴建物、1号竪穴状遺構A-A'断面(北から)



3 3・4号竪穴建物、1号竪穴状遺構A-A'断面(北東から)



4 3・4号竪穴建物、1号竪穴状遺構A-A'断面(北東から)



5 2・4号竪穴建物、1号竪穴状遺構B-B'断面(北西から)

古代～古墳時代



1 2号竖穴建物全景(西から)



2 2号竖穴建物遺物出土状況(西から)



3 2号竖穴建物全景(西から)



4 2号竖穴建物竪方全景(西から)



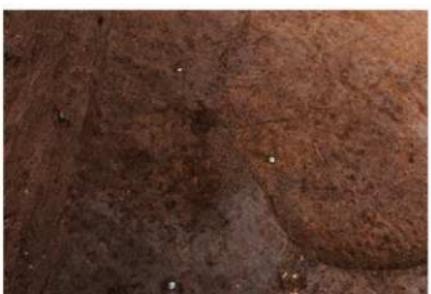
5 3号竖穴建物全景(西から)



6 3号竖穴建物遺物出土状況(西から)



7 3号竖穴建物自然石集中箇所全景(西から)



8 3号竖穴建物竪方全景(西から)



1 4号竪穴建物、1号竪穴状遺構全景(西から)



2 4号竪穴建物、1号竪穴状遺構完掘全景(西から)



3 4号竪穴建物竈全景(西から)



4 4号竪穴建物竈掘方全景(西から)



5 5号竪穴建物全景(南東から)

古代～古墳時代



1 5号竪穴建物A-A'断面(南東から)



2 5号竪穴建物B-B'断面(南西から)



3 5号竪穴建物遺物出土状況(南東から)



4 5号竪穴建物炉全景(南東から)



5 5号竪穴建物炉C-C'断面(東から)



6 5号竪穴建物P1全景(南東から)



7 5号竪穴建物P2全景(南東から)



8 5号竪穴建物P3全景(南東から)



1 5号竪穴建物P 4全景(南から)



2 5号竪穴P 5全景(南東から)



3 5号竪穴建物掘方全景(南東から)



4 5号竪穴建物掘方A-A'断面(南東から)

4世紀後半以前



1 68号土坑全景(南から)



2 68号土坑断面(南から)



3 76号土坑全景(南西から)



4 76号土坑断面(南から)



5 77号土坑全景(南東から)



6 77号土坑断面(南東から)



7 73号ピット全景(南から)



8 73号ピット断面(南から)



9 74号ピット全景(南から)



10 74号ピット断面(南から)



11 75号ピット全景(南から)



12 75号ピット断面(南から)



13 76号ピット全景(南から)



14 76号ピット断面(北西から)



15 77号ピット全景(南東から)



1 77号ピット断面(南東から)



2 78号ピット全景(南から)



3 78号ピット断面(南から)



4 79号ピット全景(南から)



5 79号ピット断面(南から)



6 80号ピット全景(南から)



7 80号ピット断面(南から)



8 81号ピット全景(南から)



9 81号ピット断面(北から)



10 82号ピット全景(南から)



11 82号ピット断面(南西から)



12 83号ピット全景(南から)



13 83号ピット断面(南から)



14 118号ピット全景(南から)



15 118号ピット断面(南から)

4世紀後半以前



1 119号ピット全景(南から)



2 119号ピット断面(南から)



3 120号ピット全景(南東から)



4 121号ピット全景(南東から)



5 120・121号ピット断面(南東から)



6 122号ピット全景(南東から)



7 122号ピット断面(南東から)



8 123号ピット全景(南から)



9 123号ピット断面(南から)



10 124号ピット全景(南東から)



11 124号ピット断面(南東から)



12 125号ピット全景(南から)



13 125号ピット断面(南から)



1 基本土層1(西から)



2 基本土層2(東から)



3 基本土層3(東から)



4 旧石器確認1号トレンチ全景(南から)



5 旧石器確認2号トレンチ全景(南から)



6 旧石器確認2号トレンチ断面(南から)



7 旧石器確認3号トレンチ全景(南から)



8 旧石器確認3号トレンチ断面(南から)



1 旧石器確認 4号トレンチ全景(南から)



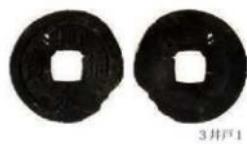
2 旧石器確認 4号トレンチ断面(南から)



3 旧石器確認 5号トレンチ全景(南から)



4 旧石器確認 6号トレンチ全景(南から)



5・6土坑1



5号掘立柱建物、1～4号井戸、5・6・26号土坑、91号ビット出土遺物



1型建1



1型建2



1型建3



1型建4



1型建5



1型建9



1型建10



2型建1



2型建2



2型建4



2型建3



2型建8



2型建11



2型建5



道構外(近) 8



道構外(近) 3

道構外(近) 7



道構外(绳) 1

道構外(绳) 2

道構外(绳) 3

報告書抄録

| | |
|-----------|---|
| 書名ふりがな | ほどたやしきまわりいせき |
| 書名 | 保渡田屋敷廻り遺跡 |
| 副書名 | 西毛広域幹線道路(高崎工区)社会資本総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 |
| 卷次 | 一 |
| シリーズ名 | 公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 |
| シリーズ番号 | 729 |
| 編著者名 | 高島英之 |
| 編集機関 | 公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 |
| 発行機関 | 公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 |
| 発行年月日 | 20230821 |
| 成法人ID | 21005 |
| 郵便番号 | 377-8555 |
| 電話番号 | 0279-52-2511 |
| 住所 | 群馬県渋川市北橘町下箱田784-2 |
| 遺跡名ふりがな | ほどたやしきまわりいせき |
| 遺跡名 | 保渡田屋敷廻り遺跡 |
| 所在地ふりがな | ぐんまけんたかさきしほどたまちしない |
| 遺跡所在地 | 群馬県高崎市保渡田町地内 |
| 市町村コード | 102024 |
| 遺跡番号 | 02007 |
| 北緯(世界測地系) | 36° 22' 56.9" |
| 東経(世界測地系) | 138° 58' 38.8" |
| 調査期間 | 20210601-20211031 |
| 調査面積 | 3,197.730 |
| 調査原因 | 道路建設 |
| 種別 | 古墳・集落・散布地・城館・その他 |
| 主な時代 | 中・近世、古代、古墳時代、4世紀後半以前 |
| 遺跡概要 | 中・近世-掘立柱建物5+柵1+溝14+井戸6+集石3+土坑75+ピット82+烟1+中近・世土器+石製品+古銭/古代-竪穴建物4+竪穴建物状遺構1+土師器+須恵器/古墳時代-竪穴建物1+古墳1+土師器+埴輪/4世紀後半以前-土坑3+ピット19+繩文土器+石器 |
| 特記事項 | 10世紀の集落 |
| 要約 | <p>保渡田屋敷廻り遺跡は、高崎市保渡田町地内、井野川と大清水川の合流地点付近の扇状地上に位置する。調査の結果、3面に亘る遺構確認面が確認された。1面目は2次堆積のAs-Bによって覆われた近世の烟で、調査区北部上手部分の一部、表土直下に約100m残存していた。2面目は、現耕作土直下及び1面目烟の下層から検出された古墳時代～中・近世の遺構で、古墳周濠、古墳時代前期の竪穴建物1棟、平安時代中期の竪穴建物4棟と竪穴状遺構1基、中・近世の掘立柱建物5棟、柵1条、溝14条、井戸6基、集石3基、土坑75基、ピット82基等を確認した。3面目はAs-Cを含む黒色土下の遺構面で、調査区北部および西部の上手部分の一部から土坑3基とピット19基を確認した。遺構に伴う土器の出土はなかったが、出土した土器はいずれも繩文時代前期後葉のものであった。</p> <p>古代より古い時代の遺構数は少なく、調査対象地は集落の中心部分では無く、縁辺部分であったと考えられる。また、この地においては繩文時代以来、人の営為が連続と継続していたというわけではなく、繩文時代、古墳時代、古代、中・近世と断続的に土地利用がなされていた様子が覗えた。</p> |

公益財團法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第729集

保渡田屋敷廻り遺跡

西毛広域幹線道路(高峰工区)社会资本総合整備
事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

令和5(2023)年8月21日 発刷
令和5(2023)年8月23日 発行

編集・発行／公益財團法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

〒377-8555 群馬県邑楽郡北橘町下箱田784番地2

電話(0279)52-2511(代表)

ホームページアドレス <http://www.gunmathan.org/>

印刷／第一印刷株式会社